

大阪市平野区

長原・瓜破遺跡発掘調査報告

XV

1995年度大阪市長吉瓜破地区

土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書

2000.3

財団法人 大阪市文化財協会

長原・瓜破遺跡発掘調査報告 XV

2000. 3

長原遺跡の中央地区と西・西南地区で検出された、古墳時代から飛鳥時代を中心とする遺構と遺物を報告している。中でも、遺構では、大型のものも含めた、古墳時代および飛鳥時代の掘立柱建物が検出され、集落の変遷を探る上で貴重な資料が得られた。遺物では、関東系の和泉式土器や韓式系土器を含む古墳時代中期後半の大量の土器類を中心に、平安時代の瑞花双鴛鴦文八稜鏡、奈良時代の木簡、旧石器時代の国府型ナイフ形石器などが出土している。また、まとまって出土した古墳時代から奈良時代にかけての木製品や、飛鳥時代のウシ・ウマ骨についても検討を加えた。

大阪市平野区

長原・瓜破遺跡発掘調査報告

XV

1995年度大阪市長吉瓜破地区

土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書

2000.3

財団法人 大阪市文化財協会

『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』XV 正誤表

頁	行	誤	正
8	2	黄褐色 (2.5Y6/4)	黄褐色 (2.5Y5/3)
14	29	褐灰色 (7.5Y4/2)	褐灰色 (7.5YR4/1)
20	14	褐灰色 (10YR7/2)	オリーブ褐色 (2.5Y4/3)
20	14	黄褐色 (<u>10YR7/2</u>)	黄褐色 (2.5Y5/4)
20	20	暗褐色 (7.5Y5/8)	明褐色 (7.5YR5/8)
26	4	<u>立上がり</u> を分ける	口縁部を分ける
28	4・5	<u>立上がり</u> は直立し	削除
28	5	端部は	口縁端部は
29	11	不整方向の	不定方向の
31	18・19	変化するは	変化するのは
39	24	<u>内縁</u> に複弁の	内区に複弁の
39	25	9世紀後半代	12世紀代
71	2	<u>239</u> ～234	229～234
104	18	調査地の中央部	調査地の中央部西端
128	10・11	必要があろう、	必要があろう。
141	15	SX701・702・710	SX701～703・710
159	10	長原6Bii	長原6Biii層
169	40・41	<u>頸椎</u>	頸椎



NG95-14次調査出土土器

大阪市平野区

長原・瓜破遺跡発掘調査報告

XV

1995年度大阪市長吉瓜破地区

土地地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書

2000.3

財団法人 大阪市文化財協会

序 文

本書は、1995年度に行なった大阪市長吉瓜破地区土地区画整理事業施行に伴う発掘調査の報告書である。『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』シリーズにおいては、平野区の長吉・瓜破地域の発掘調査を通じて得られた多くの成果を報告し、この地域の歴史解明に努めてきた。15冊目となる本書では、古墳時代から奈良時代の掘立柱建物や井戸、水田やそれに係わる木簡など、さらなる調査研究の進展に寄与する資料を収録している。

また、近年、発掘調査の成果をより広く社会へ還元することが求められてきており、報告書でまとめられた学術的成果や発掘資料としての文化財を生涯学習や児童・生徒の総合学習などに積極的に活用し、これまで以上に広範な社会的ニーズに応じてゆく所存である。

最後に、発掘調査および報告書作成に当って、ご理解とご協力を賜った長吉瓜破区画整理事務所ならびに地元の方々をはじめとする関係者の皆様に、深く感謝の意を表して刊行の挨拶とする。

2000年3月

財団法人 大阪市文化財協会

例 言

- 一、本書は大阪市建設局長吉瓜破区画整理事務所が施行した、大阪市平野区内における1995年度土地区画整理事業施行に伴う発掘調査の報告書である。
- 一、発掘調査は、財団法人大阪市文化財協会調査課長永島暉臣慎(現調査部長)の指揮のもと、同主任田中清美(現報告書作成室長代行)、調査員高橋工・大庭重信・寺井誠・絹川一徳・宮本康治、嘱託調査員高橋真由美(旧姓瀬尾)が行った。各調査の地番・面積・期間・担当者は表1に記した。
- 一、木製品および金属製品の保存処理は調査課伊藤幸司・鳥居信子が行った。
- 一、本書の執筆は、第Ⅱ章を大庭が、第Ⅲ章第1節を田中が、第Ⅲ章第4節を高橋が分担し、第Ⅳ章第2節については松井章・宮路淳子・佐久間桂子の各氏より玉稿を賜った。その他については、上記調査員との検討や調査記録をもとに主として池田研(調査課調査員)が行った。英文要旨の作成はRobert Condon氏と宮本が行った。本書の編集は、調査課長京嶋覚・長原調査事務所長松尾信裕の指導のもとに、各執筆者の協力を得て、池田が行った。
- 一、遺構写真は主として担当調査員が撮影し、遺物写真の撮影は徳永圀治氏に委託した。
- 一、奈良国立文化財研究所の光谷拓実氏には樹種の同定を、また松井章氏をはじめ宮路淳子・佐久間桂子の各氏には、資料整理中に急逝した久保和士(調査課調査員)に代わり、ウシ・ウマ骨の整理から図版作成に至るまでご指導いただいた。記して、感謝の意を表する次第である。
- 一、発掘調査および本報告書作成においては、補助員諸氏の働きに負ったところが大きい。厚く御礼申し上げる。
- 一、発掘調査と報告書作製の費用は、大阪市建設局および同市水道局・同市下水道局・日本電信電話株式会社・関西電力株式会社・大阪ガス株式会社が負担した。
- 一、発掘調査で得られた出土遺物、図面・写真などの資料は当協会が保管している。

凡 例

- 一、本書において用いる地層名は原則的に各調査ごとに個別に記載する。長原遺跡の標準層序との対比は[趙哲済1997]に基づいて行い、標準層序の表記は、文中では長原○層とし、図表等ではNG○層とした。現段階の標準層序は別表1に示した。また、断面図における粒径表記も同文献に従って行った。
- 一、遺構検出面の層序関係に基づく呼称および形成過程に基づく呼称は、[趙1995]に従って行った。
- 一、遺構名の表記には、塀・柵(SA)、掘立柱建物(SB)、溝(SD)、井戸(SE)、土塋(SK)、ピット(SP)、畦畔(SR)、石器集中部(LC)、その他の遺構(SX)、自然流路(NR)の略号を用いた。略号の後ろには各調査次数ごとの通し番号を付し、遺構の大まかな検出層準が区別できるように、長原4層層準の溝にはSD4〇〇、長原7層層準の土塋にはSK7〇〇のように表記した。
- 一、水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、本文・挿図中ではTP±〇〇mと表記する。また、挿図中の方位は座標北を示し、座標値は国土平面直角座標(第Ⅵ系)の値である。
- 一、各調査の基準点は、市営長吉住宅屋上の1級基準点を起点とした閉合トラバース測量を行い、その成果を用いている。
- 一、遺物実測図中において、黒色土器A類では内面、同B類では内外面にスクリーントーンを付した。石器遺物番号についてはシリーズⅧ・Ⅸを踏襲しており、本報告では調査年度を省略した。また、ウシ・ウマ骨については取上げ時の登録番号(R番号)をそのまま使用している。
- 一、石器遺物の図版の縮尺は原則としてほぼ原寸大である。
- 一、石鏃の型式分類の基準および各部位の名称は、[菅榮太郎1995]に準拠した。
- 一、本書で頻繁に用いた土器編年は下記の文献に拠っている。本文中では煩雑さを避けるため、これら引用参考文献をその都度提示することは割愛した。弥生土器：[佐原眞1968]、円筒埴輪：[川西宏幸1978]、古墳・飛鳥時代の須恵器：[田辺昭三1981]、飛鳥・奈良時代の土器：[奈良国立文化財研究所1976]・[古代の土器研究会編1992]、平安時代の土器：[佐藤隆1992]、瓦器：[森島康雄他1995]

本文目次

序文

例言

第Ⅰ章 調査の経過と概要

第1節 1995年度の発掘調査と報告書の作成	1
1) 発掘調査	1
2) 報告書の作成	2
第2節 調査の経過と概要	3
1) 長原遺跡中央地区	3
i) 95-20次調査 ii) 95-42次調査 iii) 95-54次調査	
2) 長原遺跡西・西南地区	4
i) 95-14次調査 ii) 95-13・41・76次調査 iii) 95-49次調査	

第Ⅱ章 長原遺跡中央地区の調査

第1節 95-20次調査	7
1) 層序	7
2) 各層出土の遺物	8
3) 遺構とその遺物	9
i) 江戸時代の遺構 ii) 平安時代の遺構と遺物	
iii) 飛鳥時代の遺構 iv) 古墳時代の遺構と遺物	
第2節 95-42次調査	14
1) 層序	14
2) 各層出土の遺物	16
3) 遺構とその遺物	17
i) 江戸時代の遺構と遺物 ii) 鎌倉時代の遺構	
iii) 飛鳥・奈良時代の遺構 iv) 古墳時代の遺構と遺物	

第3節	95-54次調査	20
1)	層序	20
2)	各層出土の遺物	22
3)	遺構とその遺物	23
	i)江戸時代の遺構	ii)室町時代の遺構
	iii)飛鳥・奈良時代の遺構	iv)古墳時代の遺構と遺物
第4節	中央地区の調査のまとめ	33
1)	東除川の変遷と地形変化	33
2)	古墳時代の集落	34
第Ⅲ章	長原遺跡西・西南地区の調査	35
第1節	95-14次調査	35
1)	層序	35
2)	各層出土の遺物	39
	i)長原3層出土の遺物	ii)長原4Bi~iii層出土の遺物
	iii)長原6Ai・ii層出土の遺物	iv)長原6Bi・ii層出土の遺物
	v)長原7A層出土の土器と長原2~7A層出土のその他の遺物	
	vi)長原7Bi層出土の遺物	vii)長原8/9層出土の遺物
	viii)長原7A・12A層出土の遺物	
3)	遺構とその遺物	61
	i)平安~奈良時代の遺構と遺物	ii)飛鳥~古墳時代の遺構と遺物
4)	小結	106
第2節	95-13・41・76次調査	109
1)	層序	109
	i)はじめに	ii)層序
2)	各層出土の遺物	111
	i)第1層出土の遺物	ii)第2~3層出土の遺物
	iii)第4~5層出土の遺物	iv)第6a~6b層出土の遺物
	v)第8層出土の遺物	vi)石器遺物
3)	遺構とその遺物	115
	i)江戸~室町時代の遺構と遺物	ii)奈良時代の遺構と遺物
	iii)飛鳥時代の遺構と遺物	iv)古墳時代の遺構と遺物
4)	小結	127

第3節 95-49次調査	129
1) 層序	129
2) 各層出土の遺物	132
i) 第2層出土の遺物	ii) 第3a～3c層出土の遺物
iii) 第4a～4e層出土の遺物	iv) 第6a～6h層出土の遺物
v) 第7a層出土の遺物	vi) 第7b層出土の遺物
vii) 韓式系土器	viii) 木簡・木製品
3) 遺構とその遺物	137
i) 室町～鎌倉時代の遺構と遺物	ii) 奈良～飛鳥時代の遺構と遺物
iii) 古墳時代の遺構と遺物	
4) 小結	144
第4節 西・西南地区の調査成果のまとめ	145
1) 飛鳥時代の集落について	145
第IV章 遺構・遺物の検討	151
第1節 長原・瓜破遺跡で出土した古墳時代から奈良時代にかけての木製品	151
1) はじめに	151
2) 木製品が出土した主要な調査の概要と地理的分布	151
3) 各論	153
4) まとめ	154
第2節 長原遺跡95-14次調査出土の動物遺存体	159
1) 概要	159
2) 出土した動物遺存体の種類と観察	162
3) 考察	163
4) 集中部と文献との対比	165
5) まとめ	167
別表 長原遺跡の標準層序1995	174
引用・参考文献	175
あとがき・索引	
英文要旨	
報告書抄録	

原色図版目次

1 鏡・土器

上：95－54次調査出土の瑞花双鴛鴦文八稜鏡

下：95－14次調査出土の和泉式土器

図版目次

- 1 中央地区95－20次調査地 地層断面と飛鳥時代の遺構
上：南壁地層断面(北西から)
下左：長原6Bi層上部上面検出遺構(東から)
下右：長原6Bi層下部上面検出遺構(東から)
- 2 中央地区95－20次調査地 古墳時代の遺構
上：SB701(北から)
下左：SB701礎板検出状況(東から)
下右：長原7B層上面検出遺構(東から)
- 3 中央地区95－42次調査地 地層断面と古墳～奈良時代の遺構
上：南壁地層断面(北東から)
下左：長原5層基底面検出遺構(東から)
下右：長原7B層上面検出遺構(東から)
- 4 中央地区95－54次調査地 地層断面と飛鳥～奈良時代の遺構
上：南壁地層断面(北西から)
下左(上)：長原6Ai層上面検出遺構(西から)
下左(下)：長原6Bi層上面検出遺構(西から)
下右：長原6Bi層下面検出遺構(東から)
- 5 中央地区95－54次調査地 古墳時代の遺構
上：長原7B層上面検出遺構(東から)
下：SB706(北から)
- 6 西地区95－14次調査地 地層断面
上：西壁地層断面(東南から)
下：南壁地層断面(北東から)
- 7 西地区95－14次調査地 奈良～平安時代の遺構
上：長原4Biii層上面検出遺構(北から)
下：長原6Ai層上面検出遺構(北から)
- 8 西地区95－14次調査地 飛鳥時代の遺構
上：長原6Bii層ウシ・ウマ骨出土状況(北から)
下：長原6Bii層ウシ・ウマ骨出土状況(西から)
- 9 西地区95－14次調査地 飛鳥時代の遺構
上：長原6Bii層ウシ・ウマ骨出土状況(南から)
中：長原6Bii層ウマ骨出土状況(北西から)
下：長原6Bii層ウマ骨出土状況(南西から)
- 10 西地区95－14次調査地 古墳～飛鳥時代の遺構
上：SX701遺物出土状況(西から)
下：SD712関東系土器出土状況(南から)
- 11 西地区95－14次調査地 古墳時代の遺構
上：古墳時代の遺構(南から)
下：古墳時代の遺構(北から)
- 12 西地区95－14次調査地 古墳時代の遺構
上：SE701(東から)
下：SE701南北断面(東から)
- 13 西地区95－14次調査地 古墳時代の遺構
上：SB701(西から)
下：西部微高地全景(北東から)
- 14 西地区95－41次調査地 地層断面と中近世・飛鳥時代の遺構
上：西壁地層断面(東から)
下左：第3層基底面耕作溝群(北から)
下右：SD601検出状況(北から)
- 15 西地区95－41次調査地 古墳～奈良時代の遺構
上：SB601(北から)
下：完掘状況(北から)
- 16 西南地区95－76次調査地 古墳時代の遺構
上：SX701遺物出土状況(東から)

- 下：SD704(南から)
- 17 西南地区95-76次調査地、西地区95-13次調査地
飛鳥時代の遺構と石器調査状況
上：SB602(南から)
下：95-13次調査地石器調査状況(南から)
- 18 西地区95-13次調査地 古墳～飛鳥時代の遺構
上：第3区完掘状況(東から)
下：SD701(東から)
- 19 西地区95-13次調査地 古墳時代の遺構
上：SD702・703(東から)
下：SD703遺物出土状況(東から)
- 20 西地区95-49次調査地 奈良・鎌倉時代の遺構
上：第4e層上面の水田・畦畔・踏込み(西から)
下：第6e層上面検出遺構と西壁地層断面
(南東から)
- 21 西地区95-49次調査地 古墳・奈良時代の遺構と
遺物出土状況
上左：第7a層遺物出土状況(北西から)
上右：木簡出土状況(北東から)
下左：第7b層基底面検出遺構(南から)
下右：第7b層基底面検出遺構(北から)
- 22 中央地区95-42次調査地包含層・遺構出土遺物
- 23 中央地区95-54次調査地遺構出土遺物
- 24 西地区95-14次調査地包含層出土遺物
- 25 西地区95-14次調査地包含層出土遺物
- 26 西地区95-14次調査地包含層出土遺物
- 27 西地区95-14次調査地包含層出土遺物
- 28 西地区95-14次調査地包含層出土遺物
- 29 西地区95-14次調査地遺構出土遺物
- 30 西地区95-14次調査地遺構出土遺物
- 31 西地区95-14次調査地遺構出土遺物
- 32 西地区95-14次調査地遺構出土遺物
- 33 西地区95-14次調査地遺構出土遺物
- 34 西地区95-14次調査地遺構出土遺物
- 35 西地区95-14次調査地遺構出土遺物
- 36 西地区95-14次調査地遺構出土遺物
- 37 西地区95-14次調査地遺構出土遺物
- 38 西地区95-14次調査地遺構出土遺物
- 39 西地区95-14次調査地遺構出土遺物
- 40 西地区95-14次調査地遺構出土遺物
- 41 西地区95-14次調査地遺構出土遺物
- 42 西地区95-14次調査地出土長原式土器・埴輪・石
器遺物・石製品
- 43 西地区95-14次調査地出土石器遺物・石製品
- 44 西地区95-14次調査地出土木製品
- 45 西地区95-14次調査地出土木製品
- 46 西地区95-13次調査地遺構出土遺物
- 47 西地区95-13・41次調査地包含層・遺構出土遺物
- 48 西南地区95-76次調査地包含層・遺構出土遺物
- 49 西・西南地区95-13・41・76次調査地出土石器遺
物・金属製品
- 50 西地区95-49次調査地包含層出土遺物
- 51 西地区95-49次調査地包含層出土遺物
- 52 西地区95-49次調査地包含層・遺構出土遺物
- 53 西地区95-14次調査地出土ウマ骨
- 54 西地区95-14次調査地出土ウマ骨
- 55 西地区95-14次調査地出土ウマ骨
- 56 西地区95-14次調査地出土ウシ・ウマ骨
- 57 西地区95-14次調査地出土ウシ骨
- 58 西地区95-14次調査地出土ウシ骨
- 59 西地区95-14次調査地出土ウシ・ウマ骨とその解
体痕

挿 図 目 次

図1 長吉瓜破地区土地区画整理事業施行範囲と調査地	2	図35 長原6Bi・ii層出土遺物	48
図2 長原遺跡中央地区の調査地	3	図36 長原7A層出土遺物	50
図3 長原遺跡西・西南地区の調査地	5	図37 長原7A層出土遺物	51
図4 95-14次調査地地区割図	6	図38 長原6Bii・7A層出土盾形埴輪	54
図5 95-13・41・76次調査地地区割図	6	図39 長原7A層出土石製品	55
図6 南壁地層断面	8	図40 長原3・6Bi・7A層出土鉄製品	56
図7 各層出土遺物	9	図41 長原2・7A層出土木製品	57
図8 SK401と出土遺物	9	図42 長原7Bi層出土遺物	58
図9 各層検出遺構	10	図43 長原8／9層出土の長原式土器	60
図10 SD601・603・604断面図	11	図44 長原7A・12A層出土石器遺物	61
図11 SB701と出土遺物	12	図45 長原4Biii層上面検出遺構	62
図12 SB702・703実測図	13	図46 SD401出土遺物	63
図13 南壁地層断面および各層検出遺構	15	図47 長原6Ai～Bii層検出遺構	65
図14 各層出土遺物	16	図48 SK601出土子持勾玉	66
図15 SD203と出土遺物	17	図49 長原7A・Bi層検出遺構	67
図16 SK701と出土遺物	19	図50 SX701出土遺物	69
図17 南壁地層断面および室町～江戸時代の遺構	21	図51 SX701出土遺物	70
図18 各層出土遺物	23	図52 SX701出土木製品	72
図19 長原6Bi層下面検出遺構	24	図53 SX701出土木製品	73
図20 長原6Ai層上面および長原6Bi層上面検出遺構	24	図54 SD701出土遺物	75
図21 長原7B層上面検出遺構	25	図55 SD702出土遺物	77
図22 SB704・705実測図	26	図56 SD711出土遺物	80
図23 SB706実測図	27	図57 SD702・711出土遺物	81
図24 古墳時代の遺構出土遺物	28	図58 SD711出土遺物	83
図25 SK702～704実測図	29	図59 SD711出土遺物	86
図26 製塩土器実測図	30	図60 SD711出土遺物	87
図27 滑石製模造品実測図	32	図61 SD711出土遺物	89
図28 95-20・42・54次調査地層断面模式図	33	図62 SD712出土遺物	90
図29 NGW-9集落の配置図	34	図63 SD713出土遺物	91
図30 西壁地層断面	37	図64 SB701実測図	92
図31 長原3・4Bi～iii層出土遺物	40	図65 SE701実測図	94
図32 長原6Ai・ii層出土遺物	42	図66 SE701上層出土遺物	95
図33 長原6Ai・Aii・Bi層出土遺物	43	図67 SE701出土遺物	97
図34 長原6Bii層出土遺物	45	図68 SE701出土遺物	99
		図69 SE701出土木製品	100
		図70 SE701中層出土遺物	101
		図71 SE701出土遺物	102

図72 SK702出土遺物	104	図90 南壁・西壁地層断面	130
図73 SK705出土遺物	104	図91 滑石製有孔円板実測図	133
図74 SK708・716実測図	105	図92 包含層・遺構出土遺物	134
図75 SK716出土遺物	106	図93 各層出土の韓式系土器	135
図76 95-41次調査地北壁・西壁地層断面	110	図94 木簡実測図	136
図77 包含層・遺構出土鉄製品	111	図95 各層の検出遺構と木製品出土状況	138・139
図78 各層出土遺物	112	図96 SD701出土鉄製釘実測図	140
図79 包含層・遺構出土石器遺物	114	図97 包含層・遺構出土遺物	142
図80 95-41次調査地西区の各層検出遺構	116	図98 包含層・遺構出土遺物	143
図81 95-13・41・76次調査地の奈良～古墳時代遺構	118	図99 馬池谷西岸地域における飛鳥時代の遺構分布図	146
図82 95-41次調査地西区の奈良～古墳時代遺構	118	図100 瓜破遺跡東南建物群配置図	148
図83 95-13・76次調査地の飛鳥・古墳時代遺構	119	図101 木製品出土調査地点の分布図	152
図84 95-41次調査地遺構出土遺物	120	図102 ウシ・ウマ骨の破片数比	160
図85 SB601実測図	121	図103 ウシ・ウマ骨出土集中部	160
図86 SB602実測図	122	図104 ウシ・ウマ骨出土状況その1	160
図87 SD701実測図	123	図105 ウシ・ウマ骨出土状況その2	160
図88 95-13次調査地遺構出土遺物	125	図106 ウシ・ウマ骨出土状況その3	161
図89 95-76次調査地遺構出土遺物	126	図107 ウシ・ウマ骨出土状況その4	161
		図108 ウシ・ウマ骨種別分布図	161

表 目 次

表1 1995年度土地区画整理事業に伴う発掘調査一覧	1	表5 長原・瓜破遺跡で出土した古墳時代から奈良時代の木製品一覧	156
表2 製塩土器の分類とその比率	31	表6 95-14次調査出土動物種名	160
表3 層別の出土木製品一覧	137	表7 ウシ・ウマの部位別出土量	169
表4 馬池谷西岸地域における飛鳥時代の主要な掘立柱建物	147	表8 ウマの頭蓋骨・下顎骨計測値	170
		表9 ウシの下顎骨計測値	170
		表10 ウシ・ウマ骨計測値	171

写 真 目 次

写真1 製塩土器	30	写真5 第6e層出土木簡	136
写真2 滑石製模造品	31	写真6 包含層・遺構出土鉄製品	140
写真3 杯蓋588のヘラ記号	133	写真7 釘頭部X線写真	140
写真4 滑石製有孔円板	133		

第Ⅰ章 調査の経過と概要

第1節 1995年度の発掘調査と報告書の作成

1) 発掘調査

1995年度の土地区画整理事業に伴う発掘調査件数は8件、発掘総面積は4,020㎡であった(図1、表1)。そのうち長原遺跡西地区が4件3,256㎡、同西南地区が1件468㎡、同中央地区が3件296㎡である。瓜破遺跡内での調査は行われなかった。

現場での作業は1995年5月2日に開始し、1996年3月25日に終了した。各調査とも基本的には現代の盛土および作土を重機により、それ以下を人力により掘削している。また調査深度が深い場合など必要に応じ、H鋼と横矢板を用いて土留め工事を実施した。検出した遺構・遺物は写真や実測図によって記録し、木製品や金属製品など保存処理が必要なものはそのつど処理した。各調査の調査地番・面積・期間・担当者などは表1のとおりである。

なお、発掘調査次数は遺跡略号「NG」(長原遺跡)・「UR」(瓜破遺跡)の後に年度、次いで各年度における開始順の番号を付して表記するが、本書で報告する1995年度の調査については、すべて「NG」を冠することから、これを省略している。

表1 1995年度土地区画整理事業に伴う発掘調査一覧

発掘次数	面積	調査地番	担当者	調査期間
長原遺跡西地区				
NG95-13次	1,589㎡	平野区長吉長原西3丁目	高橋工	1995年5月8日～1995年8月3日 1995年10月30日～1996年2月29日
NG95-14次	675㎡	同 長吉長原西1丁目	田中清美・絹川一徳	1995年5月2日～1995年10月17日
NG95-41次	720㎡	同 長吉長原西3丁目	高橋工・寺井誠・瀬尾真由美	1995年8月31日～1996年1月17日
NG95-49次	272㎡	同 長吉長原西3丁目	宮本康治	1995年11月6日～1996年2月20日
長原遺跡西南地区				
NG95-76次	468㎡	同 長吉長原西3丁目	高橋工	1996年1月10日～1996年3月25日
長原遺跡中央地区				
NG95-20次	70㎡	同 長吉長原3丁目	大庭重信	1995年6月5日～1995年8月2日
NG95-42次	104㎡	同 長吉長原3丁目	大庭重信	1995年9月4日～1995年10月21日
NG95-54次	122㎡	同 長吉長原3丁目	大庭重信	1995年10月21日～1996年1月12日

2) 報告書の作成

遺物の水洗・マーキング・接合などの作業、図面・写真資料の基本的な整理作業は、発掘調査終了後ただちに調査担当者のもとで行った。調査担当者が作成した資料を基礎として、報告書の作成に伴う図面・写真・遺物等の整理作業を1998年度に行った。それらの作業についても、現場作業などほかの業務に当たっていたばあいを除き、原則として調査担当者が携わり、95-14次調査については田中が、95-20・42・54次調査については大庭が、その他については池田が主として行った。原稿の執筆は例言に記したとおり分担して行い、編集は長原調査事務所長松尾信裕の指揮のもと池田が担当した。

報告書の版下の作成は[高井健司1992]で紹介された方法に従って行い、完成したデジタルデータを印刷所に直接入稿した。

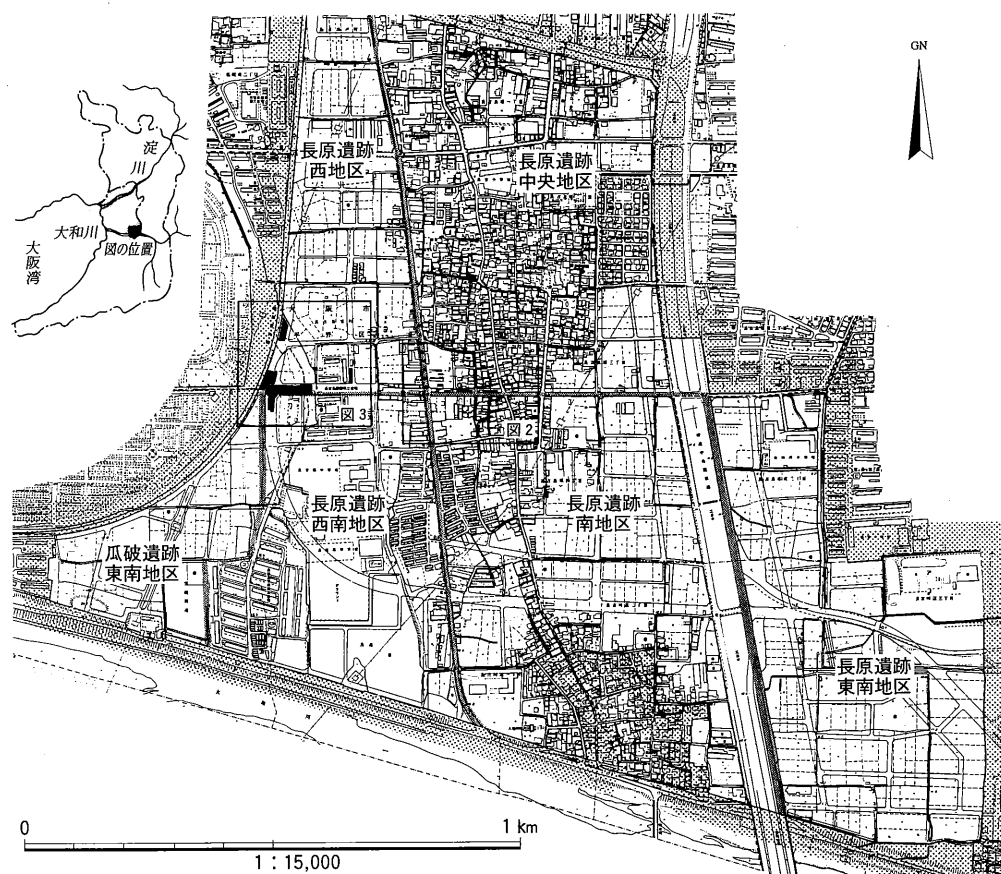


図1 長吉瓜破地区土地区画整理事業施行範囲と調査地

第2節 調査の経過と概要

1) 長原遺跡中央地区(図2)

本年度は、東西方向の既設道路の拡幅に先だち、95-20・42・54次調査の3件の調査が順次実施された。これまで周囲で行われた調査により、調査地の北方には古墳時代中期から後期にかけての集落域が、南方には同時期の墓域が広がっていたことが判明しており、3件の調査地はこの集落域の南端に位置している。調査に当っては、H鋼と横矢板による土留めを行った。主な調査成果としては、飛鳥・奈良時代以来の東除川の変遷を明らかにすることができたこと、古墳時代の建物群を検出し、集落域の南端に当たると推定されていた調査地周辺の様子が明らかになったことなどが挙げられる。

i) 95-20次調査

近世の耕作溝、平安時代の土壌、飛鳥時代の畦畔や溝、古墳時代の掘立柱建物群を検出した。また、古墳時代の遺構検出中に滑石製白玉が出土したことから、遺構埋土をすべて持ち帰り水洗選別を行った。また長原7B層相当層以下では、阪手火山灰層とみられる火山

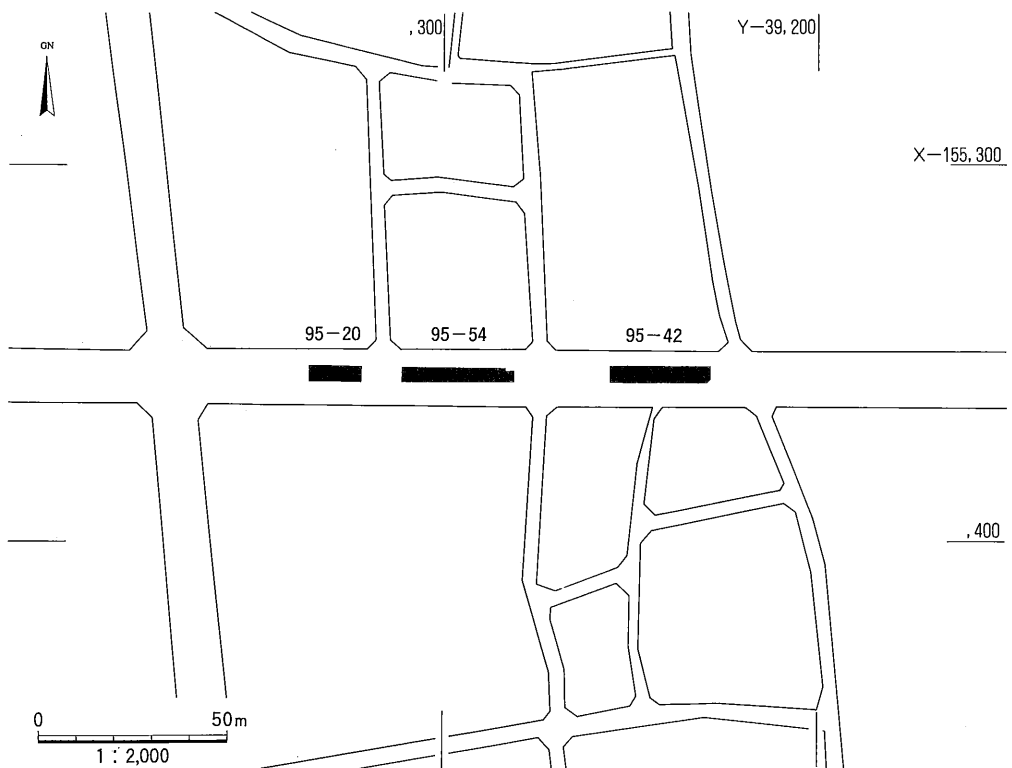


図2 長原遺跡中央地区の調査地

灰層が観察された。

ii)95-42次調査

本調査地は東除川の本流部分に当り、古代から近世にかけての氾濫により砂が厚く堆積していた。長原6B層上面まで明確な遺構面が認められなかったため、長原2層から5層までは砂層の切合いに留意しながら、調査地北半を人力により掘下げた。地層の観察は南壁を中心に行った。土管を利用した17世紀の導水施設、中世の溝、飛鳥・奈良時代の溝・杭列・畦畔、古墳時代の土壙などが検出された。

iii)95-54次調査

飛鳥・奈良時代の畦畔や踏込み、古墳時代の建物・土壙・溝などを検出した。断面観察用に残した南アゼを除去中に、洪水で堆積した砂礫層の下部から、平安時代の瑞花双鴛鴦文八稜鏡が出土した。ほかにも、古墳時代の遺構に伴って、滑石製の有孔円板・紡錘車・白玉などが出土している。

2)長原遺跡西・西南地区(図3)

当地区は長原遺跡西方の瓜破遺跡と隣接しており、1983年度以降多くの発掘調査が実施されてきた。地区内では南東から北西に延びる「馬池谷」と仮称している幅約100mほどの埋没谷が存在する。この谷の東西では、これまでの調査で、古墳時代中期から飛鳥時代にかけての集落が営まれ、古代から近世にかけて谷が埋っていく過程ではおもに水田として利用されたことが分かっている。

本年度の調査では、95-14次調査地と95-13・41・76次調査が「馬池谷」の西岸、95-49次調査が東岸に位置する。95-14・49次調査については「馬池谷」の斜面から谷地形の内部に当たることが予想されたため、H鋼と横矢板を用いて土留め工事を実施した。

i)95-14次調査

調査地周辺では、縄文時代晩期の土器・石器ブロックを検出したNG94-63次調査、奈良時代以降の水田や「馬池谷」の支谷などを検出したNG93-82次調査など、これまでも多くの調査が行われている。実測や遺物の取上げのため5m四方の地区割を行い、南東杭を基準に地区名を付し調査を開始した(図4)。遺構としては、奈良時代から江戸時代にかけての各時代の水田、古墳時代中期の掘立柱建物・井戸・溝などが検出された。遺物は、関東系の和泉式土器や韓式系土器を含む大量の土器、製塩土器、滑石製品、木製品など古墳時代に属するものを中心であるが、旧石器時代のナイフ形石器、縄文時代後・晩期の土

器や石錘も出土している。また、飛鳥時代に属する遺物では、類例の少ない履物などの木製品や、解体痕が見られるウシ・ウマ骨がまとまって出土した。

ii) 95-13・41・76次調査

調査地の南西では、これまでにUR86-11次調査やNG89-67次調査などで、飛鳥時代の掘立柱建物群が発見されている。95-13・41・76次調査地は各々隣接しており、95-13次調査地では周辺耕作地への出入りを確保するため調査地を3区に分割した。また、95-41次調査では現代の下水管をはさみ、東区・西区を設定した(図5)。調査の過程で、飛鳥時代の掘立柱建物(95-41・76次調査)と、古墳時代の溝(95-13次調査)が調査地南端で検出されたことから、区画整理事務所と協議の上、調査地を一部拡張した。調査では、中・近世の耕作溝群や土壌、飛鳥時代の掘立柱建物や溝、古墳時代の溝や土壌などが検出

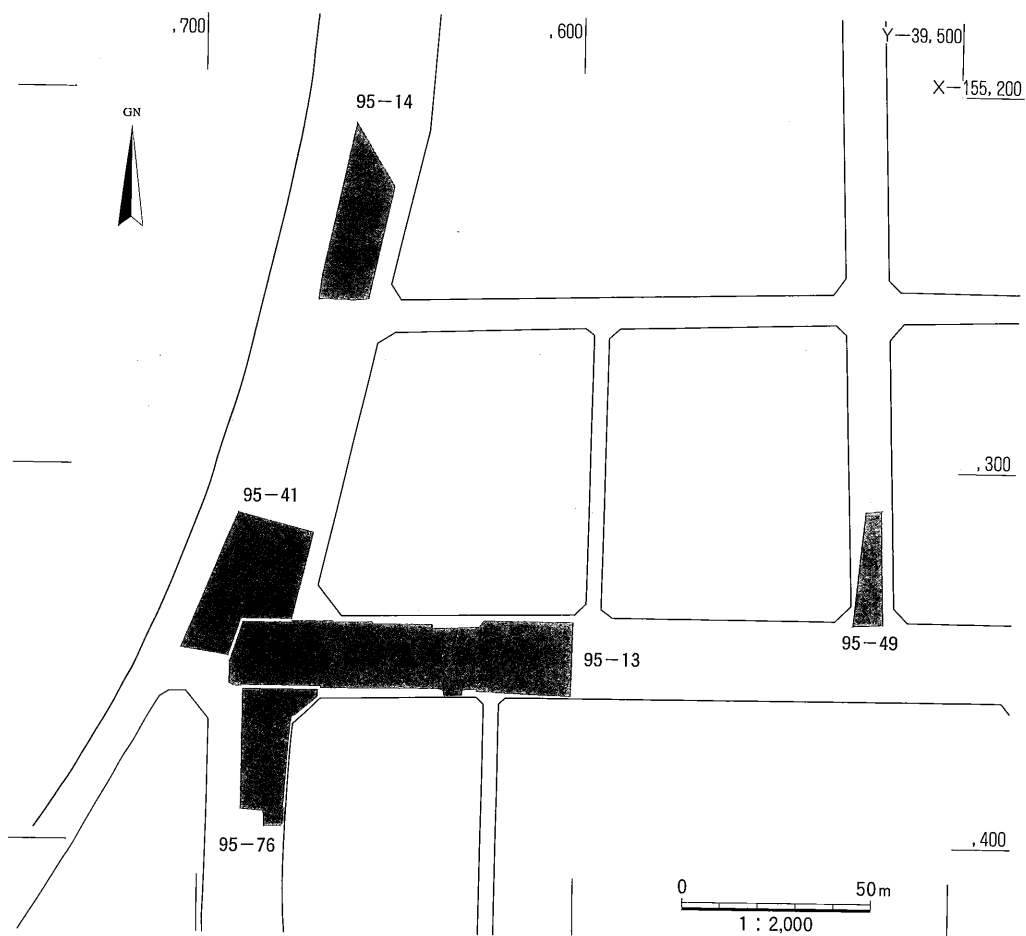


図3 長原遺跡西・西南地区の調査地

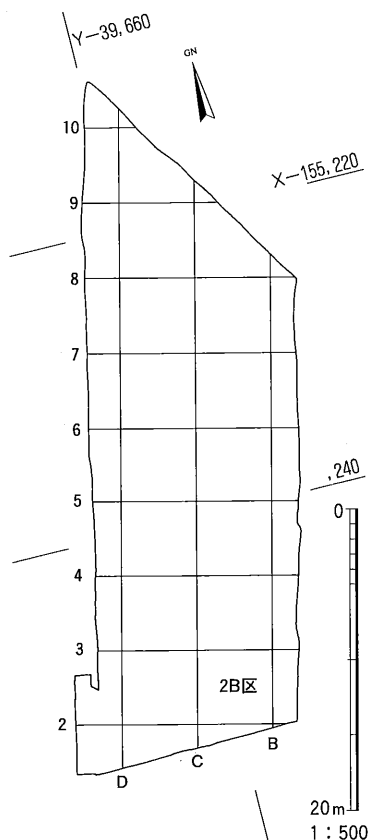


図4 95-14次調査地地区割図

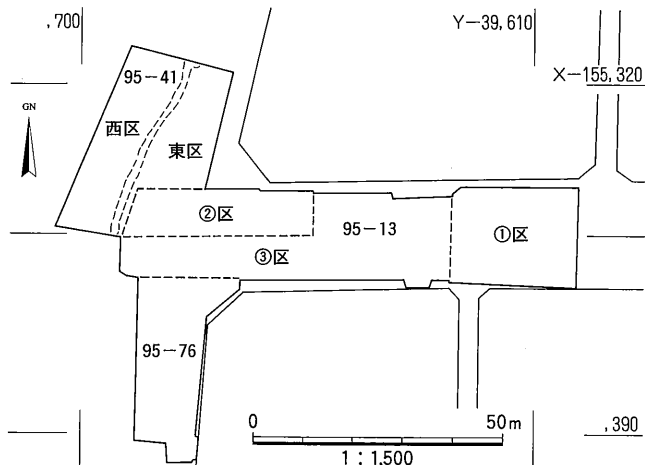


図5 95-13・41・76次調査地地区割図

され、土器や円筒埴輪など古墳時代中～後期の遺物を中心に、飛鳥時代のものとみられる鉄製鎌・鉸具、縄文時代の石鏃、旧石器時代のナイフ形石器などが出土した。長原・瓜破遺跡における飛鳥時代の掘立柱建物の分布や性格などを考える上で重要な資料が得られた。

iii) 95-49次調査

古墳時代の集落が確認されたNG93-34次調査地が南接するほか、周辺では多くの調査が行われてきており、古墳時代から平安時代の集落、奈良時代から室町時代にかけての水田などが検出されている。調査地は、10m単位で南から地区割をして、遺物取上げや実測の規準とした。遺構としては、中世の水田・島畠や溝、飛鳥～奈良時代の水田や溝、古墳時代の井戸・土墳・溝などが検出された。遺物では韓式系土器を含む古墳時代中期の土器、古墳～奈良時代の木製品や木簡が出土しており、そのほかにも鉄製釘、製塩土器、有孔円板などがある。調査では、馬池谷の埋没と土地利用の変遷や、古墳時代中期の集落範囲を考える上で貴重な資料が得られた。

第Ⅱ章 長原遺跡中央地区の調査

第1節 95－20次調査

1) 層序(図6、図版1)

長原遺跡は瓜破台地の東縁から沖積平野にかけて位置する。調査地では長原遺跡標準層序の沖積層上部層Ⅰに相当する氾濫性の砂礫層が厚く堆積していた。これは調査地東側を南から北に流れていた旧東除川の氾濫によるもので、調査地内では長原4A層および長原6Aii層を確認した。それ以深には、長原6Bi層に相当する作土層があり、沖積層上部層Ⅱの長原7B層、沖積層中・下部層の長原12/13層がわずかに残存していた。低位段丘構成層である長原14層の上面のレベルはTP+10.0mである。

地層の観察は東西に細長い調査地の南壁を利用して行った。本章の各調査における層名は調査地間の層序の対比のため、長原遺跡標準層序に従う。以下、各層の特徴を示す。

長原0層：現代の盛土で、層厚約70cmあった。

長原2層：江戸時代の作土層である。上下2層に分かれ、上部が礫混り灰オリーブ色(5Y4/2)シルト質細粒砂、下部が礫混り暗オリーブ色(5Y4/3)細粒砂である。陶磁器や瓦を含み、層厚は約16cmあった。

長原4A層：浅黄色(2.5Y7/3)礫～極粗粒砂の氾濫性の水成層で、調査地全域に30～55cmの厚さで堆積する。下位の地層を大きく削込んでおり、南壁断面では東から西へ下がるラミナが顕著に見られた。磨滅した土師器・瓦器片を含む。

長原4C層：礫混り暗オリーブ色(5Y4/3)細粒砂の暗色帯で、調査地北西端にわずかに残存していた。下位の長原6Aii層の上部が土壌化したもので、層厚は約10cmあった。本層上面で平安時代の土壌を検出した。

長原6Aii層：にぶい黄色(2.5Y6/4)細粒砂～礫の水成層で、調査地の北西部と東部に残存していた。長原6Bi層段階の水田面およびSD601の上半を埋積する。層厚は約40cmあった。本層内から飛鳥時代の土師器が出土した。

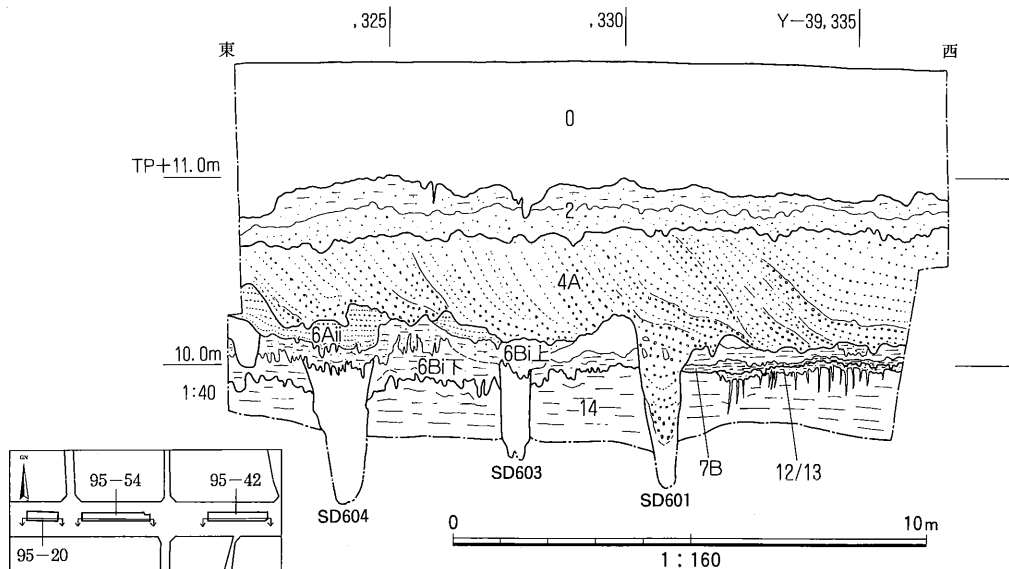


図6 南壁地層断面

長原6Bi層：層相から上・下部の2層に区分できる。

上部は礫～細粒砂混り黄褐色(2.5Y6/4)粘土の作土層であり、調査地全域に分布する。層厚は10～20cmあった。

下部は調査地西部で検出したSD601を境に土質が異なっている。東側では暗灰黄色シルト質粘土からなり、層厚は10～20cmで、下面の踏込みが顕著であった。西側では炭化物粒を若干含む黄灰色(2.5Y5/1)粘土質シルトからなり、層厚は約10cmであった。上部と比べて砂粒を含まない。

長原7B層：オリーブ黒色(5Y3/2)シルトの暗色帯で、調査地西半に層厚約3cmと薄く残存していた。古墳時代の土師器・須恵器を含む。

長原12/13層：灰色(10Y6/1)細粒砂質シルトで、無色透明の扁平型ガラスや角閃石を多く含む。調査地西半に分布し、層厚は約3cmあった。下面で乾痕が顕著に見られた。

長原14層：灰色(7.5Y6/1)粘土である。調査地全面に分布し、層厚は40cm以上あった。

2) 各層出土の遺物(図7)

長原6Aii層から1・2が、長原6Bi層から3・4が出土した。

1は土師器の羽釜である。口径28.6cmで、口縁部に水平の鏝を貼付ける。雲母・長石・角閃石を含む生駒西麓産の胎土である。2は口径27.6cm、器高11.9cmの土師器鉢である。底

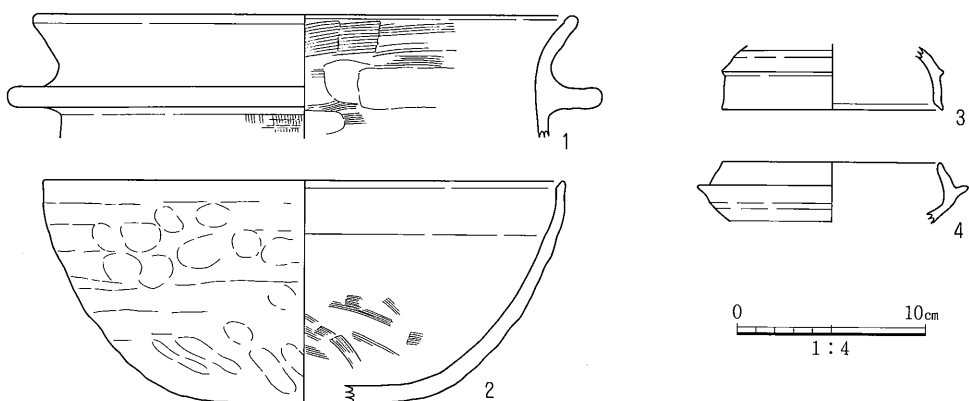


図7 各層出土遺物
長原6Aii層(1・2)、長原6Bi層(3・4)

が深く、口縁端部は内傾した面をもつ。外面がユビオサエ調整、内面下半をハケ調整のあと、上半に横ナデを施す。

3は口径11.8cmの須恵器杯蓋で、TK47型式に属する。4は口径11.8cmの須恵器杯身である。立上がりは短く内傾しており、MT85型式に属する。ともに地層の年代を示さず、下位の層準に由来するものである。

3) 遺構とその遺物

i) 江戸時代の遺構(図9)

長原2層下部の下面で精査を行い、SD201・202を検出した。幅約0.5m、深さ約0.1mの東西方向の溝で、耕作に係わるものと考えられる。18世紀以降の陶磁器が出土した。

ii) 平安時代の遺構と遺物

この時代の旧地表面は洪水による削平でほとんど残存していなかった。わずかに調査地北西端で長原4C層が残っており、上面でSK401を検出した。

SK401(図8) 深さ0.1mの浅い土壌である。調査地内では北側肩のみ残存していた。埋土中から土師器5・黒色土器6および拳大の砂岩が出土した。

5は口径15.2cmの土師器碗である。6は黒色土器A

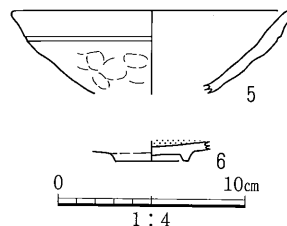
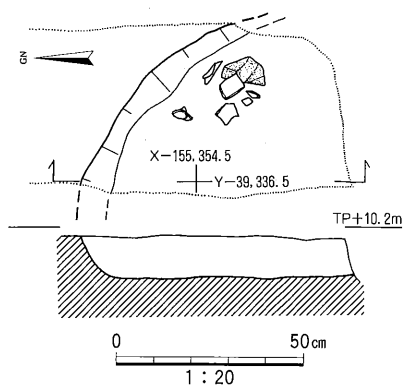


図8 SK401と出土遺物

類の椀もしくは皿の底部である。高台は復元径が4.0cmで、断面台形である。これらは平安時代Ⅱ期に属する。

iii) 飛鳥時代の遺構(図9、図版1)

調査地内に長原6Bi層上・下部の2層の作土層が分布していた。長原6Bi層上部は6Aii層の水成層で覆われており、上面で溝SD601・602、畦畔SR601および踏込みを、また6Bi層下部上面で溝SD603・604をそれぞれ検出した。

a. 長原6Bi層上部上面検出遺構

SR601および踏込み 調査地東部に南東―北西方向の畦畔SR601が存在する。北西端で西側に直角に取付く、幅0.6mの小畦畔がわずかに残存していた。SR601以东およびSD601以西では、長原6Aii層で埋るヒトや偶蹄類の踏込みが顕著に見られた。

SD601(図10) 調査地西部で検出した南東―北西方向の溝で、幅1.2m、深さ0.9m、断面は逆台形である。溝を掘った際のあげ土を溝の両側に盛り、幅約1.0m、高さ0.2mの土堤を設けている。溝の最下部には機能時の細粒砂～シルト質粘土が堆積しており、その後細粒砂質シルト層で埋められ、最終的に長原6Aii層に相当する細粒砂～礫により埋って

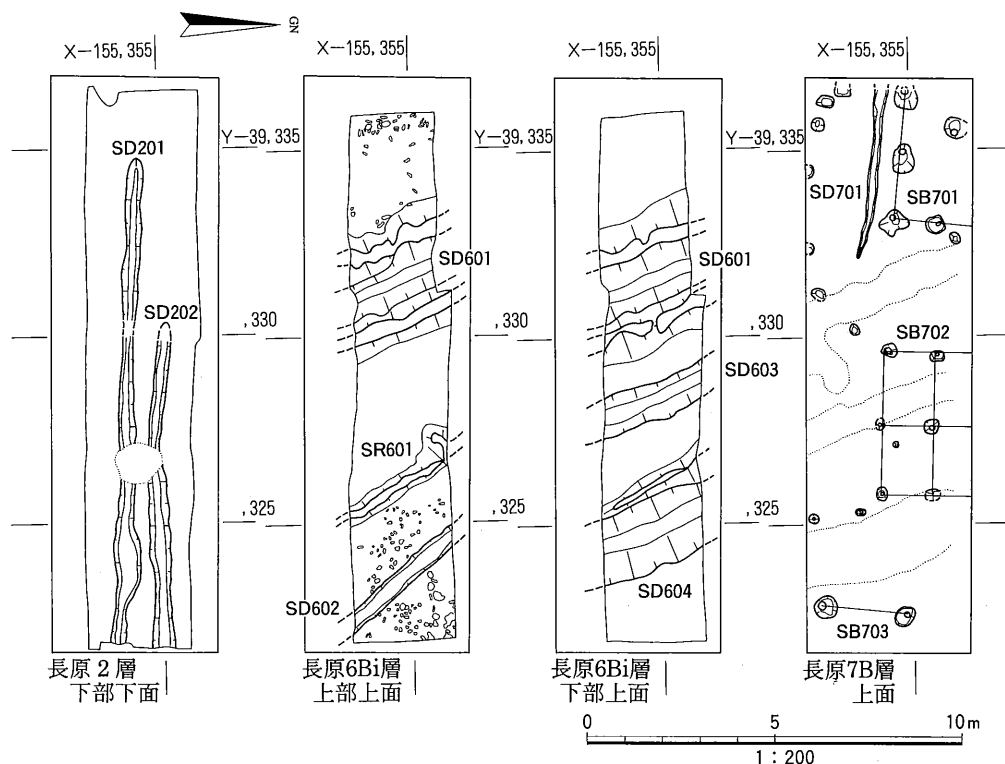


図9 各層検出遺構

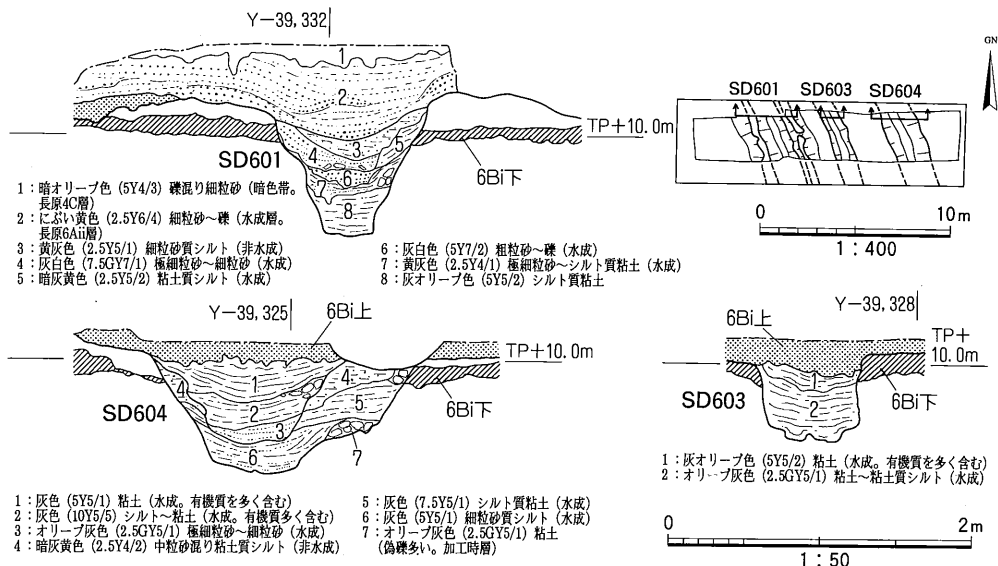


図10 SD601・603・604断面図

ることが調査地の北壁断面で確認された。遺物は出土しなかった。

SD602 調査地東部で検出した南東—北西方向の溝で、幅0.5m、深さ0.2mである。細粒砂～粗粒砂の水成層で埋っており、周囲の作土を起源とする偽礫を多く含む。周辺に分布する踏込みは、SD602の埋没後に形成されたものである。遺物は出土しなかった。

b. 長原6Bi層下部上面検出遺構

SD603(図10) 調査地中央で検出した南東—北西方向の溝で、検出面での幅1.0m、深さ0.65m、断面は方形である。シルト質粘土～粘土の水成層で徐々に埋っている。遺物は出土しなかった。

SD604(図10) SD603の東側でこれと平行する溝で、検出面での幅1.8m、深さ0.65m、断面は逆台形である。下部には機能時のシルト質細粒砂～シルト質粘土層が堆積しており、その上を中粒砂混り粘土質シルト層で人為的に埋められる。このあと溝は掘直され、最終的に細粒砂～粘土の水成層で埋る。SD603・604ともに周囲に、溝を掘った際のあげ土と考えられる地山起源の偽礫が分布していた。遺物は出土しなかった。

SD601・603・604は、調査地南側300mで検出された飛鳥時代の流路群Ⅱ[京嶋寛1990]の続きで、灌漑用の水路と考えられる。なお、これらの水路は、いずれも長原6Bi層下部の上面より掘込まれており、長原6Bi層上部の水田耕作時に機能していたのはSD601のみである。

iv)古墳時代の遺構と遺物(図9、図版2)

長原7B層上面で掘立柱建物SB701～703と溝SD701、およびこれらと組み合わない柱穴を11基検出した。

SB701(図11、図版2) 調査地西部で検出した掘立柱建物である。東西2間以上、南北2間以上で、続きは北側の調査地外に延びている。柱間距離は東西が1.7m、南北が1.2mで、東西の方が間隔が広い。東西の柱穴は掘形が直径約0.6mの不整な円形で、検出面からの深さが0.4～0.6m、柱径が0.15mであった。南北の柱穴の一つはそれよりも規模が小さく、掘形の直径が0.5m、深さが0.25mであった。また、南東隅の柱穴底には残存長が一辺約14.0cmの方形で、厚さ約1.5cmの板材が敷かれており、礎板と考えられる。最も荷重のか

かる隅柱を支える目的で設置されたものであろう。当遺跡では、古墳時代から飛鳥時代にかけての掘立柱建物に関するこれまでの調査成果から、梁行に比して桁行の柱間距離の短いことが統計的に判明している。SB701は南北棟と考えられ、方位はN7.0°Eである。

SB701の南側には、これと平行する幅0.2m、深さ0.04mの浅い東西方向の溝SD701があり、SB701に伴う排水溝と考えられる。

柱穴内からは、土師器7および須恵器・製塩土器片が、南東隅柱穴付近からは白玉8が出土した。7は口径が25.1cmの土師器甕で、口縁部の内外面はヨコナデ調整、体部の内外面はハケ調整である。5世紀後半から6世紀前半にかけてのものであろう。8は緑灰色を呈する滑石製白玉で、直径4.8mm、厚さ3.8mmある。遺構の検出作

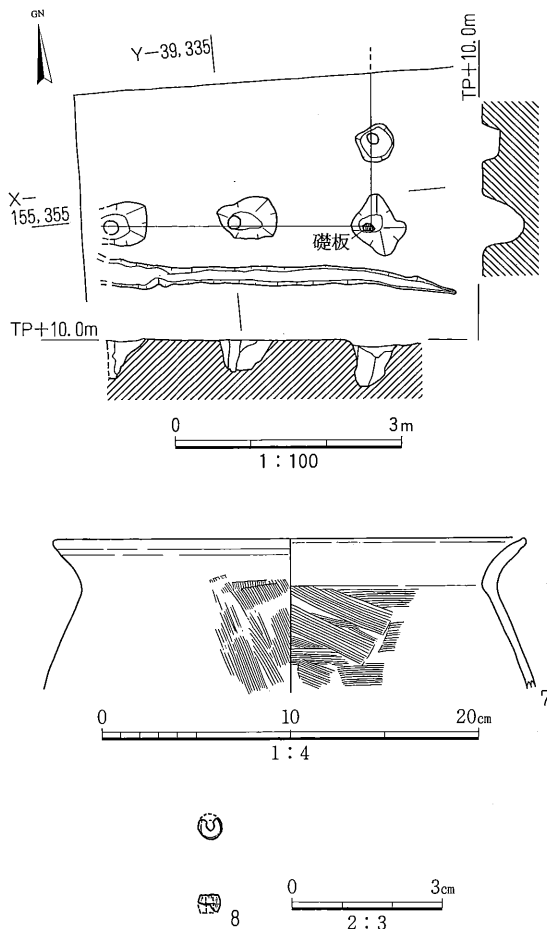


図11 SB701と出土遺物

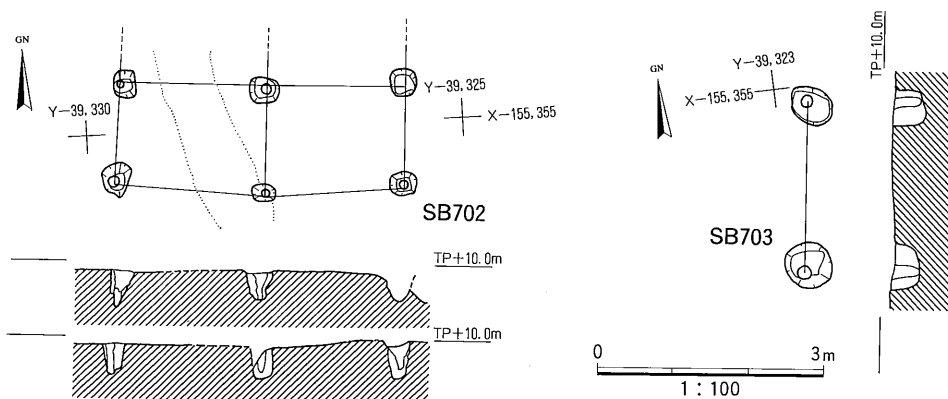


図12 SB702・703実測図

業中に出土したため、その後、同時代の遺構埋土をすべて持ち帰り水篩したが、このほかに滑石製品は出土しなかった。

SB702(図12) 調査地中央で検出した総柱の掘立柱建物で、続きは北側の調査地外に延びている。東西2間(3.6m)、南北2間以上で、柱間距離は東西が1.8m、南北が1.3mである。柱穴はいずれもほぼ同じ規模で、掘形が直径0.3mの円形、深さが検出面から0.4mあり、柱は直径0.1mあった。**SB702**は柱配置から南北棟と考えられ、方位はN2.0°Eである。柱穴内からは土師器・須恵器および製塩土器の小片が出土したが、時期を特定できるものはない。向きが**SB701**と同じ方向で、かつ建物の南辺がそうすることから、これと同時存在していた可能性が高い。

SB703(図12) 調査地東部で検出した掘立柱建物で、南北1間分を確認した。建物の大部分は東側の調査地外に延びているものと考えられる。南北の柱間距離は2.2mである。柱穴は掘形が直径0.5mの円形で、深さが検出面から0.4~0.5m、柱径が0.15mであった。方位はN7.0°Eである。柱穴内からは土師器および製塩土器の破片が出土したが、時期は特定できなかった。

調査地内では**SB701**~**703**以外に柱穴を11基検出したが、建物を復元するにいたっていない。復元した3棟の建物についても、**SB701**の柱穴から出土した土師器7以外、遺物の出土量が少なく、時期の判定が困難であるが、後述するように建物の配置が南北方向を指向していることから、いずれも5世紀後葉から6世紀初頭のものと考えられる。

第2節 95－42次調査

1) 層序(図13、図版3)

調査地は95－20次調査地点の約70m東側に位置する。本調査地点では奈良時代以降、近世にいたるまでの河道(旧東除川)が位置を変えながら南から北に流れており、河川の氾濫がもたらした複数時期の土砂が厚く堆積していた。その厚さは230cmに及ぶ。調査地内では長原2・4A・4B・5の各層が確認され、それぞれの水成層が不整合の関係で重なり合っていた。それ以深の地層は、調査地東半で長原6B層に相当する作土層および長原7B層が分布していた。また、低位段丘構成層である長原14層の上面のレベルはTP+9.8mである。

地層の観察は東西に細長い調査地の南壁を利用して行った。以下に各層の特徴を示す。

長原0層：現代の盛土である。

長原2層：上部の客土層と下部の水成層に分かれる。下部は調査地全域に分布する黄橙色(10YR7/8)礫～極粗粒砂の氾濫性の水成層である。層厚は50～110cmあった。本層中から17世紀後半代の陶磁器が出土した。上部は調査地東半の低い個所を埋める客土である。礫混り浅黄色粗粒砂～礫で、上半は攪乱を受けていた。大和川付け替え後に機能しなくなった東除川を埋めたものと考えられる。

長原4A層：明黄褐色(10YR6/6)細礫～細粒砂の氾濫性の水成層で、極細粒砂～シルトの大型の偽礫を多く含む。調査地全域に分布し、層厚は30～60cmあった。本層中から瓦器・土師器が出土した。

長原4B層：明黄褐色(10YR6/8)シルト～細礫の水成層である。調査地西部に存在する河道SD401を埋積する。本層中から瓦器が出土した。

長原5層：明黄褐色(10YR7/6)細礫～細粒砂の氾濫性の水成層である。調査地中央の河道SD605を埋積する。奈良時代の土師器・須恵器が出土した。

長原6B層：調査地東半に分布する作土層で、上・下部の2層に分かれる。上部は灰オリーブ色(5Y5/3)シルト質粘土で、杭列を境に東側にのみ分布する。層厚は約5cmと薄く、下面は踏込みによる凹凸が顕著であった。下部は暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質粘土で、層厚は約10cmあった。下面は水平に近く凹凸は見られない。本層中からは地層の年代を示す遺物は出土しなかった。

長原7B層：粗粒砂混り褐灰色(7.5Y4/2)極細粒砂質シルトで、下位の長原14層を起源

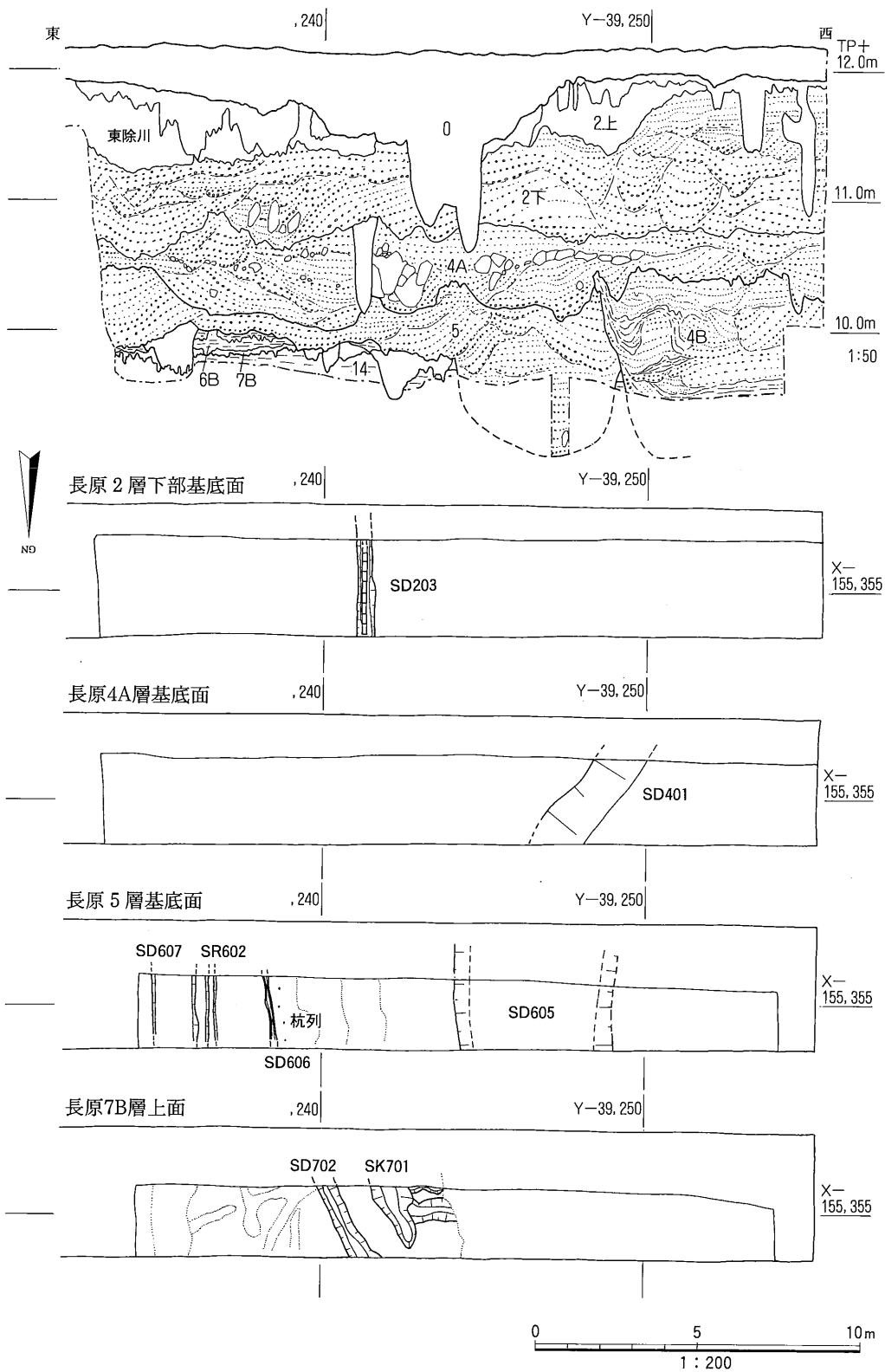


図13 南壁地層断面および各層検出遺構

とした偽礫を含む。層厚は5～10cmで、下位層との境界は明瞭である。本層上面で、溝および古墳時代の遺物を含む土壌を検出した。

長原14層：灰白色(5Y7/1)粘土で、層厚は20cm以上あった。

2) 各層出土の遺物(図14、図版22)

長原2層下部の水成層中から9～12が、長原4A層から13・14・16が、長原4B層から15が、長原5層から17・18がそれぞれ出土した。

9～12は近世陶磁器で、9は唐津焼皿、10は京焼系の碗、11は肥前磁器碗、12は丹波焼播鉢である。9は表面の磨滅が激しく、底部内面に砂目が残る。時期は9が17世紀前半、10が17世紀末、11・12が17世紀後半である。

13～15は瓦器碗である。13・14は口径12cm前後と小さく、13は高台が省略されている。外面はユビオサエ、内面にはミガキが数条施されるのみである。13世紀後半のものである。15は口径14.8cm、器高5.6cmで、しっかりとした高台をもつ。外面はヘラケズリののちヘラミガキを行い、内面は底部と体部を分割してヘラミガキを施す。11世紀後半のものである。

16は土師器杯もしくは鉢の底部である。突出した高台をもち、復元高台径12.1cmである。

17は須恵器杯Bである。体部に近い位置に高台が付けられ、復元高台径は9.6cmである。平城宮土器V～VIのものである。18は土師質のミニチュア甕である。口縁部を折り曲げて

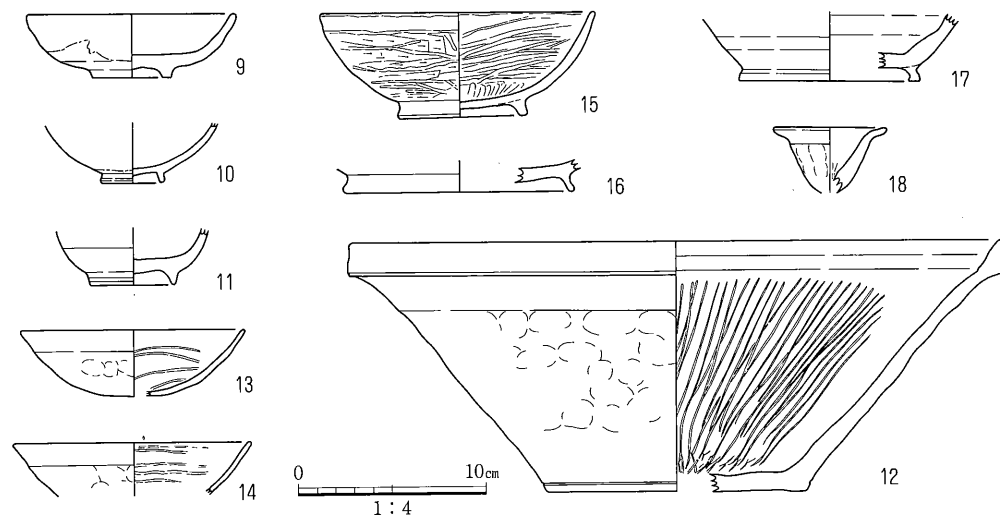


図14 各層出土遺物

長原2層下部(9～12)、長原4A層(13・14・16)、長原4B層(15)、長原5層(17・18)

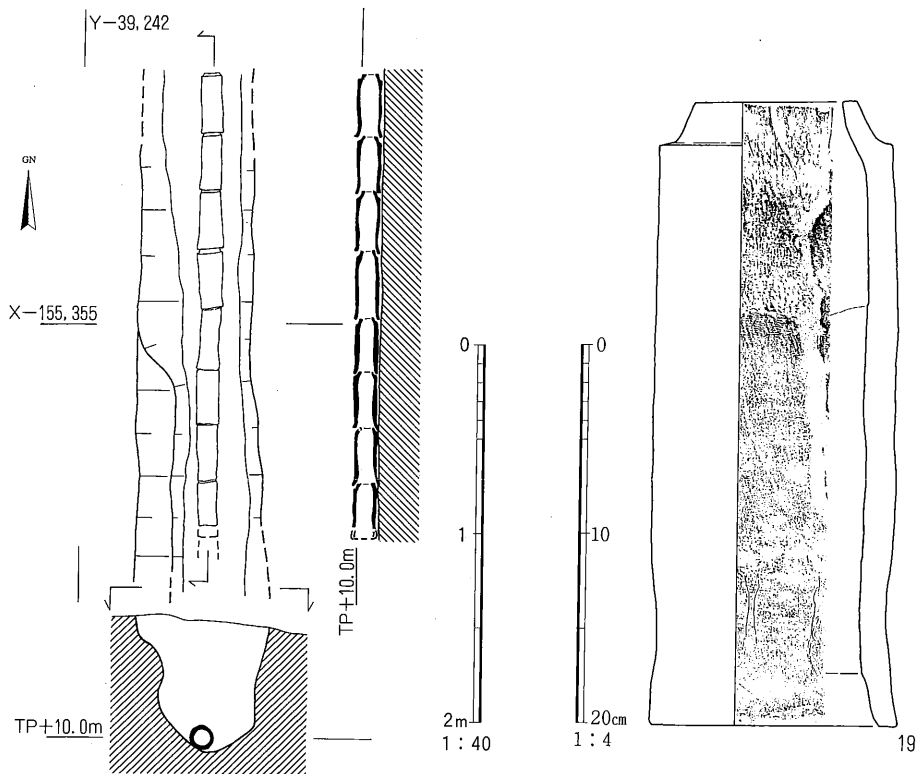


図15 SD203と出土遺物

おり、調整は内外面ともユビオサエもしくはナデである。

3) 遺構とその遺物

i) 江戸時代の遺構と遺物(図13)

南壁断面の観察により、長原2層下部の上面で東除川の河道と考えられる落込みを確認した。また、長原2層下部の水成層を除去した基底面で溝SD203を検出した。

東除川 東側の調査地外にまたがる南北方向の河道である。調査地内で西肩を確認し、幅9.5m以上、深さ0.6mある。断面観察では底に水が流れた痕跡を確認することができなかったが、長原2層上部の客土層によって一気に埋められており、1704年に行われた大和川の付け替えによって機能しなくなった東除川に相当すると考えられる。

SD203(図15) 調査地中央で検出した南北方向の溝である。幅0.7m、深さ0.7mで、溝底に瓦質の土管を連結して並べ、砂礫層によって埋戻していた。土管の底のレベルが南側より北側の方がわずかに低いことや、土管同士の結合方法から、南から北に水を流す暗渠

施設と考えられる。埋土中から寛永通宝が2点出土した。

19は瓦質の土管で、直径13.0cm、長さ33.0cmである。鉄線引きによる粘土板を巻いて作られており、内側には接合部をナデ消したあとが残る。胴部内面には布目圧痕が、玉縁部から胴部にかけての内面にはゴザ状圧痕[小林謙一・佐川正敏1989]が残る。

ii) 鎌倉時代の遺構(図13)

SD401 長原5層上位の長原4A層基底面で東肩を検出したSD401は、調査地西半を南西―北東方向に横切る河道で、幅7.0m以上ある。一部深掘りによって溝の底を確認し、深さは長原4A層基底面から1.4mある。長原4B層に相当する水成のシルト～礫の互層で埋まっている。上層から出土した完形の瓦器碗15については、第2節の第2項で扱った。

iii) 飛鳥・奈良時代の遺構(図13、図版3)

調査地中央で河道SD605を、調査地東部で溝SD606・607、杭列および畦畔SR602を検出した。ともに長原5層の水成層で覆われているが、調査地東部では長原6A層に相当する地層が長原5層により削平され残存していない可能性がある。

SD605 南北方向の河道で、幅5.0mある。一部深掘りによって確認した溝の底は、深さ0.7mある。長原5層に相当する水成の粗粒砂～礫で一気に埋まっている。調査地の南側600mで検出されているSD21・27[京嶋1990]の続きで、奈良時代の幹線的な流路と考えられる。

SD607およびSR602 SD607は調査地の東端で検出した南北方向の溝で、幅1.3m、深さ0.3mある。溝の下面は踏込みが顕著であり、周囲の作土層と水成の粗粒～極粗粒砂を起源とする偽礫で埋っていた。遺物は出土しなかった。SD607の西隣にはこれと平行して南北方向の畦畔SR602が存在する。幅は0.4m、高さは0.1mである。

SD606および杭列 幅0.1m、深さ0.04mの南北方向の浅い溝である。SD606の西隣には、これと平行して南北方向の杭列が存在する。直径5cmの杭が0.6mごとに打たれており、調査地内で4本検出した。杭列は一直線ではなく、東西にややずれながら交互に並んでいる。このことから、仕切り板などを間にはさんで両側から杭を打って支えるものであった可能性がある。

iv) 古墳時代の遺構と遺物(図13、図版3)

調査地東部の長原7B層上面で溝SD702および土壙SK701を検出した。

SD702 幅0.5m、深さ0.3mの南東―北西方向の溝である。黄灰色のシルト質粘土で徐々に埋ったあと、上半は人為的に埋戻されていた。遺物は出土しなかった。

SK701(図16、図版22) 調査地中央で検出した不整形の土壌である。西側はSD605によって切られていた。最深部で0.3mあり、中～下層は水浸きの粘土が、上層には炭混りのシルト質粘土が堆積しており、自然状態で徐々に埋ったことがうかがえる。

埋土の中層から須恵器20～24および製塩土器25・26が出土した。20・21は須恵器杯蓋で、口径は20が12.8cm、21が11.6cmである。天井部は丸みを帯び、口縁端部は内傾し面をもつ。22・23は須恵器杯身で、口径は22が11.0cm、23が10.6cmである。立上がりはやや内傾し面をもつ。24は須恵器高杯の脚部である。長方形スカシ孔を3方に配し、脚部外面にカキメを施す。これらの須恵器はTK23型式に属するものである。

25は口径8.7cmの椀形の製塩土器である。色調は橙色で、胎土中に直径1mm前後の長石・石英を多く含む。器面の調整は不明であるが、器形から紀伊産のものと思われる。26は口径4.4cm、器高7.3cmの筒形の製塩土器である。器壁はやや厚手で、調整は風化のため不明瞭であるが、外面にタタキメは見られない。色調はにぶい黄橙色で、粗い胎土には長石や酸化鉄粒が比較的多く含まれる。

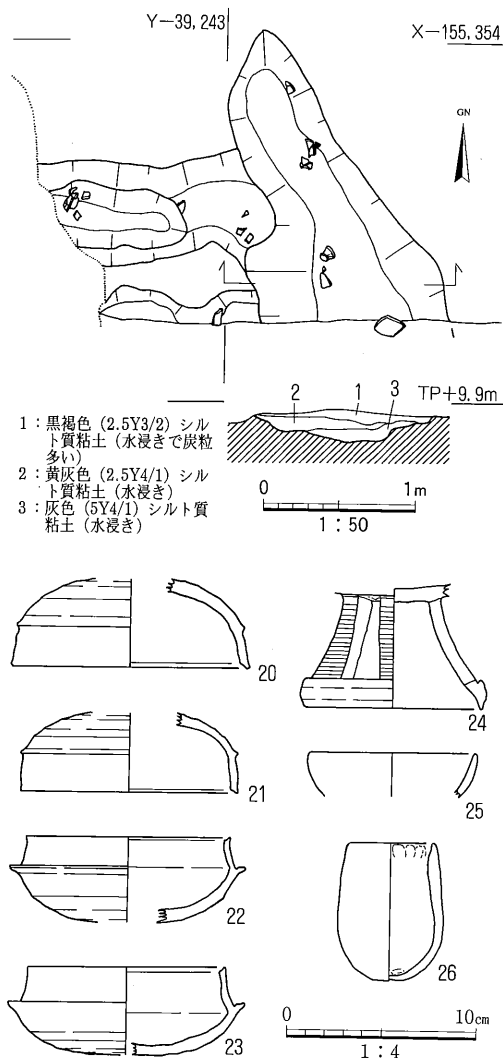


図16 SK701と出土遺物

第3節 95－54次調査

1) 層序(図17、図版4)

調査地は95－20次調査地と95－42次調査地の中間に位置する。本調査地においても、東側に想定される旧河道からの氾濫性堆積物である砂礫層が約80cmと厚く堆積していた。これは長原4A層～4B層に相当し、4B層中では水成堆積と暗色化が繰返されていた。それ以深には長原6Ai層および6Bi層の作土層が分布し、沖積層上部層Ⅱの長原7B層、沖積層中・下部層の長原12/13層はわずかに残存していたのみであった。低位段丘構成層である長原14層の上面のレベルはTP+9.9mであった。

地層の観察は東西に細長い調査地の南壁を利用して行った。以下に各層の特徴を示す。

長原0層：現代の盛土で、層厚は約70cmあった。

長原1層：現代の客土が行われる直前の近・現代の作土層で、層厚は約20cmあった。

長原2層：江戸時代の作土層である。層相の違いから上下2層に分かれ、上部が礫混り褐灰色(10YR7/2)粗粒砂、下部がにぶい黄褐色(10YR7/2)中～粗粒砂である。層厚は上部が約10cm、下部が約30cmあった。本層上部の上面および下面で耕作に係わる溝群や土壙を検出した。上部には18世紀代の陶磁器を、下部には17世紀代の陶磁器および瓦質土器を含む。

長原3層：長原2層下部の基底面で検出した調査地北部の遺構内埋土として残存していた。にぶい黄褐色(10YR5/4)礫混り粗粒砂である。瓦質土器を含む。

長原4A層：暗褐色(7.5Y5/8)大礫～粗粒砂の氾濫性の水成層である。調査地東部および西部の下位層を大きく挟んで堆積しており、層厚は最大で70cmあった。磨滅した瓦器や土師器を含む。

長原4B層：水成層と暗色帯の互層堆積からなっており、長原遺跡標準層序とはそのまま対応しない。本調査地が河川の氾濫を絶えず受ける不安定な環境にあったためと思われる。本報告では、本層を4B層上部Ⅰ・Ⅱ、4B層下部Ⅰ・Ⅱに細分して記載する。

4B層上部Ⅱは調査地中央に存在する溝状の落込み内に堆積した水成層で、黄褐色(2.5Y5/6)細礫～シルトである。4B層上部Ⅰはその上が若干土壌化した暗色帯で、調査地西部に分布する。灰白色(10YR8/1)粗～中粒砂である。4B層下部Ⅱは調査地のほぼ全域に分布する氾濫性の水成層で、灰白色(10YR8/2)中礫～細粒砂である。4B層下部Ⅰはこの上

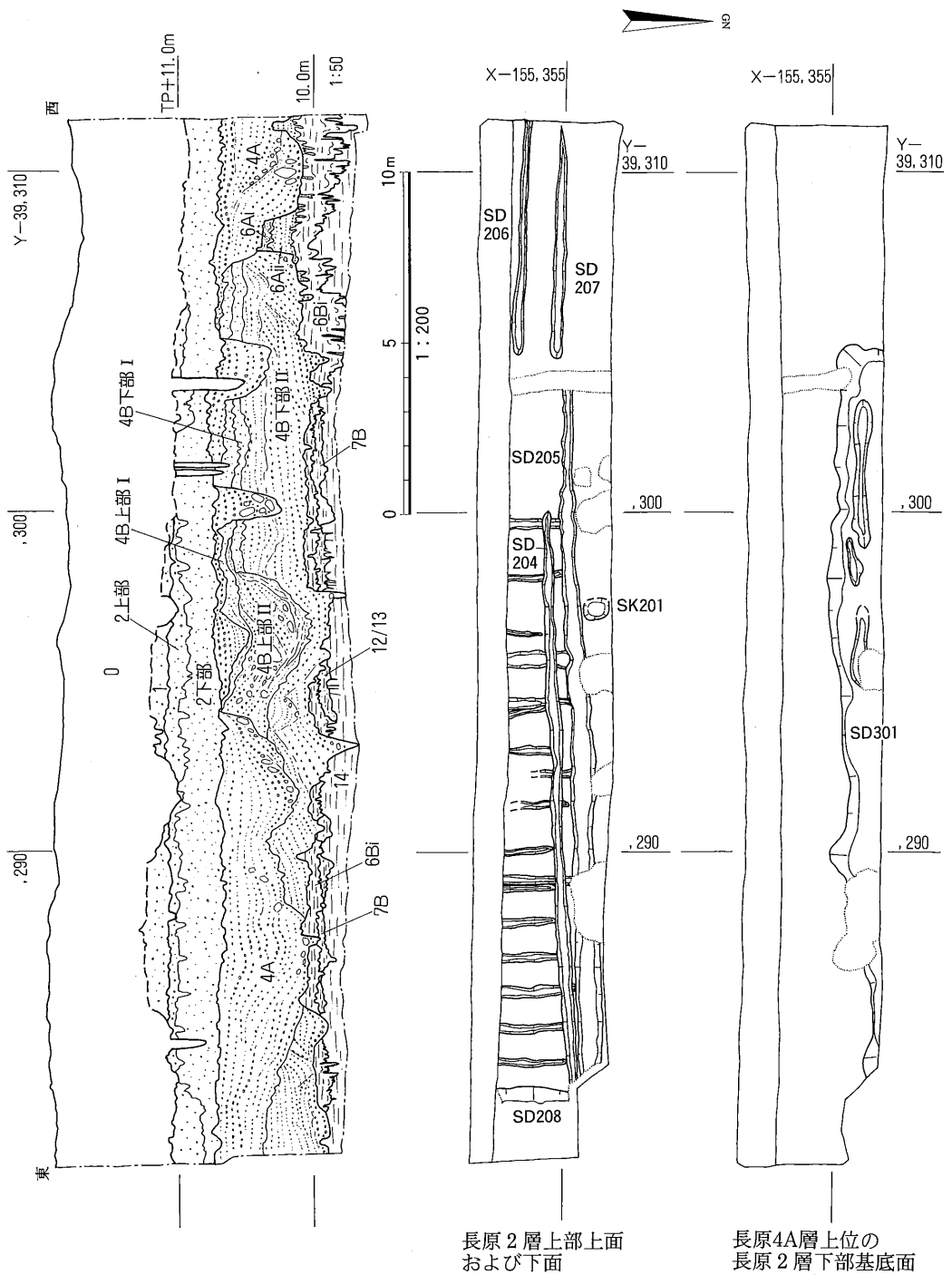


図17 南壁地層断面および室町～江戸時代の遺構

部が土壌化した暗色帯で、黄褐色(2.5Y5/3)粗～極粗粒砂である。各層から瓦器片が出土したほか、4B層下部Ⅱから青銅製の八稜鏡が出土した。

長原6Ai層：オリーブ灰色(10Y5/2)粗粒砂～シルトの作土層である。調査地西端で部分的に残存していた。下位の長原6Aii層を耕起したもので、ラミナ構造が部分的に残っていることから、耕作期間は短かったと考えられる。本層上面で畦畔および踏込みが見られた。層厚は10cmあった。

長原6Aii層：灰白色(10YR8/2)粗～極粗粒砂の水成層で、調査地西端に残存していた。層厚は20cmで、上位の作土化された部分はラミナの変形が激しい。

長原6Bi層：灰オリーブ色(7.5Y4/2)シルト質粘土の作土層である。調査地全域に分布する。長原6Aii層に直接覆われていた範囲の上面には踏込みが顕著に見られた。下面は踏込みが顕著であった。層厚は15～30cmである。

長原7B層：灰オリーブ色(7.5Y4/2)シルト質粘土の暗色帯である。調査地全域に分布し、層厚は10cmあった。調査地東部では、地山起源の偽礫粒や炭化物粒・土器片が多く含まれる。この範囲は下位層との境界が明瞭であり、遺構の埋土であった可能性もあるが、平面調査では把握することができなかった。古墳時代中期の須恵器・土師器を多く含む。

長原12/13層：細粒砂混り灰黄色(2.5Y6/2)粘土で火山ガラスを多く含む。層厚は5cm未満で、下面で乾痕が顕著に見られた。

長原14層：灰色(7.5Y5/1)粘土で、層厚は30cm以上あった。

2)各層出土の遺物(図18、原色図版1)

長原4B層下部Ⅰから瓦器27が、長原4B層下部Ⅱから瓦器28～30および八稜鏡32が、長原6Bi層から土師器31がそれぞれ出土した。

27～30は瓦器碗である。口径は27が15.9cm、28～30が13.1～13.6cmである。28・30は底が深い器形であるが、27・29はやや偏平である。外面調整はすべてユビオサエで、内面は粗雑なミガキが数条施されるのみである。13世紀前半から半ばにかけてのものである。

31は口径12.2cmの土師器鉢である。口縁部外面はヨコナデ調整し、体部外面は粗いハケ調整のあと、細かいハケ調整で仕上げている。内面調整は上半がヨコハケ、下半がナデである。6世紀後半から7世紀にかけてのものと思われる。

32は瑞花双鴛鴦文八稜鏡である(註1)。鏡胎は著しく歪み、一部が破断しており、火を受けたような痕跡がみとめられる。長径8.5cm、縁高0.21cmで、鏡胎の厚みは中央付近でも

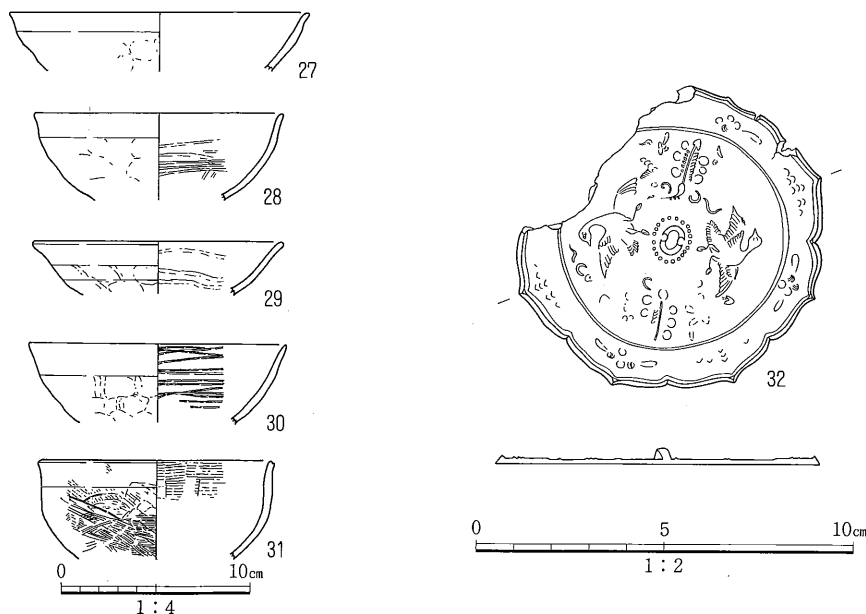


図18 各層出土遺物
長原4B層下部Ⅰ(27)、長原4B層下部Ⅱ(28～30・32)、長原6Bi層(31)

変化ない。鈕は花文座截頭楕円鈕、縁は三角形を呈する。背面の文様はさびのため不鮮明な部分があるが、内区に外向する双鳥と瑞花を交互に配し、段状の円圏で区画した外区には草花文と、飛雲文もしくは草花文が簡略化された列点文が交互に配される。羽翼を広げ飛翔の姿をとる双鳥は鴛鴦とみられる。瑞花双鳥文八稜鏡群の中で、本資料は、鴛鴦文や簡略化された列点文、鈕の形態など同種の鏡の中では後出の要素がみられる一方で、内区の瑞花は古い形態を残す。平安時代後期の後半期に属する資料であろうか。大阪府下における発掘調査で出土した同種の鏡には、和泉大津市大園遺跡出土の瑞花双鴛鴦八稜鏡2面[前田洋子1986]のほか、柏原市玉手山遺跡出土の瑞花双鳳文八稜鏡[柏原市教育委員会1990]、堺市翁橋遺跡出土の瑞花唐草文八稜鏡[堺市教育委員会1984]、枚方市九頭神遺跡出土の瑞花双鳳八稜鏡[西田敏秀1992]、大坂魚市場跡出土の瑞花双鳥文八稜鏡[大阪市文化財協会1987]などがある。大園遺跡出土資料や大坂魚市場跡出土資料には本資料と同様に、鏡胎の歪みや破断が確認されており、その使用法を検討する上で貴重な資料となりうる。

3) 遺構とその遺物

i) 江戸時代の遺構(図17)

長原2層上部の上面で、東西方向の溝SD204～207および南北方向の溝SD208を検出し

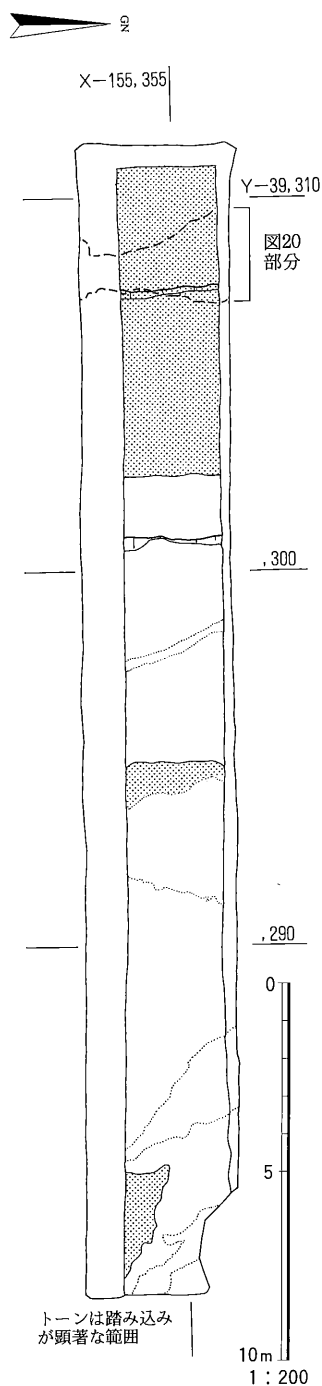


図19 長原6Bi層下面検出遺構

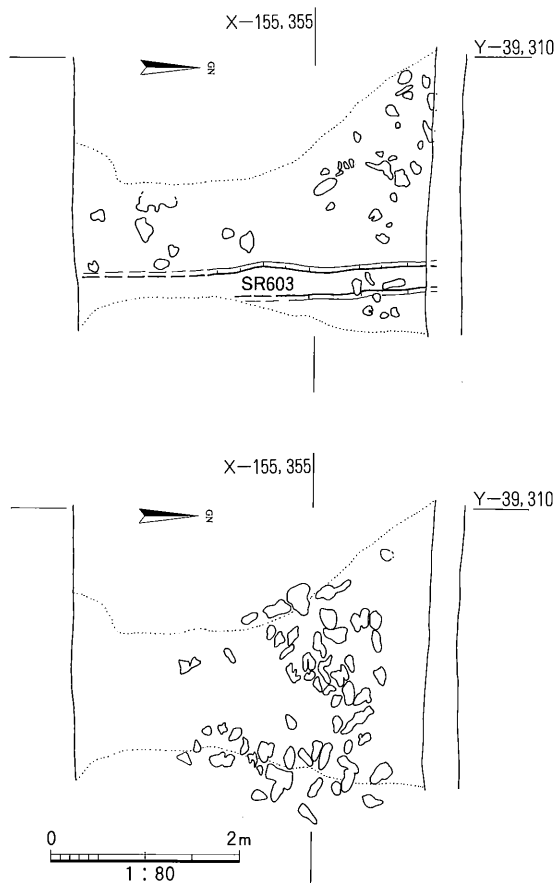


図20 長原6Ai層上面および長原6Bi層上面検出遺構

た。また、SD205以南では本層下面で等間隔に並ぶ南北溝を多数検出した。この溝群は畝の畝間と考えられる。SD205以北では上面で土壌SK201を検出したのみである。これらの遺構は18世紀代の陶磁器類を含む。

ii) 室町時代の遺構(図17)

この時代の遺物包含層は、江戸時代の耕作により削平され残っていなかったが、長原4A層上位の長原2層下部基底面で長原3層を埋土とする溝SD301を検出した。

SD301 調査地北半で検出した幅1m以上、深さ約0.5mの東西方向の溝で、南肩辺を確認した。溝は西側で途切れている。埋土中から瓦や瓦質土器が出土した。

iii) 飛鳥・奈良時代の遺構(図19・20、図版4)

この時代の地層は、大半が長原4B層下部Ⅱの砂礫層によって削平されていた。わずかに調査地西端で長原6Ai層以下の地層が残存していた。

この範囲の長原6Ai層上面で南北方向の畦畔SR603および偶蹄類を中心とした踏込みを、また長原6Bi層上面でヒトを中心とした踏込みを検出した。

さらに、長原6Bi層下面で、SR603と同じ位置に西から東へ低くなる南北方向の段を検出し、長原6Bi層の段階にもここに畦畔があったと思われる。また、上面が削平されていた他の個所でも、長原6Bi層下面で南北方向の段や、踏込みの状態が他と異なる範囲があった。これらも同様に水田の区画単位を示していたことが予想される。

iv) 古墳時代の遺構と遺物(図21、図版5)

長原7B層上面で建物・柱列・柱穴・溝・土壙を検出した。遺構は調査地東半に集中しており、西半では希薄であった。

a. 建物

SB704(図22・24、図版23) 調査地中央で検出した掘立柱建物である。東西2間(3.6m)、南北1間以上で、建物の続きは南側の調査地外に延びている。柱間距離は東西が1.8m、南北が2.0mである。柱穴の平面形は直径0.4～0.6mの隅丸方形で、深さは検出面から0.4～0.5mあった。柱はすべて抜き取られており、柱穴の一つが後述するSD705を切っている。柱穴から須恵器36と土師器45が、建物の西側から須恵器44が出土した。柱間距離の差からみて東西棟と考えられ、建物方位はN87.0°Eである。

SB704の北側にはこれと平行する東西方向の溝SD704がある。幅0.5m、深さ0.05mと浅く、SD705を切っている。SD704はSB704に付随する排水溝と考えられる。埋土

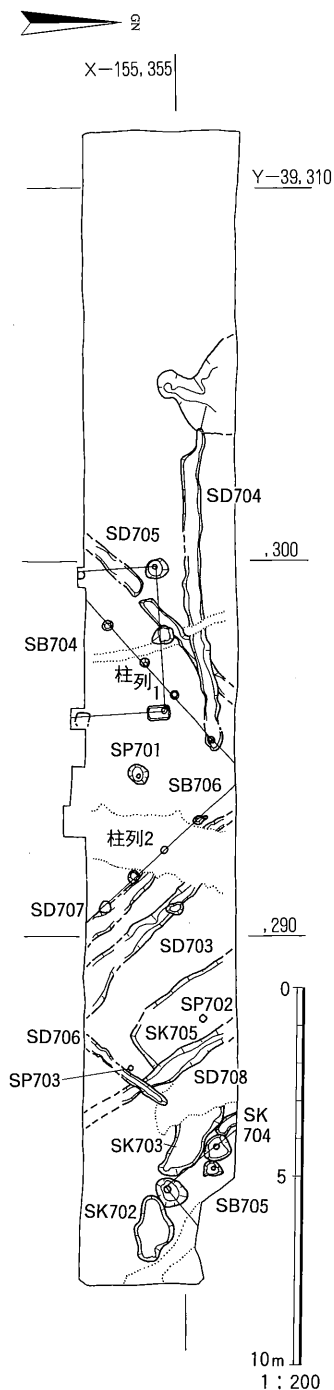


図21 長原7B層上面検出遺構

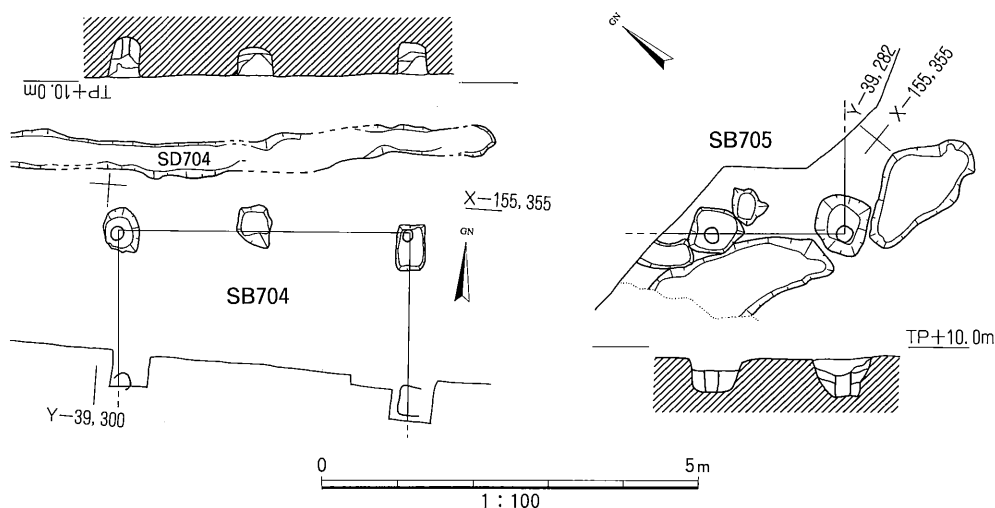


図22 SB704・705実測図

からは須恵器41・42が出土した。また、直上の長原6Bi層中から出土した37も本遺構に伴うものである可能性が強いためここで扱う。

36・37は須恵器杯蓋である。36は口径12.6cm、器高4.8cmで、天井部が丸みを帯び、天井部と立上りを分ける稜は鈍い。37は口径11.8cmで、偏平な天井部に時計回りのヘラケズリ調整を施す。41は口径11.6cmの須恵器杯身、42は口径7.6cmの須恵器短頸壺である。44は須恵器高杯の脚部で、脚部外面にカキメを施し、3方に長方形のスカシ孔を穿つ。脚端部はあまい。これらの須恵器はTK23型式に属する。45は椀形の土師器高杯で、口径が14.7cmとやや大きめで、杯部は浅い。脚部に円形のスカシ孔を3方に穿つ。以上の遺物の年代観からSB704・SD704の時期は5世紀後半と考えられる。

SB705(図22) 調査地東端で検出した掘立柱建物である。柱穴を2基確認したにとどまり、建物自体は北東側の調査地外に延びている。柱間距離は1.9mで、方位はN39.0°Wである。柱穴は直径約0.6mの隅丸方形で、深さは検出面から約0.5mあった。柱は抜き取られていたが、下半に柱痕跡が残っており、直径0.2mであった。遺物は出土しなかった。後述するSK702・703はSB705に伴う可能性がある。

SB706(図23・24、図版5・23) 調査地中央で正方位から約45°振って直角に折れ曲がる柱列1・2を検出した。柱間距離はそれぞれ1.1～1.4mで、柱穴の直径は約0.25mである。柱列1の2基の柱穴内には柱根が残存していた。直径4.8cmで、底は平坦に処理されていた。

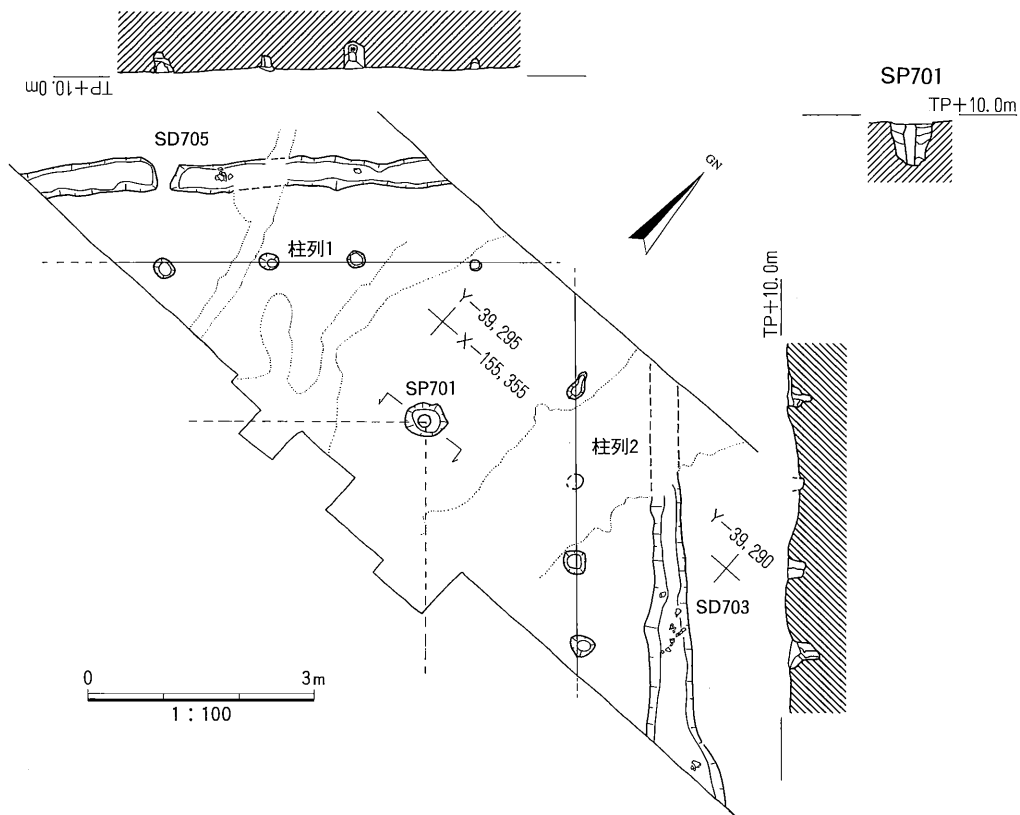


図23 SB706実測図

柱列1・2の北西および北東側には、これらと平行する溝SD703・705が存在する。ともに幅0.4m、深さ0.15mの断面U字形の溝で、SD705は途中で途切れる個所がある。ともに加工時の偽礫層で溝の下半が埋ったあと、上半に機能時のシルト質粘土が堆積していた。SD705から須恵器34・35および土師器47が、SD703から須恵器33および滑石製白玉64が出土した(図27)。SD703・705は埋土の共通性、および溝中央から柱列までの距離がともに1.0mと等しいことから、柱列の外側を巡る溝であった可能性が高い。

柱列・溝に囲まれた内側には、柱穴SP701が存在する。平面形が直径0.5mの円形で、深さは検出面から0.6mである。柱痕跡の直径は約0.2mあった。柱列1・2との距離はともに2.0mと等しく、一連の遺構であった可能性が高い。調査地内ではこれに組み合わせる柱穴を検出することができなかったが、柱列と平行する建物の柱筋を想定すると、柱間は少なくとも2.5m以上はあったことになる。

限られた調査範囲のため不明な点が多いが、これらの遺構が大型建物SB706を構成する

一連のものであると想定すると、SD703・705は建物を巡る排水溝、柱列1・2は庇もしくは下屋を支える柱、SP701は母屋を支える柱の一つと考えうる。類似した構造をもつものに群馬県三ツ寺遺跡の6世紀前半の1号掘立柱建物がある[群馬県教育委員会ほか1998]。

33・34は須恵器杯蓋、35は高杯蓋である。いずれも口径が13cm前後で、立上がりは直立し、端部は水平に近い面をもつ。33の天井部は扁平である。これらはTK208型式に属する。47は口径14.2cmの土師器甕である。短く直線的に立上がる口縁部とやや肩の張った体部を持ち、体部の調整は外面がハケ、内面が強いナデで、体部外面には広くススが付着する。以上の遺物の年代観からSB706の時期は5世紀後半と考えられる。

b. 溝

SD706 南西―北東方向の溝で、幅0.1m、深さ0.05mとほかのものより細い。下半に炭粒を多く含むシルト質粘土が堆積しており、上半が地山起源の偽礫で埋められている。溝

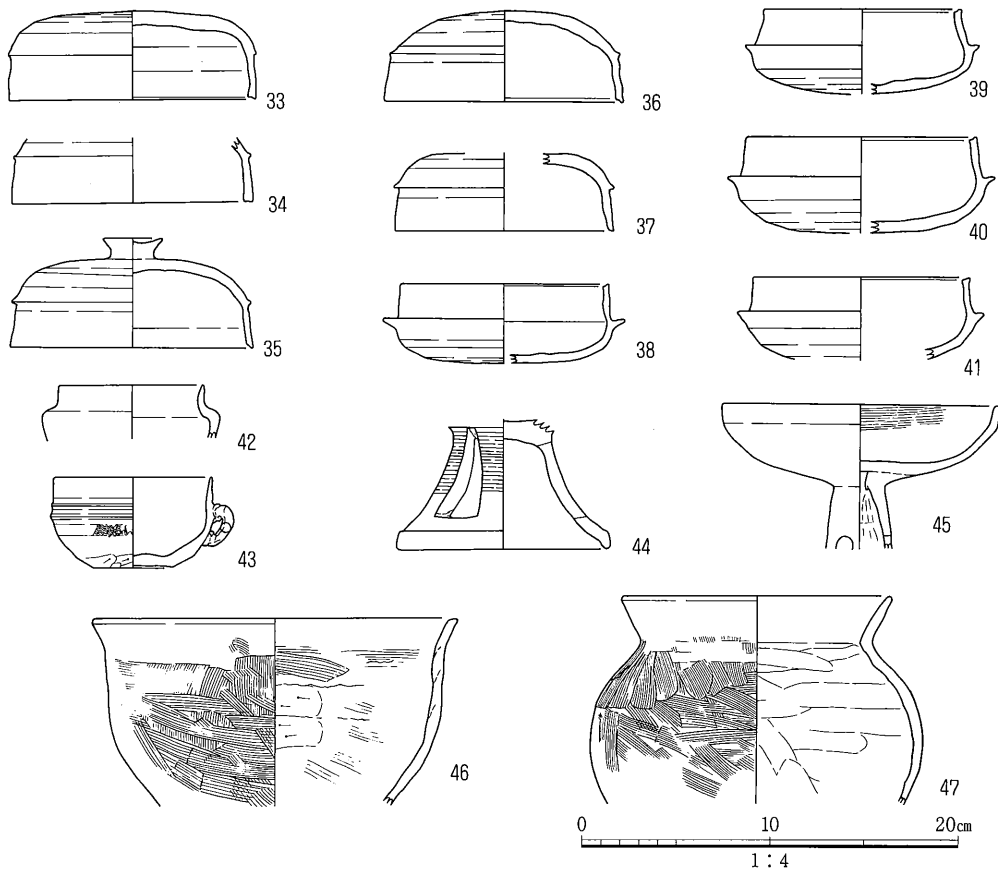


図24 古墳時代の遺構出土遺物

SB704(36・44・45)、SD703(33)、SD704(37・41・42)、SD705(34・35・47)、SD708(39・40・43)、SK704(46)、SK705(38)

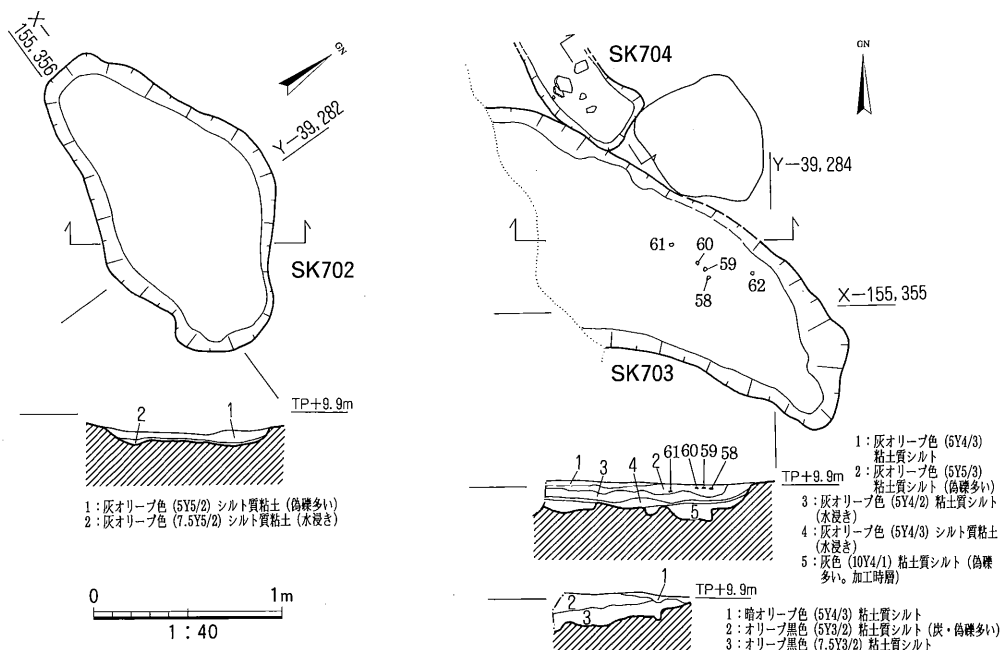


図25 SK702～704実測図

の埋土中およびその周囲から炭粒とともに細片化した製塩土器が多量に出土した(図26)。

SD707 南東－北西方向の溝で、幅0.4m、深さ0.05mと浅い。地山起源の偽礫で埋められており、遺物は出土しなかった。柱列2の一つに切られている。

SD708(図24、図版23) 南東－北西方向の溝で、幅0.4～0.5m、深さ0.05mと浅い。下半は加工時のものと思われる地山起源の偽礫層があり、上半は炭粒を含む偽礫層で埋められている。両層の境には、機能時のシルト層がごく薄く認められた。この層から須恵器39・40・43が出土した。

39・40は須恵器杯身で、口径は39が10.5cm、40が12.3cmである。ともに立上がりは長く内傾し、端部は内傾しシャープな面をもつ。43は口径8.4cm、器高4.8cmの須恵器把手付碗で、片側に環状の把手が付く。体部外面には2条の突帯とその下に波状文を巡らす。体部下半には不整方向のヘラケズリを施す。これらはON46段階～TK208型式のものであろう。

c. 土壌

SK702(図25) 平面形が長軸1.8m、短軸1.0mの長楕円形の土壌で、深さが検出面から約0.1mある。最下層に薄い水つきのシルト質粘土がたまつたあと、偽礫層で人為的に埋戻されている。遺物は出土しなかった。

SK703(図25) 平面形が長軸が2.5m以上、短軸が0.9mの長楕円形の土壌で、深さは検

出面から約0.15mある。SK702同様、最下層に水つきの粘土質シルト層が薄くたまつたと、偽礫層で人為的に埋戻されている。粘土質シルト層の上面には炭粒がわずかに散在しており、埋戻し土中から滑石製有孔円板が5点出土した(図27)。これらは同一層中の近接した位置からまとまって出土しており、土壌を埋戻す際に一括で埋められたと考えられる。

SK702・703は埋土の共通性から同時存在したと考えられ、SB705を囲む位置にあることから、建物に付随するものであった可能性がある。

SK704(図24・25、図版23) SK703の北側で検出した、長軸0.6m以上、短軸0.35mの長方形の土壌で、深さが検出面から約0.2mある。SK703に切られている。埋土上半は炭粒を多く含む偽礫混りの粘土質シルトで、ここから土師器46が出土した。

46は口径19.5cmの土師器鉢である。調整は体部外面がタテハケののちヨコハケ、体部内面が横方向のヘラケズリののちヨコハケである。5世紀後半代のものである。

SK705(図24) 方形プランと推定される浅い落込みで、一辺は3.3m以上ある。深さは検出面から約0.1mで、埋土下半が加工時のものと思われる地山起源の偽礫層で、上半は炭化物を含む水浸きの粘土質シルト層が堆積しており、その上部は若干攪乱されていた。埋土上半からは滑石製紡錘車63や須恵器38などが出土した(図27)。SK705は平面形から竪穴住居の可能性があったため調査時に精査に努めたが、確証は得られなかった。ただし、SK705

の内側および外側で検出した柱穴SP702・703がその一辺に平行することから、一連の遺構となる可能性がある。SP702・703の掘形は一辺0.15mの方形である。

38は口径10.8cmの須恵器杯身である。直立する立上がりの端部は内傾し面をもつ。TK208型式に属する。

d. 製塩土器(図26、写真1)

SD706とその周辺から出土した製塩土器を報告する。製塩土器片のうち、一辺1cm以上のものは218点で、総重量は240.8gあった。形態がわかるものはすべて丸底で直径3～6cmの筒形である。

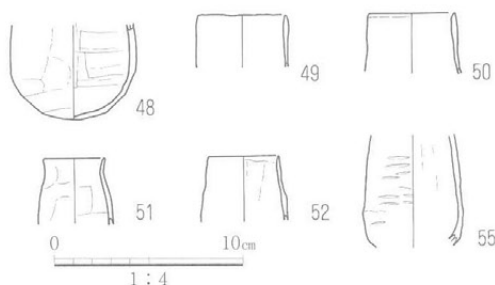


図26 製塩土器実測図

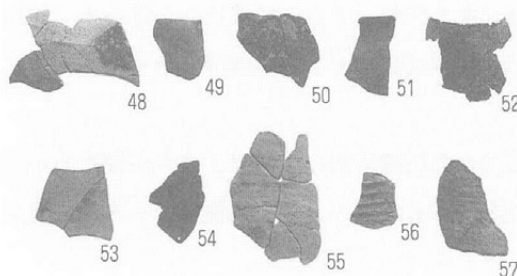
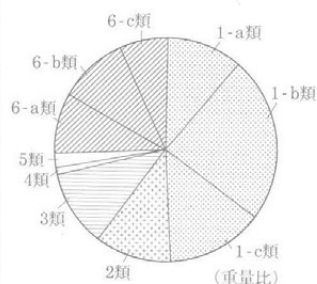


写真1 製塩土器

表2 製塩土器の分類とその比率

番号	分類	京嶋92	外面調整	内面調整	胎土	色調	個数(%)	重量g(%)
48	1-a	I-a	ナデ	横ナデ4	精良(酸化鉄粒含1)	白色	18(8)	26.5(11)
49	1-b	I-a	ナデ	縦ナデ3・横ナデ8	精良(酸化鉄粒含22)	桃白色	67(31)	57.7(24)
50	1-c	I-a	ナデ	縦ナデ2・横ナデ5	精良(酸化鉄粒含4)	灰～灰褐色	39(18)	31.8(14)
51	2	a	ナデ	縦ナデ2・横ナデ2	砂粒少量含む	灰～黄灰色	18(8)	26.9(11)
52	3	III-a	ナデ	縦ナデ5・横ナデ1	砂粒多量含む	灰褐色	33(15)	26.8(11)
53	4	I-b	ナデ・タタキ	横ナデ1	精良	乳白色	1(0.4)	2.6(1)
54	5	II-b	タタキ	縦ナデ1	雲母・酸化鉄粒多	橙褐色	2(0.9)	4.3(2)
55	6-a	b	タタキ	縦ナデ2・横ナデ1	砂粒少量含む	白～灰白色	12(6)	22.1(9)
56	6-b	b	タタキ	横ナデ2	砂粒少量含む	灰褐色	23(10)	24.2(10)
57	6-c	b	タタキ	縦ナデ3	砂粒少量含む	黄褐色～橙褐色	5(2)	17.9(7)
合計							218(100)	240.8(100)



外面調整はナデもしくはユビオサエとタタキの2種類があり、それらは胎土や色調の特徴から1～6類のグループに分けることができる。1および6類は微妙な色調の違いによりさらにa～cに細分できる。それぞれの特徴と数量は表2の通りである。

全体的な傾向としては、外面調整がユビオサエもしくはナデのものが重量比で71%と優勢で、中でも胎土が精良で砂粒をほとんど含まない1類が主体を占め、色調では桃白色の1-b類(49)を筆頭に灰～黄灰色の1-c類(50)が続く。白色を呈する1-a類は他よりやや口径が大きい傾向がある(48)。また、外面ユビナデで砂粒を少量含む2類(51)や多量を含む3類(52)も一定数存在する。一方、外面調整がタタキのものは29%と少数派で、その中では砂粒を少量含む白～灰白色を呈する6-a類(55)や、灰褐色を呈する6-b類が主体となる。備讃瀬戸産と考えられる外面調整がタタキで胎土中に雲母を多く含む5類は2点のみであった。

時期を確定できる共伴遺物はないが、周辺の遺構からON46段階～TK208型式の須恵器が出土しており、これらの製塩土器は5世紀後半のものである可能性が高い。長原遺跡出土の製塩土器の変遷を整理した京嶋覚によれば、1類(京嶋分類I群a手法)から5・6類(京嶋分類b手法)に変化する須恵器というTK23型式の時期頃であるという[京嶋1992a]。今回報告した資料は、それに先行する過渡的な時期要素を示しているといえよう。

e. 滑石製模造品(図27、写真2)

SK703出土の有孔円板58～62、SK705出土の紡錘車63、SD703出土の白玉64について報告する。

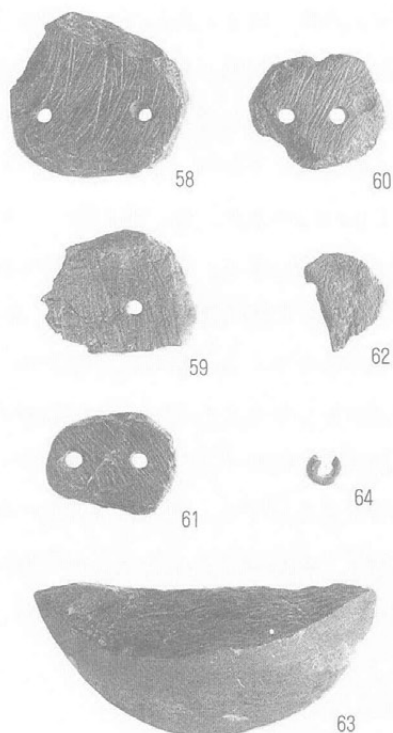


写真2 滑石製模造品

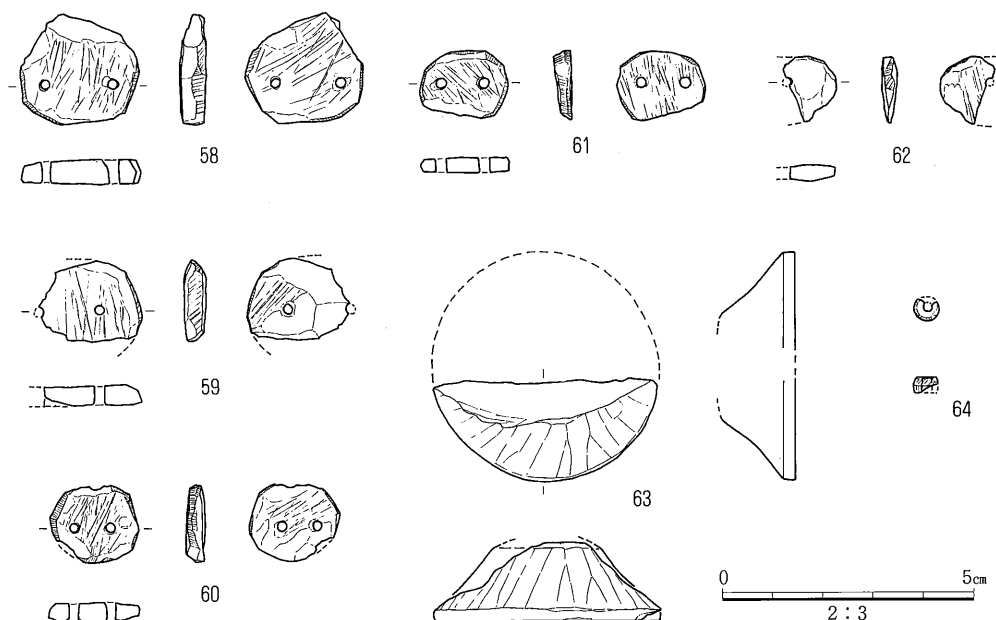


図27 滑石製模造品実測図
SK703(58~62)、SK705(63)、SD703(64)

有孔円板 58は長径2.39cm、短径2.13cm、厚さ0.47cmの不整円形で、暗緑灰色を呈する。側面を縦方向に削って整形しているが、整形の省略部分が多く粗雑である。離れた位置にある2孔は、同じ方向から穿孔されている。また、片面に穿孔をやり直した痕がある。59は一部欠損しており、厚さ0.40cmある。緑灰色を呈する。60は長径1.79cm、短径1.53cm、厚さ0.36cmの正円に近い楕円形で、暗緑灰色を呈する。側面の削痕は剥離した部分を除いてほぼ全周に及ぶ。近接した位置にある2孔は、逆方向から穿孔されている。図27の左面の右孔横には穿孔途中の穴がある。61は長径1.75cm、短径1.34cm、厚さ0.32cmの楕円形で、暗緑灰色を呈する。側面には縦方向の削痕が一边を除いてほぼまんべんなく及ぶ。2孔は逆方向から穿孔されている。62は緑灰色を呈する有孔円板の破片で、厚さ0.28cmある。

紡錘車 63は半分以上が欠損しているが、直径4.5cm、高さ1.5cmに復元できる。色調は暗緑灰色を呈する。側面には幅広の研磨が縦方向に施されている。

白玉 64は緑灰色を呈する滑石製白玉である。直径4.7mm、厚さ3.0mmで、一部破損している。側面には縦方向の削痕が残り、中央部分に稜をもつ。

註)

(1) 瑞花双鳥文八稜鏡については、前田洋子氏(大阪市立博物館)よりご教示を賜った。記して、感謝の意を表する次第である。

第4節 中央地区の調査のまとめ

1) 東除川の変遷と地形変化

今回の調査地は瓜破台地上を南から北に流れる旧東除川流域の西半に位置し、これを横断するトレンチを入れた形となった。各調査では長原6層より上で河川の氾濫による堆積作用が頻繁に観察され、流路の変遷による地形の変化を知ることができた(図28)。

95-20・42次調査で確認された長原6層段階の南北溝は、周囲の飛鳥・奈良時代の水田への導水を目的とした灌漑用水路で、これらを埋める水成層の長原6Aii層は95-20・54次調査地点に、長原5層が95-42次調査地点にそれぞれ分布している。95-42次調査で検出したSD605は初期の旧東除川に相当すると考えられる幹線流路であろう。

長原4B層段階の流路は95-42次調査地西半から95-54次調査地東半にかけて見られる。95-54次調査地西半で観察した長原4B層下部Ⅰから上部Ⅱまでの暗色化と水成堆積の繰返しは、河川流域の不安定な環境を反映していたようである。

これを覆う長原4A層の水成層は広い範囲に分布しており、上面が削平されているものの本層上面のレベルは95-42次調査地点付近で最も高くなっている。さらに、この地点には長原2層段階の水成層が厚く堆積し、近世の東除川は天井川の様相を呈していたようである。現在の地形からもうかがうことができる河道あとの自然堤防は、長原4A・2層の堆積によって形成されたことがわかる。

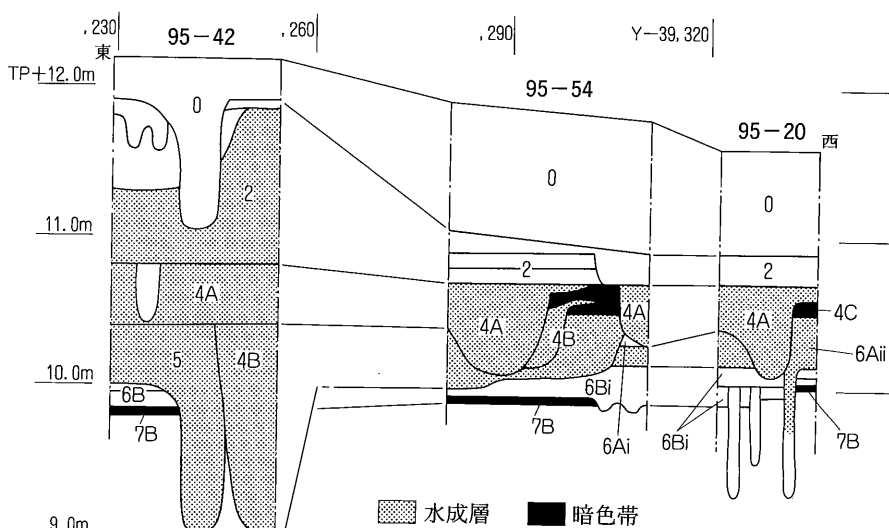


図28 95-20・42・54次調査地層断面模式図

2) 古墳時代の集落

95-20・54次調査では、古墳時代中・後期の集落址を検出した。北隣のNG88-54次調査でも掘立柱建物や井戸が見つかり、これらを一つの集落単位と捉えることができる。同様の単位は遺跡内でも多く認められ、それぞれが完結しながら相互に有機的関係を有して集落全体を形成していたようである。

調査地点は、西部集落の南端に位置するNGW-9集落に相当

する[高橋工1999]。調査範囲は道路部分に限定されているため、全容を知ることにはできないが、現状で得られたデータからNGW-9集落の展開をたどってみる。

まず、集落の形成は、95-54次調査で検出した大型の庇付建物の可能性があるSB706を含む2棟の建物が造営された、京嶋分類の2期(須恵器編年ではON46段階~TK208型式)に始まる[京嶋1993a]。方位は南北から約45°振れており、南西から北東に緩やかに下がる地形に制約されていたと考えられる。この時期の遺構・遺物の分布範囲は限定されている。3期(TK23型式~TK47型式)になると集落域が北西側へ拡大し、95-20・54次調査地とNG88-54次調査地の南半に掘立柱建物が分布する。95-42次調査では同時期の土壌SK701を検出したが、居住域の縁辺の様相を示しており、この辺りが集落単位の東限と思われる。また北限は、NG88-54次調査地の北部であろう。建物の方位は南北方向を指向するようになり、それ以前と様相を異にする。4期(TK10型式)には、NG88-54次地点に帆立貝形の前方後円墳である南口古墳が築かれ、この時期までには集落が廃絶している。

以上の変遷は、2期に東部から西部へ移動し始めた集落が、3期には定着して最盛期を迎えるという長原遺跡の諸集落の動向と軌を一にしている。また、西部への集落の移動と定着の過程で、伝統的に受け継いできた東部の居住規制から開放されたという従来の評価[京嶋寛1993]に対し、95-54次調査で検出されたNGW-9集落の形成期の特殊な大型建物は、集落の構造変換の具体的内容とその主体を検討する上で貴重な資料であるといえる。

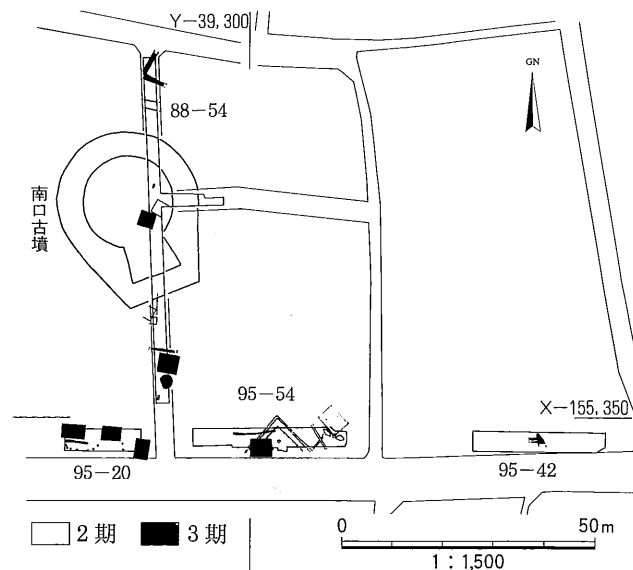


図29 NGW-9集落の配置図

第三章 長原遺跡西・西南地区の調査

第1節 95-14次調査

1) 層序(図30、図版6)

調査地の層序は、「馬池谷」の内部と谷の外部では一部で差異が見られたが、基本的には長原遺跡の標準層序1995(別表1)に対応した。ただし、後述するように長原2・3層については水成層および作土層が新たに細分されたが、長原8～12層相当層については、層理面が不明瞭なため細分できなかった。また、長原13層についても奈良時代以後の水田開発などによって攪拌されており、一部で見られたのみである。ここでは、「馬池谷」の内部から外部にかけての地層の堆積状況が連続して観察された西壁断面について、上位より記載する。

長原1層：黒灰色砂礫混りシルトで、層厚は10cm前後である。現代の水田作土である。

長原2層：本層は作土および水成層に二分されるが、それらはさらに2a～2g層に細分することができた。2a層は黄褐色砂礫混りシルトで、長原1層準の水田の床土である。2b層は黄褐色砂礫混り粘土質シルトで、江戸時代の作土である。2c層はにぶい黄色シルト礫混り細粒砂で、水成層である。2d層はにぶい黄色細粒砂混りシルトで、作土である。2e層は黄褐色シルト混り細粒砂の水成層で、黄褐色砂礫混り粘土質シルトの2f層は2e層に覆われた江戸時代の作土である。2g層は暗青灰色細粒砂～砂礫からなる水成層で、作土のブロックを多く含む。以上の各層の層厚は5～20cm前後あり、このうち、調査地のほぼ全域で確認された2a・2b層以外の地層は調査地北部の「馬池谷」内だけに分布していた。

長原2／3層：灰色細粒砂混りシルトで、層厚は10～25cmである。調査地の中央部から北部にかけて層厚を増しながら堆積しており、上面でヒトの足跡や耕作痕跡が観察された。本層は下位の長原3層の上部に客土を行って水田面を造成しており、15世紀代の瓦質土器を含むことから長原3層に相当する作土と考えたが、上面を唐津焼など17世紀初頭の陶磁器の細片を含む2e層が覆うことから、下限を江戸時代初期とした。

長原3層：本層は上部の水成層と下部の整地層に二分される。上部の水成層はオリブ灰色含細粒砂シルト～粘土質シルトおよびオリブ灰色細粒砂混りシルトで、層厚は10～80cmである。本層は調査地の北部に位置する「馬池谷」に堆積しており、ドブ貝やタニシを含む。15世紀代の瓦質土器が出土した。下部の整地層は地山のブロックを多く含むオリブ灰色細粒砂混りシルトで、層厚は10～25cmである。

長原4A層：本層は上層の緑灰色極細粒砂質シルトと、下層の灰白色シルト混り細粒砂～砂礫に二分される。層厚は5～30cm前後あり、調査地のほぼ全域に分布する。本層は調査地の中央部から北東方向にかけて層厚を増しながら堆積した水成層で、「馬池谷」では最大層厚が100cmあった。13世紀代の瓦器・土師器・瓦などが出土した。調査地の北部に位置する溝SD401に堆積する灰白色砂礫は本層準に含まれる。

長原4Bi層：灰オリブ色シルト・オリブ灰色含砂礫粘土質シルトで、層厚は10～40cmであり、調査地のほぼ全域に分布する。調査地北部の本層の上面では畦畔が検出されたほか、ヒトやウシと思われる足跡群が観察された。12～13世紀代の瓦器や土師器を含む。本層は調査地の南部では層相が黄褐色含礫シルト～粘土質シルトに移行している。

長原4Bii層：黄褐色含シルト砂礫～シルト混り砂礫を主体とする水成層で、層厚は5～60cmである。本層は調査地の中央部から北部にかけて堆積しており、「馬池谷」では最大層厚が60cmあった。

長原4Biii層：黄褐色砂礫混り粘土質シルト・暗灰色細粒砂混り粘土質シルトで、層厚は10～50cmであり、調査地のほぼ全域に分布する。本層上面の標高は、調査地の南部から中央部が8.8m、調査地の北部の「馬池谷」内では8.0m前後あり、この間の比高は約80cmある。上面でヒトやウシの足跡群や耕作痕跡が検出された。10～12世紀代を中心とする土器類や瓦類を含む。

長原5A層：黄褐～オリブ灰色含細粒砂シルトおよび細粒砂混り砂礫を主体とする水成層で、層厚は10～40cmある。本層は調査地の中央部以南では上位層準の耕作の影響を受けて残りが悪いが、北部の「馬池谷」では層厚が70cm以上に及ぶ部分もあった。

長原5B層：緑灰色極細粒砂～極細粒砂質シルトを主体とする水成層で、層厚は10～30cmである。本層は調査地の北部から「馬池谷」にかけて分布している。

長原6Ai層：黄褐色含砂礫シルト～粘土質シルトで、層厚は20～40cmである。本層上面の標高は調査地の南部で8.7mで、調査地北部の「馬池谷」内で7.15mあり、この間の比高は約155cmある。調査地の北部では上面で水田の畦畔をはじめ、偶蹄類やヒトの足跡群が確

認められた。6世紀末～8世紀初頭の須恵器や土師器をはじめ、8世紀代の瓦類が出土した。

長原6Aii層：緑灰色シルト混り極細粒砂を主体とする水成層で、層厚は10～20cmである。本層は調査地北部の「馬池谷」では層厚が50cm以上に及ぶ部分もあった。

長原6Bi層：オリブ灰色含シルト砂礫で、調査地の南東部および北部の「馬池谷」にかけて堆積した層厚10～20cmの水成層である。調査地の南東部の流路の周辺では6世紀末～7世紀中葉の須恵器や土師器が多量に出土した。

長原6Bii層：オリブ灰色砂礫～黄褐色砂礫混りシルトで、層厚は10～30cmである。本層は長原6Biと同様に調査地の南東部の流路および北部の「馬池谷」内を中心に堆積しており、前者では下部から6世紀末～7世紀中葉の須恵器や土師器に混在してウマ・ウシの骨が出土した。なお、本層は全体に暗色化が進んでいるが、調査地の南西部では地山の偽礫が混った厚さ40～50cmの整地層が確認された。

長原7A層：黒褐色砂礫混りシルトで、層厚は20～30cmである。本層はおもに調査地の南東部の流路および北部の「馬池谷」内に堆積しており、遺構内では7Ai・7Aii層に細分される。NR701、SD711・712、SE701などは、本層の基底面で検出された遺構である。また、調査地の南西部に位置するSE701の井戸内上部を埋戻した整地層は本層準に含まれる。5世紀末～7世紀初頭の須恵器や土師器が多量に出土したほか、調査地の南東部の流路では本層の上部からウマの骨をはじめ、板材・加工木・棒状木製品・柱材・槽・木製履物・下駄・曲物底板・砥石・盾形埴輪・鉄製品・切出形のナイフ形石器が出土した。

長原7B層：オリブ黒色含細粒砂粘土質シルト～黒褐色含砂礫粘土質シルトで、層厚は10～50cmである。本層は、単一の地層としては「馬池谷」内に堆積していた以外に確認されなかった。SD701・702、SK708は本層の基底面で検出された遺構である。なお、調査地北部の「馬池谷」内の一部では、5世紀後半の須恵器や土師器が出土した7Bi層と、4世紀後半に属する布留式土器が出土した7Bii層に細分された。

長原8／9層：暗灰黄色含礫シルト～粘土質シルトで、層厚は10～30cmである。本層は砂礫を含むシルト～シルト質粘土に層相が徐々に変化しており、下部は暗色化が進んでいる。下部から長原式土器・畿内第Ⅰ様式土器の破片が出土した。

長原10・11層：暗灰黄色シルト～礫混り細粒砂で、調査地北部の「馬池谷」と南東部の流路内に堆積している。層厚は5～50cmあり、流路内に堆積した灰オリブ色シルト混り砂礫から、縄文時代後期に属するとみられる型式不明の縄文土器の細片や石錘が出土した。

長原12A層：灰オリブ色含礫粘土質シルトで、層厚は10～20cmである。本層は調査地

の南東部の流路の西肩部および「馬池谷」内の深い部分に堆積していた。下位層との境界は不明瞭である。

長原14層：黄橙色含砂礫シルト～含礫粘土質シルトで、層厚は15cm前後ある。上面の標高は調査地の西部中央が8.55m、南東部の流路および北部の「馬池谷」の周辺が8 m前後で、調査地の南西から北東の谷頭にかけて張出している。

長原15層以下：黄灰色シルト質粘土で、「馬池谷」内では灰オリーブ色含礫粘土質シルトに層相が変わる。

2) 各層出土の遺物

i) 長原3層出土の遺物(図31、図版24)

65は口径12.4cmの白磁皿である。66は口径18.6cmで、口縁部の外端面に1条の沈線が巡る唐津焼鉢である。器体の外面および口縁部の内面に灰白色の釉を施している。67は底径10.6cmの備前焼播鉢で、内面の播り目は交差しており粗い。68は高台径4.9cmの唐津焼碗である。高台を削り出しており、体部の外面をヘラケズリ調整している。器体の内面に灰色の釉を施している。69は高台径4.0cmで、高台を削り出した白磁碗である。器体の内外面に灰白色の釉を施しており、胎土は精良で、15世紀代の李朝磁器と思われる。70は口径11.6cm、器高2.8cmの唐津焼皿である。高台は削り出されており、内面の見込みには4個所に砂目が残る。器体の内面および口縁部の外面に明オリーブ色の釉が施されている。71は高台径5.0cmの白磁碗で、内面の見込みには3個所に胎土目が残る。高台は削り出されており、器体の内外面に灰白色の釉が施されている。72は口径11.1cm、器高3.2cmの唐津焼皿である。器体の内外面に灰白色の釉を施している。高台は削り出されており、内面の見込みには砂目が残る。以上の陶磁器のうち、唐津焼は16世紀末から17世紀初頭、69・71は15世紀から16世紀代に属する李朝磁器であると思われる。

73は複弁蓮華文軒丸瓦の瓦当である。外区内縁は無文で、内縁に複弁の蓮華文、中房の外周に雄蕊帯を配している。9世紀後半代に属するものであろう。

77は基底部径14.5cmの円筒埴輪で、倒立させて基底部をユビオサエ調整している。器体の外面は細かいタテハケのあとにナデ調整を加えており、内面はタテハケのあとにユビナデ調整している。タガは断面三角形で、断続ナデ技法で貼付けられている。円形のスカシ孔を穿つ。色調は灰黄色で、窖窯焼成である。胎土中に長石・石英粒を含む。川西編年Ⅴ期の後半に属するものである。全体にやや磨滅しているが、近隣古墳から遊離したもの

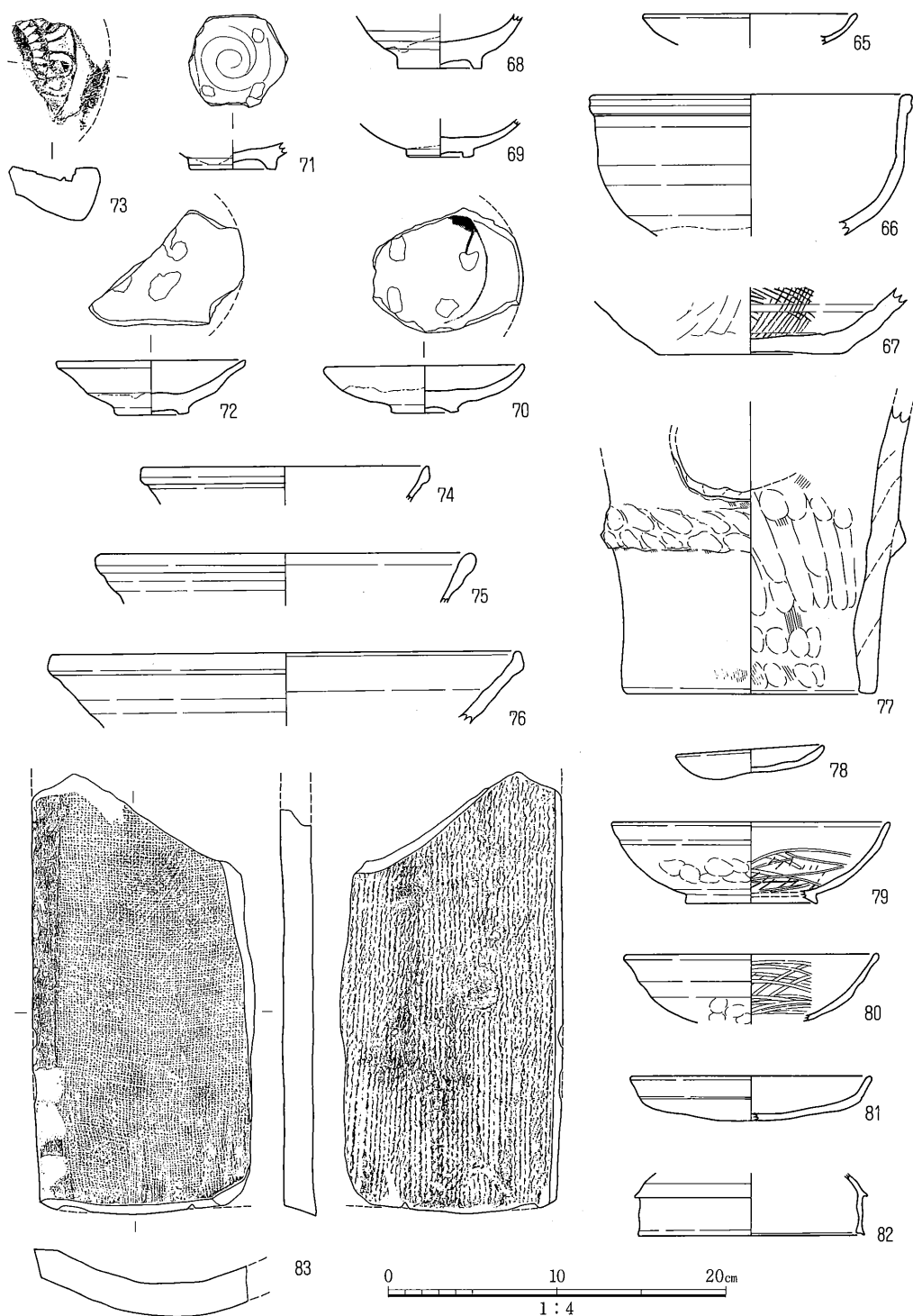


図31 長原3・4Bi~iii層出土遺物

長原3層(65~73・77)、長原4Bi層(79・82)、長原4Bii層(80・81)、長原4Biii層(74~76・78・83)

と思われる。

ii) 長原4Bi～iii層出土の遺物(図31、図版24)

79・82は長原4Bi層、80・81は長原4Bii層、74～76・78・83は長原4Biii層から出土した遺物である。以下、上位の層準から記述する。

79は口径16.4cm、器高4.8cmの瓦器碗である。口縁端部はわずかに内傾しており、底部の高台は断面三角形である。底部の内面見込みから体部にかけて斜格子および螺旋状のヘラミガキが施されている。

82は口径13.4cmの須恵器杯蓋である。口縁部と天井部の境界の稜はシャープで、天井部の2/3以上をヘラケズリ調整している。TK208型式に属するものであろう。

80は口径14.8cmで、口縁端部を丸くおさめた瓦器碗である。器体の内面にやや粗いヘラミガキを施しており、底部の外面にはユビオサエが残る。13世紀の中頃に属する。

81は口径14.0cm、器高2.6cmの土師器皿である。口縁部の内外面に強いヨコナデを加えており、底部の裏面はユビオサエで整えている。色調は灰黄色で、胎土中に長石・チャート粒を含む。11世紀後半に属するものである。

74は口径16.8cmで、玉縁状をなす口縁部および体部の内外面に灰白色の釉が施されている。12世紀代に属する白磁碗である。

75・76は東播系須恵器鉢で、口径は各々21.8cm、27.4cmである。口縁端部を75は玉縁状におさめており、76は面取っている。色調は灰白～灰色で、焼成は良い。75は14世紀後半に、76は13世紀後半に属するものであろう。

78は口径8.6cm、器高1.9cmで、口縁端部を丸くおさめた土師器皿である。器体のほぼ全体をヨコナデ調整しているが、底部の裏面にはユビオサエが残る。色調は灰黄色で、胎土中に長石・雲母粒を含む。11世紀後半に属するものであろう。

83は凸面に縄タタキが施された平瓦で、凹面には細かい布目圧痕が残る。縁はヘラ切り未調整である。色調は暗灰色で、焼成は良い。調査地の北西にある成本廃寺に伴うものかもしれない。

iii) 長原6Ai・ii層出土の遺物(図32・33、図版24・25)

85・88・89は長原6Ai層、84・86・87・90～94は長原6Aii層から出土した遺物である。

平瓦84～87はいずれも凸面に縄タタキが施されており、凹面には布の圧痕が残る。84は一部を欠損しているがほぼ元の形状を留めている。短边上端の幅25.2cm、長辺の長さ35.4cm、厚さ1.8cm前後ある。凸面には短辺に対して直行するように下端から上端に向って、

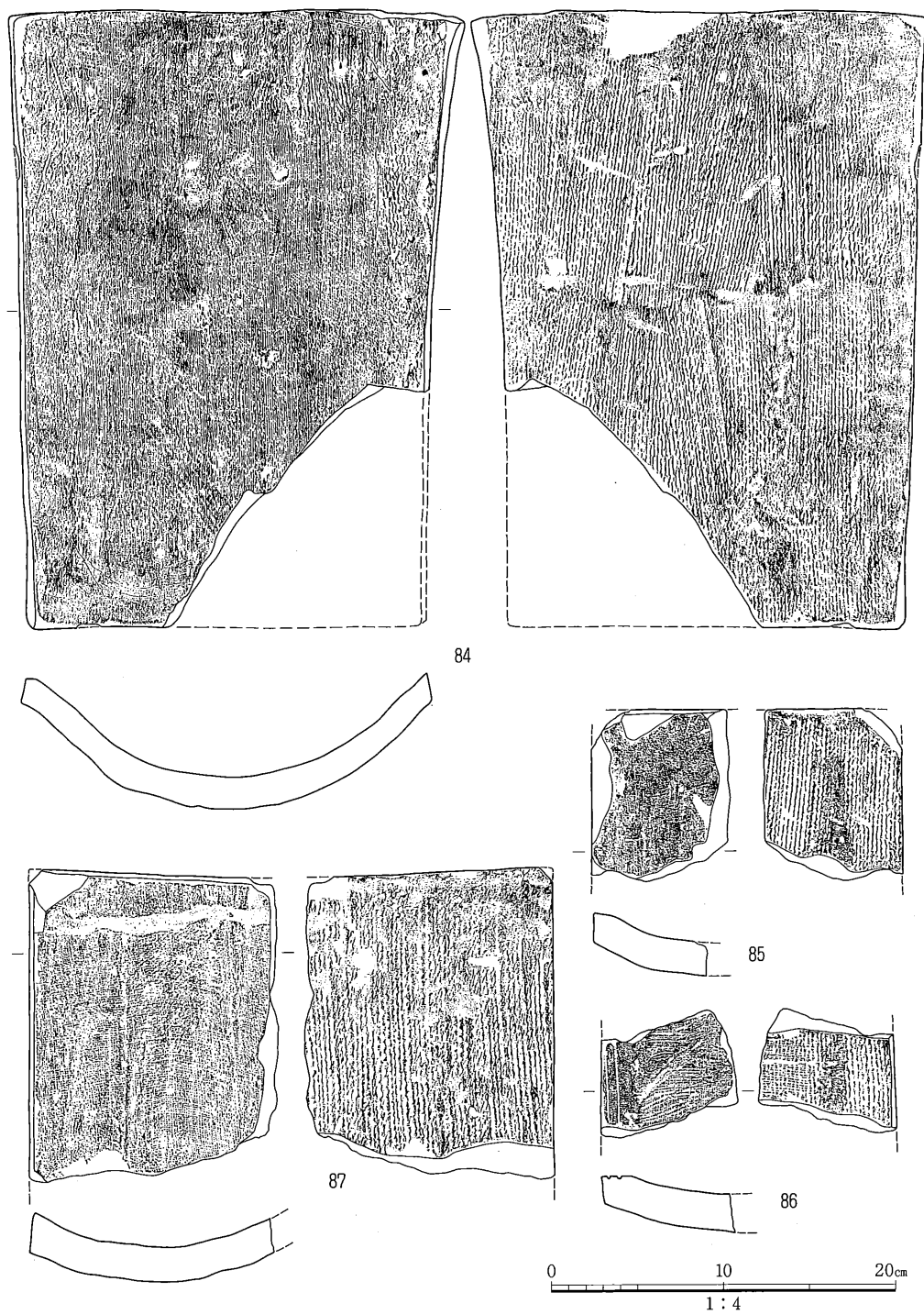


図32 長原6Ai・ii層出土遺物
長原6Ai層(85)、長原6Aii層(84・86・87)

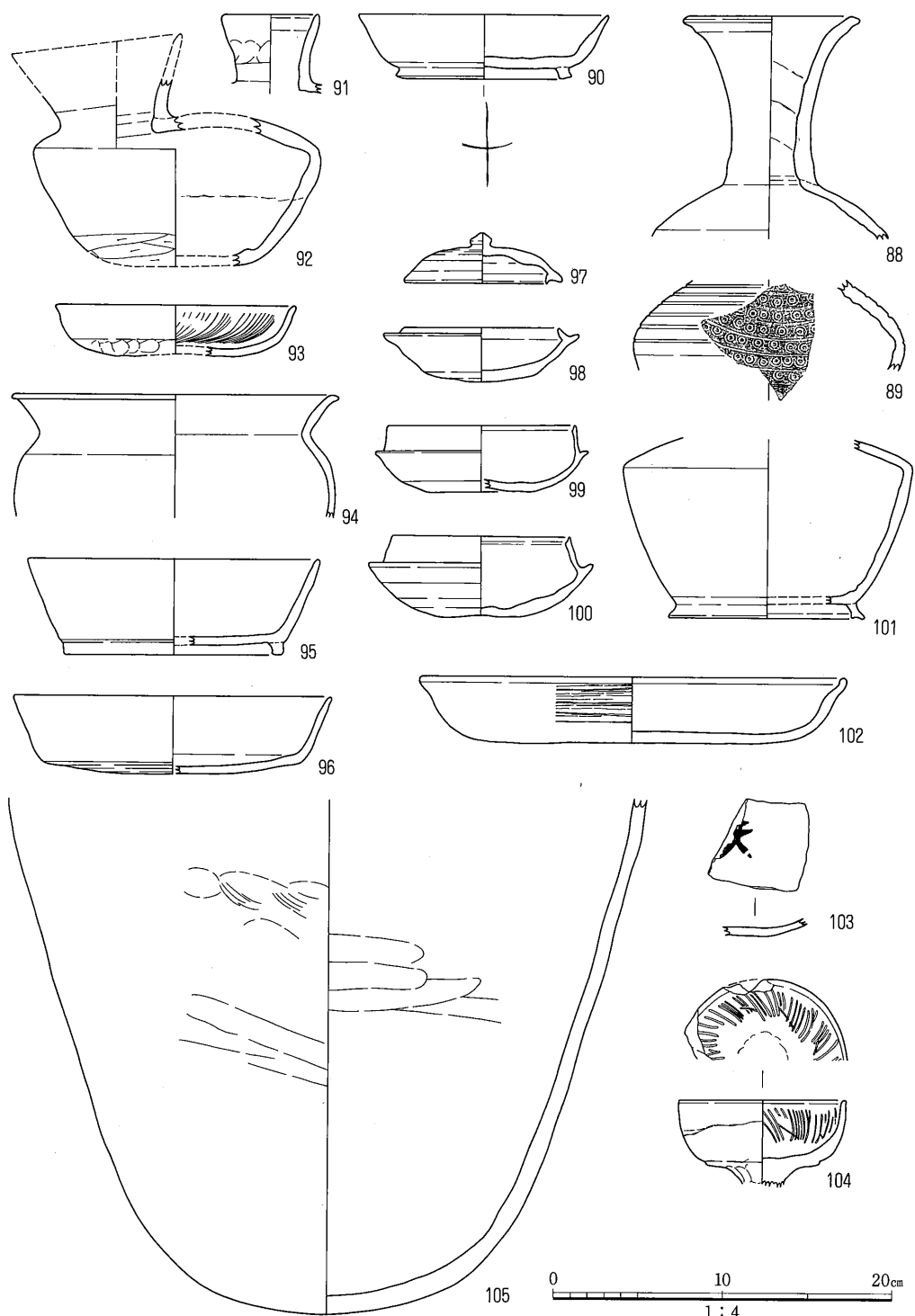


図33 長原6Ai・Aii・Bi層出土遺物

長原6Ai層(88・89)、長原6Aii層(90～94)、長原6Bi層(95～105)

左から右に3段の縄タタキが施されており、凹面には布目が残る。この瓦は縄タタキが凸面短辺の上下端まで及ぶことや凹面の長辺端にも布目が見られることから1枚作りによるものと思われる。87の凹面には模骨や紐と思われる圧痕がある。

88は口径9.4cmで、漏斗状の口頸部を有する須恵器長頸壺である。口縁端部を面取っており、頸部の内面にはシボリメが残る。器体の外面に施されたオリーブ灰色の灰釉や胎土などから尾張産の可能性がある。89は器体の外面を6条の沈線で区画して、沈線間に円形のスタンプ文を配した壺の体部片である。色調は灰色で、焼成は良い。文様や形態、胎土などからみて、統一新羅の陶質土器と思われる。90は口径14.5cm、器高3.8cmの須恵器杯Bである。口縁部は体部から外上方に開いており、高台は底部のやや内側に貼付けられている。底部の裏面には「十」字状の墨書がある。色調は灰色で、焼成は良い。

91は口径5.4cmの須恵器平瓶の口縁部片で、口縁端部を丸くおさめており、頸部の外面にはユビオサエが残る。92は口縁部および体部の一部を欠損した須恵器平瓶で、体部はヨコナデ調整、底部をヘラケズリ調整している。91・92ともに色調は灰色で焼成は良い。90～92は飛鳥Ⅳに属するものであろう。

93は口径13.8cm、器高3.1cmで、口縁端部が短く開いた土師器皿である。体部の内面には暗文が密に施されており、底部の裏面にはユビオサエが残る。色調はにぶい黄橙色で、胎土中に長石・雲母・シャモットを含む。94は口径18.6cmで、口縁部が大きく開いた土師器甕である。口縁端部をわずかに肥厚させており、体部の内面には炭化物が付着している。93・94ともに飛鳥Ⅲに属するものである。

iv) 長原6Bi・ii層出土の遺物(図33～35、図版24・25・42)

95～105は長原6Bi層、106～132は長原6Bii層から出土した。以下長原6Bi層から順を追って記述する。

95は口径17.1cm、器高5.7cmの須恵器杯Bである。高台は底部の端近くに貼付けられており、口縁端部を丸くおさめている。色調は灰色で、焼成はあまい。96は口径18.6cm、器高4.6cmの須恵器杯Aである。口縁部は体部からわずかに開いており、底部のほぼ全体をヘラケズリ調整している。色調は灰白色で、焼成はややあまい。97は口径7.5cm、器高3.0cmの須恵器杯G蓋である。口縁部内面の返りは短く、天井部の1/3以上をヘラケズリ調整しており、中央に宝珠つまみがある。色調は灰色で、焼成は良い。胎土中に1～5mmの長石粒を含む。98は口径9.1cm、器高3.3cmの須恵器杯Hである。口縁部の立上がりは短く内傾しており、底部はヘラ切り未調整である。色調や胎土は97と変わらない。99・100は口径

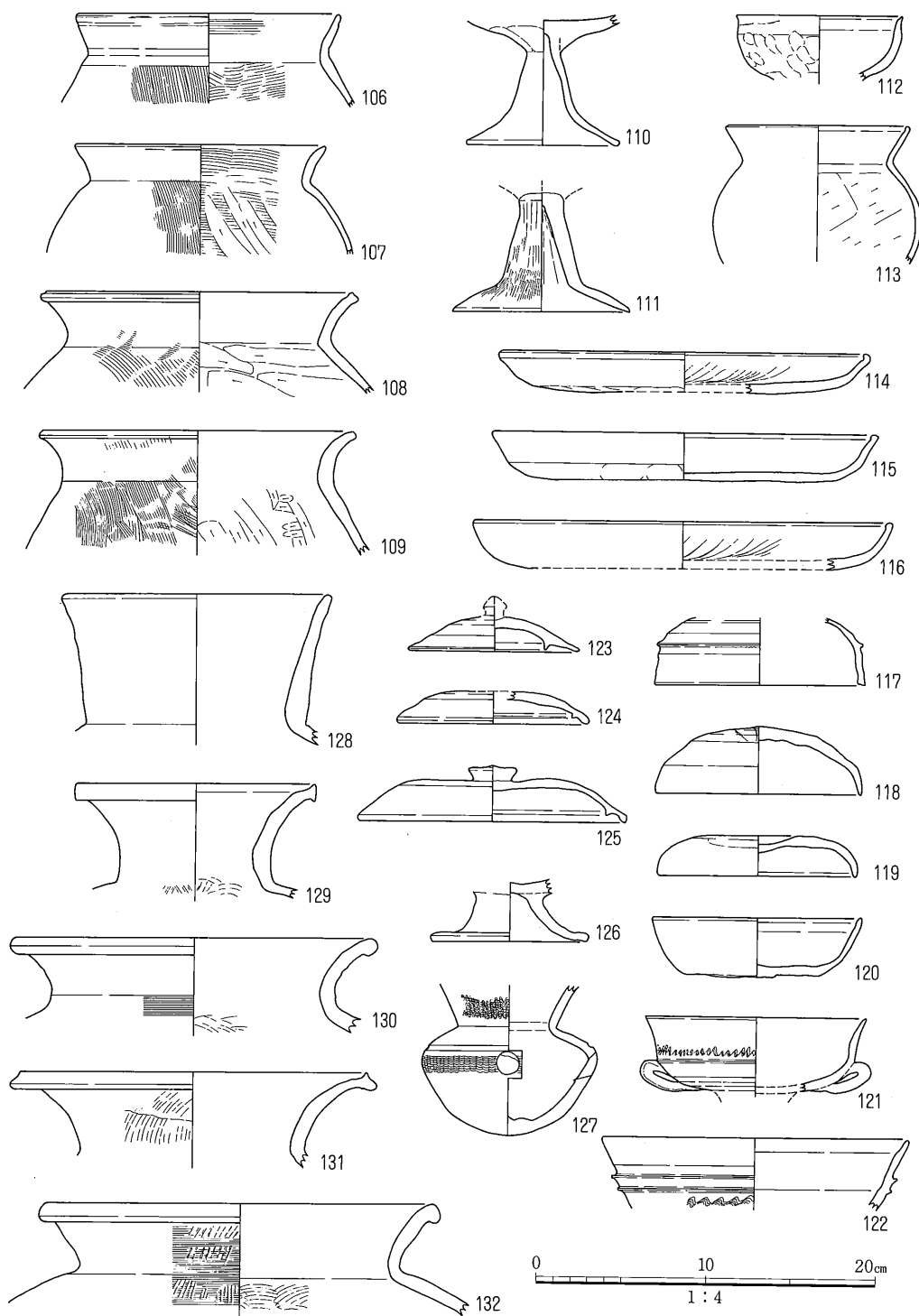


图34 長原6Bii層出土遺物

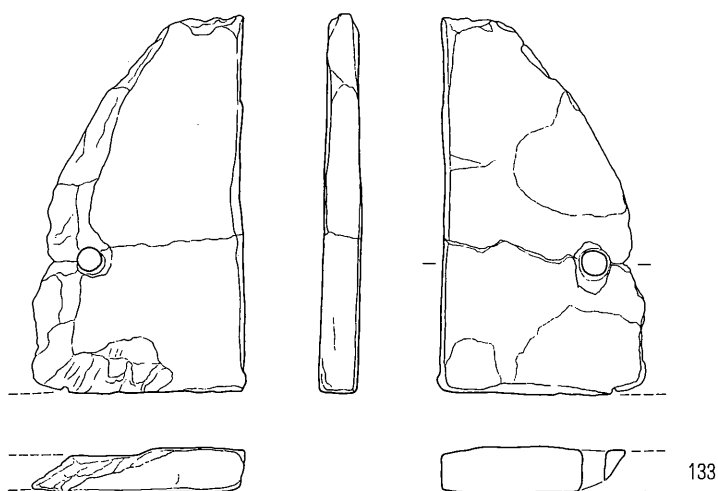
10.5～11.0cm、器高3.9～4.8cmの須恵器杯身である。口縁部の立上がりは後者は前者に比べて内傾しており、ともに口縁端部が浅く凹む。底部を99は1／3、100は2／3以上ヘラケズリ調整している。101は体部の上半を欠損した須恵器壺である。底部の端に貼付けられた高台の径は11.5cmあり、体部の内外面にヨコナデ調整を施している。色調は灰白色で、焼成は良い。以上の須恵器のうち95・96・101は平城宮土器Ⅱ、97・98は飛鳥Ⅱ、99・100はTK47型式に属するものであろう。

102は口径24.9cm、器高3.9cmの土師器皿Aである。口縁部は体部から短く開いており、端部を丸くおさめている。口縁部から体部の外面に横方向のヘラミガキを施しており、底部は全体にナデ整えている。色調は赤～褐色で、胎土中に長石・雲母・黒色粒を含む。103は碗の底部の破片で、裏面に「天」の墨書がある。色調は、にぶい黄色で、胎土中に長石・角閃石・チャート粒を含む。104は口径9.8cmで、脚部を欠損した土師器高杯である。杯底部に脚部を貼付けており、体部の内面には縦方向のやや粗い暗文が施されている。色調はにぶい橙色で、胎土中に長石粒を含む。102は平城宮土器Ⅱ、103・104は飛鳥Ⅰ～Ⅱに属するものと思われる。105は残存する体部の最大径が42cm前後、高さが約30cmの土師器長胴甕である。体部の外面は左上がりの粗いハケのあと、同方向のナデで調整しており、内面は横方向の強いナデ調整を施している。器壁の厚みが0.7～1.2cmに及ぶ大型の土器である。色調は橙色で、焼成は良く、胎土中に長石・石英・赤色スコリヤ粒を含む。形態や胎土などから関東地域の土器の可能性がある。このほか、長原6Bi層からは、口径23.8cmで、口縁部の外面に2条のヘラ描き沈線が巡る土師器甕や、脚部径6.2cm、残存高5.2cmの土師器ミニチュア高杯、底部中央の円孔の周囲に小判形の蒸気孔を3個所配した土師器甗、須恵器杯身など、飛鳥Ⅱ～Ⅳ・平城宮土器Ⅱに属する土器が出土している。

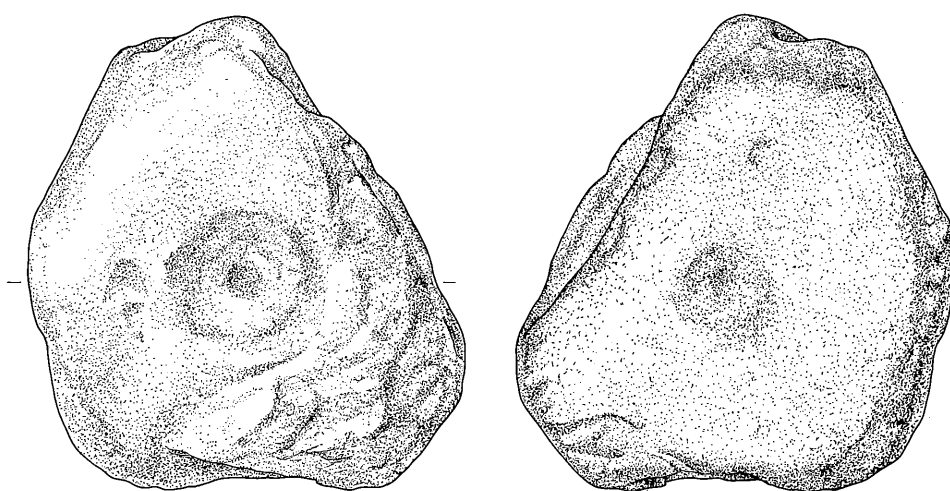
106～109は口径14.5～18.2cmの土師器甕である。いずれも体部の下半を欠損している。口縁部は短く開く106・107、緩やかに開く108・109がある。106・107・109は口縁端部を丸くおさめ、108の口縁端面は浅く凹む。これらの甕の体部の器面調整は外面がタテハケで、内面は106が右上がりのハケ、107～109はハケのあと、右上がりおよび横方向のヘラケズリを施している。色調はにぶい褐～にぶい橙色で、胎土中に長石・雲母を含む。110・111は土師器高杯で、裾部径は各々8.9cm、10.4cmである。ともに杯部を欠損しているが、110は柱状部の上端に粘土紐を継ぎ足して杯部を成形している。111の柱状部の外面には縦方向のヘラミガキのあと、細かいタテハケが施されており、内面にはシボリメが残る。色調はにぶい橙～にぶい黄褐色で、胎土中に長石粒を含む。112は口径9.6cm、器高4.0cm前後の土

師器碗である。口縁部は丸みのある体部から直立したあと、端部近くで短く開いている。体部の外面はユビオサエ、口縁部の内外面および体部の内面はヨコナデ調整である。色調はにぶい橙色で、胎土中に長石・雲母・シャモットを含む。113は底部を欠損した口径10.4cmの土師器甕である。口縁部は外上方に直線的に開いており、体部は球形に近い。全体に器面が磨滅しており、調整は体部内面のヘラケズリ以外は不明である。114～116は口径21.2～24.4cm、器高2.4～2.8cm前後の土師器皿Aである。114・115の口縁部は体部の中ほどから短く開いており、116はわずかに内湾している。口縁端部をいずれも丸くおさめており、114・116の内面には正放射暗文が施されている。色調は橙～にぶい橙色で、胎土中に長石・雲母粒を含む。以上の土師器のうち、105～109・112は古墳時代後期、110・111・113は古墳時代中期、114～116は飛鳥Ⅳに属するものであろう。

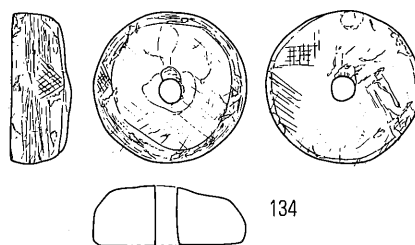
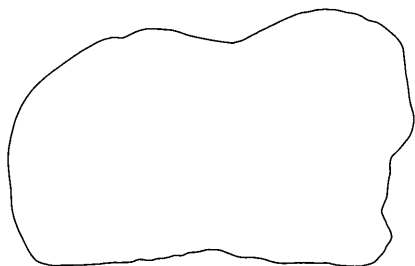
117～119は須恵器杯蓋である。117は口径が12.3cmで、口縁部と天井部の境界の稜は明瞭である。天井部の2/3以上をヘラケズリ調整している。118は口径12.0cm、器高4.0cmで、119は口径11.6cm、器高2.4cmである。ともに口縁端部を丸くおさめており、117の口縁部と天井部の境界にはにぶい稜があるが、118・119には見られない。118の天井部には「川」字状のヘラ記号がある。以上の須恵器の色調は灰色で、焼成は良い。117はTK23型式、118・119は飛鳥Ⅰに属するものである。120は口径12.2cm、器高3.5cmの須恵器杯Aである。口縁部に強いヨコナデを加えており、底部はヘラ切り未調整である。色調や焼成は119と共通する。飛鳥Ⅳに属するものであろう。121・122はともに脚部を欠損した須恵器無蓋高杯で、口径は各々13.0cm、18.0cmに復元された。121の口縁部には櫛描波状文が施されており、体部には一對の断面円形の飾り耳がある。122の体部の上半には2条の突帯と櫛描波状文が巡る。ともにTK23型式に属するもので、色調や焼成は117と共通する。123は口径6.0cmの須恵器蓋である。口縁部の返りが天井部の境界から内側によることから、長頸壺の蓋と思われる。天井部の1/2以上をヘラケズリ調整しており、中央にはつまみのはがれた跡がある。124は口径9.2cmの杯G蓋、125は口径13.4cmで器高3.3cmの須恵器杯B蓋である。ともに口縁部の返りは短く、天井部の約1/2をヘラケズリ調整している。125の天井部の中央には扁平な宝珠つまみがある。126は底径9.0cm前後の須恵器台付壺の脚部と思われるものである。脚端部を水平におさめており、内外面をヨコナデ調整している。以上の須恵器の色調や焼成は119に類似しており、123・124・126は飛鳥Ⅲ、125は飛鳥Ⅳに属するものであろう。127は頸部の上半以上を欠損した須恵器甗である。頸部の下端近くに櫛描波状文、体部の中ほどに沈線と櫛描刺突文を施しており、体部には施文後に穿たれた円孔が



133



135



134

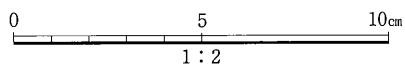


図35 長原6Bi・ii層出土遺物
長原6Bi層(133)、長原6Bii層(134・135)

ある。色調は灰色で、焼成は良い。TK23型式に属するものである。128は口径15.4cmの須恵器直口壺である。口頸部をヨコナデ調整しており、口縁端部は丸くおさめる。129は口径14.0cmで、口縁端部を上下に拡張した須恵器提瓶の口頸部である。体部の外面に平行タタキが施されており、内面には当て具痕が残る。130～132は口径20.3～22.8cmの須恵器甕である。口縁端部を130・132は丸くおさめており、131はつまみ上げている。130・132は頸部から体部にかけて平行タタキのあと、カキメを施している。以上の須恵器の色調は紫灰色を呈する130以外は灰色であり、焼成は良好である。128・130～132はTK209型式、129はTK10型式に属するものであろう。

石製品では133が長原6Bi層から、134・135が長原6Bii層から出土した。133は厚さ1.3cm前後の板状の石製品で、石材は結晶片岩である。端および平坦面には粗いミガキ状の調整が施されており、平坦面には表裏面から穿たれた孔がある。用途については明らかでない。

135は最大長12.5cm、最大幅11.7cm、最大厚6.8cmの凹み石である。平坦面の表裏面に直径2.2～4.0cm前後、深さ0.4～1.0cmの凹みがあるほか、側面にも粗い調整痕がある。石材は灰オリーブ色を呈する砂岩である。縄文時代晩期終末から弥生時代前期初頭の長原式土器に伴うものかと思われる。

134は直径4.1cm、最大厚1.6cmの紡錘車である。中央の軸孔は径約5.5mmあり、表面から裏面に向けて穿孔している。表裏面および側面を調整しているが、裏面および側面に調整痕が残る。側面および裏面のそれぞれ1個所に鋸歯文が施されている。石材は滑石である。

v) 長原7A層出土の土器と長原2～7A層出土のその他の遺物(図36～41、図版26・27・42・43・45)

136・137は須恵器杯蓋で、各々の口径は11.4cm、13.5cm、器高は3.2cm、3.6cmである。ともに口縁部と天井部の境界を丸くおさめており、天井部の約1/3をヘラケズリ調整している。口縁端部は前者は丸く、後者は尖りぎみである。138・139は須恵器杯身で、各々の口径は11.0cm、12.0cm、器高は3.3cm、4.2cmである。ともに立上りは短く内傾しているが、後者は直線的におさめている。底部の約1/3をヘラケズリ調整しており、138の内面には当て具痕が残る。140は口径12.9cm、器高4.6cmの須恵器杯蓋である。口縁部と天井部の境界の稜は明瞭で、口縁端部を面取っており、天井部のほぼ全体に細かいヘラケズリ調整を施している。141は口径10.0cm、器高5.2cmの須恵器杯身である。立上りはやや内傾しており、口縁端部は短く開いて内側に凹面をなす。底部の約1/3をヘラケズリ調整している。以上の須恵器の色調は、暗青灰色を呈する139を除いて灰色であり、焼成も良い。

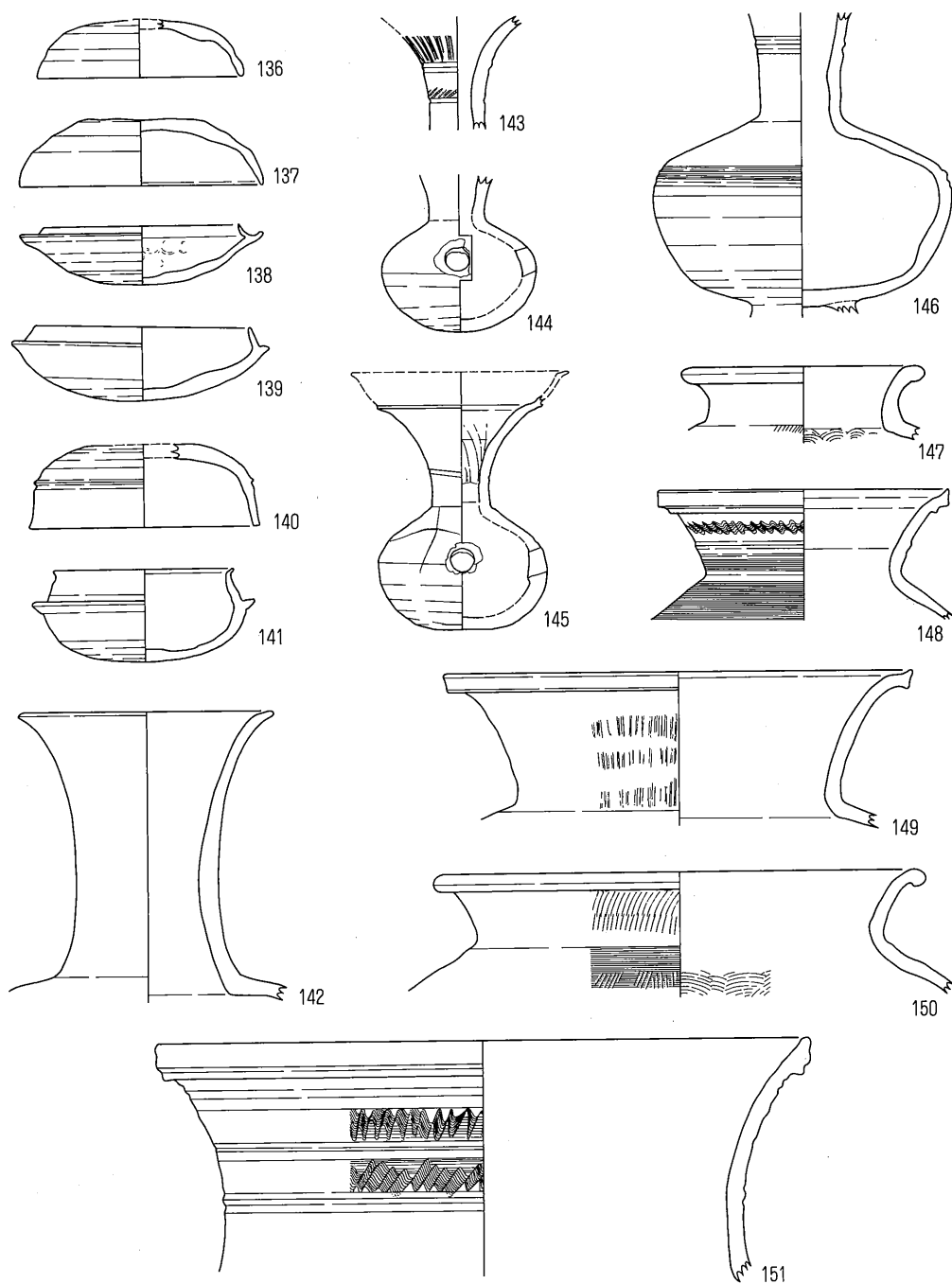


図36 長原7A層出土遺物

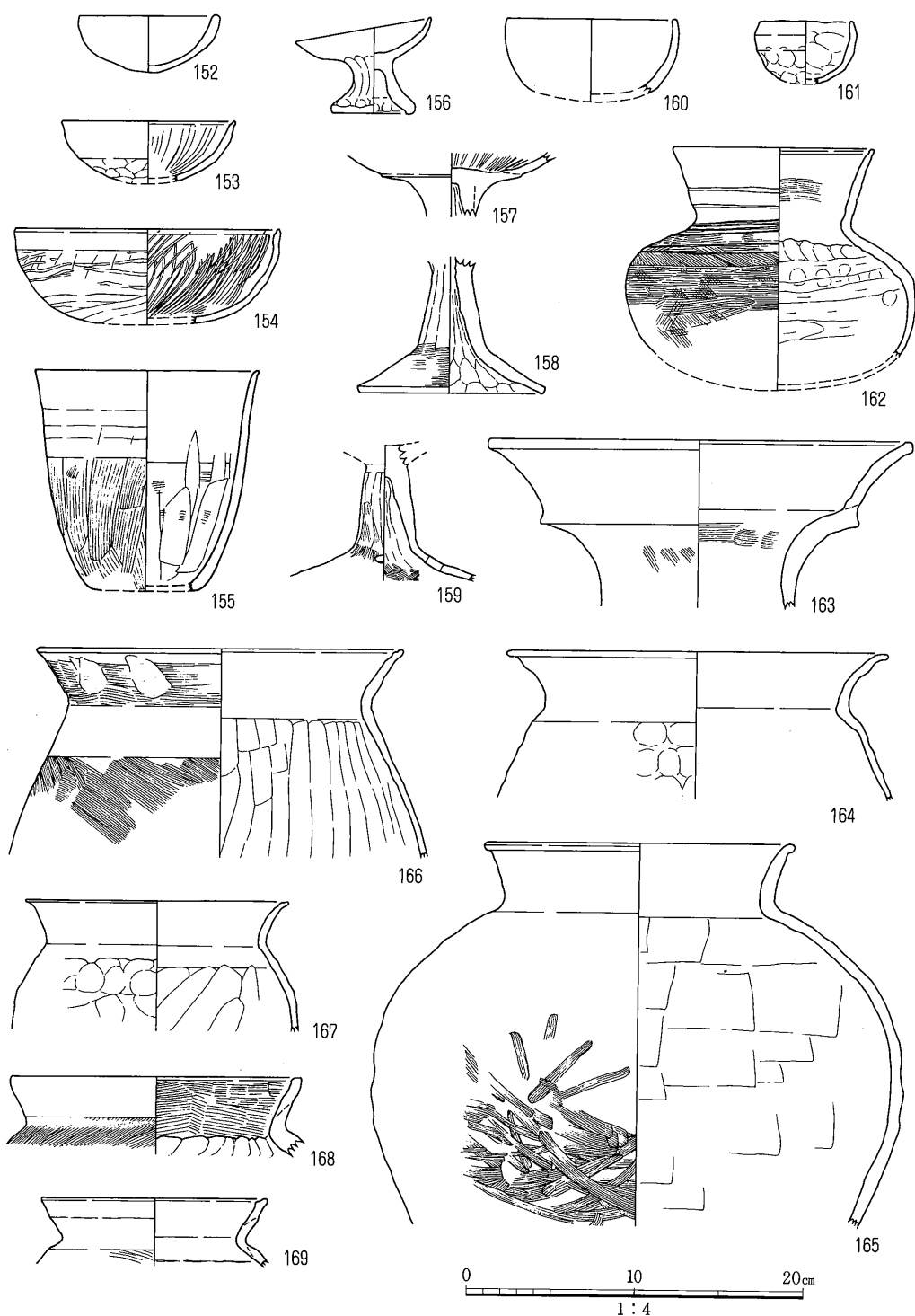


图37 長原7A層出土遺物

136・138はTK217型式、137・139はTK209型式、140・141はON46段階に属するものであろう。142は口径13.8cmの須恵器長頸壺の口頸部で、体部以下を欠損している。口縁部は筒状の頸部からロート状に開いており、器体の内外面をヨコナデ調整している。外面には灰白色の自然釉が見られる。飛鳥Ⅳ～Ⅴに属するものである。143～145は須恵器甕で、143は口縁部および体部、144は頸部以上、145は口縁部を欠損している。143の頸部には1条および2条の凹線で区画された中に櫛描集線文と刺突文が施されており、145は1条の凹線が巡る。144・145ともに体部の中ほどまでヘラケズリ調整しており、ともに外面から内面に向かって円孔を穿つ。なお、円孔の周囲には焼成後の打ち欠きがあるほか、145の体部の上半には「十」字状のヘラ記号が見られる。色調は143が暗灰色、144は灰白色、145は灰色であり、焼成は良好である。以上の須恵器はTK43型式～TK209型式に属するものである。146は口縁部および脚台を欠損した須恵器台付長頸壺である。体部はやや扁平であり、頸部に2条、体部の中ほどに3条の凹線が巡る。色調は灰色で、焼成は良い。TK209型式に属するものであろう。147～151は口径12.6～36.6cmの須恵器甕である。いずれも体部を欠損しているが、147・148は小型、149・150は中型、151は大型の甕である。147・150の頸部は短く、口縁端部は丸い。148は頸部の中ほどに突帯状のにぶい段があり、これより以下にカキメを施している。口縁端部を上方に拡張しており、口縁部の下端に突帯、頸部の上端に櫛描波状文が1条巡る。149も口縁端部を上方に拡張しており、頸部の外面には整形時の平行タタキが残る。151の頸部は2条1単位の凹線とにぶい突線によって区画されており、1・2段目の区画内には櫛描波状文が巡る。色調は灰～灰白色で、焼成は良い。147・150はTK209型式、148・149はTK208型式、151はTK47型式あるいはMT15型式に属するものと思われる。

152は口径8.2cm、器高3.4cmの土師器椀である。口縁部はやや内湾する体部から直立しており、底部は尖りぎみにおさめている。口縁端部を面取っており、器体のほぼ全体をナデ調整している。色調はにぶい橙色で、体部の外面には黒斑がある。胎土中に長石・角閃石・雲母・シャモットを含む。153は口径10.2cm、器高3.7cm前後に復元された土師器杯Cである。口縁端部は内傾しており、底部はユビオサエで、口縁部および体部の内面はヨコナデ調整している。器体の内面には正放射暗文が施されている。154は口径15.6cm、器高5.6cmの土師器杯Cである。口縁端部は内傾しており、器面の調整は口縁部の内外面がヨコナデ、底部は横方向のヘラケズリである。体部の外面に横方向、器体の内面にはやや乱れた縦方向の暗文が施されている。155は口径13.2cm、器高13cm前後の土師器鉢である。口縁部は

体部からわずかに開いており、底部は平底である。器面の調整は口縁部から体部の中ほどにかけての外面がかかるいタテハケのあとヨコナデであり、体部の内面はヨコハケのあと縦方向のナデを施している。以上の土師器の色調は、にぶい褐色を呈する155を除きにぶい橙あるいは橙色で、焼成は良い。胎土中に長石・雲母を含む。153～155は飛鳥Ⅰに属するものであろう。なお、鉢とした155には把手は確認されなかったが、類似品の中には体部の中ほどに上向きの細い棒状の把手が付くものがある。156は口径8.0cm、器高5.7cmの土師器ミニチュア高杯である。杯部は浅い皿状を呈しており、脚部は器壁が厚く、器面の内外面をユビナデで整えている。色調はにぶい黄橙色で、焼成は良い。胎土中に長石・雲母を含む。157～159は土師器高杯の杯底部および脚部である。157は脚部の上端に粘土紐を足して杯底部を成形した過程が確認された資料である。杯部の内面には正放射暗文が施されている。158は杯部を欠損しており、柱状部の外面は縦方向のナデ、裾部はヨコハケを断続的に施したあと、ヨコナデ調整している。柱状部から裾部の内面はシボリメが観察され、ユビオサエで整えている。159は杯部に脚部を差し込んで成形しており、柱状部から裾部の外面には細かいタテハケが施されている。内面にはシボリメと断続的なヨコハケ調整が観察される。裾部の4方に円形スカシ孔を穿つ。以上の土師器の色調は黄橙～橙色で、焼成や胎土は156と変わらない。156～158は飛鳥Ⅰ、159は6世紀後半に属するものであろう。

160は口径約10cmの椀である。器高は4～5cm程度になるとみられる。口縁部は内湾した体部から直立しており、端部を水平におさめている。器体の内外面の調整はナデである。色調はにぶい橙～灰白色で、胎土中に微細な長石・チャート粒を多く含んでおり、全体に二次的な火を受けていることから製塩土器であると思われる。161は口径5.3cm、器高3.7cmの体部が球形に近い製塩土器である。口縁部は体部の上端から内傾しており、体部の内外面をユビオサエで整えている。色調は灰黄褐色で、胎土中に微細な長石粒を含む。160・161ともに6世紀前半代に属するものであろう。

162は口径11.7cmの土師器直口壺である。底部を欠損しているが、器高は14～15cm程度になるとみられる。やや扁平な球形の体部から筒状の口頸部が外上方に開いており、頸部の中ほどから体部の上半にかけて7条のにぶい沈線が巡る。体部の外面は左上がりのハケのあと、ヨコハケを施しており、内面は横方向のヘラケズリ調整である。口頸部の調整はヨコナデであるが、内面にはヨコハケが残る。色調は橙色で、胎土中に長石・雲母粒を含む。5世紀後半に属する。

163は口径24.5cmの古式土師器壺である。口縁部は複合口縁で、筒状の頸部から緩やか

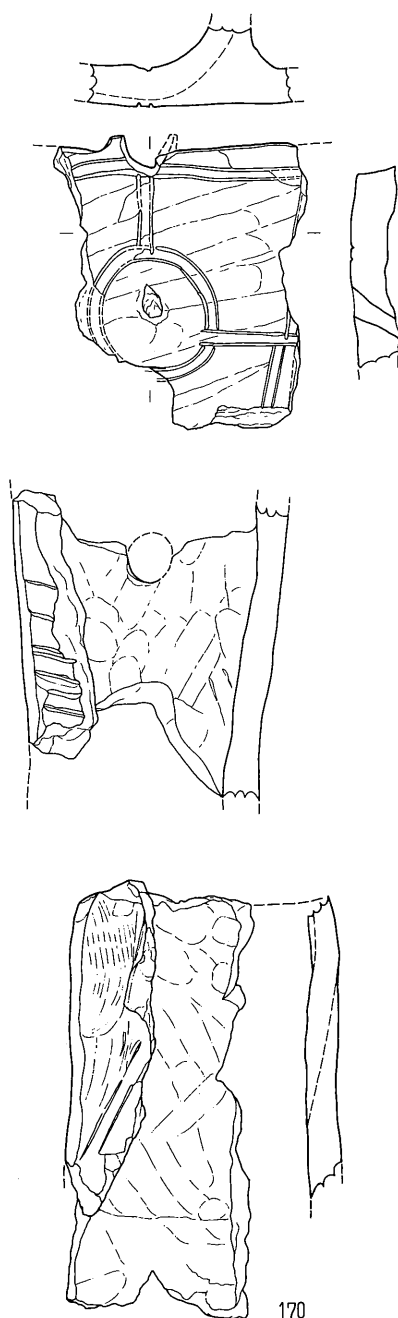


図38 長原6Bii・7A層出土盾形埴輪

に開いた擬口縁上に粘土紐を足して口縁部を成形している。頸部の内外面にタテおよびヨコハケが残る。色調は明赤褐色で、胎土中に長石・角閃石・雲母粒を含む。初期須恵器の出現以前の布留式土器の新しい段階に属するものであろう。

164・165は、口径が各々22.0cm、17.9cmの土師器甕である。164の口縁部は頸部から大きく開いており、口縁端部を水平におさめている。体部の器面調整は外面はユビオサエ、内面は横方向のナデである。165は短く開いた口縁部の端部を玉縁状におさめており、体部の器面調整は外面が左および右上がりのハケ、内面は横方向のナデである。色調は164がにぶい橙色で、165はにぶい黄橙色である。ともに焼成は良好で、胎土中に長石・シャモット粒を含む。166は口径21.5cmの土師器甕で、口縁部は頸部から直線的に外反しており、口縁端部はわずかに内傾して凹面をなす。口縁部および体部の外面は左上がりのハケのあと、かるいヨコナデ調整を施している。体部の内面調整は縦方向のヘラケズリである。色調や胎土は164と変わらない。167～169は口径13.3～17.2cmのやや小型の土師器甕である。167の口縁部は頸部から緩やかに開いており、168・169は頸部から一旦開いたあと、口縁端部の近くでわずかに内湾している。168・169の口縁端部はわずかに内傾しており、ともに口頸部の調整はヨコナデであるが、168の内面にはヨコハケが残る。体部の内外面の調整は167は外面がユビオサエ、内面は右上がりのナデ、168・169の外面は右あるいは左上がりのハケで、頸部および体部内面は前者がユビオサエ、後者はナデである。以上の土器のうち、164・165・167は飛鳥Ⅰ～Ⅱ、166・

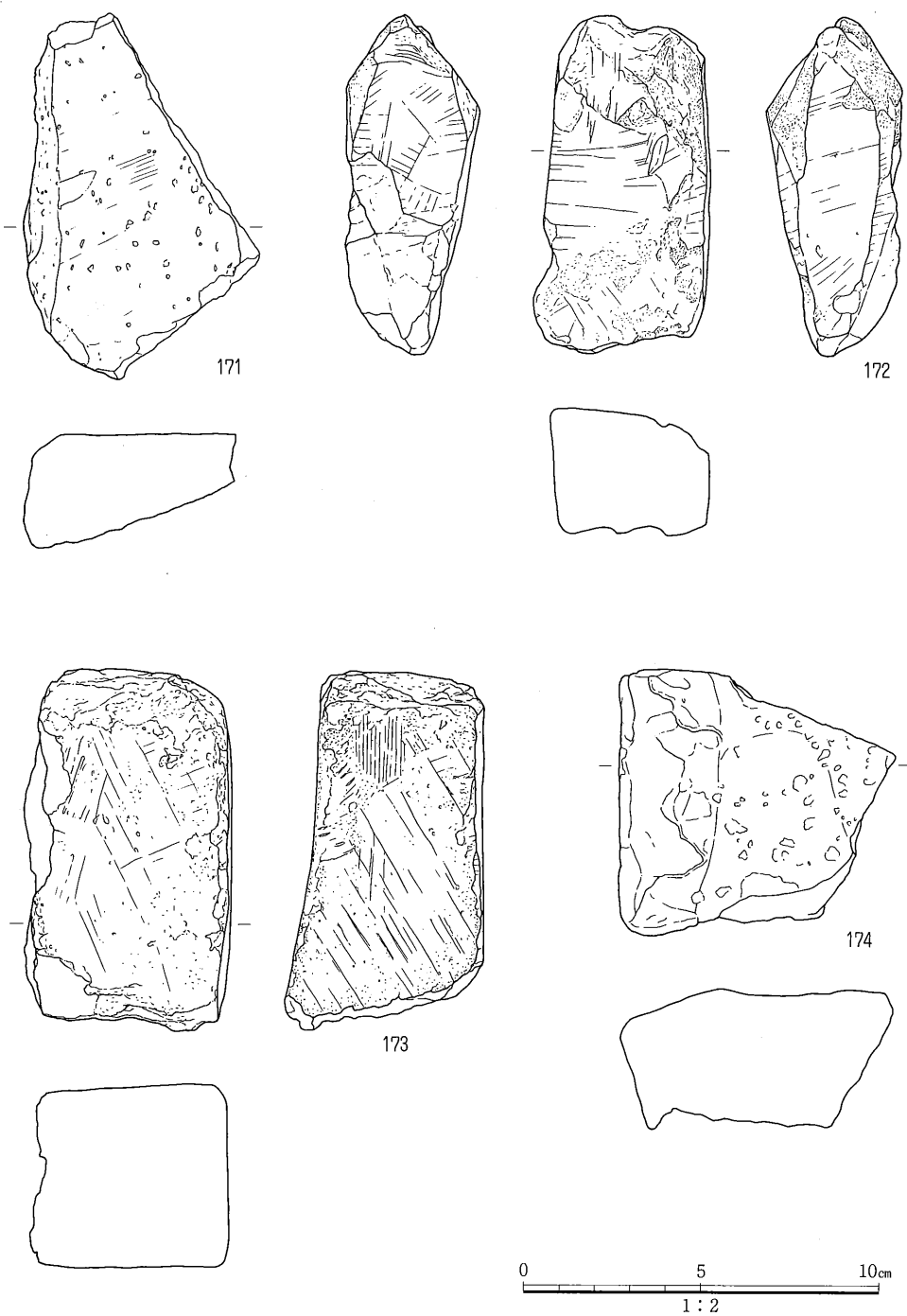


図39 長原7A層出土石製品

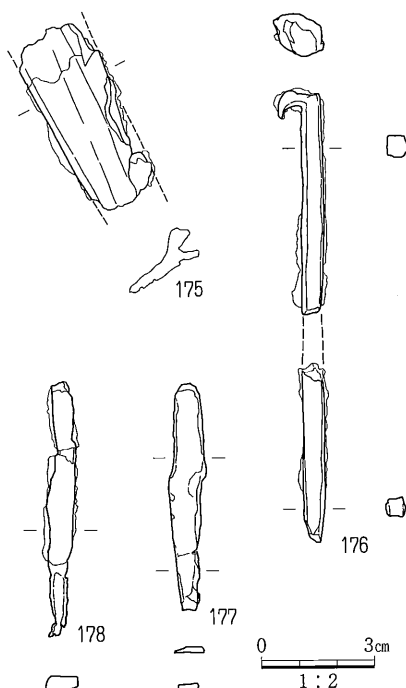


図40 長原3・6Bi・7A層出土鉄製品
長原3層(175)、長原6Bi層(176)、長原
7A層(177)、長原7A層下部(178)

168・169は5世紀の後半代に属するものであろう。

170は4B区の長原7A層下面の浅い窪地内から出土した形象埴輪である。3片の破片に大きく分かれており、円形および縦横の線刻のある板状の部位と、接合面に線刻、円形スカシ孔が施された最大径が14.8cmの円筒がある。板状の部位には表面から裏面に向って突いた小孔と、上縁部に2個所の突起があることから石見型の盾形埴輪の断片と思われる。色調はにぶい橙色で、焼成は窖窯によっており、胎土中に長石・雲母・チャート粒を多く含む。類似品は調査地の東南380mに位置する6世紀中葉の帆立貝形前方後円墳である南口古墳から出土している[大阪市文化財協会1995]。6世紀中葉に属するものであろう。

171～173は砥石で、1D区のSK716上面の長原7A層準の整地層から出土した174以外は、長原7A層から出土した。171は二次的な火を受けているほか、割れているため、元の形状は明らかでない。石材は安山岩質凝灰岩である。172は3面に研ぎ痕があるほか、1短辺側には叩打痕がある。石材は凝灰岩である。173は長さ10.1cm、幅5.9cm、厚さ5.1cmで、形状は長方形を呈する。3面に研ぎ痕があり、石材は凝灰岩である。174は砥石の断片である。2面に研ぎ痕があり、全体に二次的な火を受けている。石材は流紋岩である。以上の砥石は大きさや石材および研ぎ痕からみて、鎌などの鉄製品用のものと思われる。

175は長原3層から出土した鋤先の断片と思われるもので、柄に装着する風呂が一部残っている。176は中央部および尖端を欠損しているが、長さ約12cmに復元された釘である。断面は一辺約0.5cmの方形であり、頭部は使用時の打撃により変形している。8B区の長原6Bi層から出土しており、飛鳥時代に属するものであろう。177は長さ6.0cm、最大幅1.1cm、178は長さ6.8cm、最大幅0.8cmの鉄製品である。前者は断面や残存部の形状からみて、片刃の刀子と思われる。刃部の最大幅は0.8cmある。178は断面が長方形の鉄製品で、上端および下端が欠損しており、用途は不明である。前者は3B区の長原7A層、後者は長原7A層下部から出土した。ともに飛鳥時代に属するものである。

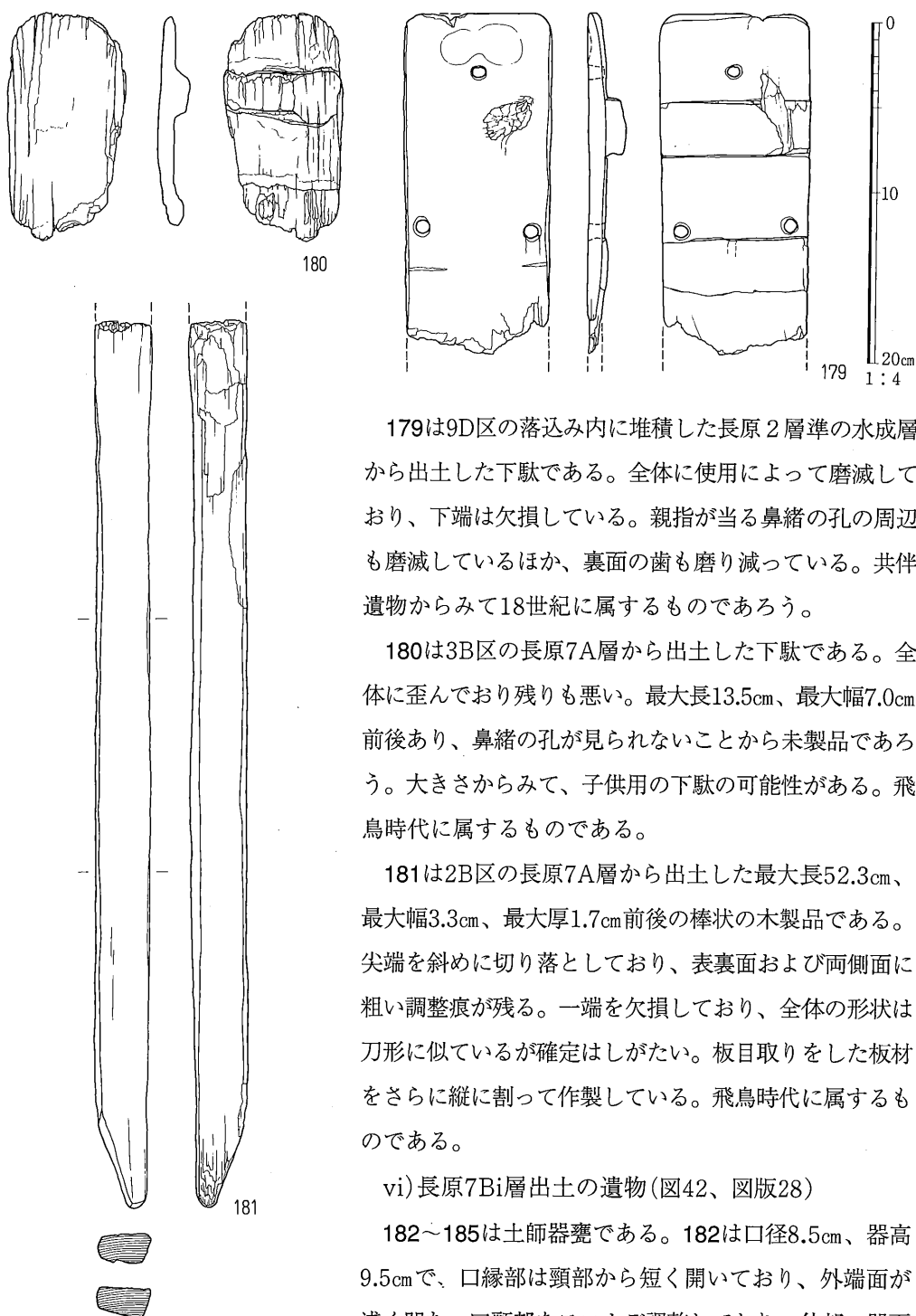


図41 長原2・7A層出土木製品
長原2層(179)、長原7A層(180・181)

179は9D区の落込み内に堆積した長原2層準の水成層から出土した下駄である。全体に使用によって磨滅しており、下端は欠損している。親指が当る鼻緒の孔の周辺も磨滅しているほか、裏面の歯も磨り減っている。共伴遺物からみて18世紀に属するものであろう。

180は3B区の長原7A層から出土した下駄である。全体に歪んでおり残りも悪い。最大長13.5cm、最大幅7.0cm前後あり、鼻緒の孔が見られないことから未製品であろう。大きさからみて、子供用の下駄の可能性があり。飛鳥時代に属するものである。

181は2B区の長原7A層から出土した最大長52.3cm、最大幅3.3cm、最大厚1.7cm前後の棒状の木製品である。先端を斜めに切り落としており、表裏面および両側面に粗い調整痕が残る。一端を欠損しており、全体の形状は刀形に似ているが確定はしがたい。板目取りをした板材をさらに縦に割って作製している。飛鳥時代に属するものである。

vi) 長原7Bi層出土の遺物(図42、図版28)

182~185は土師器甕である。182は口径8.5cm、器高9.5cmで、口縁部は頸部から短く開いており、外端面が浅く凹む。口頸部をヨコナデ調整しており、体部の器面

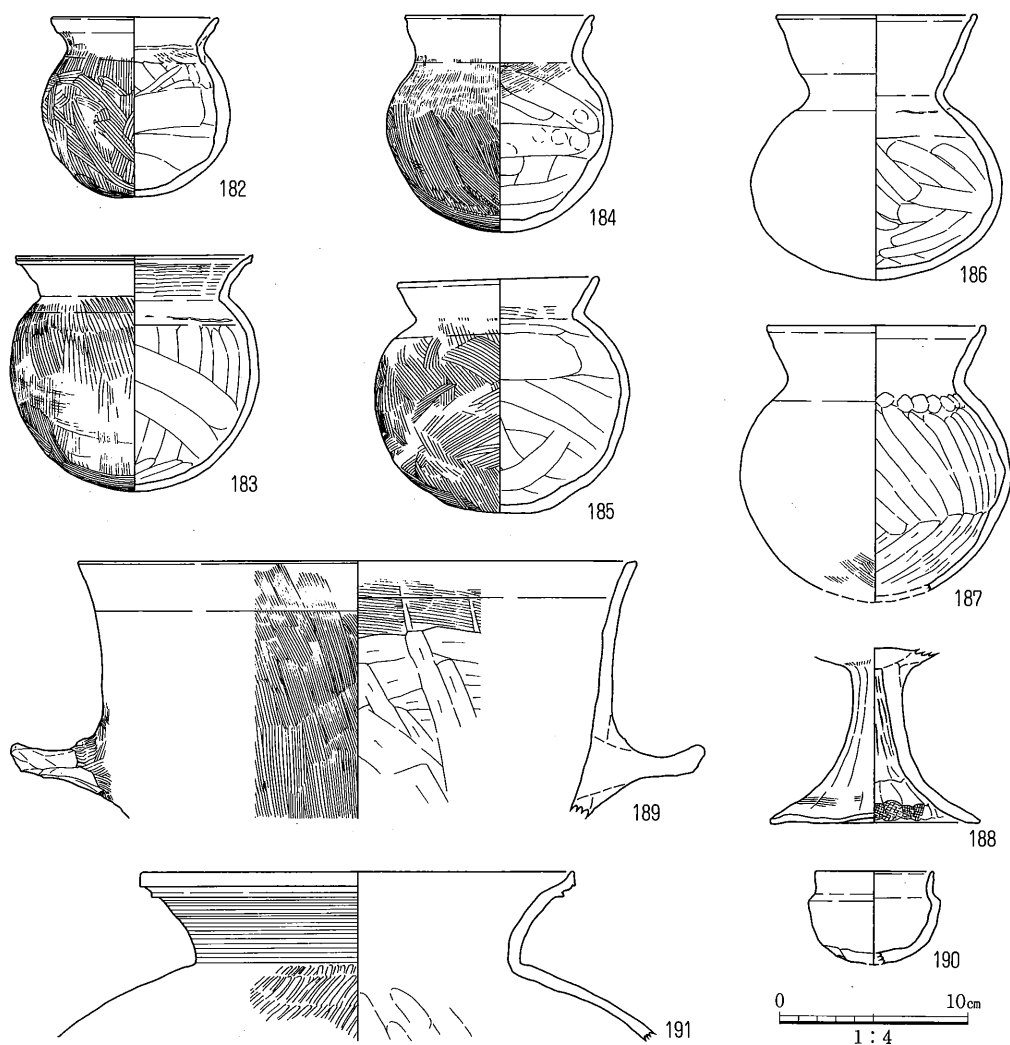


図42 長原7Bi層出土遺物

調整は外面が縦および左上がりのハケで、内面は左上がりのハケのあと、横方向のヘラケズリである。色調はにぶい橙色で、胎土中に長石粒を含む。**183**は口径と器高がともに12.6cmで、口縁部は頸部から大きく開いており、端部をつまみ上げている。口縁部の内面には粗いヨコハケが残る。体部は球形に近く、器面調整は外面が縦および左上がりのハケで、内面は縦および左上がりのヘラケズリである。色調は浅黄橙色で、胎土中に長石・雲母粒を含む。口縁部の形態や体部の器面調整などは庄内式土器などの古式土師器の系譜を引くものとして注目される。**184**は口径10.0cm、器高11.5cmで、口頸部は球形の体部から外上方に直線的に開く。口縁端部の下端が浅く凹んでおり、器面調整は口頸部がヨコナデで、体

部は外面が縦および左上がりのハケ、内面は横および左上がりのヘラケズリである。色調は橙色で、胎土は長石・角閃石・雲母粒を含み生駒西麓産と思われる。185は口径10.5cm、器高12.4cmで、口縁部は頸部から短く開いており、体部は球形に近い。口縁端部を丸くおさめており、口頸部の内外面はハケのあとヨコナデ調整である。体部の器面調整は外面が右および左上がりのハケで、内面は左および右上がりのヘラケズリである。色調はにぶい橙色で、胎土は184と同じく生駒西麓産とみられる。186は口径10.4cm、器高14.1cmの土師器直口壺である。口頸部は球形の体部から直線ぎみに開いており、口縁端部はわずかに内傾している。器面調整は口頸部の内外面がヨコナデ調整で、体部の外面はナデ、内面は右および左上がりのヘラケズリである。色調は橙色で、焼成は良い。胎土中に長石・シャモット粒を含む。187は口径11.5cm、器高14.6cm前後に復元された土師器甕である。口縁部は球形に近い体部から短く開き、口縁端部の近くに強いヨコナデを加えて端部を丸くおさめる。体部の器面調整は外面が左上がりのタテハケのあと、ナデを加えており、内面は右上がりおよび左上がりの強いユビナデを施している。色調や胎土は186と共通する。188は底径11.0cmの杯部を欠損した土師器高杯の脚部である。裾部の内面は布目圧痕を伴うユビオサエで整えられており、同外面はヨコハケのあと、弱いヨコナデ調整を加えている。柱状部は外面が面取りぎみの縦方向のナデ、内面にはシボリメが残る。色調や胎土は187と変わらない。189は口径29.6cmに復元された土師器甕である。体部の中ほど以下を欠損しており、口縁部は直線的な体部からわずかに開く。体部の器面調整は外面が断続的なタテハケ、内面は左上がりおよび横方向のヘラケズリである。口縁部の内外面は幅広くヨコナデ調整しているが、一部にハケが残る。体部の中ほどにはやや扁平な把手が挿入されている。色調は橙～にぶい黄橙色で、胎土中に長石・石英・雲母粒を多く含む。

190は口径6.2cm、器高5.0cm前後に復元された須恵器短頸壺もしくは把手付き碗である。口縁部は内傾した頸部から直立しており、底部を時計回りに静止ヘラケズリで調整している。色調は灰色で、焼成は良い。191は口径23.0cmの須恵器甕である。口縁部は頸部から緩やかに開いたあと、口縁端部の近くでわずかに内湾している。口縁端部の下端に1条の突帯が巡るほか、口頸部の外面には粗いカキメ調整を施している。体部の外面は粗い平行タタキで、内面は当て具痕をていねいにナデ消している。色調は灰～灰褐色で、焼成は良い。以上の長原7Bi層から出土した土器のうち、須恵器はTK208型式に属するものであろう。これらに共伴した土師器についても須恵器と同時期の所産とみられるものであり、5世紀後半における長原遺跡西部の土師器の様相を示す良好な資料といえる。

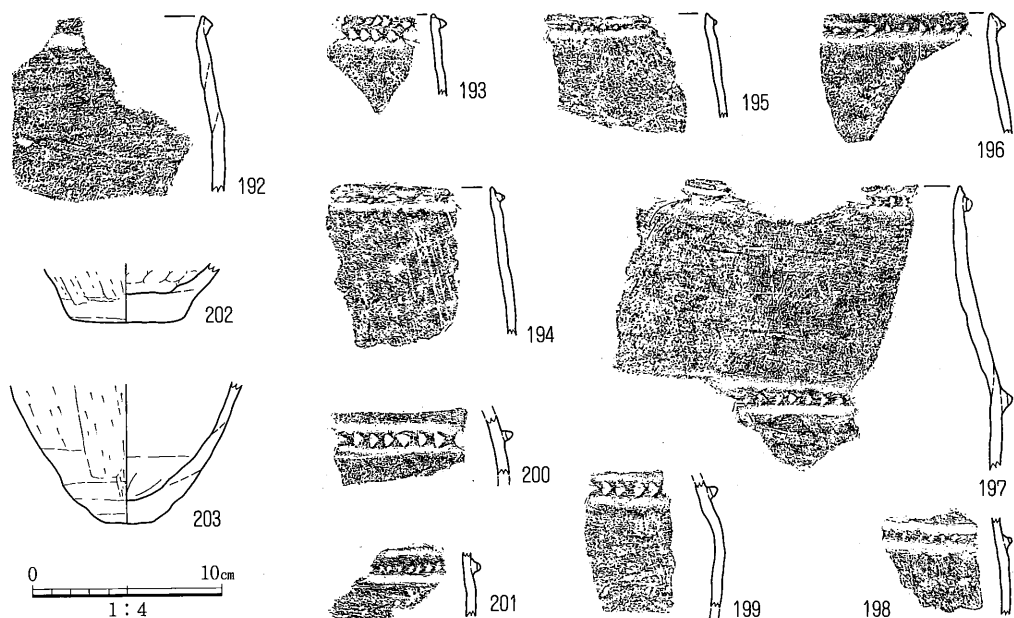


図43 長原 8 / 9 層出土の長原式土器

vii) 長原 8 / 9 層出土の遺物 (図43、図版42)

192～203は長原式土器の口縁部から底部にかけての破片で、9C～10D区の「馬池谷」内に堆積した水成層である長原 8 / 9 層一括層から出土したものである。これらのほかにも図化しなかったが、長原式土器の体部・底部の細片や、畿内第 I 様式の壺の細片が出土している。192は体部と頸部の境界に突帯が付されない深鉢で、口唇部の突帯にはキザミが見られない。頸部の外面を横方向のナデ、体部を横方向のヘラケズリで調整しており、内面は横方向のナデを加えている。粘土紐の接合方法は内傾接合である。193～196は口縁部の破片である。193・194の突帯は口唇部からわずかに下がった位置にあり、193は口唇部の上端にも D 字形のキザミが施されている。194の頸部の外面には 7 本の左上がりのヘラ描き沈線が見られる。197は口唇部からやや下がった位置および頸部と体部の境界に D 字形のキザミをもつ突帯が付された深鉢である。器面の調整は、頸部の内面に縦方向のナデを加えている以外は192と基本的に共通する。198～201は体部の細片で、199・200の突帯の D 字形のキザミは198・201に比べて大きい。202は径5.6cmの平底の底部である。器面の調整は外面が縦方向のヘラケズリで、内面はユビオサエである。203は砲弾状の底部から体部の破片で、中央がわずかに平底をなす。器面調整は外面が縦方向のヘラケズリであるが、底部は横方向にナデしており、内面は横および左上がりのナデである。内底面には工具痕が

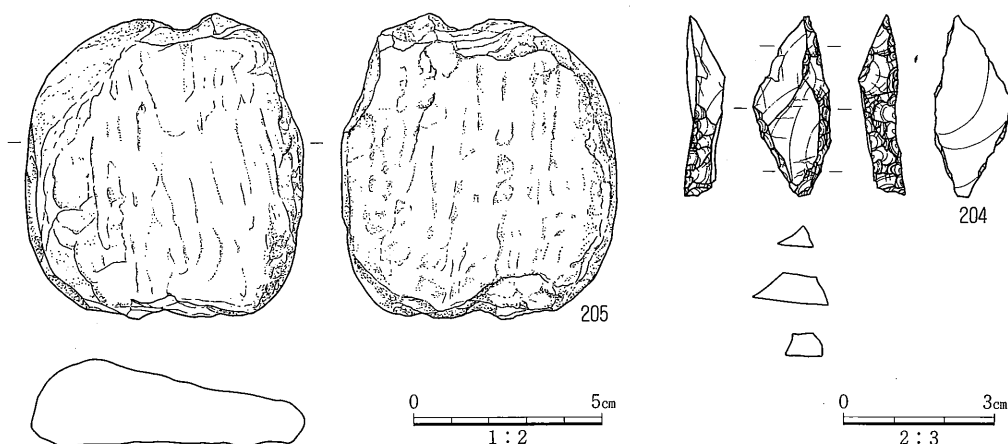


図44 長原7A・12A層出土石器遺物
長原7A層(204)、長原12A層(205)

残る。粘土紐の接合方法は内傾接合である。以上の長原式土器の色調は暗灰黄～灰黄褐色を基調としており、胎土は長石・石英・雲母・角閃石粒を含む生駒西麓産である。

viii) 長原7A・12A層出土の遺物(図44、図版43)

204は、2B区の長原7A層から出土した横形剥片を素材とする二側縁加工のナイフ形石器である。サヌカイト製で、長さ3.59cm、幅1.58cm、厚さ0.60cmである。表面は平坦でポジティブな剥離面と、前段階の剥離痕であるネガティブ面の計2面で構成される。刃部は表面左側縁上半部に設定され、背部に当る表面右側縁は対向調整によって整形加工が施されている。後期旧石器時代後半期のものと考えられる。

205は3B区の流路NR1201に堆積した長原12A層準の水成層から出土した石錘である。素材には灰白色の扁平な結晶片岩を用いており、上下端が紐を掛けるために打ち欠かれているほか、周縁にも粗い調整痕がある。本石錘は土器などの遺物を伴わなかったが、出土層準である長原12A層が堆積した縄文時代中期には調査地の北西800m付近に当時の海岸線が迫っていたことが確認されており、当該時期もしくはそれ以前の漁具であると思われる。

3) 遺構とその遺物

i) 平安～奈良時代の遺構と遺物

a. 平安時代の水田(図45、図版7)

平安時代の水田は、長原4Bi層および長原4Biii層を作土とするものを確認したが、前者については長原4Bii層準の水成層が堆積していた調査地の中央部から以北においてのみ検

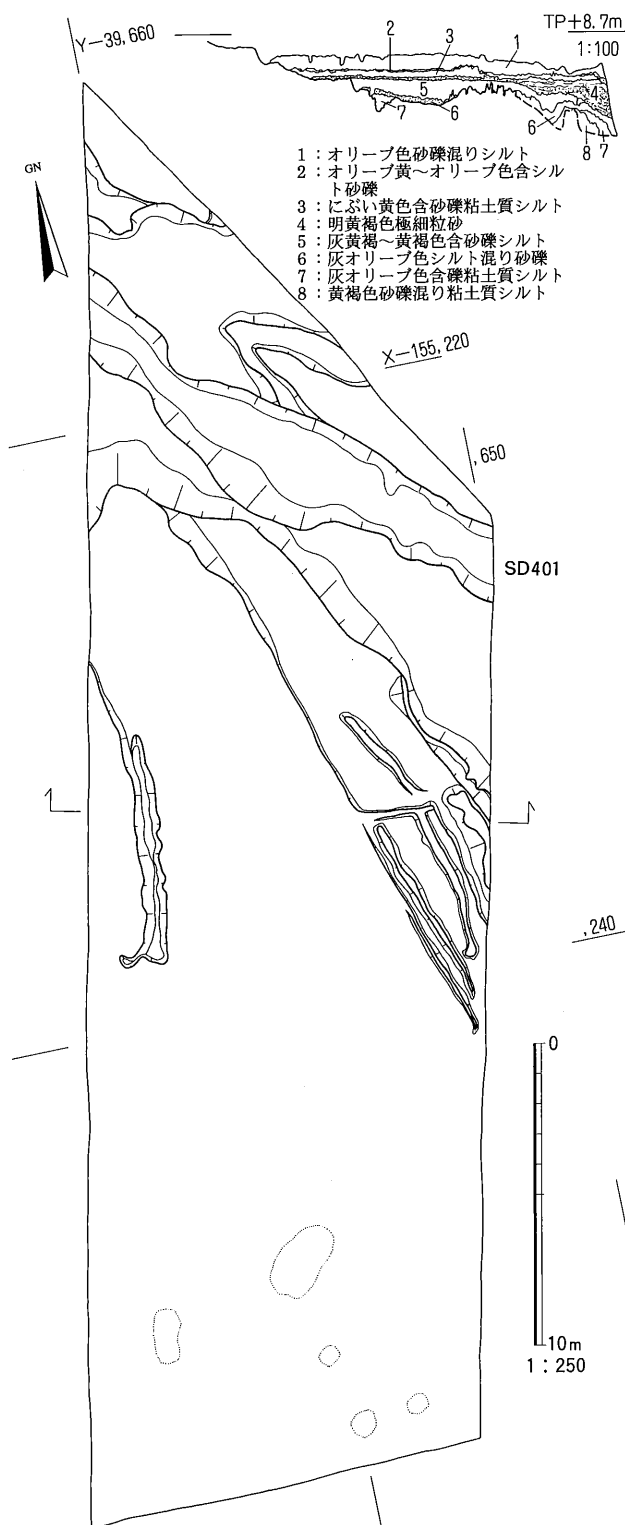


図45 長原4Biii層上面検出遺構

出することができた。長原4Bi層準の水田の作土はにぶい黄～黄褐色粘土質シルトを基調とするもので、地山層が高い調査地のCラインの中ほどより西側では多量の礫が混る。本水田面は長原2層準の水田耕作によって上部を攪拌されており、畦畔や水路などは検出されなかったが、調査地の北西部では作土の下面に耕作痕跡をはじめ、ヒトや偶蹄類の足跡が残っていた。ここでは比較的残りが良かった長原4Biii層準の水田について報告することにしたい。

長原4Biii層準の水田は、「馬池谷」の痕跡であると思われる流路状の窪地が残る調査地の北部(8B・9C・9D区)では遺存していなかったが、これより南側では畦畔や溝などが検出された。5～7B地区に位置する畦畔は、幅・高さともに0.15m前後で、方位は座標北よりやや西に振っており、ちょうど「馬池谷」の肩部の方向に沿って形成されていた。これより約0.80m低い谷の中の水田面ではヒトや偶蹄類の足跡は見られたものの、畦畔は確認されなかった。作土は明黄

褐～黄褐色粘土質シルトを基調とするが、「馬池谷」に近づくにつれてオリーブ色砂礫混りシルトに層相が変わり、上述した長原4Bi層準の水田作土と同様に、地山が高くなるCラインより西側では礫が多量に混る。層厚は10～15cm前後あるが、場所によっては上層水田の耕作によって攪拌されており、5cmに満たない所もあった。水田面はTP+8.90～8.65mで、調査地の

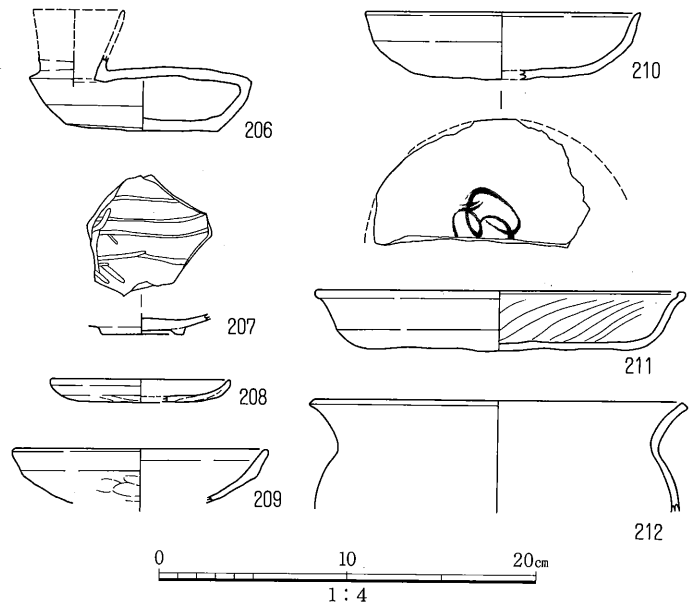


図46 SD401出土遺物

南西から北東に向って徐々に低くなるが、東西方向は図30の断面図に示したようにほぼ水平な面をなす。水田の時期については、作土中に11世紀後半から12世紀中葉の瓦器碗が含まれることから、遅くとも鎌倉時代前半頃までには開かれていたものと考えられる。

b. 溝(図45・46、図版7・29)

SD401 水田の北部、「馬池谷」の北肩部を谷の稜線に沿って東西方向に流れる幅約3m、深さ約1mの溝である。溝内には作土のブロックが混る長原4A層に相当する灰白色砂礫や暗青灰色粗粒砂が堆積していた。この溝は調査時には長原4Biii層下面の溝と認識していた。しかしながら溝の北壁や溝底に奈良時代末を下限とする墨書土器などを含む開削時に堆積した地層が残っていたことから、後述するように長原6Ai層準の水田の水路として掘られたもので、その後も幾度かの改修を経て長原4Biii層の水田の水路として機能していたものと最終的に判断した。

206は口縁部の大半を欠損した須恵器平瓶である。体部はやや扁平に成形されており、体部の下半から底部にかけてヘラケズリ調整している。色調は灰色で、焼成は良い。**207**は高台径4.4cmの瓦器碗の底部である。内面の見込みに暗文が施されている。**208**は口径9.4cm、器高1.2cmの土師器皿で、口縁部は浅い体部からわずかに開く。体部の内外面をヨコナデ調整しており、底部はユビオサエで整えている。色調はにぶい黄～灰黄褐色で、胎土中に長

石・雲母粒を含む。209は口径13.3cm、器高3.3cm前後の土師器皿で、口縁部および体部の内面をヨコナデ調整しており、体部の外面はユビオサエで整えている。色調はにぶい黄色で、胎土中に長石・雲母・シャモット粒を含む。口縁部にはススが付着している。210は口径14.5cm、器高3.6cmの土師器椀Cである。口縁部は体部からわずかに開いており、底部の裏面に螺旋状の墨書がある。器面調整は口縁部の内外面および体部の内面がヨコナデ、体部から底部の外面はユビオサエのあとナデである。色調はにぶい褐色で、胎土は長石・雲母・角閃石を含む生駒西麓産である。211は口径19.2cm、器高3.3cmの土師器杯Aである。口縁端部を丸くおさめており、体部の内面には正放射暗文を施している。色調は黄橙色で、胎土は209と変わらない。212は口径19.4cmの土師器甕である。口縁部は体部から大きく開いており、端部を面取る。口頸部の調整は内外面ともにヨコナデである。色調は黒色で、胎土は211と変わらない。以上の土器類のうち、12世紀前半に属する207～209を除き、8世紀の中葉に属するものであろう。

c. 奈良時代の水田(図47、図版7)

奈良時代の水田は調査地の中ほどに位置する東西7.0m、南北15.5m、検出面からの深さ1.7m前後の窪地の西側の地山が高い地区を中心に検出された。作土は黄褐色含砂礫シルト～黄褐色粘土質シルトで、層厚は15～20cm前後あり、ほぼ平坦な面をなす。調査では一部で畦畔状の高まりが確認された以外には、水田に伴う確実な遺構は検出されなかった。ただし、水田の北側の「馬池谷」の谷頭に沿うように掘られたSD603は、本水田に係る用水路である可能性が高い。また、調査地の南西部では長原6Ai層基底面において、SK601～606やSP601・604・606などを検出した。これらの遺構の中には作土で埋戻されたものもあったが、水田との係りは明らかにできなかった。

一方、水田の東側で検出された窪地内にも、西側の瓜破台地からこれに向って傾斜した地山面に沿うように長原6Ai層を客土とした水田作土が確認された。ただし、窪地内や北部の「馬池谷」内に造成された水田の作土は、そのベースになっている長原6Aii層などが十分に攪拌されていないように思われた。これは地下水位の高い谷内や窪地内は水稻などの耕作に適していなかったことに起因しているのかもしれない。

長原6Ai層の水田が経営された年代は、本層内にMT21型式の須恵器をはじめ、平城宮土器Ⅲに属する須恵器や土師器が含まれること、本層の直下に堆積した水成層の長原6Aii層に飛鳥Ⅳに属する土器類が含まれることから、奈良時代の前半から半ばにかけてと思われる。なお、水田面を覆うオリーブ灰色粗粒砂～含シルト砂礫からなる長原5A層、緑灰色

極細粒砂～極細粒砂シルトからなる長原5B層は、「馬池谷」および窪地内以外では単一の地層としては確認されなかった。

d. 奈良時代の溝と土壌(図47・48、図版7・43)

SD603 前述したようにSD401の前身と考えられる長原6Ai層の水田に伴う水路である。溝の幅は後世の溝の幅に比べて幾分細かったようであり、断面観察などからその位置もやや北寄りにあったことが判明した。

SK601 2C区に位置する直径0.8m前後、深さ0.3m前後の土壌である。埋土は長原6Ai層準の黄褐色含砂礫シルトであり、遺構の検出時に上面から子持勾玉が1点出土した。213は最大長7.6cm、最大幅4.0cm、最大厚2.2cmで、身にやや丸みのある子持勾玉である。両側面に2個一対、腹に1個所、背には3個所に子を設けている。頭部の紐孔は片面から穿たれており、素材には緑色を呈する滑石を用いている。全体の形態や身に丸みがあることからみて6世紀前半に属する祭祀用の子持勾玉と思われる。

ii) 飛鳥～古墳時代の遺構と遺物(図47・49、図版11・13)

a. 窪地(図50～53、図版10・29・30・44・45)

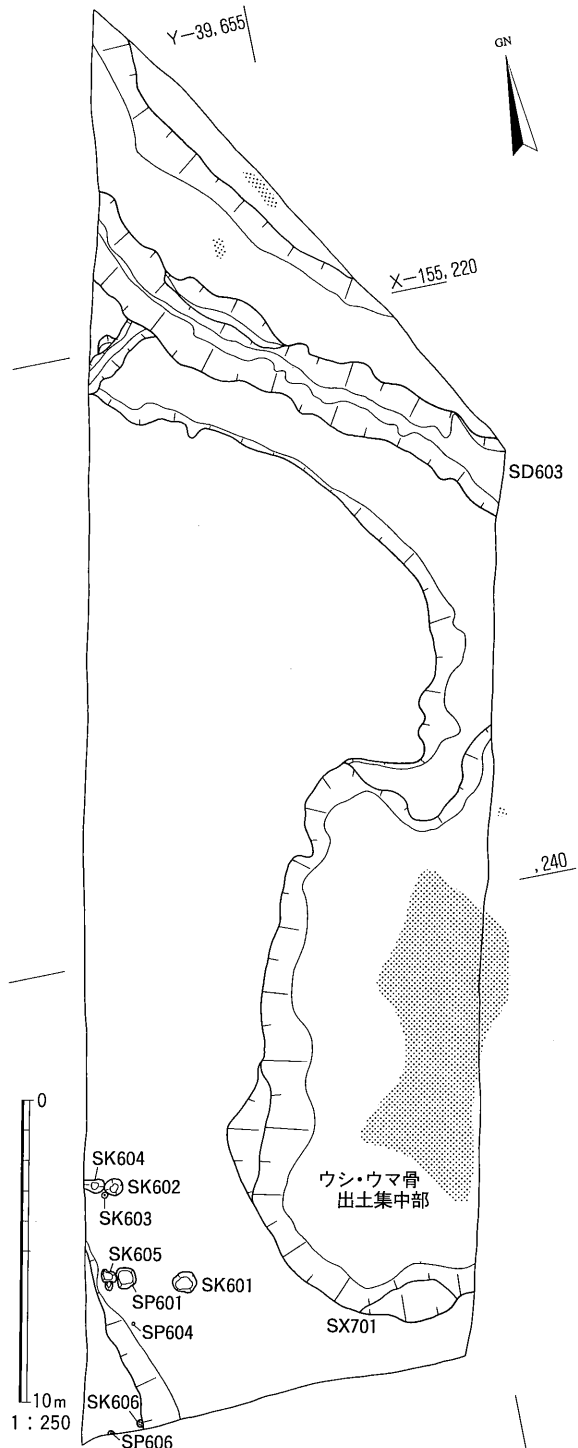


図47 長原6Ai～Bii層検出遺構

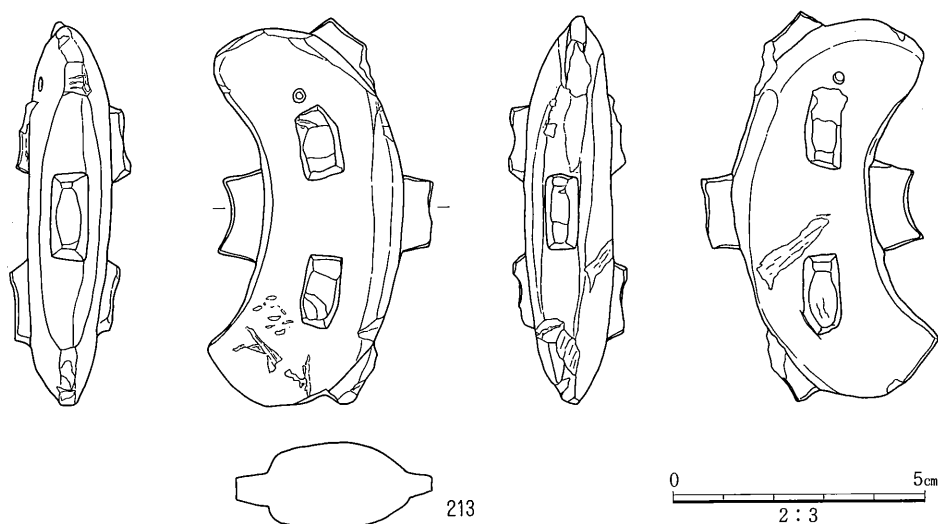


図48 SK601出土子持勾玉

SX701 調査地の南東部に位置する南北18m、東西8m以上の窪地である。本窪地の下部にはSD711・712が「馬池谷」の肩部に沿って南から北に流れている。窪地の位置は地山が西から東に向って低くなる場所に当る。そのため長原7B層から長原6Bi層準の水成層が厚く堆積しており、水浸き状態で各種の木製品や植物遺体が、また長原6Bii層からはウシ・ウマ骨が多数出土した。ウシ・ウマ骨については章をあらためて詳述することにした。窪地は長らく水浸き状態になっていたようであり、土器類や木製品をはじめ、食物残渣などの出土状況を考慮すれば、ここは調査地の西南方に位置する飛鳥時代の集落のゴミ捨て場となっていた可能性が高い。

214～216は口径14.4～15.6cmの須恵器杯蓋である。214は口縁部と天井部の境界に2条の凹線が巡る。215・216の口縁部と天井部の境界には稜があり、215の口縁端部の外端面にはキザミメが施されている。215・216ともに口縁端部は内傾しており、浅い凹面をなす。214は天井部の2/3を、215・216は1/3をヘラケズリ調整している。214はMT85型式、215・216はMT15型式に属するものである。217～223は口径10.4～12.6cmの須恵器杯身である。217～221の立上がりは短く内傾しており、口縁端部は丸い。220は立上がりを受け部から折り込んで成形している。222は立上がりが受け部からほぼ直立しており、口縁端部を丸くおさめている。223の立上がりはわずかに内傾しており、口縁端部は内傾して凹む。底部を217・218・222は1/3、219・220・221・223は2/3、ヘラケズリ調整している。220の底部には「+」印状のヘラ記号がある。217・220はTK217型式、218・219・221はTK209型式、222・223はTK23型式に属するものである。224・225は口径12.0cm、

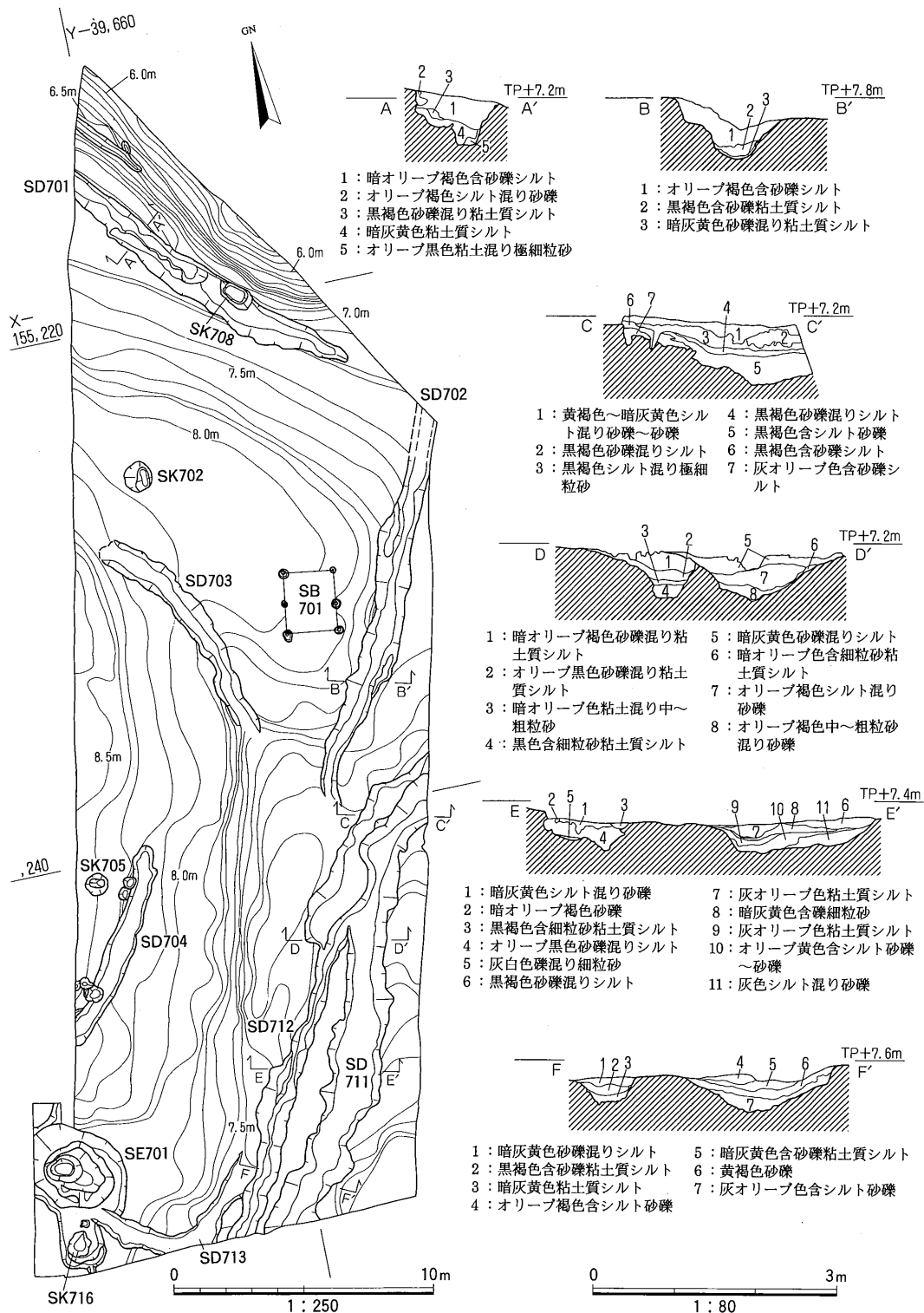


図49 長原7A・Bi層検出遺構

器高6.5cm前後の須恵器無蓋高杯である。ともに口縁部と体部の境界の稜はにぶく、口縁端部を細くおさめており、杯部と脚部を個別に成形したあとと接合している。224の脚部は裾部が大きく開き、上向きの端部には1条の沈線が巡る。225の脚部は直線的に開いており、端部もわずかに肥厚させたあとと丸くおさめている。杯部の外面に224は「|」印状、225には「井」字状のヘラ記号がある。ともにTK209型式に属するものである。226は残存高17.0cmで、口頸部の大半を欠損した須恵器提瓶である。完形の体部は全体に丸く成形されており、全面にカキメ調整が施されている。肩部には環状あるいは鉤手状の把手は見られない。TK209型式に属するものであろう。227・228は、各々口径が16.2cm、20.2cm、器高が23.5～33.7cm前後に復元された須恵器甕である。227の口縁部は頸部から大きく開き、端部を丸く肥厚させており、外端面には1条の細い沈線が巡る。頸部の外面にヘラ記号がある。体部は球形に近く、外面を平行タタキで整形しており、内面には当て具痕が残る。228の口頸部は器高に比べて短く、体部は長胴に近い。口縁部は上方で短く開いており、端部を上下に拡張している。体部の外面を平行タタキで整形したあと、底部近くまでカキメ調整しており、内面には当て具痕が残る。227・228ともに体部と底部の境界には体部を先に成形したあと、続いて底部を成形した工程を示すタタキの重なる部分が見られる。TK47型式に属するものであろう。以上の須恵器の色調は灰色を基調としており、焼成は良い。なお、227・228は接合する破片がSD711から出土しており、本来はSD711に伴うものと思われる。

229は口径10.2cm、器高4.8cm前後の土師器碗である。口縁部は球形に近い体部から一旦内傾したあととわずかに開いており、口縁端部は浅く凹む。口縁部の内外面および体部の内面はヨコナデ調整で、体部の外面はユビオサエで整えている。色調はにぶい橙色で、胎土中に長石・雲母粒を少量含む。230は口径7.8cm、器高8.0cm前後に復元された土師器ミニチュア高杯である。杯部に脚部を接合して成形しており、脚部の外面にはユビナデが残る。色調は明赤褐色で、胎土中に長石・雲母粒を含む。231は口径11.4cm、器高5.7cmの土師器把手付碗で、把手の大半を欠損している。口縁端部は内傾しており、にぶい沈線が巡る。体部の内面に正放射暗文が、外面に横方向のやや粗い暗文が施されている。232は口径15.8cm、器高5.0cm前後の土師器杯Cである。口縁部は体部からわずかに開いており、体部の内面に正放射暗文を施している。底部をのへラケズリで調整している。233は口径18.2cm、器高7.2cm前後の土師器杯Cである。口縁端部は内傾しており、体部の内面に正放射暗文と螺旋状暗文を施している。体部の外面はナデおよびユビオサエで、底部をへラケズリで調整している。234は口径19.0cm前後の土師器高杯で、脚部を欠損している。杯部の内面には細

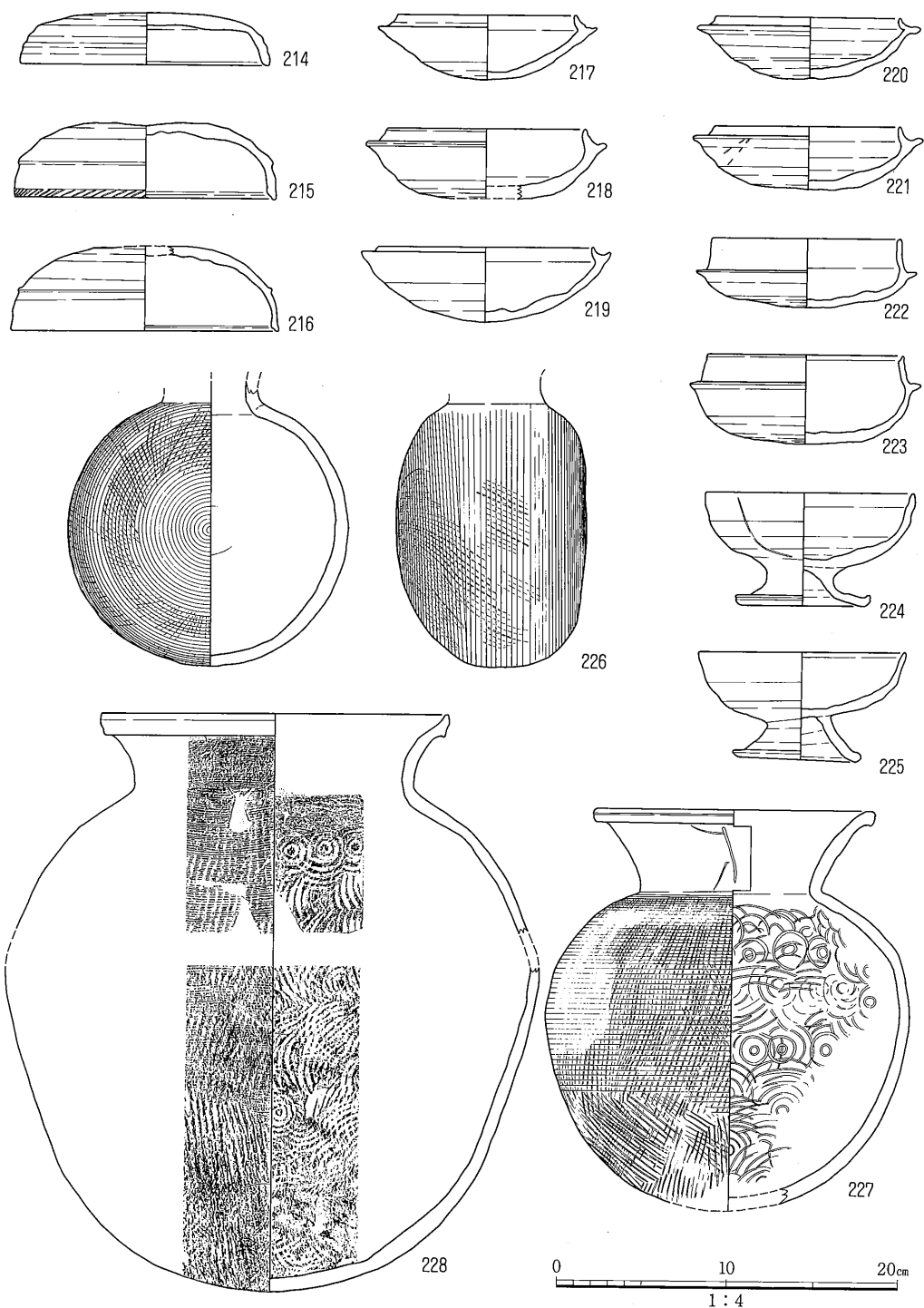


图50 SX701出土遗物

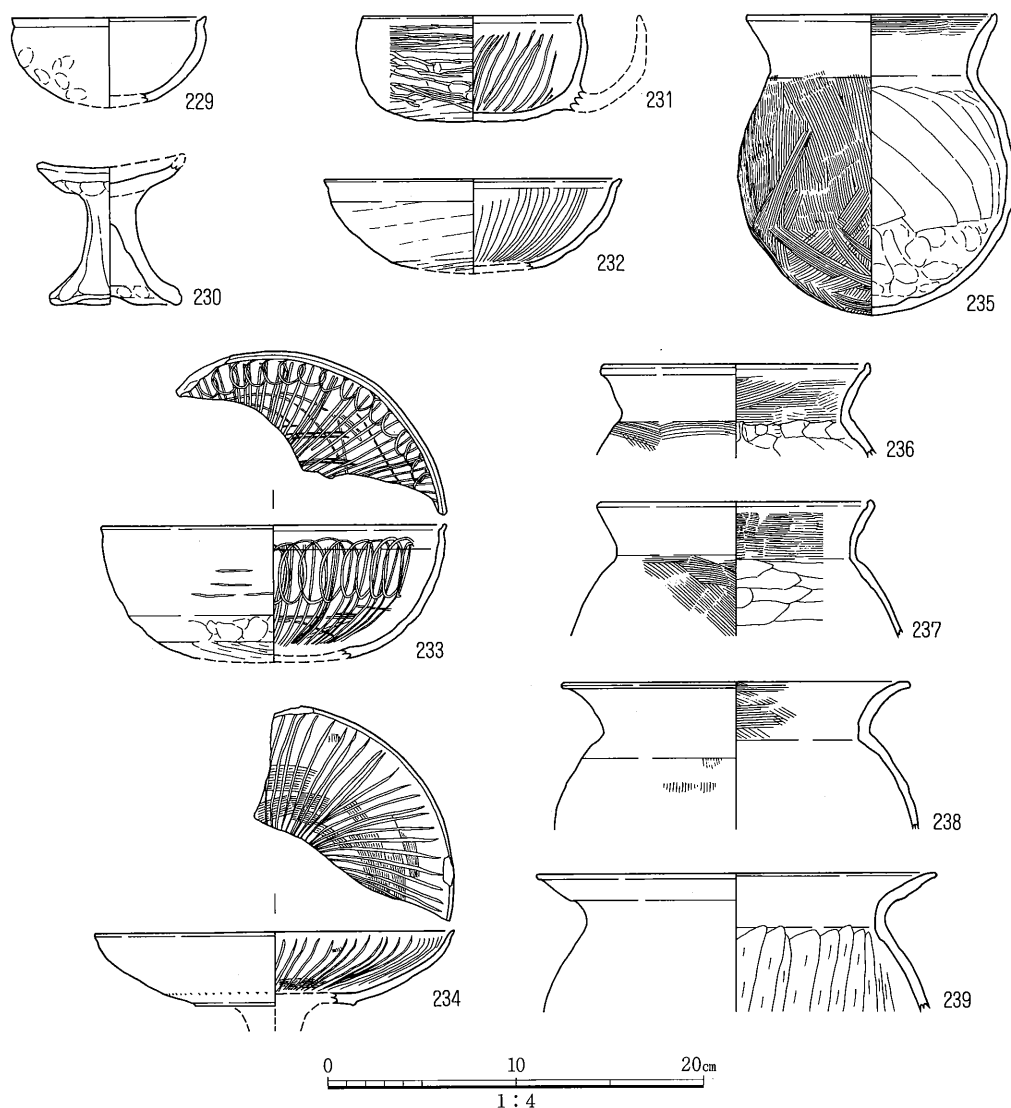


図51 SX701出土遺物

かいハケのあと、正放射暗文を施している。以上の土師器の色調や胎土は229と共通する。235は口径12.9cm、器高16.0cmの土師器甕である。口縁部は球形に近い体部から短く開いており、底部はわずかに尖る。体部の器面調整は外面が主に左上がりのハケで、内面はユビオサエのあと左上がりのヘラケズリを施している。236～239は口径14.0～21.2cmの土師器甕で、いずれも体部の大半を欠損している。236・237は口縁端部を上方に肥厚させており、238・239は丸くおさめている。236・237の口縁部の内面にはヨコハケが残っており、ともに体部の内面をヘラケズリ調整している。238・239の体部内面の調整は前者がナデで、

後者は縦方向のヘラケズリである。236～239の色調はにぶい橙色を基調としており、胎土中に長石・雲母・シャモット粒を含む。以上の土師器のうち、239～234・238は飛鳥Ⅰ、235～237・239は5世紀末から6世紀初頭に属するものであろう。

240～248は木製品である(註1)。240は尖端を欠損しており、中ほど以下が切断されているが、残存長16.5cm、最大幅9.5cm、最大厚1.2cmで、形状から木製履物と判断した。両側面の立上がりは底板から約1.8～2.0cmあり、幅は爪先側に向って狭くなっている。底板には立上がりに接する位置に短径1.0～1.2cm、長径2.8cm前後の一对の孔があり、これから前にかけて著しく磨耗している。底板の裏面も長軸方向に向って磨滅していることから、実用品として使用されたものと思われる。辺材を刳貫いて製作している。241も形状が240に類似することから木製履物と考えられるもので、残存長25.0cm、最大幅6.5cm、爪先側の立上がりはやや内傾しており、高さは2.5cm前後ある。底板は平滑で、最大厚は1.3cmあり、立上がりに接して2.0cm×3.0cm前後の長方形の孔がある。孔は立上がりに沿って垂直に穿たれていることから、ここに下駄の歯のような突起物を挿入していた可能性がある。立上がりは肉厚に作られており、芯に近い材を素材にしている。

242は全長36.7cm、最大幅8.1cmで、前後が山形を呈する槽である。底は平滑であり、側は肉厚で、芯持ち材を刳貫いて作られている。

243は直径26.7cm前後に復元された曲物底板で、最大厚は0.6cmある。表裏面に刃物による無数の切り傷があるほか、片面の中央部と側面が磨耗していることから、まな板などに転用されたものと思われる。

244は残存長35.4cm、最大幅5.2cm、最大厚2.8cmの建築部材で、一端を幅約0.7cm切込んで杢としている。245は全長49.1cm、最大幅3.8cm、最大厚1.6cmの建築部材と思われるものである。246は残存長52.8cm、最大幅6.1cmで、中央に1.9cm×7.2cmの杢孔がある。両端を欠損しているが、形状からみて扉の可能性はある。247は杢孔のある丸太材の断片で、建築部材であろう。248は残存長29.3cm、最大幅1.4cm、最大厚0.8cmの棒状の木製品である。両端を欠損しており、用途は不明である。以上の木製品の内、樹種が判明しているものは240・241(コウヤマキ)、242(ヒノキ)である。以上のほかにもSX701内からは加工木をはじめ、落葉広葉樹を主とする流木や燃え木などが出土しているが、これらを含めて今回報告した木製品は、調査地の南西に想定される6世紀末から7世紀中葉に営まれた集落に係るものといえる。ところで、履物とした2点の木製品については、240に形状や大きさが酷似した資料が前期難波宮に関連する遺構から出土している(NW97-3次調査)。これら3

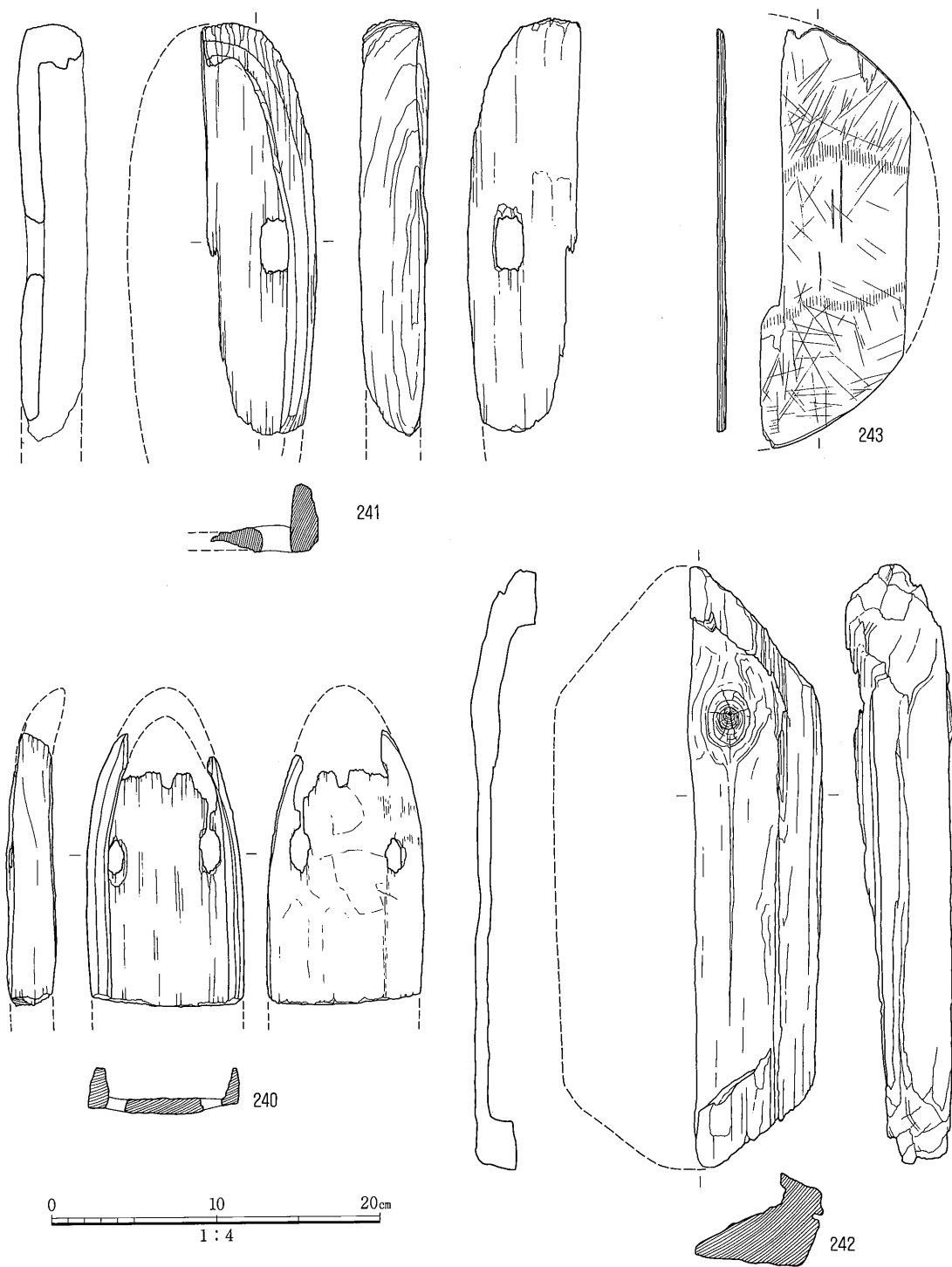


图52 SX701出土木製品

点の木製品は、TK209～TK217型式の須恵器が相伴していることから、7世紀の第1四半世紀頃に属する可能性が高い。これまでに、飛鳥時代以前にさかのぼる木製履物とされるものは北部九州・関東・北陸地域で弥生時代と古墳時代に属するものが確認されているが、近畿地方では平城京の井戸出土の奈良時代の沓とされたもの[田中一郎1955]以外には類例がない。

また、福岡市に所在する弥生時代後期後半の雀居遺跡[下村智編1995・松村道博1995]や古墳時代前期の那珂君休遺跡[小畑弘己編1989]の木製履物を例にとると、爪先の形状が異なるほか、底板の裏面に前者は「隆起帯」と呼ばれる滑り留め、後者には左側に2箇所、右側に3箇所、計5箇所の突起が削り出されている。さらに、紐孔の位置は立上がりりの下端に穿っており、隆起帯や突起を持たず平坦な底板に孔を穿つ長原遺跡や前期難波宮の資料とは大きく異なっている。

一方、愛知県海部郡蟹江町の「ナンバ」と称される民具をはじめ、長野県更埴市に伝わる「履物」状民具などの関連資料から福岡市例を検討された比佐陽一郎氏は、「用途的には田下駄の中でもナンバの一種であるが、埋没を防ぐ機能が薄く足の保護を重視していること

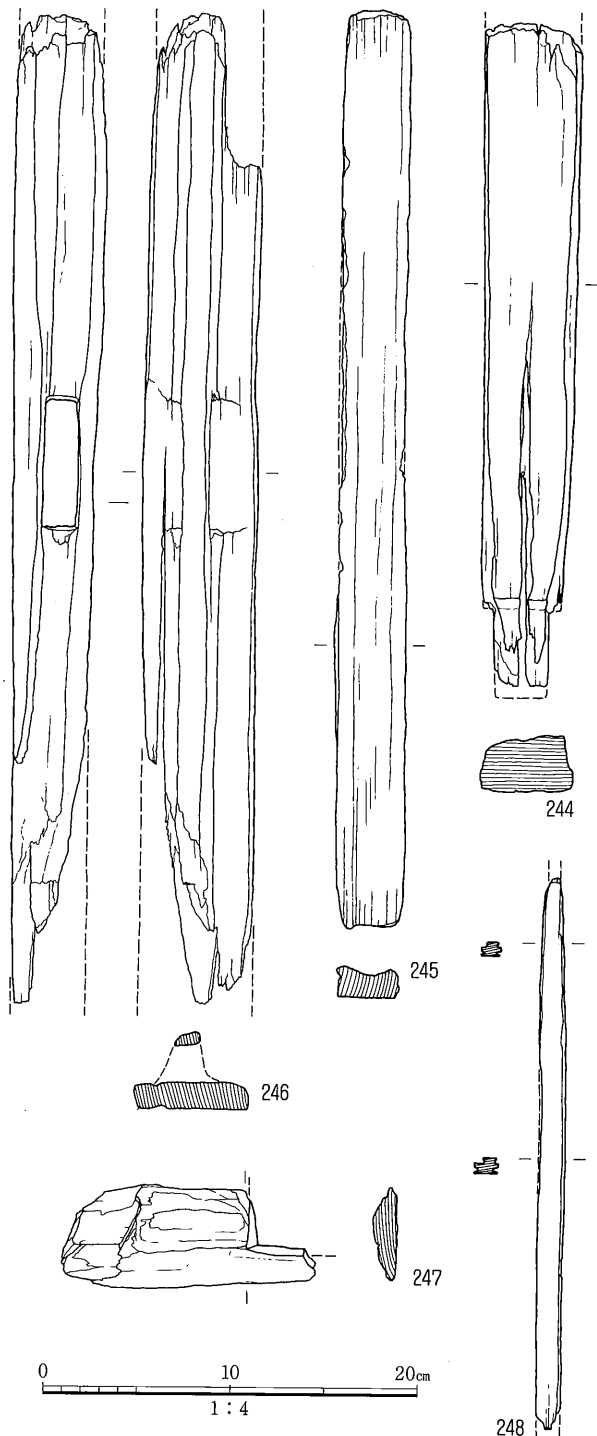


図53 SX701出土木製品

から、葦や葭を刈るのにその切り株で足を痛めるのを防ぐ目的で装着されたとするのが最も自然と思われる」と指摘されている[比佐陽一郎1997]。ここでは、底板の裏面の形状が異なることやここが著しく磨耗していることなどを考慮して、農具以外の祭祀などに係る履物としての可能性も指摘しておきたい。

b. 溝

SD701(図54、図版31) 調査地の北部に位置する幅約1.0～1.5m、深さ0.3～0.8m、断面V字状の溝である。本溝は「馬池谷」の肩部に沿って、東西方向に長さ約13mに渡って掘込まれており、東に位置する南北方向の溝SD702とは本来一連の溝であったと考えられる。両溝は「馬池谷」に西南側から張出した微高地を囲むように位置することから、微高地の西南側に存在したと考えられる古墳時代の集落の区画溝である可能性が高い。溝内には暗オリーブ褐色含砂礫シルト、黒褐色砂礫混り粘土質シルトなどからなる水成層が堆積しており、ON46段階～TK23型式の須恵器や土師器が出土した。また、溝の中ほどでは、溝の埋没後に掘込まれた土壌SK708が検出された。

249・250は須恵器短頸壺で、ともに体部の中ほど以下を欠損している。口径は各々8.8cm、9.2cmである。249の口縁部は体部から直立しており、250は短く開く。251は口縁部を欠損しているが、体部が球形に近い須恵器短頸壺と思われる。底部を静止ヘラケズリで調整している。252は口径6.0cm、器高5.0cmの須恵器短頸壺である。口縁部は体部から直立しており、頸部に1条の沈線が巡る。底部はヘラケズリ調整しており、「+」印状のヘラ記号がある。253・254は口径12.6cm、器高4.2cm前後の須恵器杯蓋で、254は天井部の大半を欠損している。ともに口縁部と天井部の境界の稜は明瞭であり、天井部の2/3近くをヘラケズリ調整している。253の口縁部はわずかに開いており、253・254ともに口縁端部の内側は凹面をなす。255は口径12.2cm、器高9.6cmの須恵器有蓋高杯である。立上がりはわずかに内傾しており、口縁端部はやや肥厚して内側に凹面をなす。脚部は裾に向って直線的に開いており、3方にスカシ孔を穿つ。256も脚部の大半を欠損した須恵器有蓋高杯で、口径は11.2cmである。立上がりはわずかに内傾しており、口縁端部は内側に凹面をなす。257は底径9.0cm前後の須恵器高杯の脚部で、3方にスカシ孔を穿つ。258は口径15.9cmの須恵器無蓋高杯である。口縁部下端の2条の突帯の下に1条の櫛描波状文が巡る。259は把手を欠損した須恵器把手付碗で、口径11.2cm、器高6.6cmである。口縁端部はわずかに凹面をなし、口縁部に1条、体部の上端には2条のにおい突帯下に1条の櫛描波状文が巡る。底部は静止ヘラケズリで調整している。以上の須恵器の色調は灰色を基調とし、焼成も良好である。

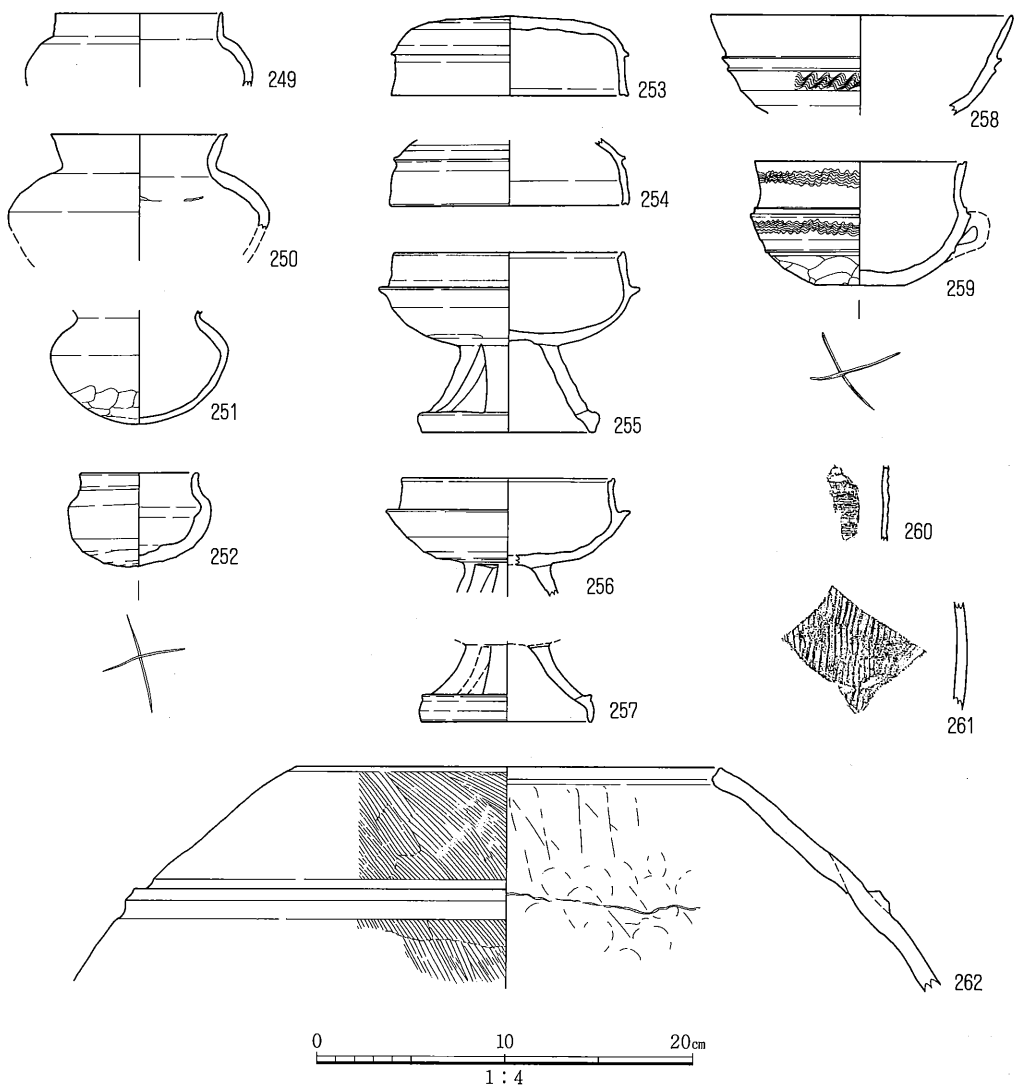


図54 SD701出土遺物

249～254はTK208型式、255～258はTK23型式、259はON46段階に属するものである。

260は器表面を平行タタキで整形した製塩土器の破片である。色調はにぶい橙色で、胎土中に微細な長石・雲母粒を含む。

261は器表面を鳥足文タタキで整形した韓式系土器である。内面の調整はナデで、器壁の厚みやカーブなどから壺の破片の可能性がある。色調は灰黄色で、軟質に焼成されており、胎土中に長石・石英・雲母粒を含む。

262は口径22.8cmに復元された移動式竈である。天井部はドーム状に丸くなっており、

内面にはススが付着している。器体の外面を左上がりの断続的な粗いハケで、内面はユビオサエおよびナデ調整しており、外面には断面台形の突帯が巡る。色調は橙色で、胎土中に長石・石英・雲母粒を含む。同様な移動式竈は寝屋川市長保寺遺跡[寝屋川市教育委員会1993]、堺市浅香山遺跡[堺市教育委員会1997]などで5世紀後半から末に属するものが出土しており、長保寺遺跡出土例とは形状や色調・胎土などが酷似している。

SD702(図55、図版31・43) 調査地の北東部に位置する断面V字形の溝で、幅1m前後、深さ0.8m前後である。本溝は既述の通りSD701と一連の溝と考えられるもので、「馬池谷」を東に臨む微高地に沿って南北約15mに渡って検出された。溝内には黄褐色含砂礫シルト、黒褐色砂礫混り粘土質シルト、オリーブ黒色砂礫混りシルトなどからなる水成層が堆積しており、溝の南部では微高地側から投棄された状態で初期須恵器の大甕が出土したほか、SB701の東側に当る溝内でも須恵器や土師器に混って滑石製の勾玉1点、有孔円板2点、白玉15点などが採集された。なお、SD702の南端は徐々に細くなって4・5B区以南に拡がる窪地内で消えており、窪地内を南から北に向って流れるSD712とは一連の溝である可能性がある。

263～266は口径14.4～19.0cmの土師器甕で、いずれも体部の上半以下を欠損している。263・265・266の口縁部は体部から外上方に開いており、265の口縁端部は面をなして内傾している。口縁部が緩やかに外反する264の口縁端部は丸くおさめる。263・265の体部の内外面は左上がりのハケあるいはヨコハケが施されており、264は体部の外面を左上がりのハケで、内面はナデで調整している。263～266の色調は、灰白色である265を除き、にぶい橙色を基調としており、胎土中に長石・シャモット・雲母粒を含むものが多い。

267は底径11.0cm前後の平底の韓式系土器で、底部近くに左上がりの粗いハケを施している。色調や胎土は、上述した土師器と差異はない。

268は口径10.6cmの土師器直口壺である。口縁部は体部から一旦直立したあと、端部近くでわずかに開く。体部の器面調整は外面が左上がりのハケ、内面は横方向のヘラケズリである。色調や胎土は265と共通する。269は底径10.2cmの土師器高杯の脚部である。柱状部外面を縦方向にナデており、裾部内面はヨコハケのあと端部にかけてユビオサエを施している。色調や胎土は268に酷似している。

270は口径13.0cm、器高4.2cmの須恵器杯蓋である。口縁部と天井部の境界の稜は明瞭で、口縁部はわずかに開く。天井部の1/3以上をヘラケズリ調整している。271・272は口径が10.8cm前後の須恵器杯身である。ともに立上がりはわずかに内傾しており、口縁端部は

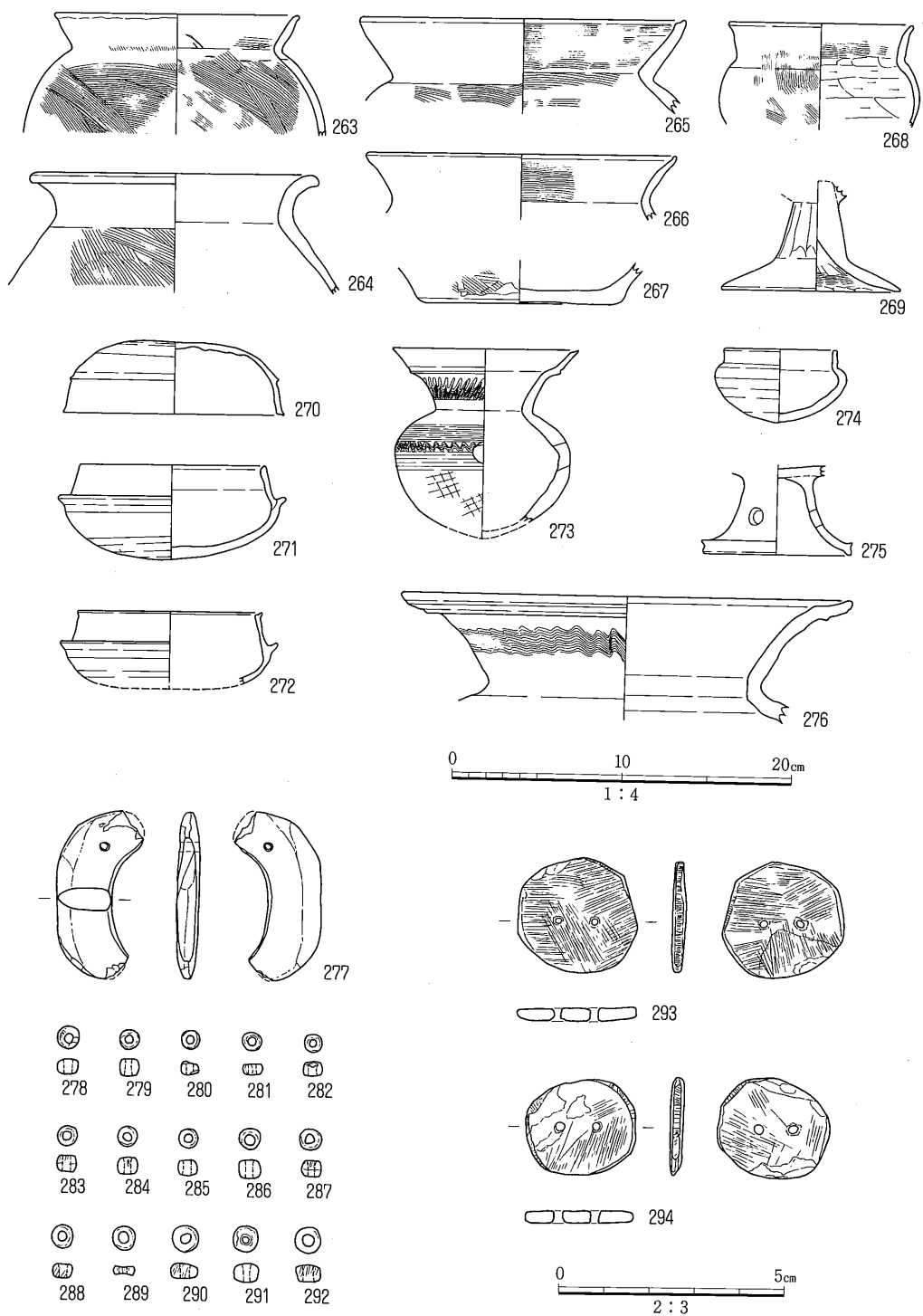


图55 SD702出土遺物

前者はやや肥厚し、後者は内傾して凹面をなす。271は底部を1/3、272は受け部の近くまでヘラケズリ調整している。273は口径、器高ともに11cm前後に復元された須恵器甕である。口縁部は頸部から一旦外反したあと、外上方に開く。頸部および球形に近い体部の中ほどに1条の櫛描波状文が巡る。体部の中ほどにはカキメ調整のあと、外面から内面に向って円孔を穿つ。274は口径6.6cm、器高4.3cmの須恵器短頸壺である。口縁部は体部から直立しており、体部の外面を頸部近くまでヘラケズリ調整している。275は底径8.5cmの須恵器高杯の脚部である。裾端部をわずかに拡張しており、3方に円形スカシ孔を穿つ。276は口径26cm前後の須恵器甕で、口縁部は頸部から水平に開く。口縁部の下端近くに1条の突帯、頸部の中ほどには1帯の櫛描波状文が巡る。以上の須恵器の色調は灰色を基調としており、焼成も良い。TK208型式に属するものである。土師器や韓式系土器、滑石製品についても須恵器と同時期の所産と考えられる。

277～294は暗緑色を呈する滑石製品で、5B区およびその付近で出土したものである。277は最大長3.7cm、最大厚0.5cmの勾玉で、全体にやや扁平である。頭部の紐孔は片面から穿孔されている。278～292は直径0.4～0.6cm、厚さ0.2～0.4cmの白玉である。穿孔はすべて片面から行っている。293は長径2.7cm、短径2.5cm、厚さ0.3cmの、294は長径2.4cm、短径2.1cm、厚さ0.3cmの有孔円板である。ともに表裏面および側面に粗い削痕が残る。2孔一対の孔は片面あるいは両面から穿孔している。

SD703 調査地の中央部の微高地の北側に位置する幅0.9～1.5m、深さ0.4m前後で、北西から東の窪地に向かって流れる溝である。溝内には下から暗灰黄色粘土質シルトおよび灰オリーブ色含砂礫シルトなどの水成層が堆積しており、古墳時代後期から飛鳥時代にかけての須恵器や土師器の細片が出土した。底面にはヒトの足跡や鋤先の窪みなどがあり、長原7A層準の用排水路の可能性が高い溝である。

SD704 調査地の西南部に位置する幅1m前後、深さ0.3mの溝である。埋土は黄褐色シルト(地山)ブロックを多く含む褐色含砂礫シルトであり、古墳時代後期および飛鳥時代の須恵器(蓋杯・壺)や土師器(杯・甕・把手)の細片が出土した。遺構の北端が途切れていることや埋土の状況から土壌の可能性もある。

SD711(図56～61、図版32～37) 調査地の南東部を南北に延びる幅1.4～1.8m、深さ0.6m前後の溝である。溝内にはオリーブ褐色含シルト砂礫、黄褐色砂礫、灰オリーブ色含シルト砂礫などからなる水成層が堆積しており、古墳時代から飛鳥時代にかけての多量の須恵器や土師器をはじめ、加工木や流木などが出土した。本溝の北端部は西側を平行するSD712

と窪地の中ほどで交わっており、これより先は1本の溝になっている。溝の新旧関係については、両溝が交わる5B区より先において、SD711がSD712の溝底を掘込んで東にカーブしながら流れていることが確認されたことから、SD711はSD712より後出する溝であると判断した。また、今回報告した土器類のうち、古墳時代に属するものは溝の下層(長原7Bi層準)から一括に近い状態で取り上げたもので、飛鳥時代に属するものは溝内がほぼ埋没した以後の窪みに堆積した溝の上層(長原7Ai・ii層準)から採集したものである。したがって、SX701と本溝の上層で取り上げた土器類は接合するものがあつた。以下、出土遺物を上・下層に分けて、上層出土の須恵器・製塩土器・鞆羽口から順に記述する。

須恵器では蓋杯・壺蓋・有蓋鉢蓋・甕・高杯・椀・子持壺・台付長頸壺・甕などが出土した。295は口径9.0cmで、返りの付いた壺蓋である。つまみを欠損しており、天井部には櫛描刺突文が巡る。296～298は口径12.5～13.6cmの杯蓋で、口縁部と天井部の境界は稜をなさない。天井部の1/3前後をヘラケズリ調整しており、298の天井部には「|」印状のヘラ記号がある。322・323は口径10.2cm前後の杯身である。口縁端部は内傾しており、322の立上がりにはヘラによる粗いキザミがある。ともに底部の1/3をヘラケズリ調整している。319は口径12.8cm、器高4.0cm前後の杯身である。立上がりはやや内傾しており、口縁端部を丸くおさめる。底部の1/3弱をヘラケズリ調整している。312は口径15.0cm、器高4.9cmの蓋である。口縁部と天井部の境界にはにぶい稜があり、口縁端部は内傾して浅く凹む。天井部の1/3をヘラケズリ調整している。325・326は口頸部を欠損した甕である。体部は325がやや扁平で、326は球形に近い。ともに体部の上半近くまでヘラケズリ調整しており、中ほどに円孔を穿っている。330は裾部径15.0cm前後の高杯の脚部で、裾部は柱状部から緩やかに広がる。柱状部の中ほどに2条、裾部に1条の凹線が巡っており、3方に2段の長方形のスカシ孔を穿っている。327は口径12.4cmで、体部の下半を欠損した椀である。2条の突帯間に1帯の櫛描波状文が巡る。331は子持壺の一部と思われるもので、体部の上半に櫛描刺突文が巡る。なお、器体の内面が頸部で閉塞されているため、底部に焼成時の破損を防ぐための小孔を穿っている。332は台付長頸壺の体部である。扁平な体部の中ほどを1条と2条一対の凹線で区画して、櫛描刺突文を巡らせており、脚部には3方に長方形スカシ孔を穿っている。336は口径15.0cm前後の甕で、口頸部は体部から直線的に開き、口縁端部を上下に拡張している。体部から頸部の外面をカキメ調整しており、体部の内面には当て具痕が残る。340は口径33.2cmの甕である。口縁部は体部から一旦直立したあと緩やかに開く。口縁端部を上下に拡張しており、頸部の外面にはカキメ調整の

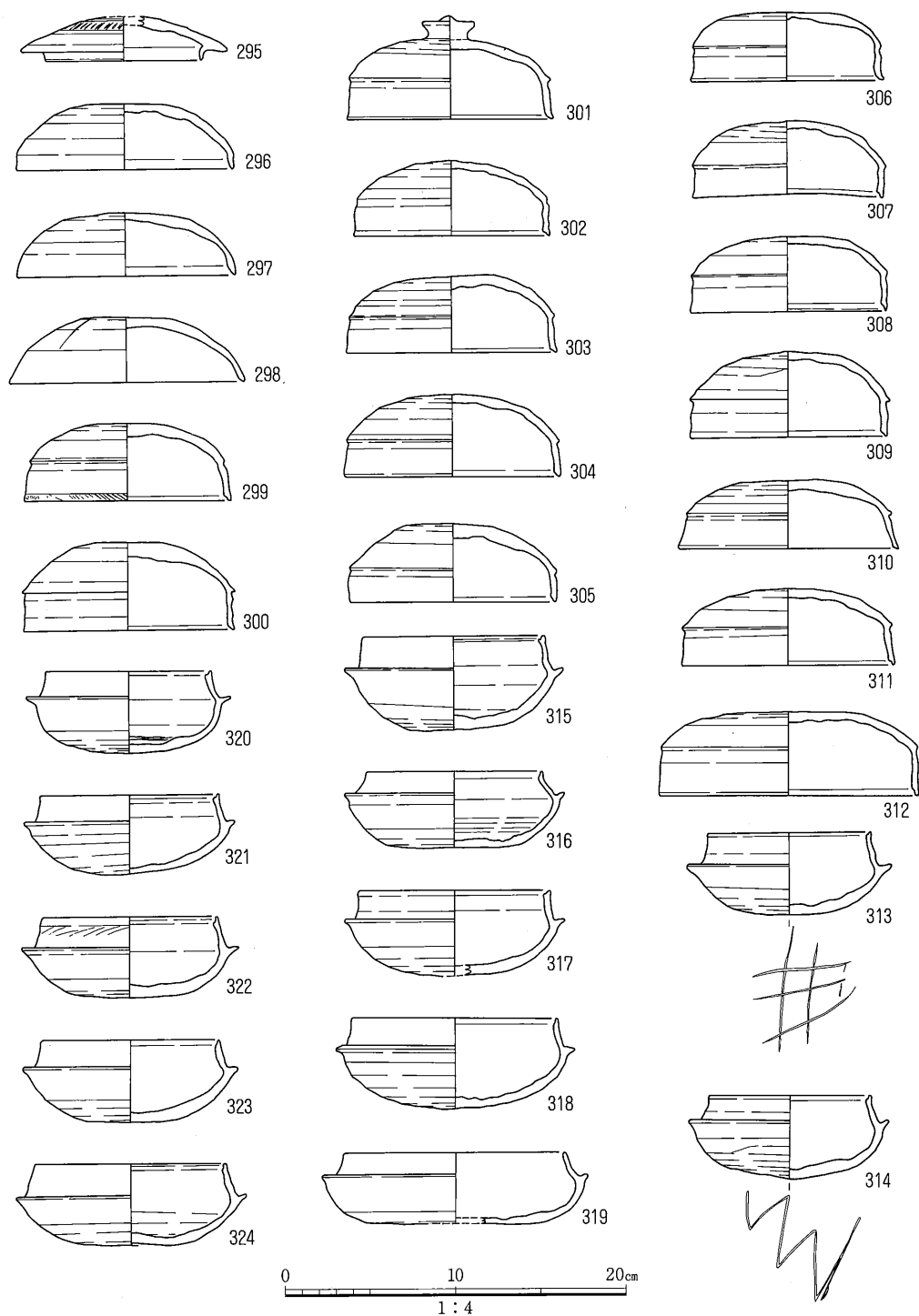


图56 SD711出土遺物

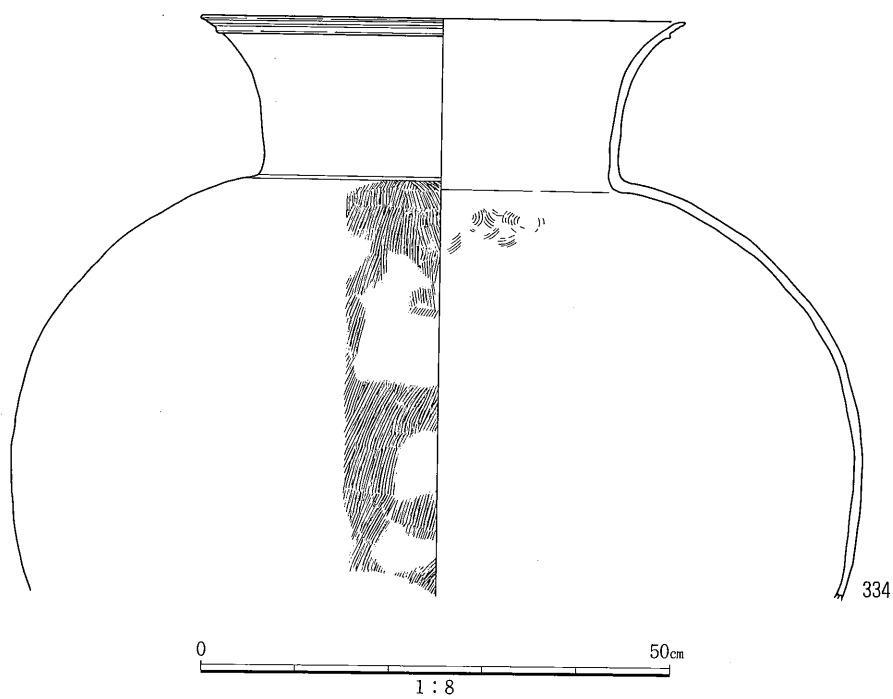
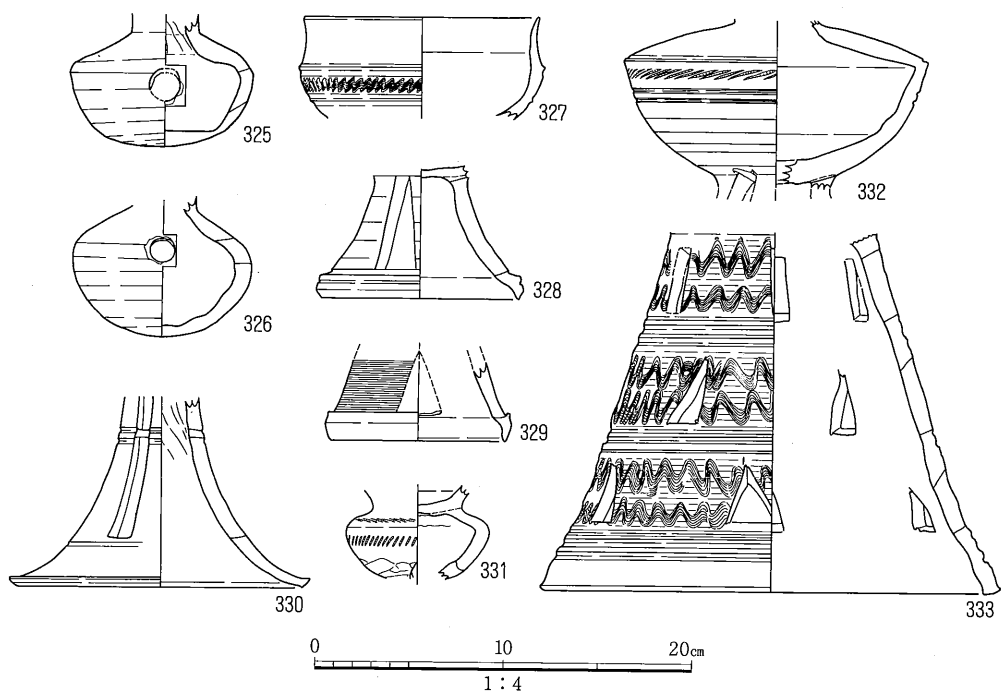


图57 SD702·711出土遺物
SD702(334)、SD711(325~333)

あと、2条1単位の凹線が3帯と、2段の粗い櫛描刺突文が巡る。以上の須恵器の色調は灰色を基調としており、焼成は良好なものが多い。295～298・325・326・330・332はTK209型式、322・323はTK47型式、312・319・336・340はTK10型式、327・331はTK23型式に属するものであろう。

346は4A区から出土した口径4.8cm、残存高6.0cm前後の製塩土器である。体部の外面を粗い平行タタキで、内面をユビオサエで整形しており、底部の外面はタタキのあとナデで整えている。色調は灰白色で、胎土中に長石・石英粒を含む。

350は轆の羽口の破片で、中央の孔の径は約2.5cmある。色調はにぶい橙色で、胎土中に長石・石英・雲母粒を含む。346・350ともに、5世紀後半から末に属するものであろう。

次に下層出土の須恵器・製塩土器について述べる。

須恵器では蓋杯・有蓋高杯蓋・高杯・器台・甕・短頸壺などが出土した。299・300は各々口径が12cm、12.2cmで、器高が4.5cm、5.1cmの杯蓋である。299の口縁部と天井部の境界の稜はややあまく、口縁部の外端面にはキザミメがある。299・300ともに口縁端部は内傾しており、天井部は全体に丸みをおびている。301は中央が突出した逆台形のつまみをもつ有蓋高杯の蓋であらう。口径12.0cm、器高6.0cmで、口縁部と天井部の境界の稜はややあまい。302～309は口径10.9～12.6cm、器高4.0～5.0cmの杯蓋である。302～304・307～309の口縁部と天井部の境界の稜はあまく、天井部も全体に丸い。口縁端部は短く開く306を除き、内傾した凹面をなす。天井部の約1/3をヘラケズリ調整するものが多い。310・311は各々口径12.8cm、12.2cm、器高4.0cm、4.5cmの杯蓋で、ともに口縁部と天井部の稜は明瞭である。全体に平坦な天井部の2/3以上をヘラケズリ調整しており、311には直線状のヘラ記号がある。313～318・320・321・324は口径9.5～12.0cm、器高4.4～5.5cmの杯身である。立上がりは受け部から内傾しており、端部は段をなすものが多い。底部のヘラケズリ調整の範囲も、受け部近くまで及ぶ318を除き、1/3前後である。313・314の底部にはヘラ記号がある。328・329は各々裾部径10.4cm、9.2cmの高杯の脚部である。328の裾部にはナデ調整したあと3方に台形の、329にはカキメ調整を施したあと4方に三角形のスカシ孔を穿つ。333は底径23.8cmで、杯部を欠損した高杯形器台の脚部である。裾部に向って直線的に開いており、柱状部を2条1単位のにぶい突帯で3区画して、この中に2帯1単位の櫛描波状文を施したあと、上から各5方に長方形および三角形のスカシ孔を穿っている。334は口径51.8cmの甕である。実測図上は体部の下半近くまでしか図化できなかったが、ほかに同一個体とみられる接合関係が不明な底部の破片が数点ある。口縁部は体部

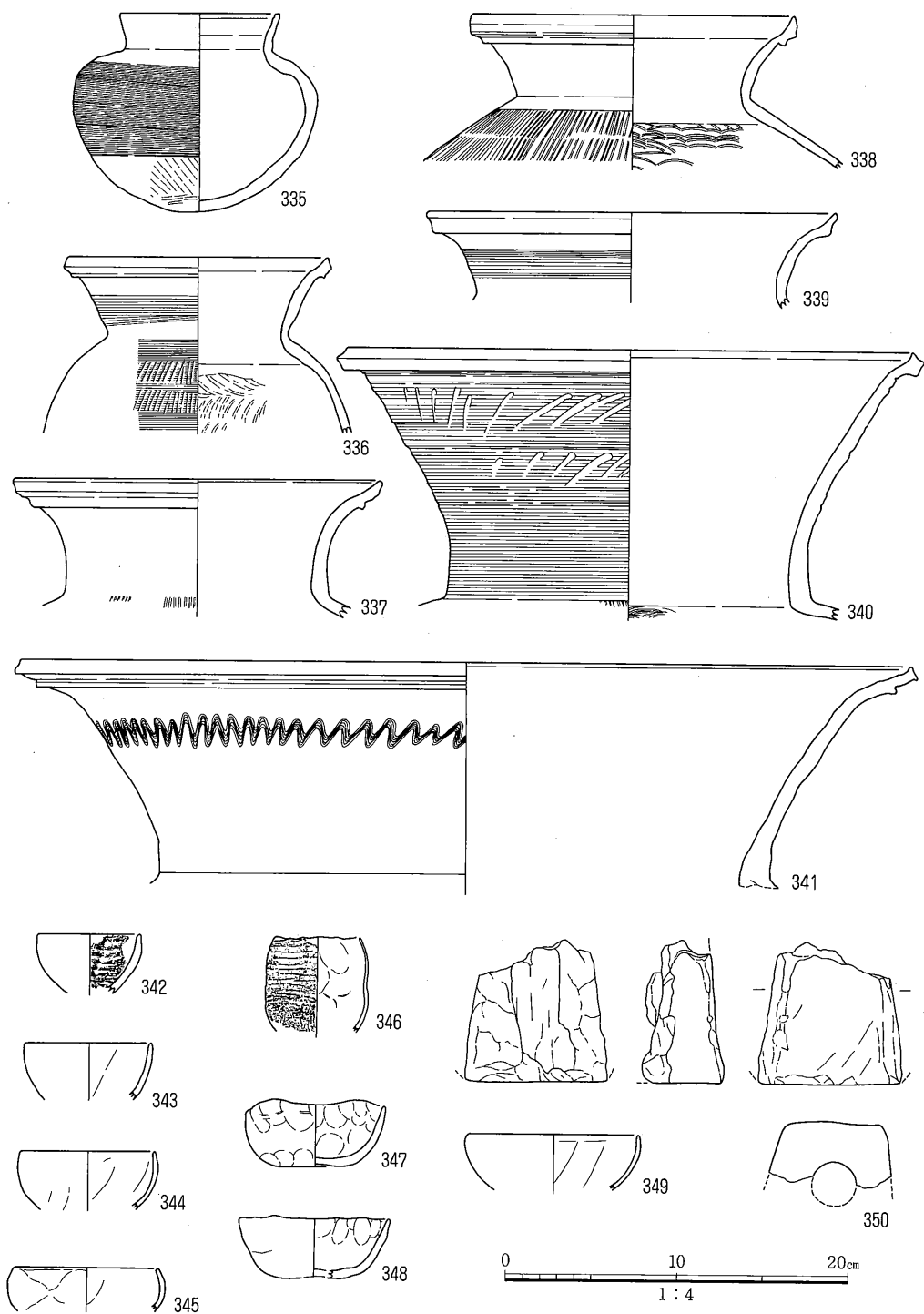


图58 SD711出土遗物

から一旦直立したあと、上方で大きく開いており、口縁端部の下方には1条の突帯が巡る。球形に近い体部の外面は細筋の平行タタキで整形しており、内面は当て具痕を横方向のていねいなナデで消している。335は口径9.1cm、器高11.6cmの短頸壺である。口頸部は球形に近い体部から一旦直立したあと、わずかに開いており、口縁端部は丸くおさめている。体部の外面は平行タタキのあと、カキメ調整を施しており、底部にはタタキメが残る。337～339は口径18.8～23.6cmの甕である。337の口縁部は体部から直立したあと、緩やかに開いており、口縁端部の下方には1条の突帯が巡る。338は口縁端部を上方に拡張しており、端部の下方には1条の突帯が巡る。339も口縁端部に粘土紐を足して上方に拡張しており、頸部の外面にはカキメ調整を施している。341は口径52.4cmの甕で、口縁部は直線的に外上方に伸びたあと、短く開く。口縁端部を上下にわずかに拡張しており、端部の下方には1条の鋭い突帯と櫛描波状文が巡る。以上の須恵器の色調は灰～暗オリーブ灰色を基調としており、焼成も良好である。299～309・313～317・320・321・324はTK47型式、310・311・318・328・329・333・337～339はTK23型式、334・341はTK208型式に属するものである。ところで、甕334の破片はSD702からもまとまって出土していたが、整理の過程では破片数の多いSD711の出土遺物として扱った。しかし、報告書の執筆過程でSD702から出土した須恵器はTK208型式に属するものが過半数を占めることが判明したことから、ここでは甕334をSD702の出土遺物に含めることにしたい。

342～345・347～349は口径6.0～10.0cm前後、器高3.5～4.0cm前後の製塩土器である。342～344は底の丸い碗形を呈しており、347・348の口縁部は未調整で、底部は平底である。口径の大きな349の器体は碗状で、丸底と思われる。342の体部の内面は二枚貝の腹縁で調整しており、343～345・349も内面に調整時の工具痕が残る。347・348は器体の内外面をユビオサエで整えており、口縁部はやや波打っている。色調は暗赤灰～にぶい橙色で、いずれも二次的な火を受けている。胎土中には微細な長石粒を含む。これらの製塩土器は長原遺跡でこれまでに確認されているコップ形のものと形態が異なるが、共伴した須恵器の型式からみて、5世紀末から6世紀初頭に属するものと思われる。

続いて上層出土の土師器・韓式系土器について述べる。土師器では杯・鉢・甕・甗などが出土した。351～354は口径11.5～16.9cm、器高3.5～6.0cmの杯Cである。体部の器面調整は351・354はユビオサエのあとヨコナデ、352・353は横方向のヘラケズリのあとヨコナデである。353の内面には正放射暗文が、354の内面にはヘラ記号状の線刻が施されている。これらの杯の色調はにぶい橙～黄橙色を基調としており、胎土中に長石・雲母粒を含む。

360は口径14.8cm、器高11.4cmの鉢である。口縁部は球形に近い体部からわずかに開いており、口縁端部の内面には1条のにぶい沈線が巡る。底部は平底で、裏面に木の葉の圧痕がある。色調・胎土は353と共通する。369・370・372は口径10.3～13.6cmの甕で、369・372の口縁部は緩やかに外反しており、端部を丸くおさめている。370は外上方に開いた口縁部の端部をわずかにつまみ上げている。これらは体部の外面に縦または左上がりのハケを施しており、内面はハケのあとヘラケズリ調整している。379は口径14.0cm前後の甕である。口縁部は緩やかに外湾しており、体部の外面はタテハケで、内面はヨコハケのあと左上がりの断続的なナデをまばらに施している。これらの甕の色調はにぶい黄橙～灰黄色であり、胎土は上述した他の土師器と共通する。383は口径26.7cmの甗で、体部の中ほど以下を欠損している。口縁部は体部から直立しており、端部は内傾して凹面をなす。扁平な上向きの把手を体部の中ほどに挿入している。体部の外面はユビオサエおよびナデで整えており、内面はヨコハケのあと縦方向にヘラケズリ調整している。色調は浅い黄橙色で、胎土中に長石粒を多く含む。355は底径14.3cmの韓式系土器と思われるもので、底部の外面および内面をヘラケズリ調整している。器形については明らかでない。色調は黄灰色で、胎土は351と共通する。

次に下層出土の土師器・韓式系土器について述べる。土師器では高杯・碗・鉢・甕・把手付鍋・甗などが出土した。356は口径9.0cm、器高7.8cmのミニチュア高杯である。脚部上に粘土紐を継ぎ足して杯部を成形しており、杯部の内外面をナデ、脚部の内外面はユビオサエで整えている。色調はにぶい橙色で、胎土中に長石・雲母・黒色粒を含む。357も裾部径10.6cmの高杯の脚部で、裾部の内面には布目圧痕が残る。色調はにぶい橙色で、胎土中には長石・チャートを含む。358は口径10.2cm、器高6.4cmで、口縁部に歪みのある碗である。体部の外面はユビオサエで、内面はハケのあと、見込みに暗文を施している。色調・胎土は357と共通する。359は口径16.1cm、器高8.3cm前後の鉢である。口縁部は張りのある体部から短く開いており、端部を丸くおさめる。底部を横方向にナデ調整している。色調・胎土は357と共通する。362～364は口径18.4～22.4cmの甕である。362の口縁部は端部の近くでわずかに内湾しながら開いており、363・364の口縁部は緩やかに外湾している。362・364の体部は球形に近い。362～364の体部の外面は縦および左上がりのハケで、内面は横方向のハケのあと、横または左上がりのナデ調整を施している。色調はにぶい黄橙～褐色で、胎土中には長石・シャモット・雲母粒を含む。365～368は口径10.9～15.7cmの甕である。366・368は完形で、前者の口縁部は球形に近い体部から外上方に開いており、後

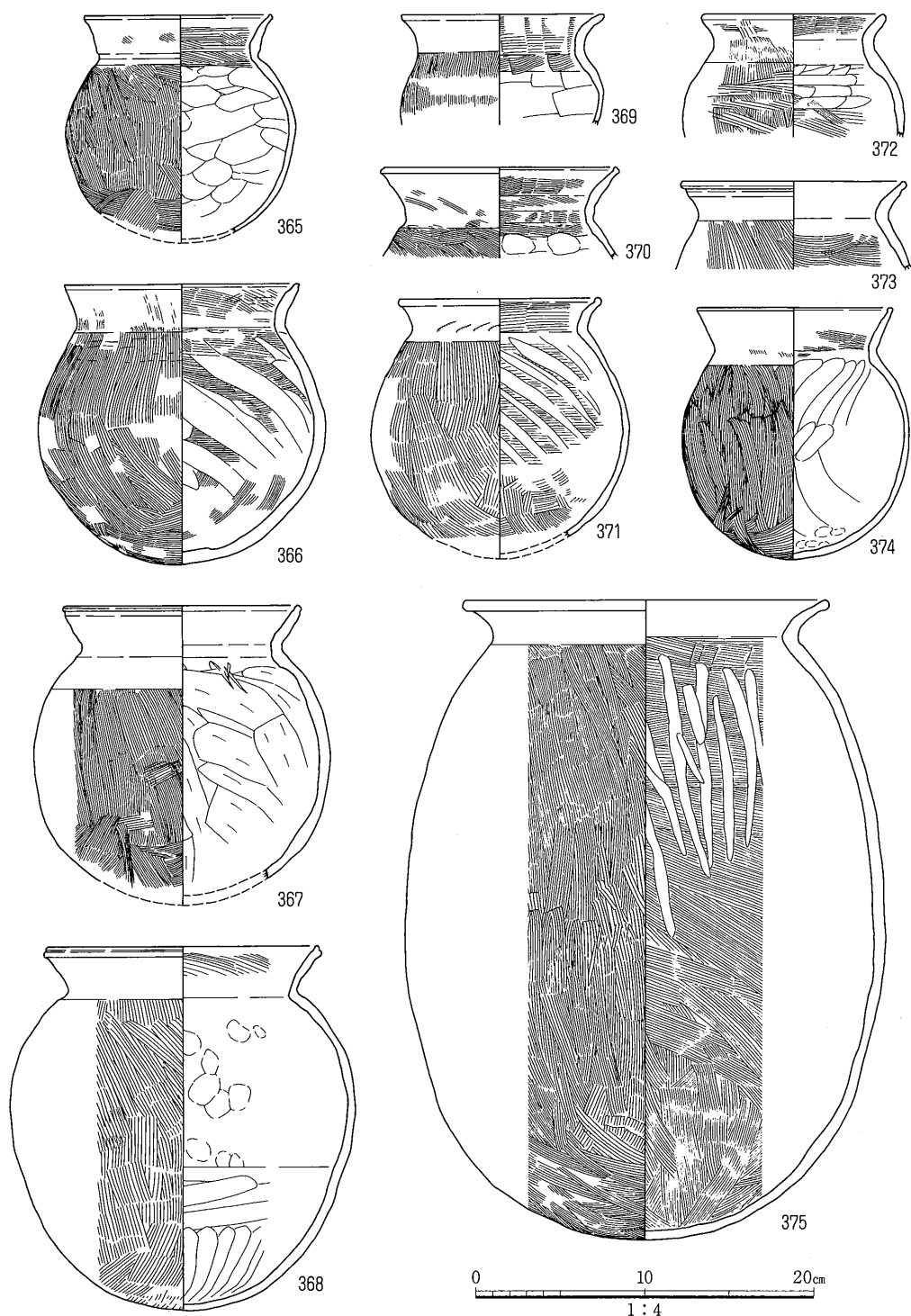


图60 SD711出土遗物

者の口縁部はやや長手の体部から短く外反している。ともに口縁端部の外端面ににぶい沈線が巡る。365・367の口縁部も球形の体部から外上方に開いており、前者は口縁端部を上方に肥厚させ、後者は端部の内外面が凹面をなす。これらの甕の体部の外面は、縦および左上がりのハケを施しており、内面はハケのあと左上がりのヘラケズリまたはユビナデで調整している。色調・胎土は前述した甕と共通する。371・373・374は口径11.3～13.0cmの甕で、完形品である374の器高は15.0cm前後である。371・374は体部が球形で、口縁部が前者は緩やかに外湾しており、後者は直線的に外上方に開く。ともに口縁端部を丸くおさめている。体部の外面は縦方向のハケで、内面は371がヨコハケのあと左上がりのユビナデ、374は左から右上がりのユビナデを施しており、後者の内底面にはユビオサエが残る。373は口縁端部の下端が凹面をなす。これらの甕の色調・胎土は365・366に酷似している。375は口径21.2cm、器高38.0cm前後の長胴甕である。口縁部は長手の体部から大きく開いており、端部を丸くおさめている。体部の内外面とも縦および左上がりのハケを施しているが、内面は上半部に縦方向のユビナデ調整をまばらに加えている。色調・胎土は368に近い。376～378・380は12.6～14.0cm前後の甕で、口縁部は短く外反する377を除き、外上方へ開く。377の口縁端面には沈線が巡り、378・380は口縁端部を上方に肥厚させている。器面調整や色調・胎土は前述した同形態の甕と差異はない。381は口径25.5cm、器高18.4cmの把手付鍋である。口縁部は丸底で球形に近い体部から大きく開いており、端部を上方に肥厚させている。体部の最大径は中ほど近くにあり、ここに扁平な上向きの把手を挿入している。器体の内外面は左上がりのハケで整形しているが、口頸部の内外面はハケのあとヨコナデ調整している。色調は橙色で、胎土中に長石・雲母粒を含む。382・384は各々口径25.0cm、27.3cmの甕である。口縁端部は382が内に肥厚しており、384は単に丸くおさめている。ともに器体の内外面にハケを施したあと、ユビオサエやナデで整えている。382の色調はにぶい黄橙色で、胎土は381と共通する。384の色調はにぶい橙色で、胎土は長石・雲母・角閃石粒を含む生駒西麓産のものである。

361は器体の外面を平行タタキで整形した韓式系土器で、器形は明らかでない。器体の内面は縦方向のナデで、底部をヘラケズリ状に横方向に強くナデている。色調はにぶい橙色で、胎土中に長石・石英・雲母粒を含む。

上述した土師器のうち、上層から出土した351～354・356～360・364は飛鳥Ⅰ、362・363や韓式系土器、製塩土器はTK47型式の須恵器に伴うものと思われる。

SD712(図62、原色図版1、図版10・41) 調査地の南東から北東に向って延びる幅0.6～

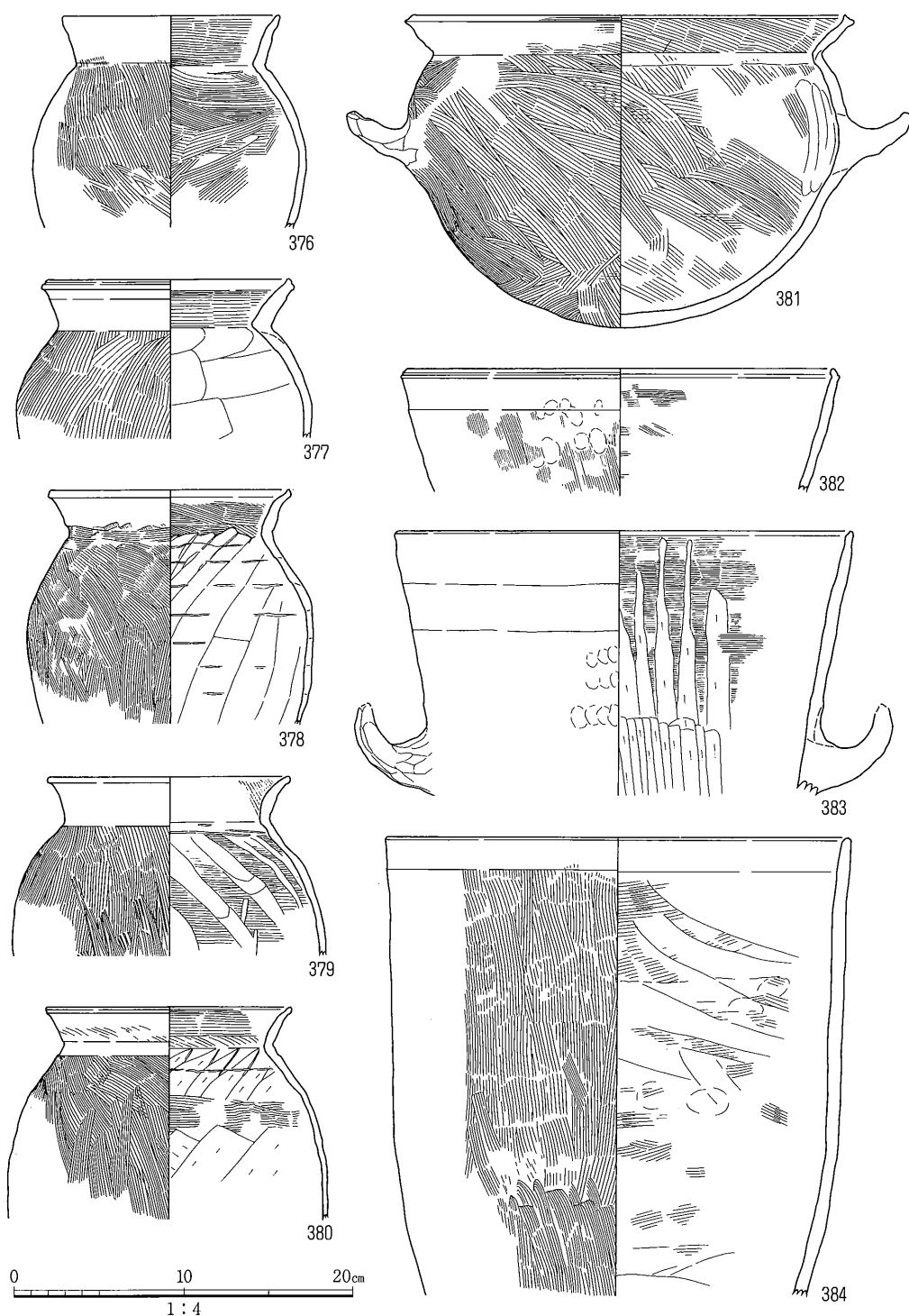


图61 SD711出土遺物

1.2m、深さ0.3～0.6m前後の溝である。溝内には暗灰黄色砂礫混りシルト、黒褐色含砂礫粘土質シルト、暗灰黄色粘土質シルトなどからなる水成層が堆積しており、2B区では溝内の下層から関東地方の完形の土師器が出土したほか、古墳時代の須恵器(TK73型式～TK23型式)や土師器、流木、植物遺体などが出土した。本溝の北部は東側を平行して流れるSD711に掘込まれていたが、溝の西肩は調査地の東端まで残っていたことから、本来の溝は窪地を通して、微高地東方の「馬池谷」に流れていたものと思われる。

385は口径16.0cm前後の須恵器無蓋高杯である。脚部を欠損しており、口縁部は緩やかに内湾しながら伸びる体部から外上方に開いており、端部は丸く肥厚している。口縁部と体部の境界には明瞭な突帯があり、この直下までヘラケズリ調整している。色調は灰色で、焼成は良い。TK73型式に属するものであろう。386は底径10.6cmの須恵器の脚部である。脚端部はにぶい凹面をなす。高杯の脚部であろうか。色調は灰～暗灰色で、焼成はややあまい。初期須恵器と思われる。

387は口径17.6cmの土師器甕である。口縁部は張りのある体部から一旦直立したあと短く開いており、端部を丸くおさめる。体部の外面は左上がりのハケを施しており、内面は時計回りにヘラケズリ調整している。色調はにぶい黄橙色で、胎土中に長石粒を多く含む。

388は口径16.2cm、器高21.4cmで、小さな平底を有する土師器甕である。口縁部は球形の体部から直立したあと大きく開いており、端部をわずかに外傾させている。口縁部の内外

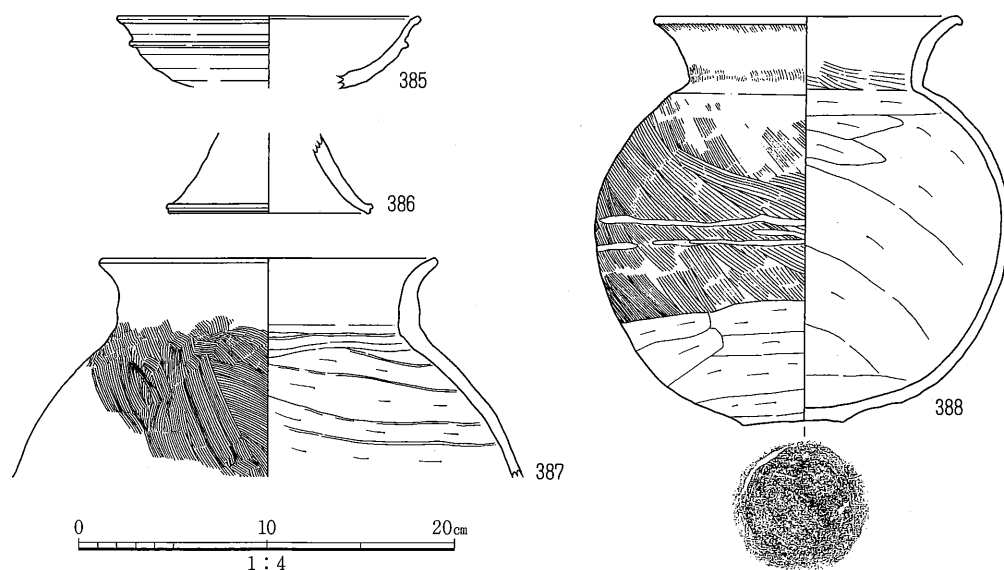


図62 SD712出土遺物

面の調整はハケのあとヨコナデを施しているが、一部にハケメが残る。体部は、外面が左上がりのハケを底部から2段に施したあと、底部から体部の下方にかけて反時計回りにヘラケズリ調整している。内面は左上がりの幅広いヘラケズリ調整を施しているが、内底面には仕上げナデが見られる。また、体部外面の中ほどには2ないし3条の暗文様のヘラミガキがあり、底部の裏面もていねいにナデ整えている。体部の中ほどから口縁部にかけてススが付着しているほか、体部の下半には3個所に支脚の使用痕が残っている。色調はにぶい赤褐色で、焼成は良好である。形態が和泉式土器に酷似しており、胎土中に2mm前後の赤色スコリヤを多量に含むことから、関東地域から搬入された土師器であり、TK73型式の初期須恵器に伴うものと判断した。(註2)

SD713(図63、図版45)

調査地の西南部に位置する幅0.6~1.2m、深さ0.3m前後の溝である。調査時にはSE701の東南部から東に向って延びる溝をSD714、これから北に曲る溝をSD713としたが、両溝とも長原7B層準の遺構で、埋土も同じ黒褐色砂礫混りシルトであることから、本報告では一連の溝とした。本溝はSE701の掘形に取付くことから、井戸の排水用の溝と思われる。

389は口径12.5cm、器高4.4cm前後に復元された須恵器杯蓋で、口縁部と天井部の境界の稜はにぶい。口縁端部はわずかに内傾しており、天井部の約1/3をヘラケズリ調整している。TK47型式に属するものであろう。

390は最大長53.7cm、最大幅13.5cm、厚さ1.4~3.3cmの板材で、上端を鋸で切断している。表面は平坦に加工しているが、裏面は未調整である。辺材を用いており、樹種は同定していないが、針葉樹と思われる。

c. 掘立柱建物(図64、図版13)

SB701は調査地の北東部、SD702の西側に位置する1間(東

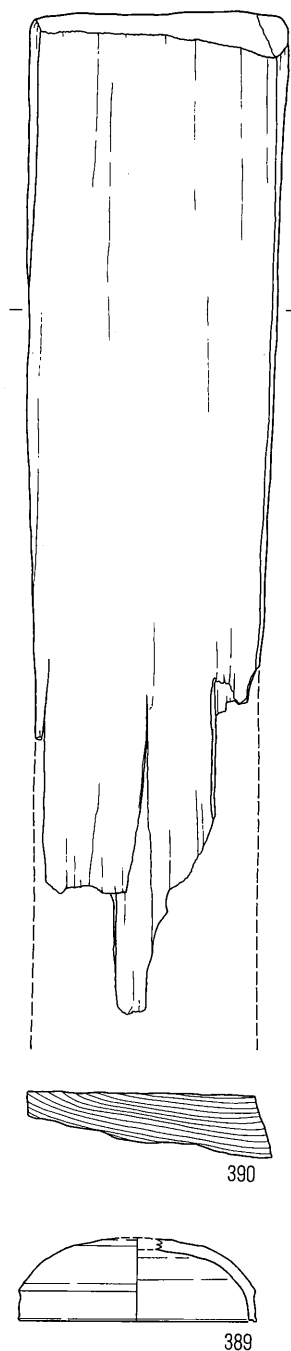


図63 SD713出土遺物

西1.9～2.0m)×2間(2.2～2.3m)、南北の掘立柱建物である。長原6Ai層の基底面で検出された。柱間距離は、梁行が1.9～2.0mで、桁行は1.1～1.2mありやや不揃いである。柱穴はやや不整形な西南の隅柱を除いて長径0.2～0.3mの円ないし楕円形で、柱痕跡は直径0.10～0.15mあった。また、柱穴の深さは検出面から0.1～0.2mあり、柱穴底の水準はTP+7.7～7.9mで、東側の柱筋の南と北端の高低差は0.15mあった。柱穴からは時期を確認できる遺物は出土していないが、柱穴の埋土や検出層準などから判断すると古墳時代の遺構である可能性が高い。また、建物の性格についても、微高地の北東の端近くに単独で建てられていることや、規模・柱間寸法などからみて、一般の住居とは考えにくい。建物の東側1.0～1.5mに位置するSD702では、前述したように、多数の須恵器や土師器に伴って滑石製品が出土しており、建物と溝が同一時期に属するものであれば、祭祀と係わりのある施設であった可能性がある。

d. 井戸(図65～71、図版12・38～41・44)

SE701 調査地の西南角に位置する長径4.5m、短径3.3mのやや不整形な素掘りの井戸

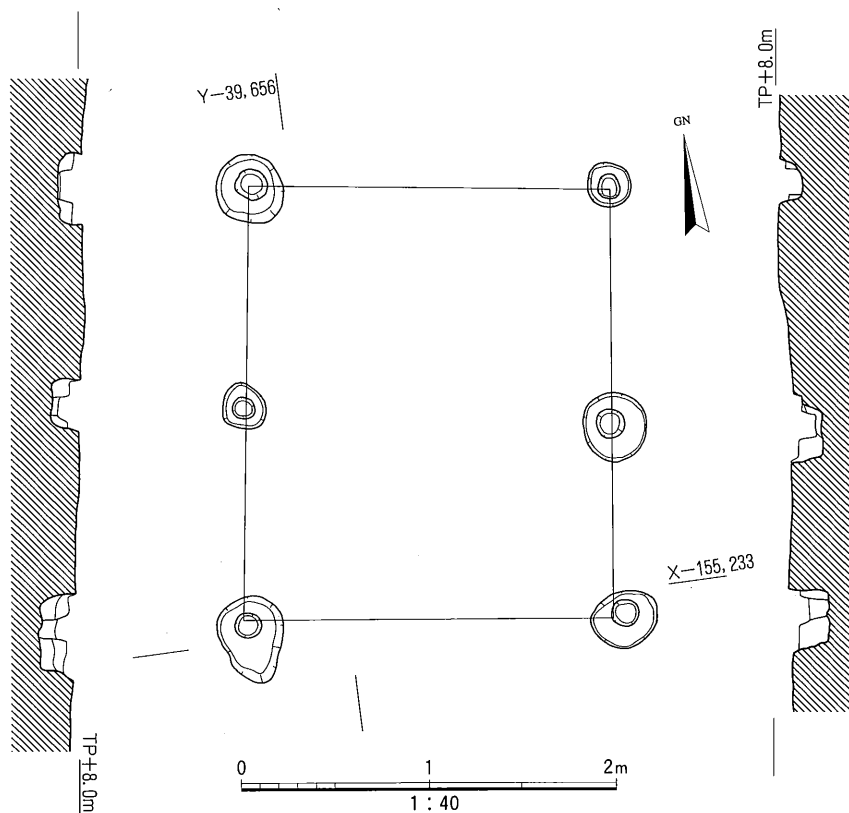


図64 SB701実測図

で、深さは検出面から約2.2mある。SE701の南側には長径1.7mで2段に掘り窪めた水溜のような遺構があるほか、井戸の掘形の東南角には湧水を東の窪地に排出するための溝と思われるSD713が取付いている。井戸内は大きく3段に掘下げられており、最上段の東側にはテラスを設けている。井戸内の埋土は上・中・下層に大きく区分される。最上層は長原7Ai層起源の偽礫が多量に混る灰黄褐色砂礫混りシルトを主体とする整地層である。本層の直下には厚さ10cm前後の細粒砂からなる水成層がある。

上層は長原7Aii層起源の偽礫が混った黒褐色含礫シルト～粘土質シルトで、5世紀末から6世紀末にかけての多数の完形品を含む須恵器や土師器をはじめ、棒状および斎串状の木製品などが出土した。本層は井戸内が水成層でほぼ埋没して窪地になった場所を埋戻した整地層であり、層厚は最大で50cmあった。

中・下層は水成のオリーブ黒色粘土質シルト、オリーブ灰色礫・シルト混り細粒砂、オリーブ灰色砂礫混りシルトなどからなり、井戸内の中ほどから5世紀末の須恵器や土師器、建築部材や木製容器の断片、ヒョウタンや桃核、植物の種子などが出土した。また、井戸の最深部から杯身3点、杯蓋1点の須恵器と、壺1点、甕4点の土師器が完形で出土したほか、堆積物を水洗したところ、数個の滑石製の白玉が捕集された。

391～405・408・416・417・425・429・440・441・443は上層出土の遺物である。

391～393は口径10.2～12.5cmの土師器杯Cである。口縁端部は391が外傾、392・393は内傾しており、391・392の体部の内面には正放射暗文を施す。体部の外面は392・393がユビオサエで整えており、391は暗文をまばらに施す。色調は灰黄褐～にぶい黄橙色で、胎土中に長石・雲母粒を含む。これらは飛鳥Ⅰに属するものである。394～397は口径12.0～19.3cmの土師器甕である。394・396の口縁は直線的に開いたあとやや内湾し、397は端部ににぶい沈線が巡る。395の口縁部は緩やかに外湾し、端部を丸くおさめている。色調は灰白色の394を除き黄橙色を基調とし、胎土は391～393と共通する。440は口径11.2cm、器高3.4cmの土師器杯Cである。口縁端部はわずかに内傾し、体部外面の下半をユビオサエで、口縁部の内外面と体部内面をヨコナデ調整している。441は口径14.3cm、器高3.6cmの土師器杯Cである。口縁端部は短く開いており、体部下半の外面をユビオサエで整えている。443は口径9.8cm、器高6.6cmの土師器直口壺である。口縁部は張りのある体部から外上方に立つ。口頸部の内外面をヨコナデ調整し、体部はナデで整えている。440・441・443の色調はにぶい黄橙色で、胎土中に長石・雲母粒を含む。飛鳥Ⅰ～Ⅱに属するものであろう。

398は口径14.6cm、器高4.9cmの須恵器杯蓋、天井部の中央に中凹みのつまみのある399

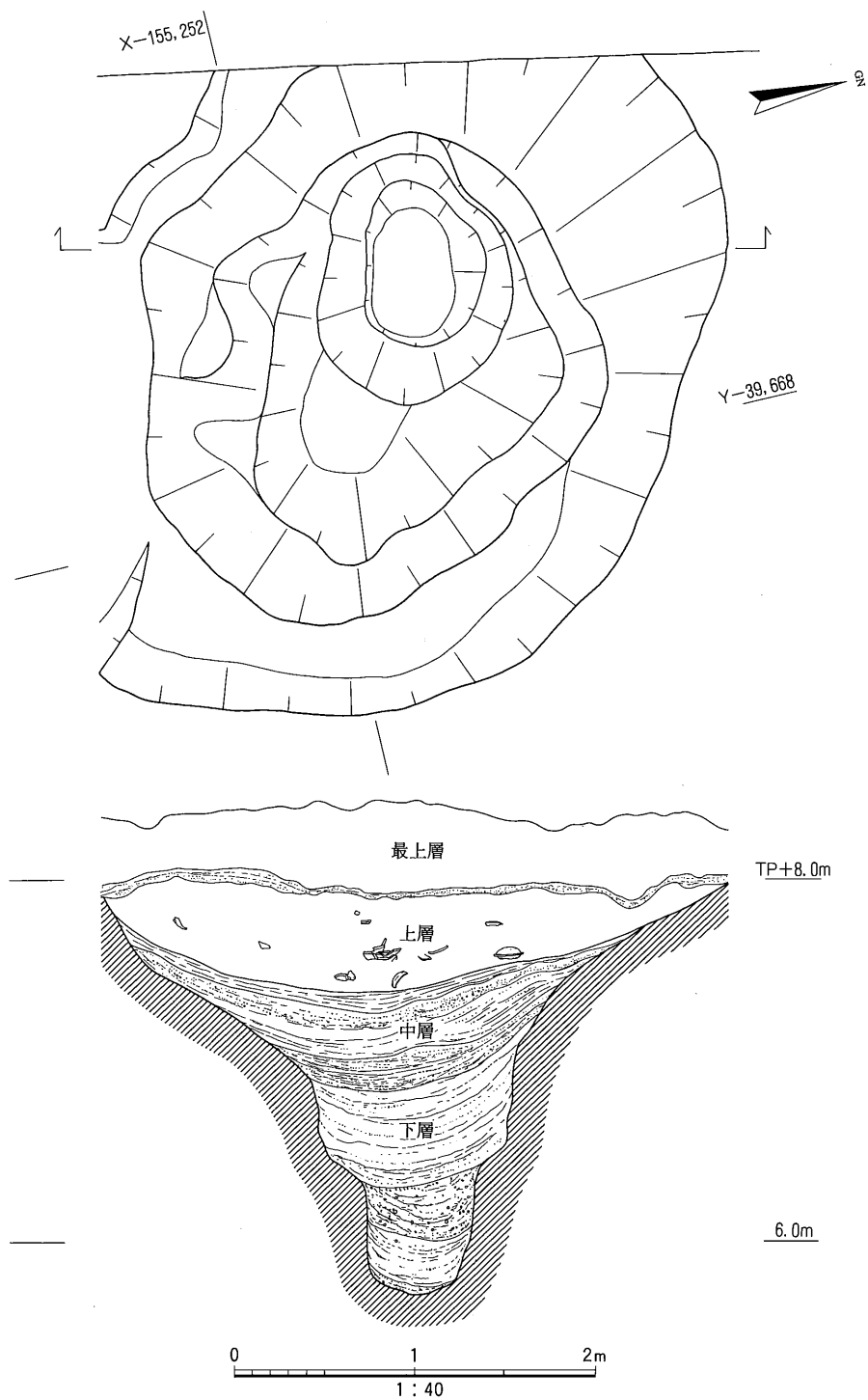


图65 SE701实测图

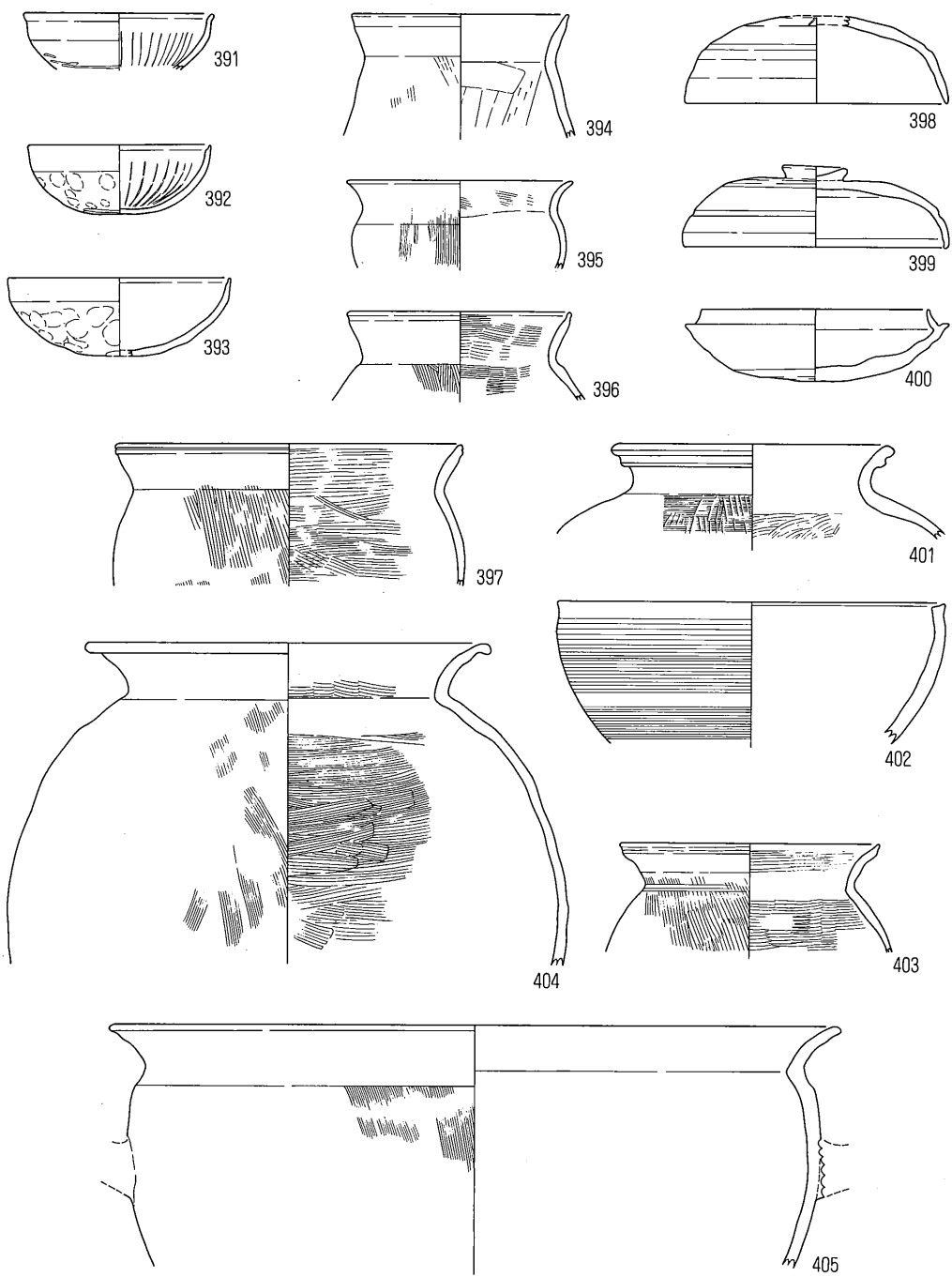


图66 SE701上層出土遺物

は口径14.6cm、器高4.7cmの完形の須恵器高杯の蓋である。ともに口縁部と天井部の境界にはにぶい凹線があり、399の口縁端部は内湾ぎみにおさめる。398の口縁端部は薄くおさめており、天井部にはヘラ記号がある。色調は灰色で、焼成は良い。ともにMT85型式に属する。400は口径12.8cm、器高4.0cmの須恵器杯身である。短い立上がりは受け部から内傾しており、口縁端部を薄くおさめている。体部の約1/3弱をヘラケズリ調整している。色調は暗青灰色で、焼成は良好である。TK209型式に属する。401は口径15.2cmの須恵器甕である。口縁部は体部から大きく外反しており、端部の下方に1条の突帯が巡る。体部の外面は平行タタキのあとカキメ調整しており、内面には当て具痕が残る。402は口径21.8cmの須恵器鉢である。口縁部は内湾しながら伸びる体部からわずかに内傾し、端部は上面が浅く凹む。体部の外面はカキメ調整で、内面はヨコナデ調整している。401・402の色調・焼成は399と共通する。401はMT85型式、402はTK209型式に属するものであろう。

403・404は各々口径が14.5cm、22.7cmの土師器甕である。403の口縁部は外上方に開いたあと、やや内湾する。404の口縁部は球形に近い体部から大きく開いており、端部を丸く肥厚させている。ともに体部の内外面をハケで整えている。色調は403が灰黄色で、404はにぶい黄橙色である。胎土は396と共通する。飛鳥Ⅰに属するものであろう。405は口径41.2cmの土師器把手付鍋である。口縁部は体部から大きく開いており、端部は丸い。体部の上半に把手の接合痕がある。体部の外面はタテハケで、内面には炭化物が厚く付着している。色調・胎土は404と共通する。飛鳥Ⅰに属するものであろう。

408は口径13.4cm、器高3.9cmの須恵器杯蓋である。口縁部と天井部の境界は丸い。口縁端部は内傾しており、天井部の1/3をヘラケズリ調整している。色調は灰色で焼成は良い。TK209型式に属する。416・417は各々口径が12.4cm、13.2cmで、器高が3.0cm、4.0cm前後の須恵器杯身である。ともに短い立上がりを受け部から内傾しているが、416の立上がりには口径の割に厚い。体部の約1/3弱をヘラケズリ調整している。色調・焼成は408と共通する。ともにTK209型式に属する。425は底径12.3cmの須恵器高杯の脚部である。裾部は柱状部から大きく開いており、脚端部は外傾して凹面をなす。柱状部の中ほどに1条の凹線が巡る。色調は灰白色で焼成はややあまい。TK209型式に属するものであろう。429は口径10.2cm、器高13.5cmの須恵器直口壺である。口縁部は球形に近い体部からやや外上方に直線的に伸び、端部は内傾する凹面をなす。口頸部から体部の下半の内外面をヨコナデ調整、底部の大半をヘラケズリ調整している。色調・焼成は408と共通する。TK43型式～TK209型式に属するものであろう。

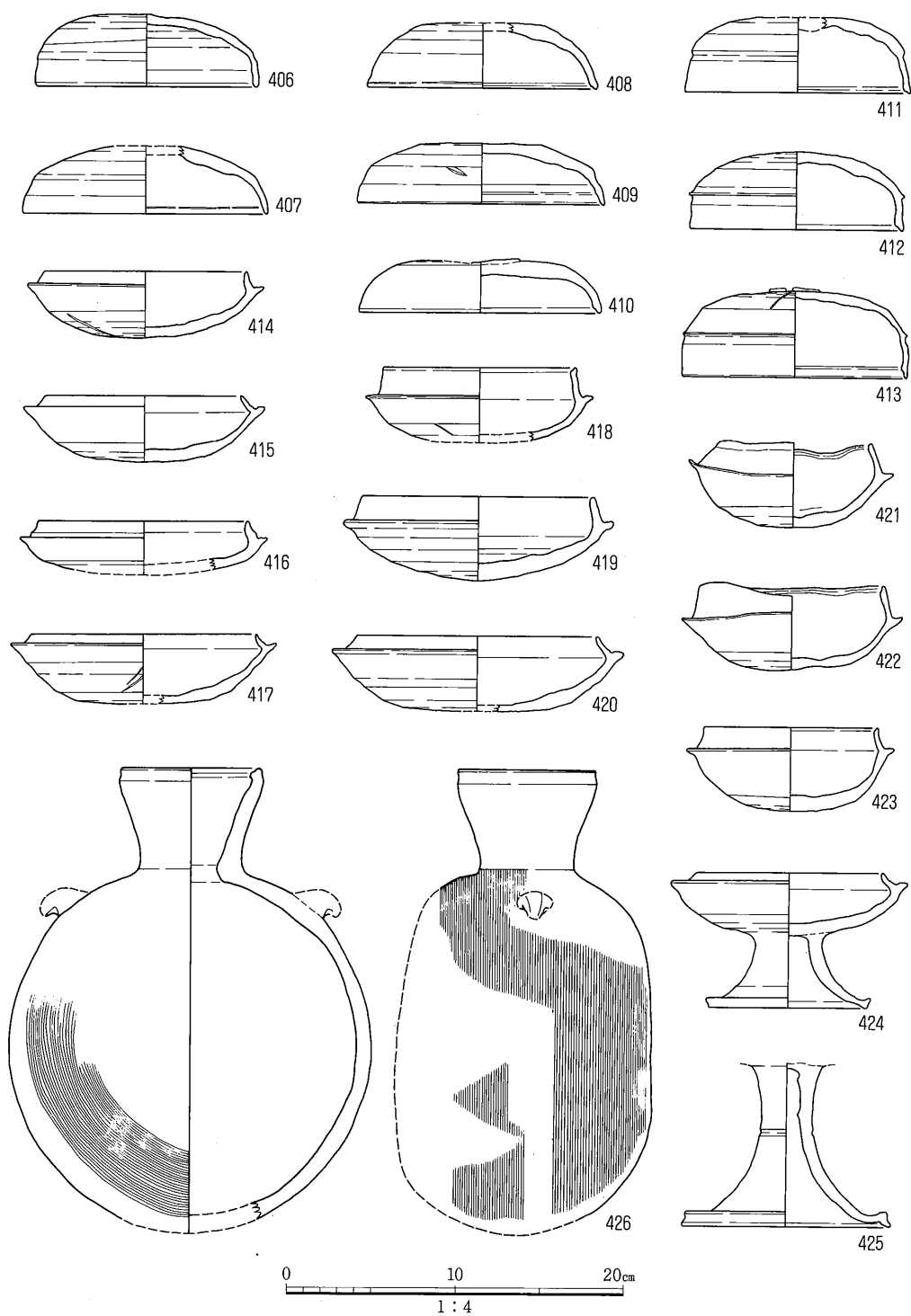


图67 SE701出土遗物

上層(408·416·417·425)、中層(406·407·409~412·414·415·419·420·424·426)、下層(413·418·421~423)

406・407・409～412・414・415・419・420・424・426～428・430・432～439・442・445・451～458は中層から出土した遺物である。

406・407・409～412は口径12.4～14.5cm、器高3.1～4.6cmの須恵器杯蓋である。口縁部と天井部の境界は、稜が明瞭な412と幅の広い凹線で区画した411を除き、丸くおさまられており、口縁端部も内傾した凹面をなす410～412以外はわずかに内傾するか丸くおさめている。天井部のヘラケズリ調整の範囲は、410が1／3以下、406は口縁部の境界近くまで及び、そのほかは1／3強である。いずれも色調は灰色で焼成は良い。406はMT85型式、407・409・410はTK209型式、411・412はTK47型式に属する。414・415・419・420は口径11.4～14.2cm、器高3.9～5.0cmの須恵器杯身である。414・415・420の立上がりは受け部から内傾しており、口縁端部は薄い。419の立上がりは受け部からわずかに内傾しており、口縁端部を丸くおさめている。体部のヘラケズリ調整の範囲は1／2程度の414を除き、1／3強である。色調・焼成は上述した須恵器杯蓋と共通する。414・415はTK209型式、419はMT85型式、420はTK43型式に属する。424は口径10.8cm、器高8.0cmの須恵器有蓋高杯である。短い立上がりは受け部から内傾しており、口縁端部は薄い。脚部は裾が大きく開いており、脚端部は上方に丸くおさめている。体部の1／3強をヘラケズリ調整しており、色調は青灰色で、焼成は良い。TK209型式に属する。426は口径8.2cm、器高27.5cm前後の須恵器提瓶である。口縁部は体部から外上方に開いたあと、口縁端部の近くで内傾している。体部は前面が大きくふくらみ、外面にはカキメ調整が施されており、肩部に鉤手状の把手が付く。色調は灰色で、焼成はややあまい。TK209型式に属する。427は口径8.4cm、器高9.0cm前後の須恵器短頸壺である。口縁部は球形の体部から内傾しながら伸びており、頸部との境界は不明瞭である。口縁端部を丸くおさめており、体部の中ほど近くまでヘラケズリ調整している。色調は暗青灰色で、焼成は良い。428も口径8.6cmの須恵器短頸壺で、底部を欠損している。体部の上半に張りがあり、口縁部は体部から短く立つ。体部の下半をヘラケズリ調整している。色調は灰色で焼成は良い。427・428ともにTK209型式に属する。430は口縁部を欠損した須恵器甕である。球形の体部から口頸部が外上方に開いており、頸部の外面には絵画様の線刻がある。体部の中ほどまでヘラケズリ調整しており、ここに円孔を穿っている。色調・焼成は428と共通する。TK209型式に属する。432～439は口径15.7～25.8cm、残存高5.3～31.3cmの須恵器甕である。口縁端部を432は上方に、433・435は上下に、436は下方に拡張している。434は口縁端部を丸く肥厚させており、437は口縁部の外端面に粘土紐を継ぎ足して、段状に成形している。432の口頸部の内

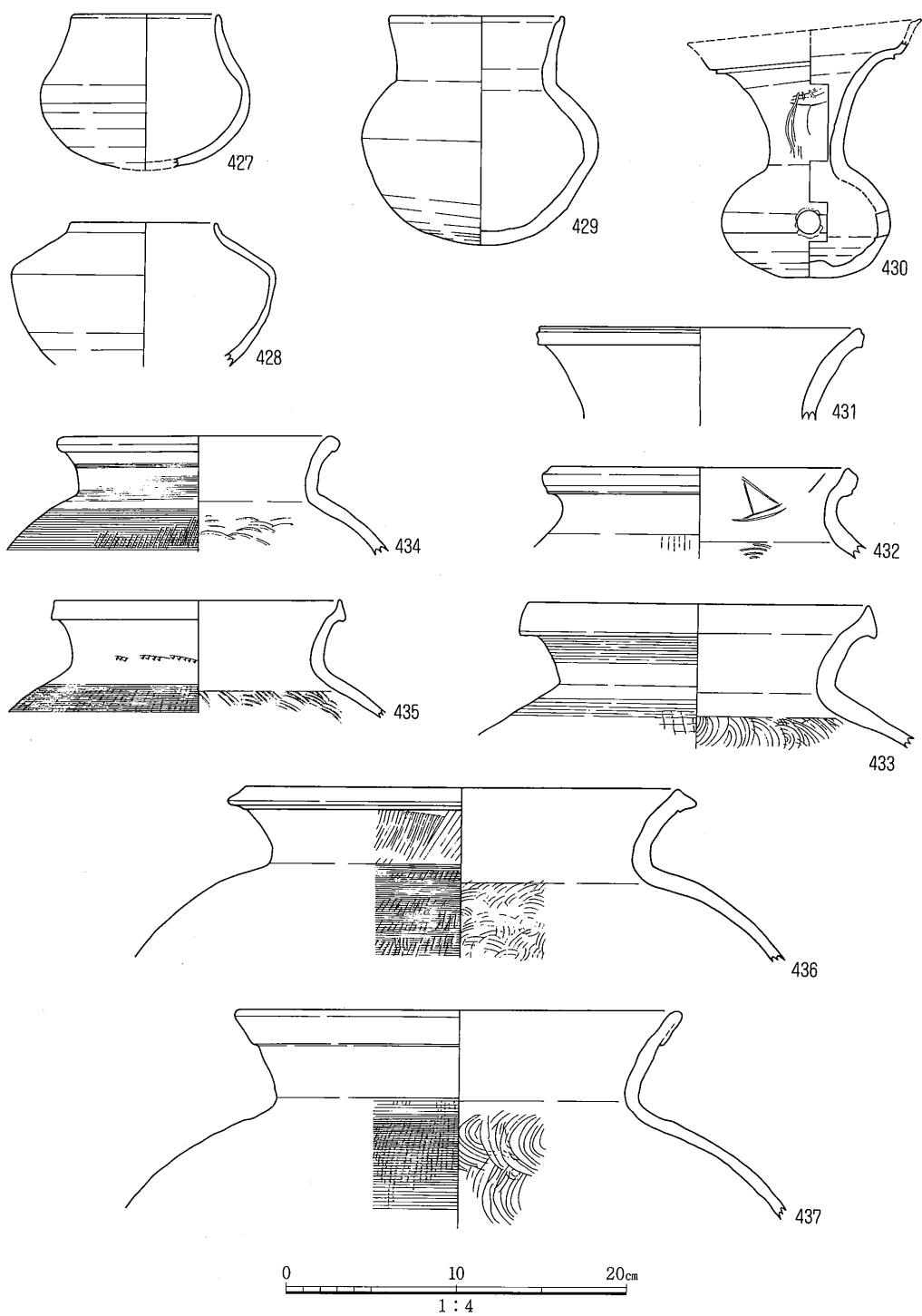


圖68 SE701出土遺物
上層(429)、中層(427・428・430・432~437)、下層(431)

面にはヘラ記号がある。434～437の体部の外面は平行タタキのあとカキメ調整しており、内面には当て具痕が残る。433の体部外面には粗い格子タタキが施されている。438・439はほぼ全体が復元された甕で、ともに体部は球形で、口縁部は頸部から短く外上方に開いており、438は口縁部の外端面が広い面をなし、439は端部を肥厚させている。438・439ともに体部の外面を平行タタキのあとカキメ調整しており、内面には当て具痕が残る。色調は灰～灰白色で、焼成はややあまい。434・436～439はTK209型式、432・433・435はTK47型式に属するものであろう。

442は底径14.9cmの土師器高杯の脚部である。柱状部には杯底部から粘土円盤が充填されており、裾部は柱状部から水平に開く。脚端部を上下に拡張しており、外端面には1条のにおい沈線が巡る。柱状部の外面はユビナデ、内面は横および縦方向のナデを施している。色調は灰黄褐色で、胎土は長石・雲母・角閃石粒を含む生駒西麓産である。445は口径14.9cmの土師器甕で、口縁部は体部から大きく開く。色調はにおい褐色で、胎土中に長石・シャモット粒を含む。451は口径20.8cm、器高31.1cmで、ほぼ完形の土師器甕である。最大径は球形に近い体部の下半にあり、内外面を縦および左上がりのハケのあとナデで整えている。

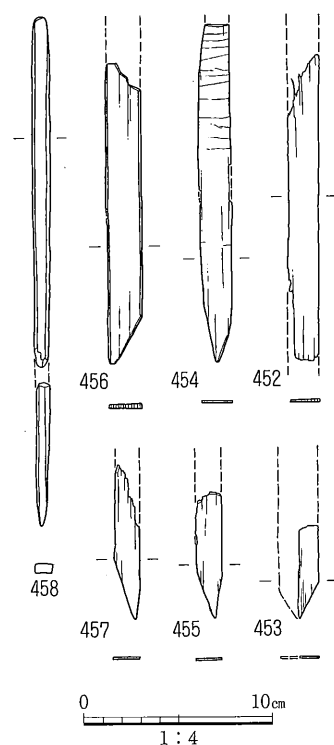


図69 SE701出土木製品

口縁部は体部から一旦直立したあと大きく開いており、端部は下方にわずかに肥厚する。色調はにおい黄橙色で、胎土は442と共通する。442・445・451は飛鳥Ⅰに属するものと思われる。

452～457は最大幅1.2～1.8cm、厚さ0.1～0.2cm、残存長5.0～17.9cmの斎串状木製品で、両側から切り込みを入れて先端を尖らせた453・454・455と、片側のみ切り落とした456・457がある。樹種はヒノキである。飛鳥Ⅰの土器類に共伴しており、斎串とすれば初出期の資料といえる。458は最大幅約0.9cm、厚さ0.5cm前後の棒状の木製品で、先端を尖らせている。樹種はヒノキである。

413・418・421～423・431・444・446～450は下層から出土した遺物であるが、これらは井戸の底面より0.5～0.6mの範囲から取り上げられたものである。418・431・450を除き、全て完形品である。

413は口径13.0cm、器高5.1cmの須恵器杯蓋である。口縁

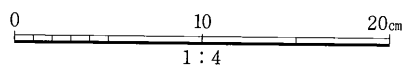
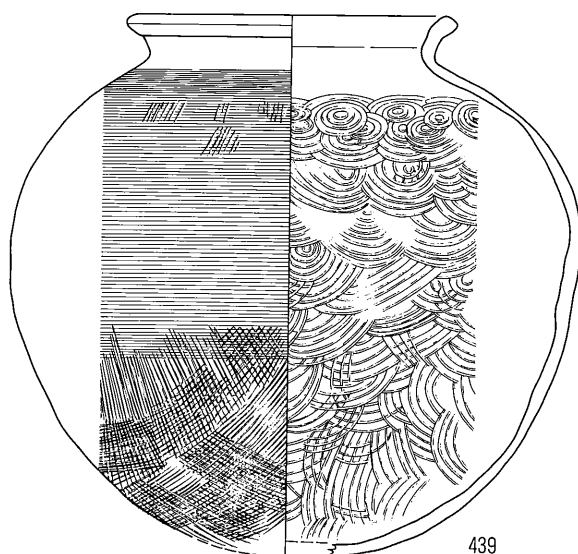
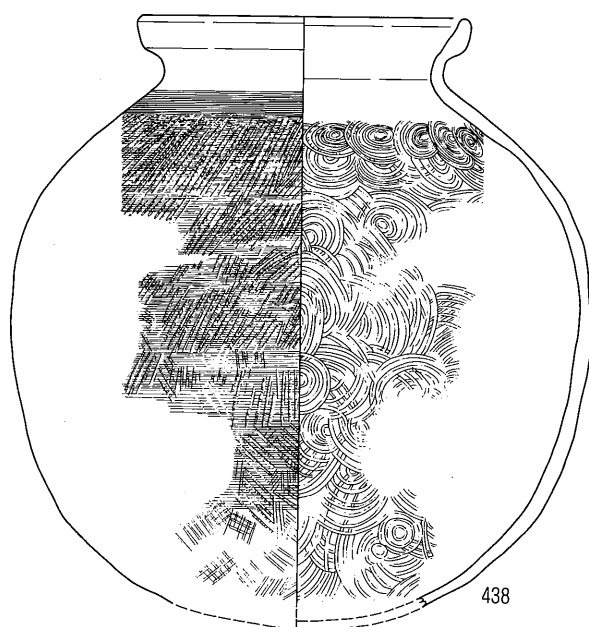


图70 SE701中層出土遺物

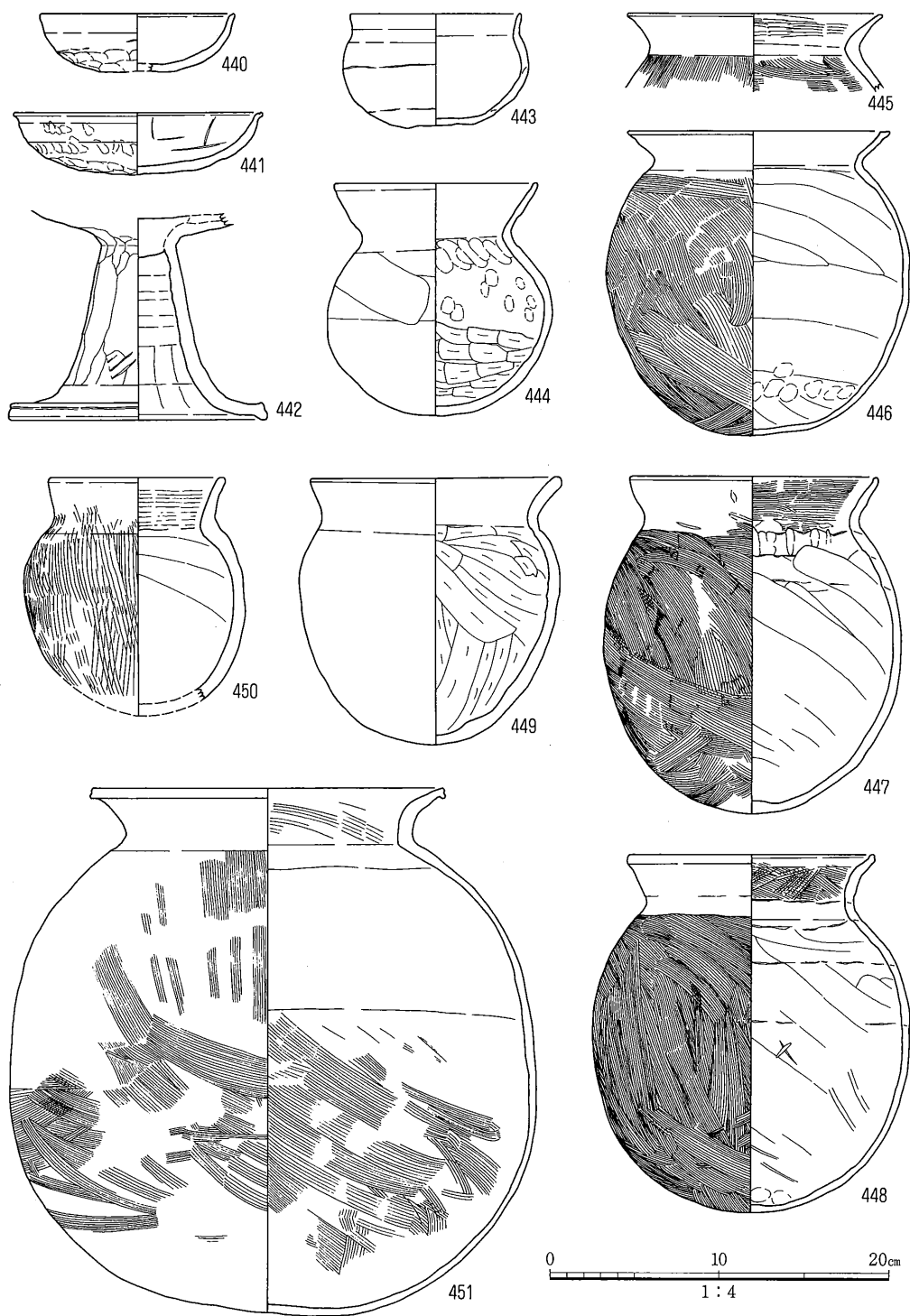


图71 SE701出土遺物

上層(440・441・443)、中層(442・445・451)、下層(444・446~450)

部と天井部の境界の稜は明瞭で、口縁端部は内傾して凹面をなす。天井部の約 $2/3$ をヘラケズリ調整している。色調は灰色で、焼成は良い。天井部にヘラ記号がある。418・421～423は口径8.8～11.0cm前後の須恵器杯身である。立上がりは内傾しており、418・421・422の口縁端部は内傾してにぶい段をなす。423の立上がりはほかのものと比較してやや短い。421・422は口縁部をはじめ全体が焼け歪んでいる。いずれも底部の $1/3$ 以下をヘラケズリ調整している。色調は灰色で、焼成は良い。413はTK23型式、418・421～423はTK47型式に属する。431は口径18.8cmの須恵器甕である。口縁端部を上下にわずかに拡張しており、2条のにぶい凹線が巡る。色調は灰～灰白色で、焼成は良い。TK47型式に属するものであろう。

444は口径11.8cm、器高13.7cmの土師器広口壺である。口縁部は球形の体部から外上方に開いており、端部を丸くおさめている。体部の調整は外面が左上がりのナデ、内面は下半が時計回りのヘラケズリで、上半はユビオサエおよびユビナデである。色調はにぶい橙色で、胎土中に長石・雲母粒を含む。446は口径14.8cm、器高17.9cmの土師器甕である。口縁部は球形に近い体部から大きく開いており、端部はわずかに肥厚して水平な面をなす。体部の調整は外面が左上がりのハケ、内面は左上がりのヘラミガキである。内底面にはユビオサエが残る。色調は灰黄褐色で、胎土は444と共通する。447・448は各々口径が14.4cm、14.2cmで、器高が19.8cm、20.9cmの土師器甕である。ともに体部はやや長手で、口縁部は外上方に開く。448は口縁端部の近くをわずかに外反させており、端部は447・448ともにつまみ上げている。体部の調整は外面が左上がりのハケ、内面は左上がりのヘラケズリである。色調は447が灰オリーブ色、448は橙色で、胎土中に長石・雲母・シャモット粒を含む。449は口径14.2cm、器高15.7cmの土師器甕である。口縁部は球形に近い体部から外上方に開いており、端部は丸い。体部の外面は全体にナデで整えており、内面は右および左上がりのヘラケズリで調整している。色調はにぶい橙色で、胎土は444と共通する。450は口径10.4cm前後に復元された小型の土師器甕である。口縁部は球形の体部から外上方に開いており、端部を丸くおさめている。体部の外面はタテハケ、内面を左上がりのヘラケズリで調整している。色調・胎土は449と共通する。以上の土師器はTK47型式の須恵器に伴う一括資料といえる。

SE701は出土遺物や埋土の状況からみて、井戸として機能していたのは井戸の中ほどにオリーブ灰色礫・シルト混り細粒砂が堆積する以前と考えられる。これ以後も井筒内は深さ1m前後はあったようであるが、井戸としての機能を失っており、オリーブ黒色粘土質

シルトが堆積した当時は池のような状態で、6世紀末以後に井戸内の上部が埋戻されるころにはごく浅い窪地になっていたようである。以上のことからSE701は長原7Bi層準の遺構であるSD701・702・711・712などと同様に、微高地の西南部に想定される5世紀後半から末頃の集落に伴う井戸と考えられる。

e. 土壌

SK702(図72、図版41) 調査地の北西部に位置する直径が1.1~1.2mのやや不整形な土壌で、深さは検出面から0.55mある。西壁は傾斜しているが、東壁はほぼ垂直であり、壁や底には径3~5cmの先細りする穴が数多くあった。内部には上部に地山であるにぶい黄褐色粘土質シルトや明黄褐色含砂礫シルト、下部に須恵器や土師器片が混った旧表土とみられる黄褐色粘土質シルトなどが、北東から南西方向に圧縮されたような状況で確認された。

459は口径9.2cmの土師器甕で、口縁部は頸部から短く開いており、端部は肥厚して丸くおさめる。器面の調整は体部の外面が縦方向の細かいハケ、内面がヘラケズリである。色調はにぶい橙色で、胎土中に長石粒を含む。460は口径14.6cm、器高5.0cmの須恵器杯蓋で、口縁端部は内傾している。口縁部と天井部の境界ににぶい凹線が巡り、天井部の2/3をヘラケズリ調整している。TK10型式に属するものであろう。

SK702は壁や底の状況、埋土や出土遺物などからみて、6世紀中葉を上限とする倒木穴と考えておきたい。

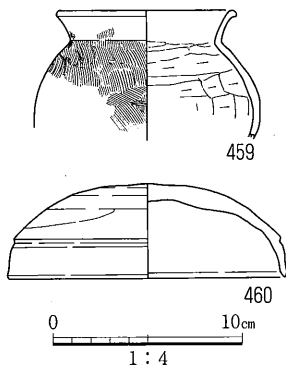


図72 SK702出土遺物

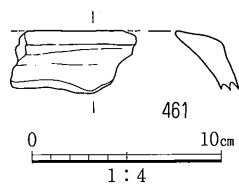


図73 SK705出土遺物

SK705(図73) 調査地の中央部に位置する径約1m、深さ約0.3mの土壌である。内部には地山が風化した黄褐色シルトおよびにぶい黄褐色礫混り細粒砂が見られ、壁や底には径3cm前後の先細りする多数の穴があった。埋土の上部からは、飛鳥時代の移動式竈の細片461が出土した。倒木穴と考えられる。

SK708(図74) 調査地の北部、SD701と切合い関係にある隅丸長方形の土壌で、短辺0.55m、長辺約1.50m、深さ約0.35mある。掘形の南および西側が2段に掘込まれており、埋土は暗灰黄色砂礫混りシルト、オリーブ黒色含砂礫シルトである。底が平坦であることや埋土に地山の偽礫が混ることから、土壌墓の可能性はある。遺物は特に出土しなかった。

SK716(図74・75、図版44・45) 調査地の西南部、SE701の南側に位置する土壌である。掘形は不整形で、東西0.86m、

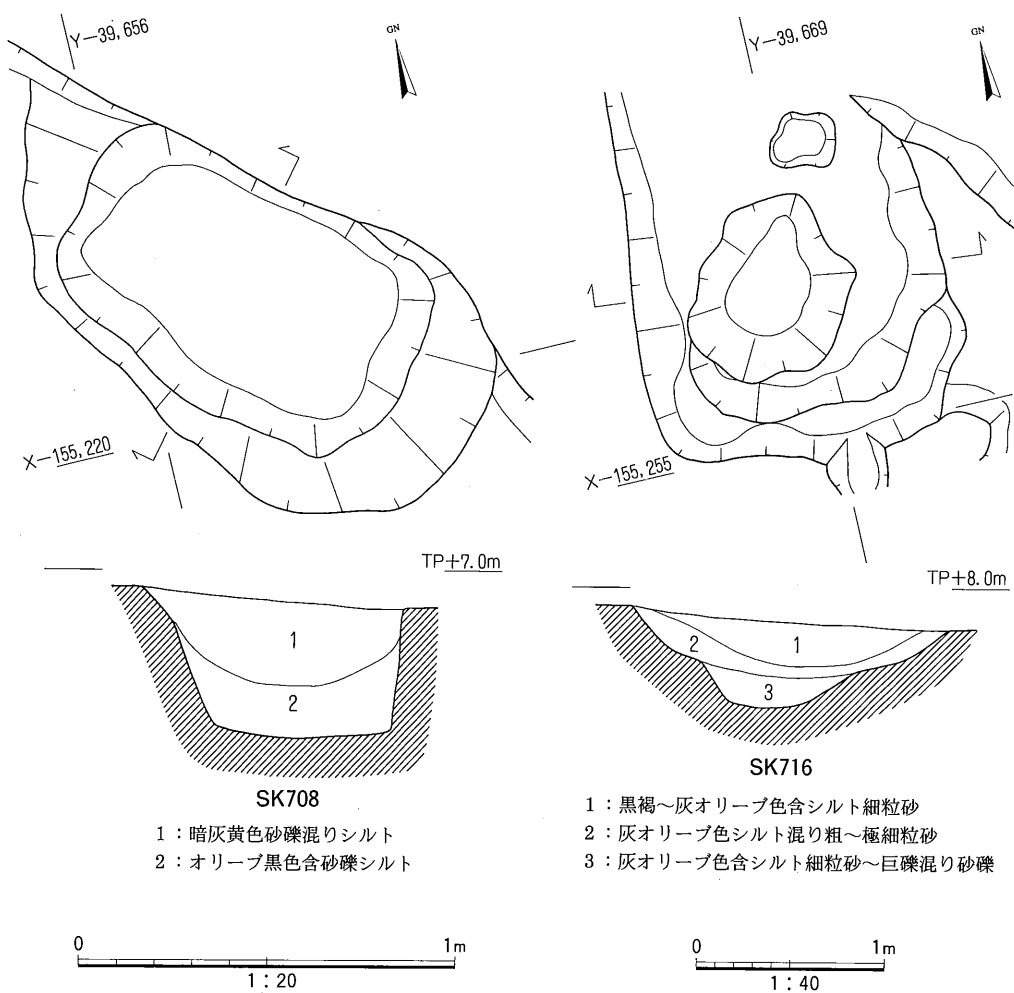


図74 SK708・716実測図

南北1m以上、深さは0.20m前後あり、中央部が1段深く掘込まれている。底面の近くから土師器や木製品が出土した。

462は口径20.2cmの土師器甕で、口縁部は頸部から大きく開いており、体部の内面を縦方向の強いナデで調整している。SE701の整地層から出土しているTK209型式の須恵器に伴う土師器と同時期に属するものと思われる。

463は先端を両側から切込んで尖らせた残存長16.3cm、幅1.5cm前後、厚さ0.10～0.15cmの斎串状木製品である。樹種はヒノキである。464は最大径19.5cm、厚さ0.9cm前後の曲物の底板である。周縁に側板を固定するための深さ0.5～0.7cmの釘穴が7個所ある。内面には刃物による傷が多数あり、まな板に転用されたものと思われる。

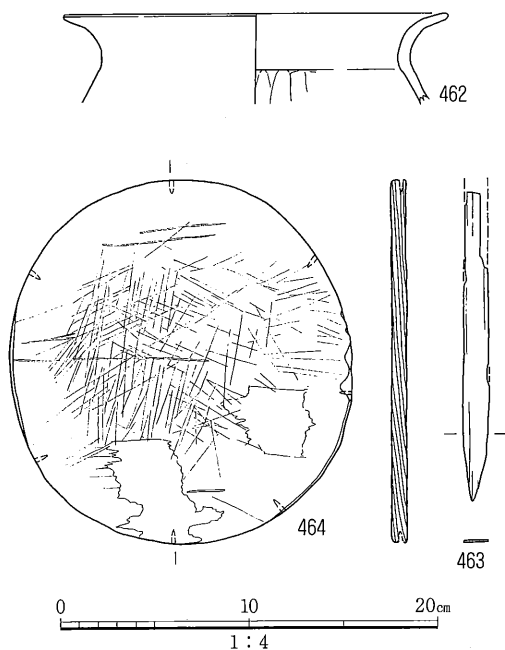


図75 SK716出土遺物

4) 小結

今回の調査では、当地域を南東から北西方向に延びる「馬池谷」の西部の具体的な状況や、「馬池谷」内の地層の堆積状況を明らかにすることができた。調査地の基本層序は長原遺跡南部標準層序に対応するが、長原遺跡の南部地域ではこれまで細分されていなかった長原2層に相当する7枚におよぶ地層(2a~2g層)が確認された。作土層と水成層に二分されるこれらの層のうち、1704(宝永元)年の大和川の付替え以前にさかのぼる2c層以下の各層については、当地域に開かれた水田が度重なる洪水を受けながらも営まれ続けたことを物語っている。一

方、2a・2b層を作土とする水田の時期は、調査地の南約1kmを西に流れる新大和川によって「馬池谷」が南北に分断された以降であり、水田の用水の供給源は川辺1丁目に設けられていた「五十間樋」から引かれていた「畑川」であった。

室町時代から奈良時代にかけての当地は長らく水田地帯となっていたようであり、これを裏付ける畦畔や水路などが確認されている。

飛鳥時代については、「馬池谷」に続く窪地内で数頭分のウシ・ウマの骨が集中して出土し注目された。ウシ・ウマ骨の中には解体痕のあるものも含まれ、当地におけるウシ・ウマの用途や解体方法をはじめ、河内地域の飛鳥時代のウシ・ウマの管理の実態を解明する上での基礎的な資料となった。また、同じ窪地内からは柱や板などの建築部材・容器をはじめ、類例の少ない木製履物などの木製品が出土した。

一方、古墳時代の遺構としては、微高地の縁辺に掘込まれた古墳時代中期後葉の区画溝と推定される複数の溝をはじめ、井戸や掘立柱建物などが検出された。溝を出土した須恵器の型式ごとに整理すると、SD712(TK73型式)、SD701・702(ON46段階~TK23型式)、SD711(TK23型式・TK47型式)となる。したがって、TK23型式の須恵器を含むSD701・702・711などは出土遺物からみても一連の溝として矛盾しないものであろう。また、SE701では井戸の機能時に堆積した地層からTK47型式の須恵器が出土しており、当地の集落に

伴う井戸と考えられる。なお、SE701やSD711ではともに機能後に堆積した地層からTK209型式の須恵器をはじめ、土師器や建築部材などが出土したことから、当地区の古墳時代の集落は5世紀の中葉以降に区画溝を伴って形成された後、遺物の量が激減する6世紀中葉に一旦衰退し、7世紀前葉には別の場所に移動した可能性が高い。

古墳時代中期から後期にかけての長原遺跡における集落は、遺跡の北東部に位置する「東ムラ」と、「馬池谷」の東側に位置する「西ムラ」の2個所がこれまでに確認されており、「東ムラ」は5世紀前葉から中葉、「西ムラ」は5世紀後葉から6世紀中葉にかけて存続したと想定されている[京嶋1993b]。また、古墳時代における当遺跡周辺の地形についても詳細な復元が進み、各時期の集落域・墓域・水田域の推定や、集落の盛衰・変遷などについても総合的な検討が加えられている[高橋1999]。その中では、「東ムラ」「西ムラ」の単位ごとの範囲が復元されたほか、「西ムラ」に先駆けて出戸自然堤防上に営まれた「東ムラ」の範囲は広く、これに対して「馬池谷」の東岸の台地の高所に南北方向に営まれた古墳時代中期後葉～末葉の「西ムラ」の集落は、竪穴住居1棟と掘立柱建物2ないし3棟からなる単位が複数集合した形態の集落であったものと指摘されている。

本調査で新たに確認された集落は「馬池谷」の西岸の瓜破台地の東縁部に位置し、「西ムラ」とは「馬池谷」を挟んで対峙する関係にある。当該期における調査地周辺の地形は、図49に示したように、北は「馬池谷」に向って急激に落込み、西は高く、東は南から北東方向に向って浅い谷状となっている。また、SD702など一連の区画溝の西側は、SB701が位置する瓜破台地から東に舌状に張出した場所を除き斜面に当り、建物を建てるには不適であったと考えられる。したがって、本集落の中心は調査地西方の瓜破台地上に想定されよう。

次に、長原遺跡では初出である関東系土器について若干のまとめを行っておく。SD712から出土した完形の土師器甕388は、形態や製作技法をはじめ、胎土中に2mm前後の赤色スコリヤを含むことから、関東地方の古墳時代中期の土師器の型式である和泉式に属する搬入品と考えた。また、製作地や搬入経路については十分な検討を経ておらず断定しがたいが、管見によるかぎり千葉県内に分布する和泉式土器の中に類似品が認められた。

和泉式土器は東京都狛江市和泉に所在する和泉遺跡の資料を標識とする古墳時代中期の土器型式とされており、地域色は見られず、関東地域のほぼ全域に分布している。存続した時期については、5世紀初頭から後半という短期間であったと考えられている[上野純司1996]。本型式の甕は一般的に体部が球形で、外面をハケのあと中ほど以下をヘラケズリ調整しており、内面はヘラケズリあるいはヘラにより平滑化している。ここでは千葉県

内(上総南西部地域および市原地域)の古墳時代中期の土器を検討された小沢洋氏の成果[小沢洋1998・1999]を参照しながら当遺跡出土資料の編年的な位置づけを行いたい。

小沢氏は当該地域の古墳時代中期の旧来の土器型式である和泉式と鬼高式初期(いわゆる鬼高Ⅰ式)に属する土器群について、高杯・杯の形態変化を基準として1～5期の5段階に区分し、1期の前段階を0期(五領式終末期／想定年代380～390年頃)とする。和泉式初期とされる1期(想定年代390～400年頃)の甕は体部が球形を呈するのに対し、定型化する2期(想定年代400～420年頃)には体部の上半は球形に近いものの、下半は直線的に成形されており、底部も厚みを増す。変容期とされる3期(想定年代420～440年頃)以降は体部が長手で口縁部の開きも小さいものが多い。一方、体部の調整については、1期には外面の上半がハケで、下半がナデ調整のものも確認されるが、ハケ調整に比してナデ仕上げのものが前段階より多くなるようであり、2期にはハケ調整は衰退してナデ調整が主体となり、3期になるとハケ調整はほとんど見られなくなるという。以上のような編年基準から甕388を見ると、口縁部が球形の体部から直立したあと大きく開き、体部外面の中ほど以下を左上がりのハケのあとヘラケズリで調整していること、底部が薄い平板をなすこと、体部の中ほどには平行するヘラミガキが施されていること、内面の調整がヘラケズリであることなどが特徴として指摘できる。同様の土器は0期に属する袖ヶ浦市念仏塚遺跡の027住居出土資料の中に認められ、1期に属する甕との共通性も見られる。ただし、0期および1期の基準資料との対比や、近畿と関東地方の中間地帯である中部・東海地域の当該期の土器との検討も経ていないため、ここでは和泉式土器の古相に相当する可能性を指摘するに留めておきたい。一方、甕388には少量ながらTK73型式の須恵器高杯や土師器甕が共伴しており、同型式の初期須恵器を3期に比定されている小沢氏の年代観とは大きな齟齬が生じてしまう。こうした問題については、今後、近畿ならび関東地方の古墳時代中期の土師器の比較や、地域を越えた時間軸の設定を行った上で、稿を改めて論ずることにしたい。

註)

- (1)奈良国立文化財研究所の工楽善通氏(現ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所)および金子裕之氏には履物・斎串状などの木製品についてご教示を賜った。記して、感謝の意を表する次第である。
- (2)関東系の土器については、福田健司・中山弘樹・服部敬史・長谷川厚・清野利明の各氏(東国土器研究会)に実見していただいた上で貴重なご教示を賜ったほか、小沢洋氏(君津都市文化財センター)には関連文献の紹介を含め多大なご助力を賜った。記して、感謝の意を表する次第である。

第2節 95-13・41・76次調査

1) 層序

i) はじめに

95-13・41・76次調査地はそれぞれ隣接しているので、一括して調査結果を報告する。層序については各層の遺存状態が良好であった95-41次調査地を中心に記述する。

ii) 層序(図76、図版14)

95-41次調査地の地山は、北西にある「馬池谷」の小支谷[大阪市文化財協会1999a]に向かって下がっている。地山が高い東区では現代の削平を受けており、近世以前の遺物包含層は残っていなかった。一方、地山が低い西区では、遺物包含層が南東で薄く、小支谷寄りの北西で比較的厚く残存していた。

第1層：現代盛土および現代作土である。基底面で井戸や土取り穴を検出した。

第2層：にぶい黄色(2.5Y6/3)シルト質極細粒砂からなる作土層で、平均層厚は20cm程度である。下面および基底面では、土壌や多数の耕作溝を検出した。長原2層に相当する。

第3層：明黄褐色(10YR6/6)シルト質極細粒砂からなる作土層で、平均層厚は10cm程度である。下面では多数の耕作溝を検出した。長原2層に相当する。以下の層については第10層を除き、西区にのみ分布する。

第4層：にぶい黄色(2.5Y6/3)シルト質極細粒砂からなる作土層で、平均層厚は15cm程度である。長原3層に相当する。

第5層：浅黄色(2.5Y7/3)極細粒砂質シルトからなる作土層で、平均層厚は15cm程度である。長原3層に相当する。

第6a層：にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト～砂質シルトからなる作土層で、南半は第6b層との境界が不明瞭になる。平均層厚は15cm程度である。下面では多数の踏み込み痕跡を検出した。長原4B層に相当する。

第6b層：灰黄褐色(10YR6/2)シルト～極細粒砂質シルトからなる作土層で、平均層厚は20cm程度である。下面では多数の踏み込み痕跡が検出された。長原4B層に相当する。

第7層：灰黄褐色(10YR6/2)シルト質粗粒砂からなる水成層で、西区の地山の高いところで踏み込み状に窪んだ部分にのみ見られる。長原5層に相当する可能性がある。

第8層：にぶい黄橙色(10YR6/3)細礫混りシルト層で、層厚はもっとも厚い部分で約

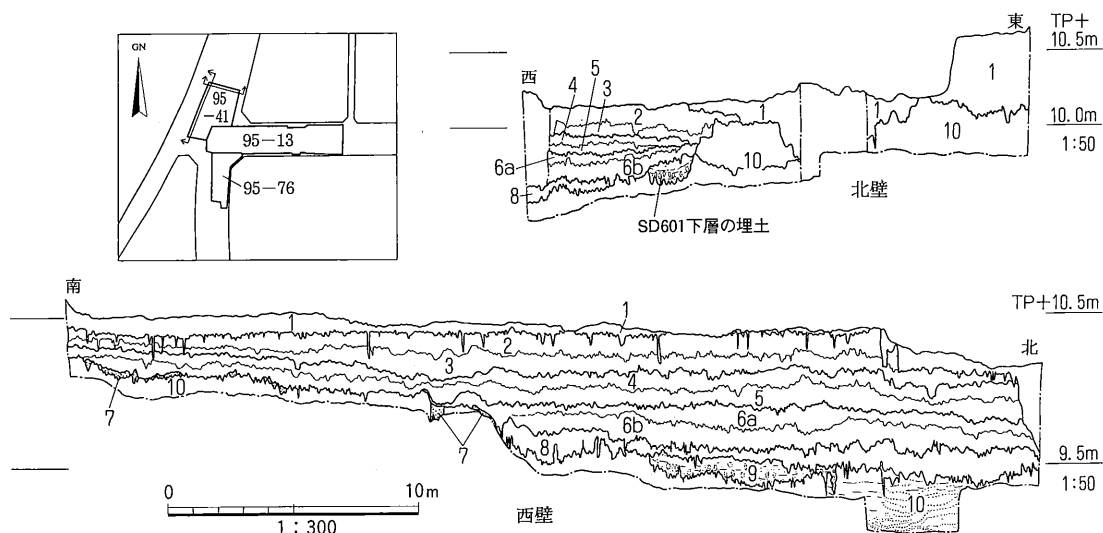


図76 95-41次調査地北壁・西壁地層断面

20cmである。西区の北西部にのみ分布する。長原6層に相当すると思われる。

第9層：にぶい黄褐色(10YR5/4)極細粒砂質シルト層である。西区北西部の段状に落ち込む部分に分布する。長原7層に相当する。

第10層：上部が黄褐色(10YR5/6)シルト質粘土～砂質シルト層で、下部が明黄褐色(10YR6/6)砂礫層である。長原15層に相当する。

一方、95-13・76次調査地の基本的な層序は、表土と現代耕土の下位に長原4層に相当する耕土の残欠である黄褐色粗粒砂混り極細～細粒砂層があり、その下位で地山が検出される。また遺構内および地山の窪み上には長原7層の残欠が観察される。

95-13次調査地の現代耕土直下の地形は、近世以降の造成や土取りによって東北方向に階段状に下がり、もっとも低い東北隅にのみ水成の青灰色粗粒砂が残存していた。この水成層も、包含する陶磁器片からみて17世紀後半以降に堆積したものである。黄褐色粗粒砂混り極細～細粒砂層の層厚は最大でも3cmほどで、本層上では上位の長原2層相当層を埋土とする耕作溝が確認されたほか、本層準の基底面では古墳時代と飛鳥時代の遺構が検出された。

地山の層相は、95-76次調査地では明黄褐色粗粒砂混り細粒砂～黄褐色シルト、95-13次調査地西部では明黄褐色中粒砂混りシルト、同調査地東部では灰白色粘土である。前二者は長原13層に、後者は長原14層以下の層準に比定されると考えられ、その標高は、もっとも高い95-13次調査地西南部で約10.8m、最も低い東北部で8.6mである。また、3件の

調査地の地山については1mグリッドを設定して、両刃草削り(通称：手ガリ)などを用いた任意分層発掘を行い微細遺物の発見に努めたが(図版17)、石器などは出土しなかった。

2) 各層出土の遺物(図77~79、図版47~49)

i) 第1層出土の遺物

重機掘削中に寛永通宝が1点出土している。

ii) 第2~3層出土の遺物(図78)

近世の陶磁器のほか、土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・瓦質土器を含む。**484**は堺搦鉢で、このほか備前焼・丹波焼の搦鉢が出土している。**485・486**は遊具のドロメンコである。混入とみられる須恵器片**487**の内面には、車輪文当て具の痕跡が観察される。このような須恵器は、これまでも数点が当遺跡で出土している[大阪市文化財協会1992・1998・1999bほか]。

iii) 第4~5層出土の遺物(図78、図版47)

土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・瓦質土器・布目瓦・サヌカイト剥片などを伴う。第4層出土の瓦器碗**468**は13世紀後半のものであろう。そのほか瓦質の三足羽釜脚部や、下位層からの混入とみられる須恵器甕**480**などが出土している。

iv) 第6a~6b層出土の遺物(図77・78、図版47・49)

出土遺物には、土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・瓦・円筒埴輪・サヌカイト剥片・鉄製品などがある。須恵器では、古墳時代から飛鳥時代にかけての資料が多数出土したが、いずれも下位層からの混入とみられる。古墳時代の資料としては、天井部に2段の列点文を巡らせる高杯蓋**474**や高杯脚**476**などTK216型式~ON46段階に属するもの、凹線間を波状文で飾り、TK47型式~MT15型式に属する器台**481**、円形スカシ孔を3方に配し、TK43型式~TK209型式に属する高杯脚**475**などがある。一方、天井部がヘラ切り未調整の杯蓋**471・473**をはじめ、甕**477**、小壺**478**などは飛鳥時代に属するものであろう。

鉄製鋌**467**は長さが1.1cmあり、脚の横断面はほぼ正方形である。95-76次調査地の長原4層相当層か

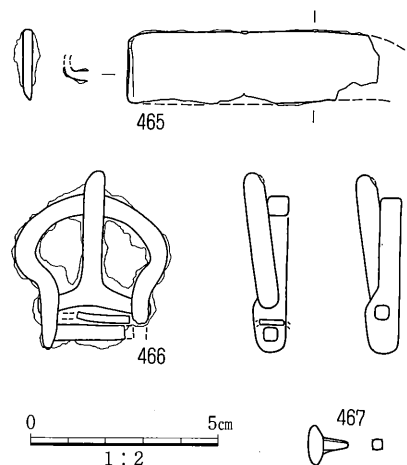


図77 包含層・遺構出土鉄製品
SD601(465)、第6a~6b層(467)、
95-76次調査地長原4層(466)

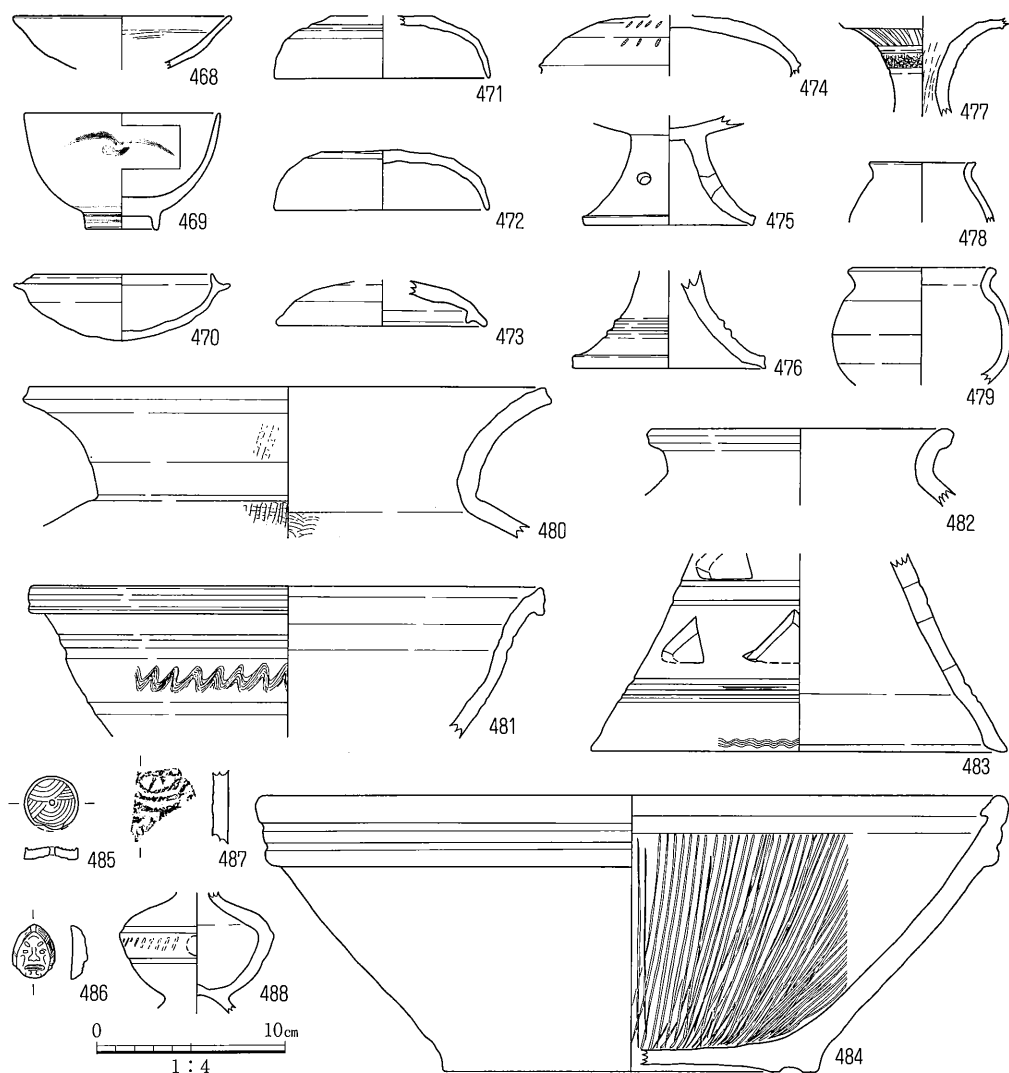


図78 各層出土遺物

第2～3層(484～487)、第4層(468・480)、第6a～6b層(471・473～478・481)、第8層(470・472・482)、攪乱(469・488)、95～13次調査地長原7層(479・483)

ら出土した鉄製鉸具466は、長さが4.8cmで、端部を薄くした帆立貝状の外枠に、T字形の刺金と横棒が組合わさるものである。X線写真では横棒を軸に取り巻いていたとみられる金属片が観察された。馬具の一部である可能性があり、時期を考える上では飛鳥時代の遺構であるSD602直上で出土している点が注目される。

v)第8層出土の遺物(図78、図版47)

土師器・須恵器・サヌカイト剥片などが出土した。須恵器では、底部が未調整の杯身470

や天井部が未調整の杯蓋472、甕482などTK217型式を中心とする資料が出土しているが、本来は本層基底面で検出された遺構に伴うものであろう。

そのほか、95-13次調査地の長原7層相当層からは、裾部に凹線と三角形スカシ孔を配し、下端部に稚拙な波状文を巡らせる器台483や、小壺479などの須恵器が出土している。

また、攪乱からの出土遺物としては、須恵器甕488や肥前系磁器碗469などがある。甕488は台の付く稀少な資料で、焼成は甘く、TK217型式前後のものか(図78、図版48)。

vi) 石器遺物(図79、図版49)

95-41次調査地を中心として各層から石器遺物が多数出土したが、いずれも遊離資料である。95-41次調査地では、サヌカイト製の石鏃AH175・AH209・AH261・AH276・AH299・AH540が出土した。以下、[菅榮太郎1995]の型式分類基準によれば、AH175は凹基無茎式石鏃で、B-2類に属する。基部と側縁の一部を欠損しており、最大長は21.3mm、重さ0.68gである。AH209は凸基無茎式石鏃で、G-2類に属する。切先を欠損しており、残存する最大長は28.9mm、重さ1.28gである。AH261は平面形が五角形をなす特徴的な平基無茎式石鏃である。切先を欠損しており、残存する最大長は23.0mm、重さ1.14gである。同様の資料は、これまでに長原9C層から出土している。AH276は逆刺を丸く仕上げる薄手の凹基無茎式石鏃で、B-2類に属する。基部を一部欠損しており、最大長は21.0mm、重さ0.60gである。AH299は逆刺を鋭く仕上げる凹基無茎式石鏃で、B-1類に属する。切先と基部の一部を欠損しており、残存する最大長は25.8mm、重さ0.77gである。AH540は逆刺を鋭く仕上げるB-1類の凹基無茎式石鏃で、風化が著しい。切先を欠損しており、残存する最大長は16.2mm、重さ0.51gである。95-13次調査地では、AB192・AB204・AB225・AB335が出土した。いずれもサヌカイト製である。AB192は逆刺を鋭く仕上げる凹基無茎式石鏃で、B-1類に属する。切先と側縁の一部を欠損しており、残存する最大長は26.8mm、重さ1.49gである。AB204は作用部の切先に近い側縁に屈曲があり、平面形が五角形を呈する平基無茎式石鏃で、F類に属する。基部と側縁の一部を欠損しており、最大長は25.5mm、重さ1.44gである。同様の資料は、これまでに長原9C層から出土している。AB225は作用部側縁が緩やかに外湾する平基無茎式石鏃であるが、E類とG類の間mediateな様相を示す。最大長は35.0mm、重さ1.99gと大型で、両面には先行剥離面を残し、調整の押圧剥離単位も大きい。AB335は平面形が柳葉形の円基無茎式石鏃で、G-2類に属する。基部を欠損しており、残存する最大長は30.9mm、重さ1.09gである。95-76次調査地では、凹基無茎式石鏃であるAB264が出土した。基部を欠損しており、残存する最大長

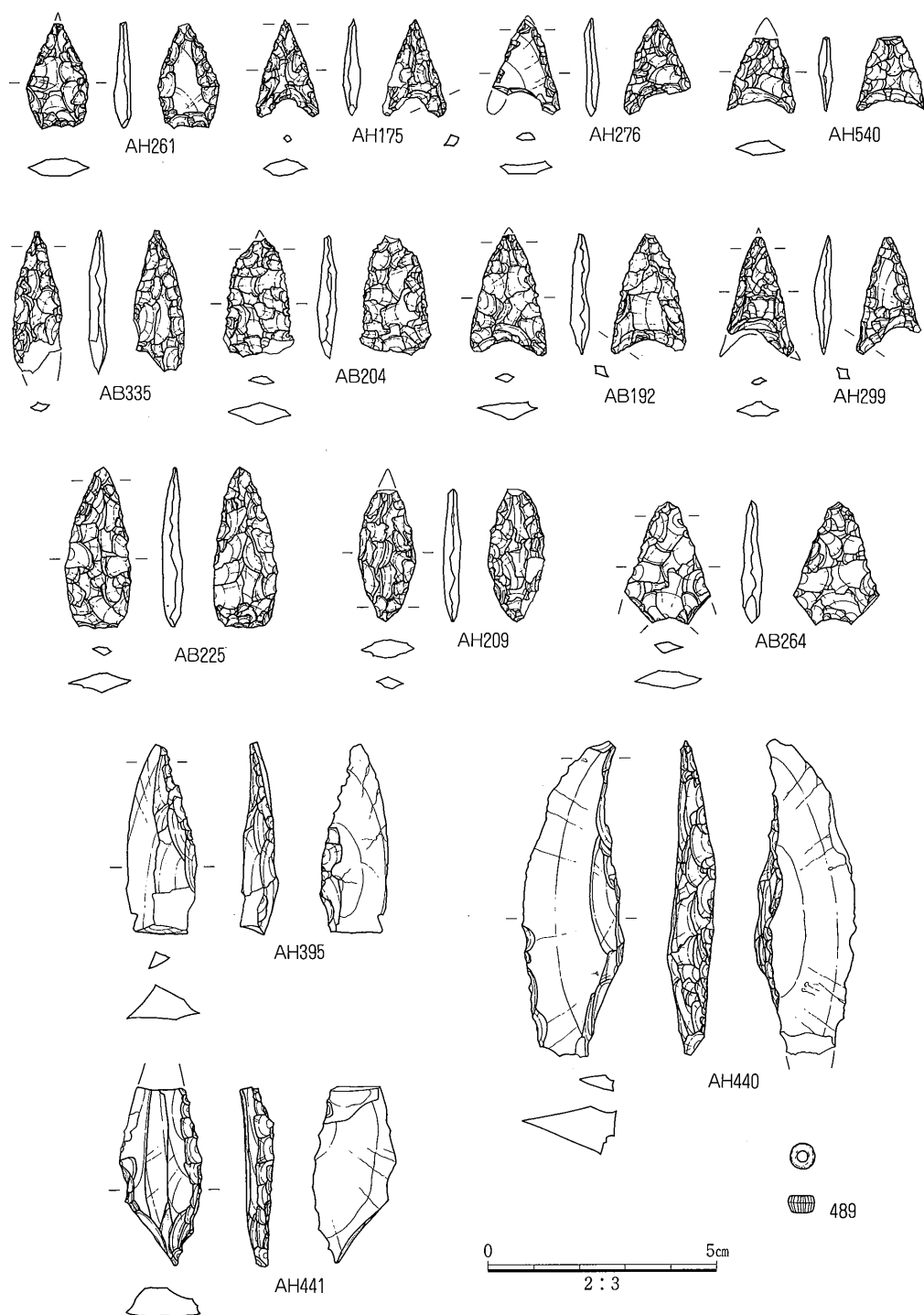


图79 包含層・遺構出土石器遺物

95-13次：長原4層(AB204・AB225・AB335)、長原7層(AB192) 95-41次：第2層下面耕作溝群(AH175)、SD601(AH395・AH440)、第3層(AH209)、第4層(AH261)、第5層(AH276・AH299)、第6層(489)、第7層(AH441・AH540) 95-76次：SD703(AB264)

は26.6mm、重さ1.61gである。チャート製の稀少な資料であり、B類に属する。形態からみて、これらは本来、AB335・AH209・AB225が長原8B～9A層(弥生時代中期～縄文時代晩期頃)に、AB204・AH261が長原9C層(縄文時代晩期～後期頃)に、AH299・AB192・AB264・AH175・AH276・AH540が長原12層(縄文時代中期頃)に属するものであろう。

ナイフ形石器は、95-41次調査地で3点が出土している。AH395は横形剥片を素材とした一側縁調整のナイフ形石器である。打面部が未加工のまま残されており、背部の調整は主に裏面から行われている。基端部を欠損しており、全体に風化が著しい。AH440は翼状剥片を素材としたとみられる一側縁調整の国府型ナイフ形石器である。基端部をわずかに欠損しており、刃角は33°を測る。表面左側縁下半部にも不規則な調整が施されている。AH441は横形剥片を素材とした一側縁調整のナイフ形石器である。先端部および基端部を欠損しており、背部の調整は裏面から行われている。表面の左側縁下部に細かな調整が施されていることから、二側縁調整のナイフ形石器であった可能性もある。

489は95-41次調査地で出土した滑石製白玉である。直径5.5mm、厚さは4.0mmあり、孔の径は2.3mmである。

3) 遺構とその遺物

i) 江戸～室町時代の遺構と遺物(図80、図版14)

95-41次調査地西区では井戸・土壇・耕作溝群・段状遺構などの遺構を検出した。

a. 井戸および土取り穴

第3・10層上位の第1層基底面および第2層上面では、土壇や井戸が検出された。土壇は、これまでも本調査地周辺で多く検出されており、近世あるいは近代の土取り穴とみられる。井戸からは砂目の唐津焼碗・炮烙・16世紀代の青花などが出土した。

b. 土壇

第10層上位の第2層基底面および第3層上面でSK201～204を検出した。これらの土壇は規模・形態ともほぼ同じで、長軸約1.5m、短軸約1.0m、深さ約0.5mである。いずれも地山ブロック混りの極細粒砂で埋戻されていた。

c. 耕作溝群

第2～5層の各層の下面で耕作溝群が検出された。第2層下面では、ほぼ南北方向(N25°E)のものが西半分の高い部分で、東西(N55°～65°W)方向のものが東半分の低い部分で見られる。これらの方向は、地形に制約された結果を示すものであろう。第3層下面で検

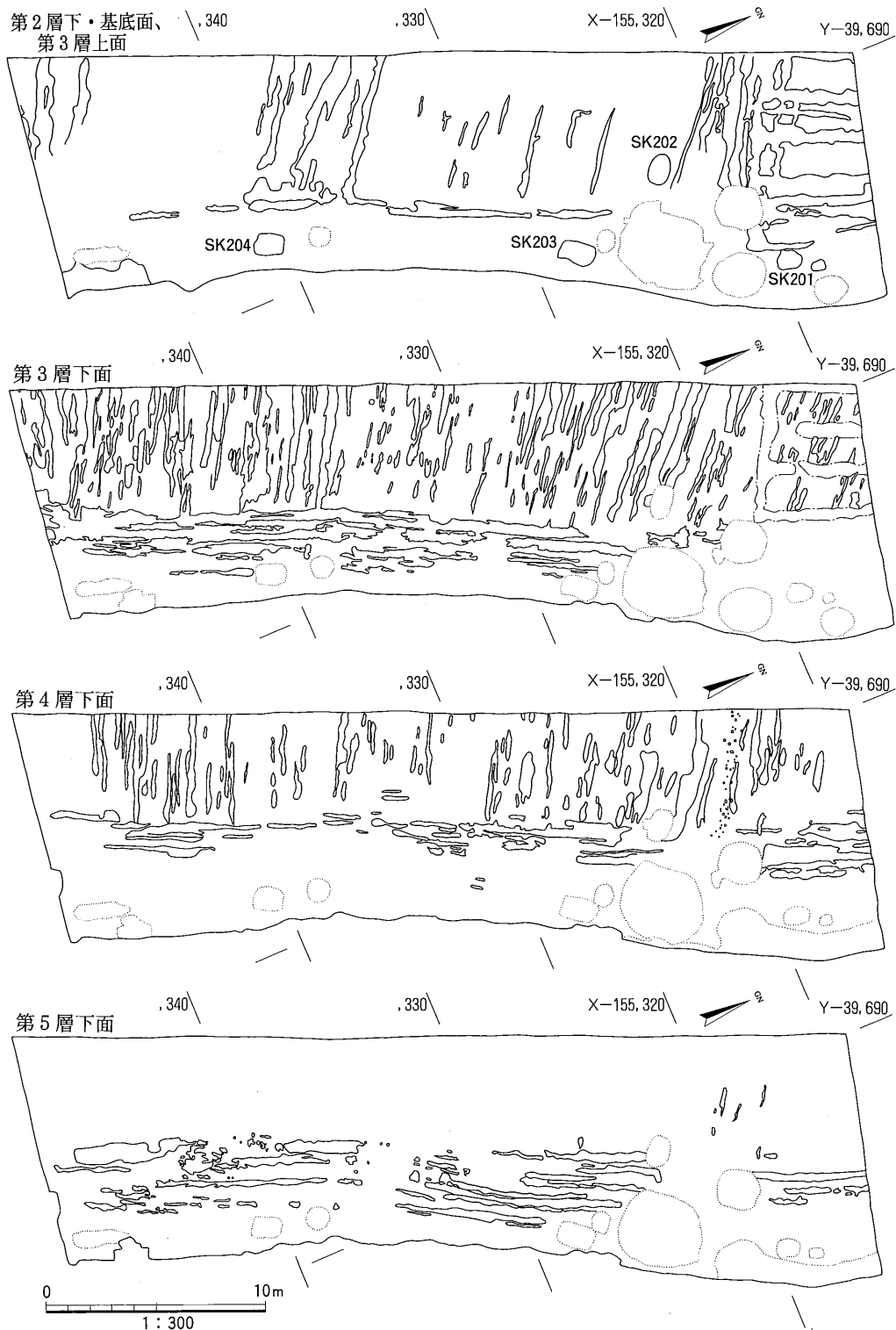


図80 95-41次調査地西区の各層検出遺構

出された、多数の南北および東西方向の耕作溝群は、第2層下面のものとほぼ方向を同じくする。第4層下面で検出された耕作溝群の方向は、南北方向のものが上位の層で確認された耕作溝とほぼ同じであるのに対し、東西方向のものはN70°Wと異なる。第5層下面の耕作溝群は上位層における耕作により残存状態が良くなかったが、残されたものから判断して、やはり南北および東西方向のものが存在したようである。

ii) 奈良時代の遺構と遺物(図81・82、図版15)

段状遺構SX601 第10層上位の第8層基底面において、SD601で囲まれた部分で検出された、高低差が10cm程度の段状の落込みである。奈良時代の須恵器が出土したSD601の上層の埋土と一連であったことから、この段が形成されたのも奈良時代頃であろう。

iii) 飛鳥時代の遺構と遺物

a. 溝

SD601(図77・81・82・84、図版14・15・47) 第10層上位の第8層基底面で検出された南北方向に走る溝で、西区中央付近で枝分れする。埋土は2層に分かれ、上層はにぶい黄～灰黄色シルト質細粒砂、下層は黄褐色細礫混りシルトからなる。枝分かれする溝は、切合い関係が認められないこと、下層の埋土や出土遺物に差異がなかったことから、同時期に存在していたものと考えられる。

遺物については、上層では杯B491など飛鳥時代末から奈良時代の須恵器が少量含まれ、下層では飛鳥Ⅰ～Ⅱを中心とした土師器・須恵器や鉄製鎌などが出土した。まず須恵器については杯・壺・甕などが出土している。杯身490・494・495のうち、完形の495は底部に「N」字状のヘラ記号が観察され、490は口径16.2cmとその大きさが目立つ。493は杯Gの蓋であろう。492は外方に強くふんばる高台をもち、杯Bもしくは壺の底部とみられる。497は直線的に、496は内湾ぎみに立上がる壺の口縁部で、498は口縁端部に面をもつ短頸壺の口頸部である。粗雑な作りの有蓋高杯499は低い立上がりをもつ。甕502は内外面にオリブ灰色の自然釉がかかり、体部内面上半部の当て具痕をなで消す。器壁を薄く仕上げる甕501の頸部には「十」字状のヘラ記号が観察される。土師器では、羽釜の鏝部500と甕503が出土した。503は内外面をナデ調整する薄手のもので、胎土に粒径の大きい長石を含む。465は残存長6.7cmの鉄製鎌刃で、大部分を錆に覆われるが、基部は柄に装着するために折り曲げていることがわかる。なお、溝の埋土からは、弥生土器片・国府型ナイフ形石器AH440なども出土している。

SD602・603(図81・83・88・89、図版18・47・48) それぞれ95-13・76次調査地の

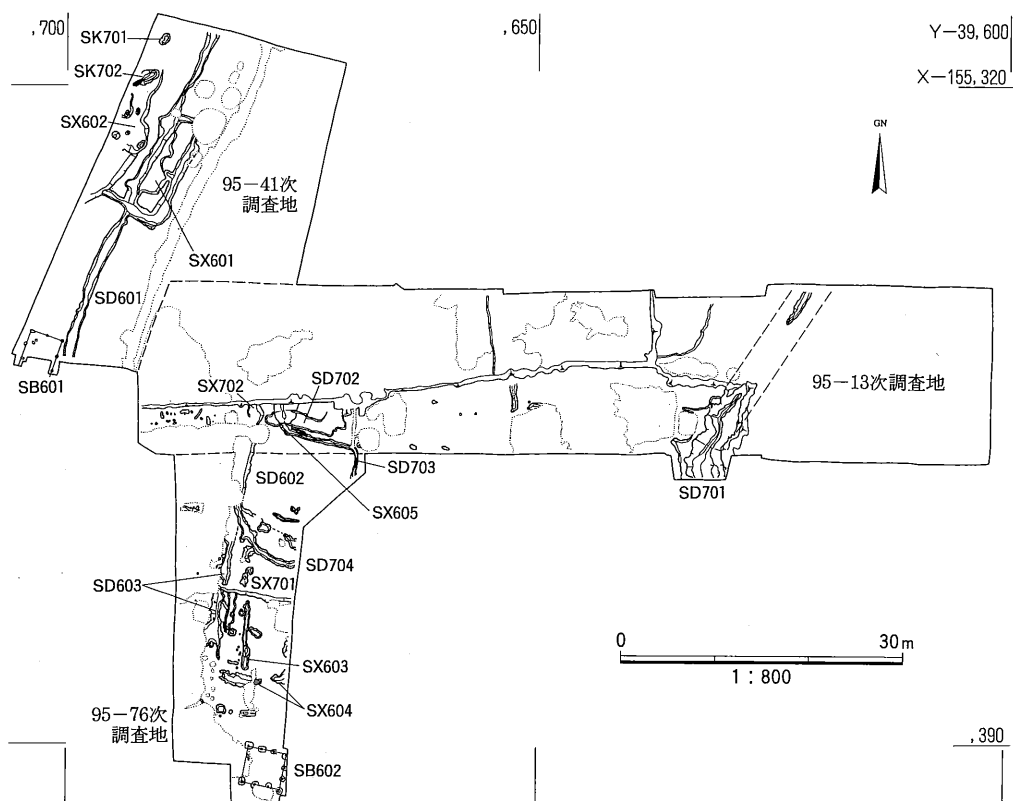


図81 95-13・41・76次調査地の奈良～古墳時代遺構

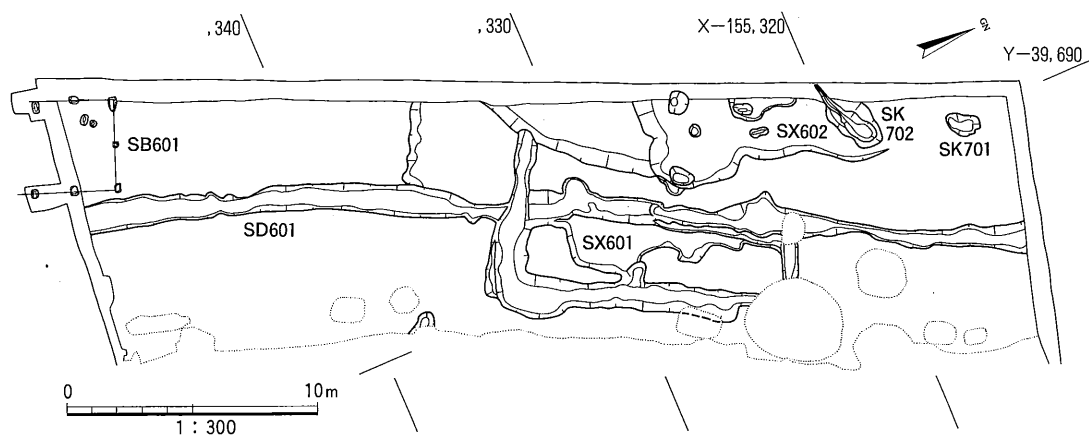


図82 95-41次調査地西区の奈良～古墳時代遺構

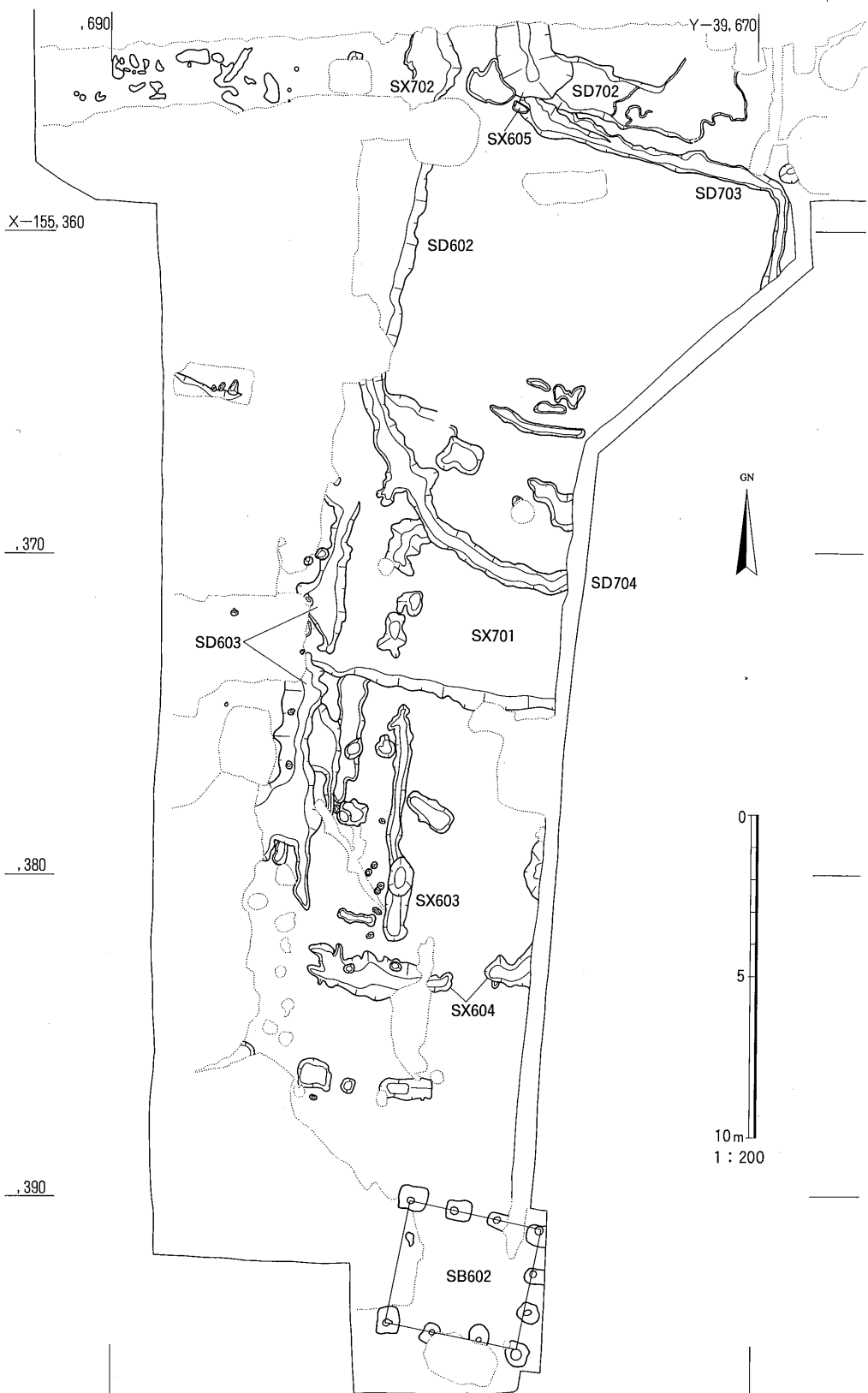


図83 95-13・76次調査地の飛鳥・古墳時代遺構

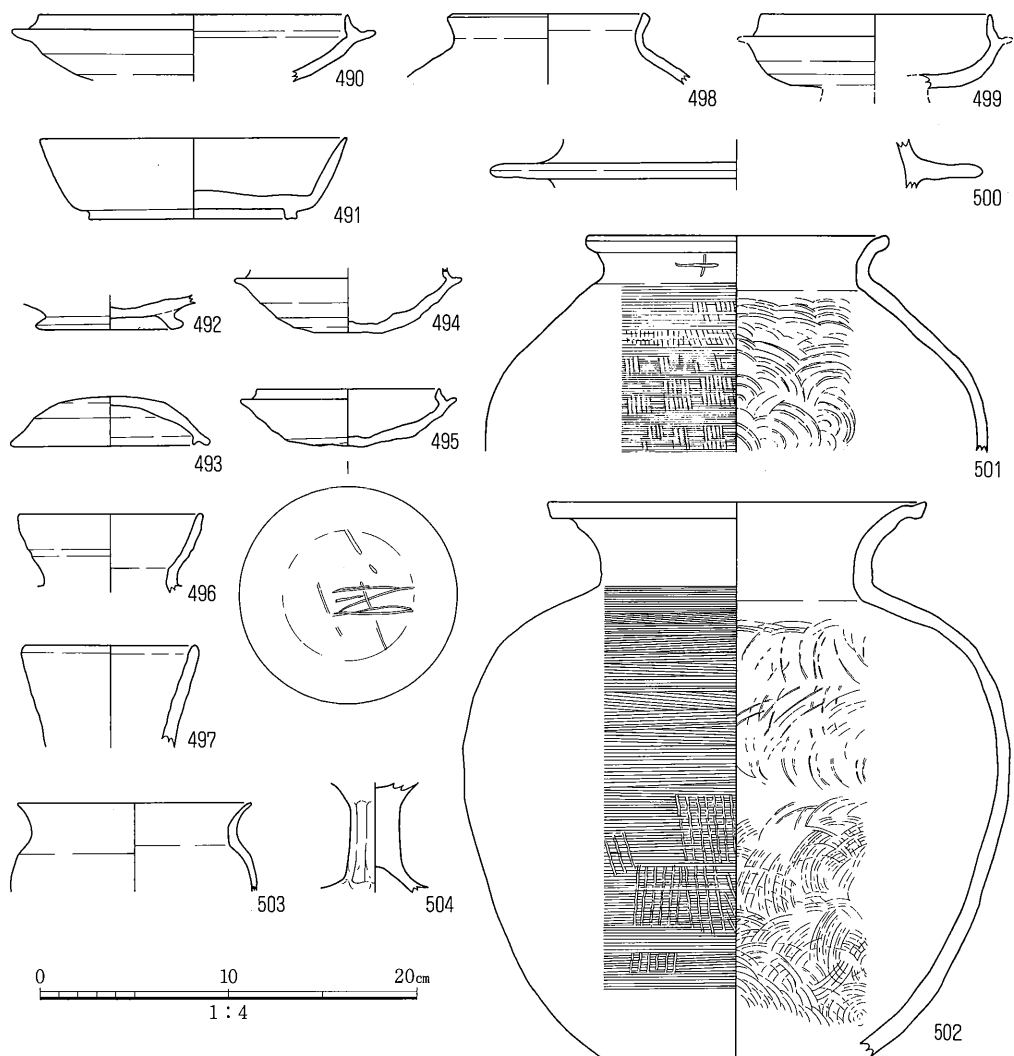


図84 95-41次調査地遺構出土遺物
SD601(490~503)、SX602(504)

境界と95-76次調査地の中央部で検出された遺構で、SD602の幅は2.5m以上、深さ0.25~0.30mである。にぶい黄褐色シルト~極細粒砂の埋土が共通することから、南北に延びる一連の溝と判断した。SD602から出土した須恵器のうち、杯身515・542はそれぞれ口径が10.3cm、12.5cmで、いずれも灰白色を呈し焼成は甘い。515の底部には長い直線状のヘラ記号が観察される。中凹みのつまみをもつ517と口径14.0cmの536はいずれも高杯の蓋とみられる。短頸壺545は、口径11.2cmで口縁端部を丸く肥厚させる。飛鳥Iを中心とするこれらの出土遺物からみて、本遺構の時期は飛鳥時代の早い段階に求めうる。

b. 段状遺構

SX602(図81・82・84、図版15)
第10層上位の第8層基底面で検出された、95-41次調査地の北西部にある不定形の段状の落込みである。本遺構の下面では土壌やピットが検出されたが、いずれも浅い。出土した土師器高杯脚504は飛鳥時代初頭のものであろう。

c. 掘立柱建物

SB601(図81・82・85、図版15)
95-41次調査地南西端の第10層上位の第4層基底面では、掘立柱

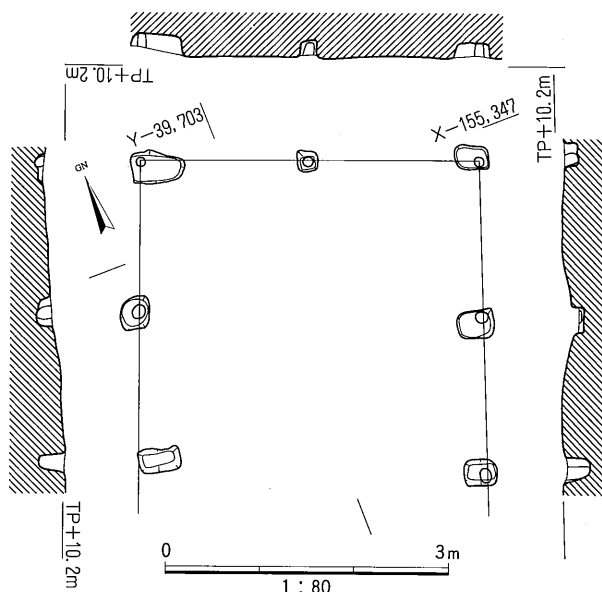


図85 SB601実測図

建物SB601が検出された。桁行が2間(3.50m)以上、梁行が2間(3.40m)の建物で、南側は調査地外に延びる。主軸の方位はN20°Eである。柱穴の平面形は側柱が一边0.30m程度、妻柱が一边0.20mの隅丸方形で、検出面からの深さはいずれも0.15m前後であった。大半の柱穴で直径0.10m程度の柱痕跡が確認された。柱穴の埋土は、いずれも地山層の偽礫による埋戻し土である。柱穴からは時期を決定することのできる遺物は出土しなかったが、上述した飛鳥時代の溝SD601と建物の主軸がほぼ平行であることから、同時期に属するものと考えられる。

SB602(図81・83・86、図版17) 95-76次調査地南東隅で検出された掘立柱建物で、東西4.18m、南北3.86mである。桁行・梁行ともに3間で、平均柱間距離は1.34mを測る。主軸の方位はN11.5°Eである。柱穴の平面形態は長方形に近いものが多く、長辺は0.50~0.80mを測る。断面観察によると、柱痕跡は直径0.20m前後と建物規模に比して比較的太く、柱間距離も短いことから、床束の柱穴が削平された総柱建物であると思われる。

年代を判断できる遺物は柱穴から出土していないが、柱穴の平面形態や、主軸が飛鳥時代の溝とみられるSD602の方向とほぼ等しいことなどからみて、飛鳥時代のものと考えられる。

これらの遺構のほか、95-13次調査地のSX605や95-76次調査地のSX603・604などの不定形の落込みについても、出土した遺物からみていずれも飛鳥時代に属するものである

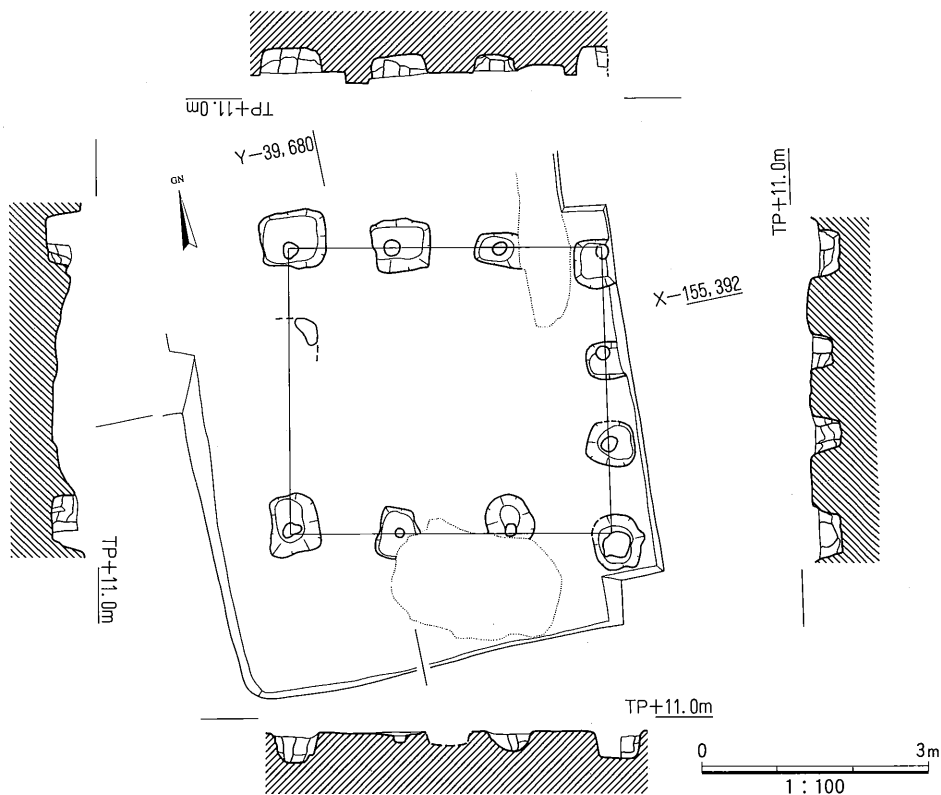


図86 SB602実測図

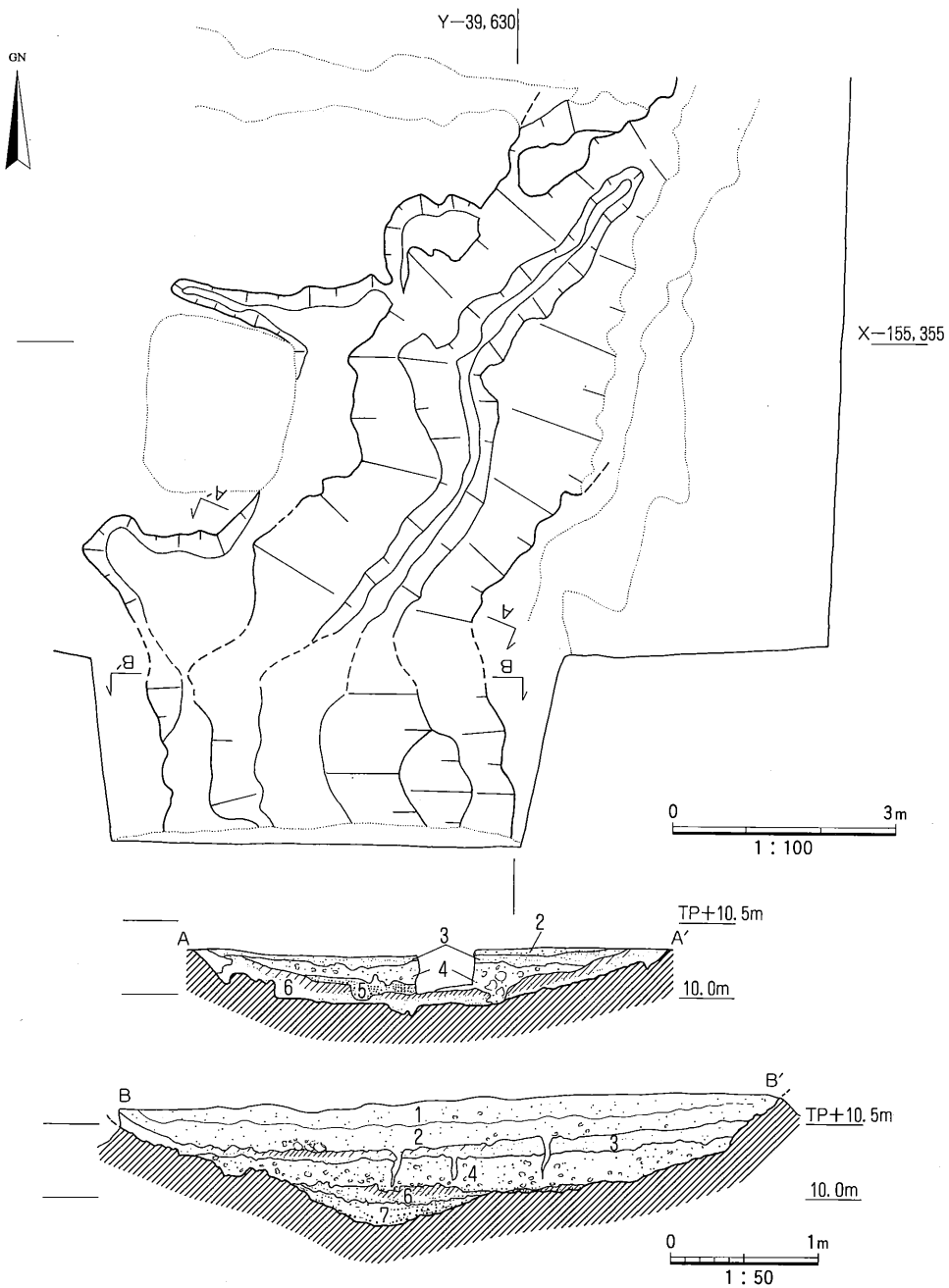
と思われる。SX605出土の土師器高杯525は、口径15.1cmで碗形の杯部内面には放射状暗文がみられる。SX603出土の須恵器甕543は、外方に直線的に開く口縁部内外面をナデ、体部をタタキ調整し、体部内面には当て具痕が残る。SX604出土の須恵器甕544は、丸く肥厚させる口縁部の内外面をナデ調整し、肩部内面には当て具痕が残る(図81・83・88・89、図版47・48)。

iv) 古墳時代の遺構と遺物

a. 溝

SD701(図81・87・88、図版18・46) 95-13次調査地第3区の東部で検出されたSD701は、幅約4.8m、深さ約0.8mで、近世の造成により上部を破壊されているが、北東方向に延びるものと考えられる。埋土は7層に分層された。3・5・6・7層は自然堆積の層である。3・5・6層は徐々に土砂が流入して堆積したとみられる地層で、暗色帯を形成する。1・2・4層は砂質土の偽礫を含む埋戻し土である。

最下層の7層から円筒埴輪530が出土したほか、531や鱗付の529などの円筒埴輪が各層



- | | |
|-------------------------|--------------------------|
| 1 : にぶい黄色細粒砂とシルト (埋戻し土) | 2 : 明黄褐色細粒砂とシルト (埋戻し土) |
| 3 : にぶい黄褐色極細粒砂 (水成層) | 4 : 黄褐色粘土質シルト～細粒砂 (埋戻し土) |
| 5 : にぶい黄褐色中～粗粒砂 (水成層) | 6 : 灰黄褐色粘土質極細粒砂 (水成層) |
| 7 : にぶい黄褐色シルト | |

図87 SD701実測図

から出土している。いずれも器面は磨耗しているが、調整方法が確認できた531では、外面にタテハケを、内面にユビナデを施す。これらの円筒埴輪は、突出度の高い突帯をもつ有黒斑の川西編年Ⅱ～Ⅲ期に属するものであることから、溝の年代は4世紀後半～5世紀前半頃と考えられる。

1・2層からは、奈良時代に降る土師器の高杯524が出土しており、溝は奈良時代に埋戻されたものとみられる。また、下位層からの混入とみられる須恵器甕523はTK23型式に属するものであろう。3層からはTK208型式に属する須恵器杯蓋507・508が出土している。7層からは混入とみられる弥生土器が出土しており、胎土中に多量の角閃石を含む528は、口縁端部を上下に肥厚させる弥生時代中期の生駒西麓産の壺である。526・527は、胎土中に粒径の大きい長石を多量に含み、同一個体とみられる。頸部下にヘラ描直線文を巡らす弥生時代前期後半の甕であろう。

SD702(図81・83・88、図版18・19・46・47) 95-13次調査地第③区の西部で検出された幅約2.0～2.5m、深さ0.05～0.5mの溝で、東西で鈍角に北方へ屈曲する。埋土はにぶい黄橙色シルトから極細粒砂で、西の屈曲部付近で急に深さを増す。東の屈曲部付近では須恵器がまとまって出土した。杯蓋505・506はそれぞれ口径が15.5cmと14.8cmで、杯身509～513は口径12.8～14.0cmであり、口縁と立上りの端部は、丸くおさめる512・513を除き内傾し、505・506・509・510は段をなす。509と完形の512は焼成良好で堅緻に仕上げられており、506の天井部内面と509の底部内面の中央に、また513の底部内面には同心円状に、当て具痕が観察される。ヘラケズリ方向は506・510が時計回り、505・512・513は反時計回りである。長脚の無蓋高杯519・520は、ともに口径10cm前後の歪んだ杯部をもち、長方形のスカシ孔を3方に配する。体部上半をカキメ、下半をヘラケズリで調整する短頸壺522とその蓋521は、灰白色を呈する自然釉のかかり具合から蓋をかぶせた状態で焼成されたと考えられる。これらの須恵器は、いずれもMT15型式～TK10型式に属する。

SD703・704・SX702(図81・83・88、図版16・18・19) SD703は幅約0.4mで深さが約0.3m、SD704は幅約0.5mで深さが約0.1mの溝で、95-13次調査地第3区の西部で検出された。埋土は2層に分れ、上層は偽礫を含み、埋戻された形跡がある。SD703の西方はSD702に切られ、東方は直角に屈曲して南の95-76調査地に続くが、埋土の状況からみてSD704と一連の遺構である可能性が高い。SD704は上部をSX701とSD602によって破壊されており、それらの遺構の基底面で検出された。SD703からは杯身514、高杯蓋516などの須恵器が出土している。口径13.1cmで立上りの端部がやや丸みをおびる514はMT15型

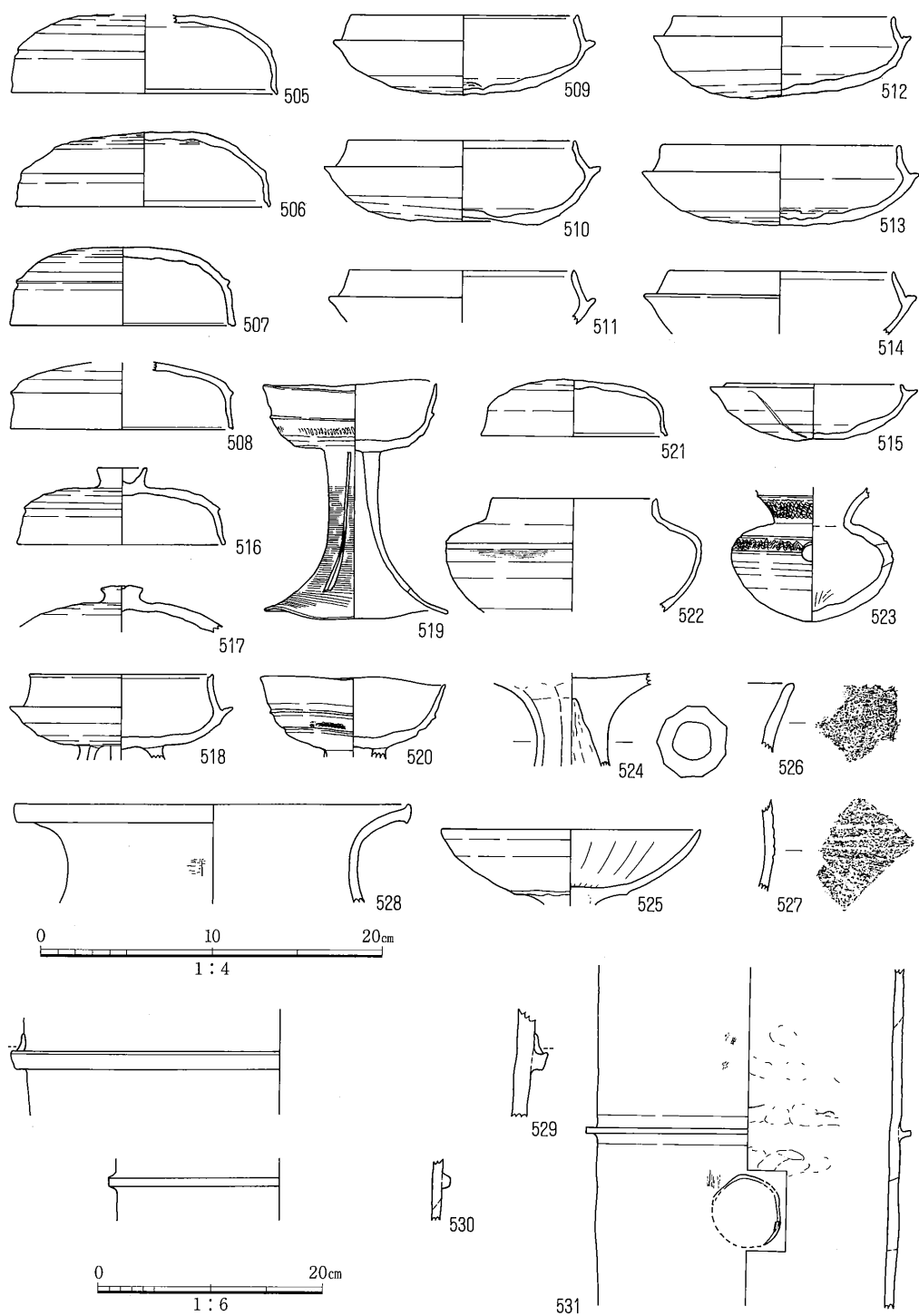


図88 95-13次調査地遺構出土遺物

SD602(515・517)、SX605(525)、SD701(507・508・523・524・526~531)、SD702(505・506・509~513・519~522)、SD703(514・516)、SX702(518)

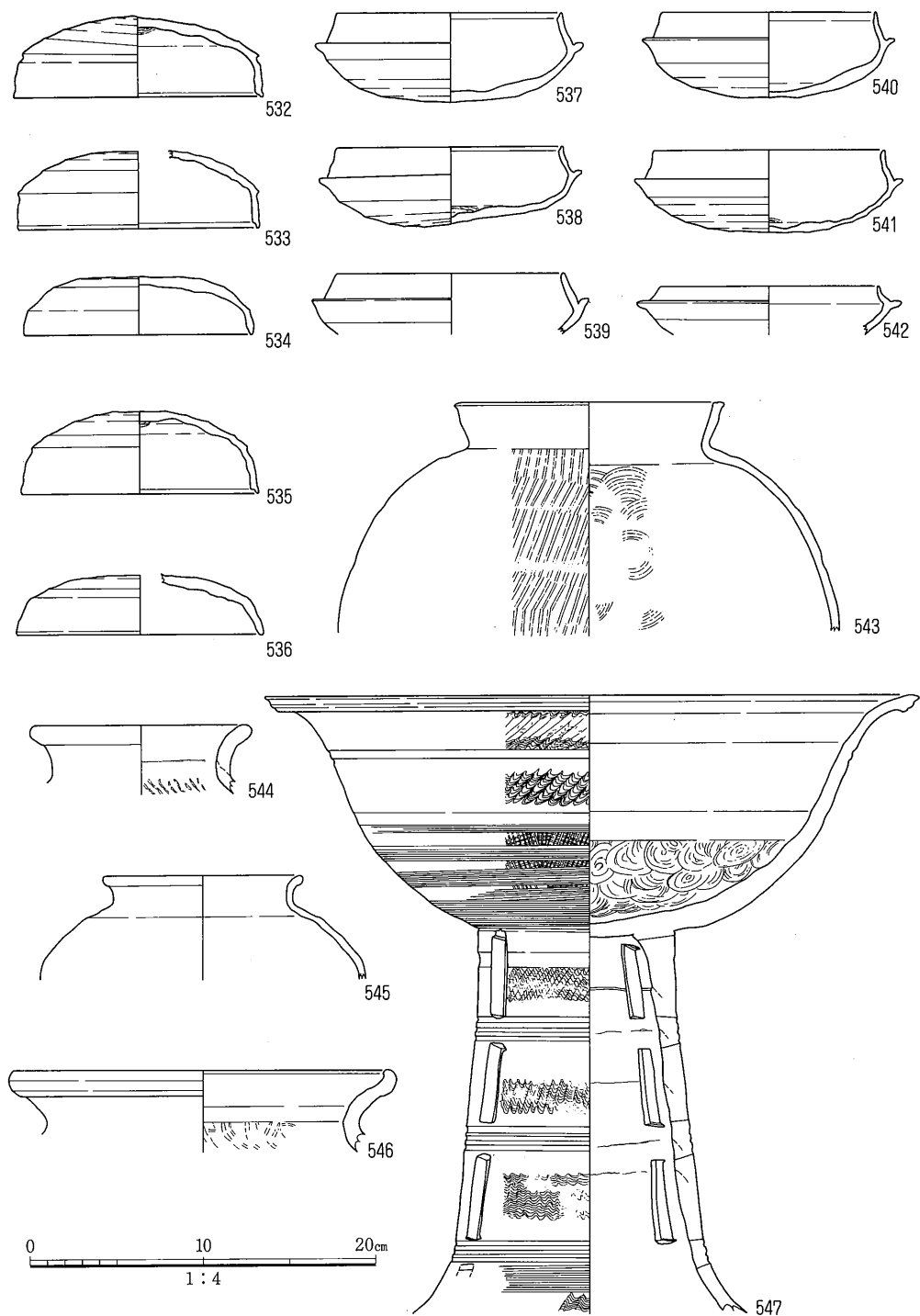


图89 95—76次調査地遺構出土遺物
SD602(536・542・545)、SX603(543)、SX604(544)、SX701(532~535・537~541・546・547)

式～TK10型式に属する。中凹みのつまみをもち口径12.0cmを測る516は天井部が時計回りのヘラケズリにより調整されており、TK208型式～TK23型式に属する。遺構の時期については、上部を破壊するSD702・SX701からMT15型式～TK10型式の須恵器が出土していること、SD703と一連の遺構とみられる不定形土壙SX702からTK23型式～TK47型式の須恵器高杯518が出土していることなどから、5世紀後半と考えられる。

b. 土壙(図81・82、図版15)

SK701 95-41次調査地北西隅の、第10層上位の第8層基底面で検出された平面楕円形の土壙である。長径1.2m、短径0.7m、深さ0.2mで、古墳時代の須恵器の細片が出土した。

SK702 第10層上位の第9層基底面で検出された、2段落ちの土壙である。検出面の長径が3.0m、短径1.5m、2段目が長径1.5m、短径0.6m、検出面からの深さは0.25mで西側に幅0.2mの溝が延びる。土師器・須恵器を伴うが、時期を決定できる遺物は出土していない。

c. 用途不明遺構(図81・83・89、図版16・48)

SX701は、95-76次調査地の中央東寄りを東西に帯状に延びる落込みで、幅約4.5m、深さ約0.1mを測る。埋土は黄灰色中粒砂混り細粒砂である。出土遺物は須恵器の高杯・器台片の多さが目立つ。北側の肩部で横倒しの状態で出土した須恵器器台547は、4方に長方形のスカシ孔を配し、波状文と凹線で杯部と脚部外面を飾る。杯部内面下半には当て具痕を残す。その周辺から出土した多数の須恵器蓋杯のうち、杯蓋532・533・535は口径13.7～14.4cm、杯身537～541は口径12.3～13.3cmで、いずれも灰白色を呈し焼成が甘く、ヘラケズリ範囲が比較的に広いという共通した特徴を示す。立上がりの端部は539・541が丸くおさめるほかは、段をなす。ヘラケズリ方向は、532・537・540が時計回り、533・535・538・539・541が反時計回りで、532・535の天井部と538・541の底部の内面には当て具痕が残る。須恵器甕546は口径21.7cmで、口縁端部を内側にやや肥厚させており、体部内面には当て具痕が残る。これらの須恵器は、MT15型式～TK10型式の特徴をもつ。TK209型式に属する杯蓋534は上層からの混入とみられる。

4) 小結

地層が削平、攪乱された部分の多い中で、95-41次調査地西区では、比較的良好な状態で残されていた各時期の包含層を観察することができた。調査地は「馬池谷」の西側に位置するが、地山の傾斜は「馬池谷」ではなく、NG93-82次調査地で検出されたその小支谷に

向っていることが確認された。第2～5層下面で検出された中近世の耕作溝の方向が正方位でないのは、条里地割が設定された後もこの傾斜に規制されたためであろう。

遺構については、まず川西編年Ⅱ～Ⅲ期の円筒埴輪を伴うSD701が検出されており、注目される。本調査地の周辺地域は、これまでに得られた当該時期の調査成果が乏しく、また長原古墳群では、同時期の円筒埴輪を持つ塚ノ本古墳、一ヶ塚古墳、長原40号・176号墳、高廻り1・2号墳などが造営されているのに対し、古墳の分布の空白地域となっている。一方、調査地の西北には花塚山古墳をはじめとする古墳時代中期の古墳群が存在した可能性が指摘されており[長山雅一1988]、周辺では有黒斑の鳥形埴輪や合子形埴輪が出土している。現時点では、溝の性格や、円筒埴輪出土の意味を積極的に評価することは困難であるが、今後はそれらの古墳群との関係を踏まえた上で資料の蓄積を進めて行く必要であろう、

次に、飛鳥時代の溝とみられる遺構については、SD601とSD602が各々隣接する掘立柱建物の方位と合致していることから、それらの区画に係る施設である可能性が強い。SB601やSB602など掘立柱建物の評価については、章末で詳述することとする。

遺物については、95-76次調査地のSX701から出土した、MT15型式～TK10型式に属する土器群が注目される。これまでの調査成果により、当遺跡からは叩き具と当て具がセットで出土するなど、この段階の須恵器が当地域内で自給されていた可能性も示唆されており[大阪市文化財協会1993]、焼成や調整の面で共通した特徴をもつこれらの土器は、編年や生産地を考える上で貴重な資料となりうるといえよう。

第3節 95－49次調査

1) 層序(図90)

「馬池谷」の東側斜面の一角に当る本調査地では、現代耕土以下の各層が良好に堆積している状況が観察された。

第0層：現代盛土で、層厚は約70cmである。長原0層に相当する。

第1層：現代作土で長原1層に相当する。層厚は10cm未満で調査地の一部に残存する。

第2a層：オリーブ褐色含礫細～中粒砂層である。層厚20cm前後で、調査地のほぼ全域に分布するが、水成層を部分的に挟んでおり細分される可能性がある。近世の陶磁器等を含み、長原2層に相当する作土層であると思われる。

第2b層：にぶい黄褐色礫質粗粒砂層で、層厚は10cm未満である。調査地の一部にのみ残存する水成層で、長原2層に相当するとみられる。

第3a層：オリーブ褐色含礫シルト質細～中粒砂層で、層厚は10～15cmである。調査地のほぼ全域に分布する作土層で、瓦質土器・中世陶器などを含み長原3層に相当する。

第3b層：オリーブ褐～黄褐色礫質粗粒砂層で、層厚は最大50cm程度である。下位の作土層起源のブロックを含む。調査地の中央部を中心に分布する水成層で、下位層を大きく削込む自然流路の埋土となっている。長原3層に相当すると思われる。

第3c層：黄褐色シルト質細粒砂層で、第3b層で削込まれる範囲以外に分布する作土層である。層厚は15cm程度である。瓦質土器や馬歯が出土し、長原3層に相当すると思われる。下面および基底面では耕作に伴う溝を確認している。

第4a層：にぶい黄色細粒砂質シルト層で、層厚は10～25cmある。第4d層が分布しないところでは厚く見られ、調査地の南半を中心に存在する作土層である。長原4Bi層に相当する可能性がある。

第4b層：黄褐色細粒砂層で、層厚は15cm未満である。第4a層と同様の分布状況を示す作土層で、長原4Bi層に相当する可能性がある。

第4c層：にぶい黄褐色細粒砂層で、層厚約30cmの作土層である。NG93－34次調査の成果をもとにすると島島の盛土であると考えられる。調査地のほぼ中央とやや北寄りに分布し、島島もその範囲内に存在したものとみられるが、規模などは不明である。

第4d層：にぶい黄褐色極細～細粒砂層で、層厚10cm前後の水成層である。調査地北半に

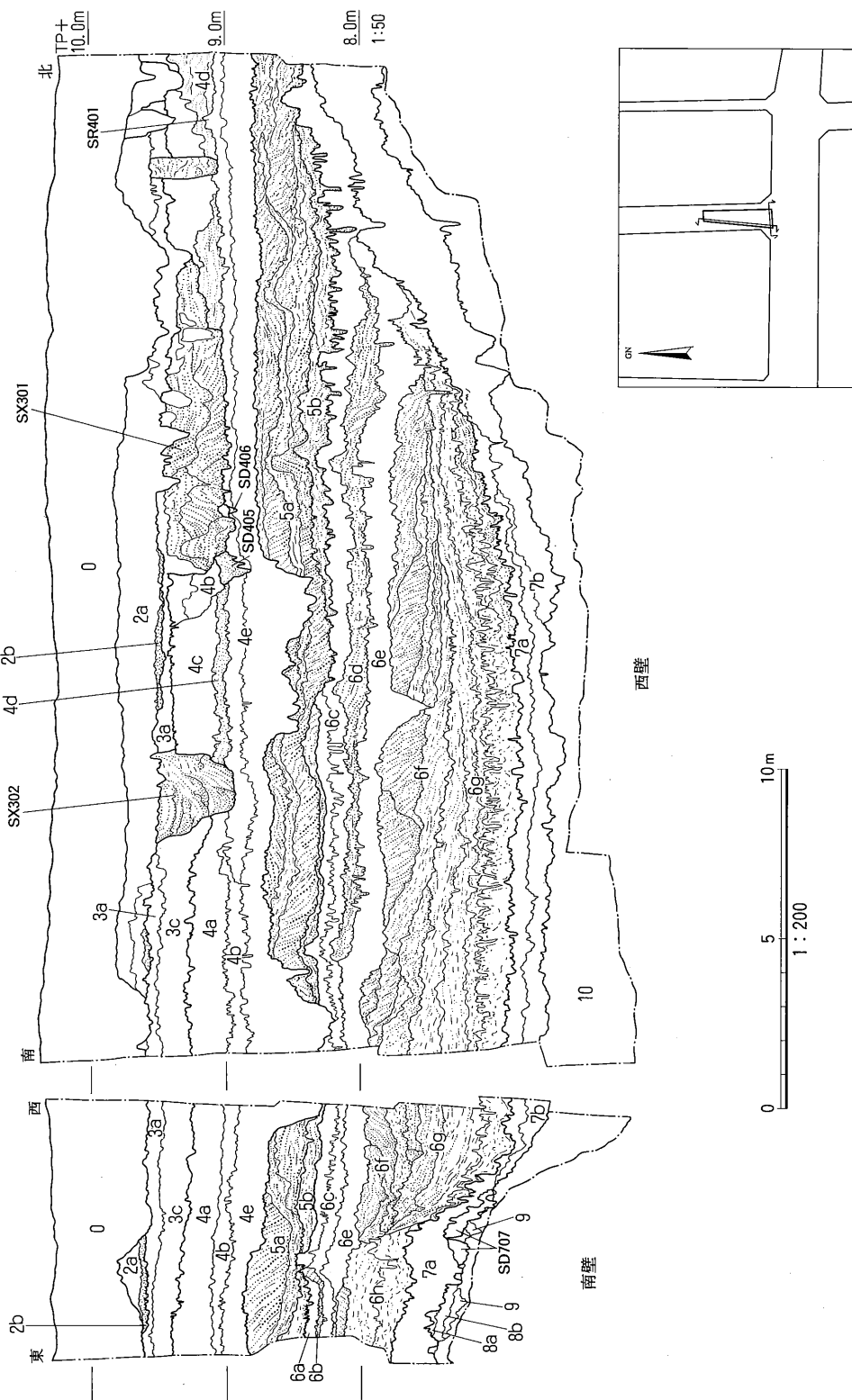


图90 南壁·西壁地层断面

おもに分布し、南半では上層段階で作土化されたためか検出されなかった。

第4e層：黄褐～灰オリーブ色シルト質細粒砂層である。調査地のほぼ全域に分布する作土層で、層厚は平均30cmである。上面では東西方向の畦畔を検出した。一部で大きく下層を作土化する部分が見られる。出土した瓦器などから長原4Bi層に相当すると思われる。

第5a層：にぶい黄褐～オリーブ灰色の細粒砂～砂礫層で、調査地の全域に堆積する水成層である。層厚は最大50cmで、長原5A層に相当する。

第5b層：オリーブ黄～黄褐色の細～中粒砂層で、調査地のほぼ全域に分布している水成層である。層厚は10cm程度である。長原5B層に当る。

第6a層：オリーブ灰色細粒砂質シルト層で、調査地の南部東半にのみ残存していた作土層である。層厚は最大10cmである。長原6A層に相当すると思われる。

第6b層：オリーブ灰色粗粒砂層で、層厚は10cm未満である。第6a層と同様、おもに調査地の南東部に分布する。

第6c層：オリーブ灰色細粒砂質シルト層で、調査地の全域に分布する作土層である。層厚は10cmほどで、8世紀代の土師器・須恵器を含む。

第6d層：オリーブ灰色中～粗粒砂層で、調査地中央部の谷地形の内部に厚く堆積する水成層である。層厚は10～15cmである。

第6e層：オリーブ灰色含礫シルト質細粒砂層で、調査地のほぼ全域に分布する。層厚は15～25cmあり、上面では畦畔と段状の落込みを検出した。長原6A層に相当する作土層と思われる。

第6f層：オリーブ灰色中～粗粒砂層で、調査地の谷地形の内部におもに分布する水成層である。層厚は10～50cmである。長原6Aii層に相当すると思われる。

第6g層：暗オリーブ灰～オリーブ灰色の細～粗粒砂質シルト層で、調査地の谷地形の内部で特に厚く堆積している水成層である。植物遺体をラミナ状に多く含んでいる。層厚は最大で50cmあまりである。長原6Aii層に相当すると思われる。

第6h層：オリーブ黒色砂質シルト層で、層厚は40cmほどである。長原6Aii層に相当する水成層と考えられる。

第7a層：暗オリーブ褐色粘土質シルト層で、調査地のほぼ全域に分布する暗色化した層である。層厚は10～20cmで、古墳時代の土師器や須恵器を多数含み、長原7B層に相当する。

第7b層：黒褐色含礫粘土質シルト層で、おもに調査地の谷地形の内部や遺構内部に堆積する暗色化した地層である。層厚は10～20cmで、古墳時代の土器を含み、長原7B層に相当

すると考えられる。調査地の北部など第7a層との境界が不明瞭となる部分については、一括して第7層として記述する。

第8a層：オリブ黄色細粒砂層である。調査地南東部を中心に分布し、長原12/13層漸移帯に相当するとみられる。

第8b層：オリブ黄色極細～細粒砂層である。調査地の南東部にのみ分布し、長原13A・B層に相当すると思われる。

第9層：灰オリブ色礫質粘土で、調査地の一部に残存する。長原13C層に相当する。

第10層：オリブ灰～暗緑灰色砂礫層で、長原16層に相当する。

2) 各層出土の遺物

i) 第2層出土の遺物

18世紀代の肥前系・瀬戸美濃系の陶磁器や堺播鉢などが出土している。

ii) 第3a～3c層出土の遺物(図92)

14世紀代の東播系須恵器播鉢・瓦器・瓦質土器・瓦などが出土した。554は瓦質土器の羽釜で、15世紀代のものとみられる。

iii) 第4a～4e層出土の遺物(図92)

土師器・黒色土器・瓦器や12世紀代の中国製と思われる白磁などが出土した。549は第4a層出土で13世紀後半に、548は第4e層出土で13世紀前半に属する和泉型の瓦器碗である。第4e層から出土した土師器皿550は、強いヨコナデにより口縁部が外反する。

iv) 第6a～6h層出土の遺物(図92、写真6、図版50)

平城宮土器Ⅰ～Ⅱを中心とする土師器・須恵器が出土している。遺物からは、各層の年代差は明確ではない。第6e層出土の土師器皿A552と、第6f層出土の土師器高杯551は平城宮土器Ⅱ前後のものと思われる。第6h層出土の土師器杯A559は飛鳥Ⅳ～Ⅴ、須恵器杯B556・杯B蓋557・土師器皿A558は平城宮土器Ⅰ～Ⅱに属するののものであろう。そのほか須恵器甕560や平城宮土器Ⅲ前後のものと思われる完形の土師器杯A555が出土している。また薄い板状の鉄片587が第6h層から出土しているが、本来の形状や用途は不明である。

v) 第7a層出土の遺物(図91・92・97、写真3・4、図版50・51)

古墳時代中期～後期前半の多数の土師器・須恵器や、製塩土器・有孔円板・馬歯などが出土した。須恵器では、蓋杯・把手付碗がある。立上がり端部が段をなし、時計回りのヘラケズリを施す杯身590はTK23型式～TK47型式に属する。杯蓋588・589のうち、588の

天井部には「×」印状のヘラ記号が深く刻まれ(写真3)、内面には有機物が付着する。器表面には焼成時に胎土中から噴き出した黒色粒が多数観察されたが、成分は不明である。両者ともにヘラケズリ方向は反時計回りであり、TK10型式～MT85型式に属する。把手付碗594・595の内面には自然釉がかかる。594は耳状把手上部に豆粒状の装飾を付したもので、595と比べ凸帯が鋭く、精緻な作りである。いずれも底部外面の調整は静止ヘラケズリである。594はTK208型式、595はTK23型式に属するものであろう。



588

写真3 杯蓋588のヘラ記号

土師器では、甕561～566のうち、563～566が長胴甕で、563・564は同一個体であると思われる。いずれも体部外面をハケ、内面をヘラケズリで調整する。口縁部の調整は、562・565が内外面ともにナデで、563はハケのあと先端部のみナデ、561・566は外面がナデ、内面がハケである。



567

写真4 滑石製有孔円板

滑石製有孔円板567は残存部の厚さが0.47cmで、2個所に穿たれた孔は、図91の右側の面から穿孔されている。孔径は、穿孔した面では0.23cm、裏面では0.21cmである。表裏面および側面に残る削痕は、大まかに方向を揃え施されており、その単位は側面に施されたものがより粗い。側面には、自然面が一部に残る。復元形は長楕円形になると考えられる。

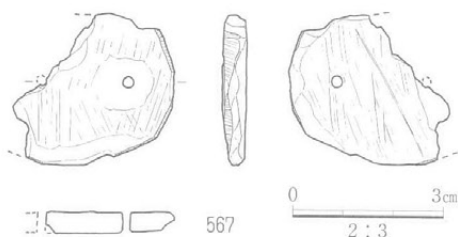


図91 滑石製有孔円板実測図

vi) 第7b層出土の遺物(図97、図版51・52)

古墳時代中期後半の土師器や須恵器、製塩土器などが多数出土した。まず須恵器では、精緻な造りで受部上端に自然釉がかかる杯身591がTK208型式～TK23型式、592はTK23型式に属するとみられ、いずれもヘラケズリ方向は時計回りである。把手付碗596もそれらと同時期のものであろう。甕のうち、599は他の資料と異なり内外面とも灰赤色を呈する。600はTK23型式～TK47型式に属するものであろう。提瓶604は体部中央を塞いだ粘土板が一部剥離しており、接合の方法がよく観察できる。MT15型式～TK10型式のものか。

土師器では、長胴甕605と壺602が出土している。甕605はナデ調整する口縁部外面を除

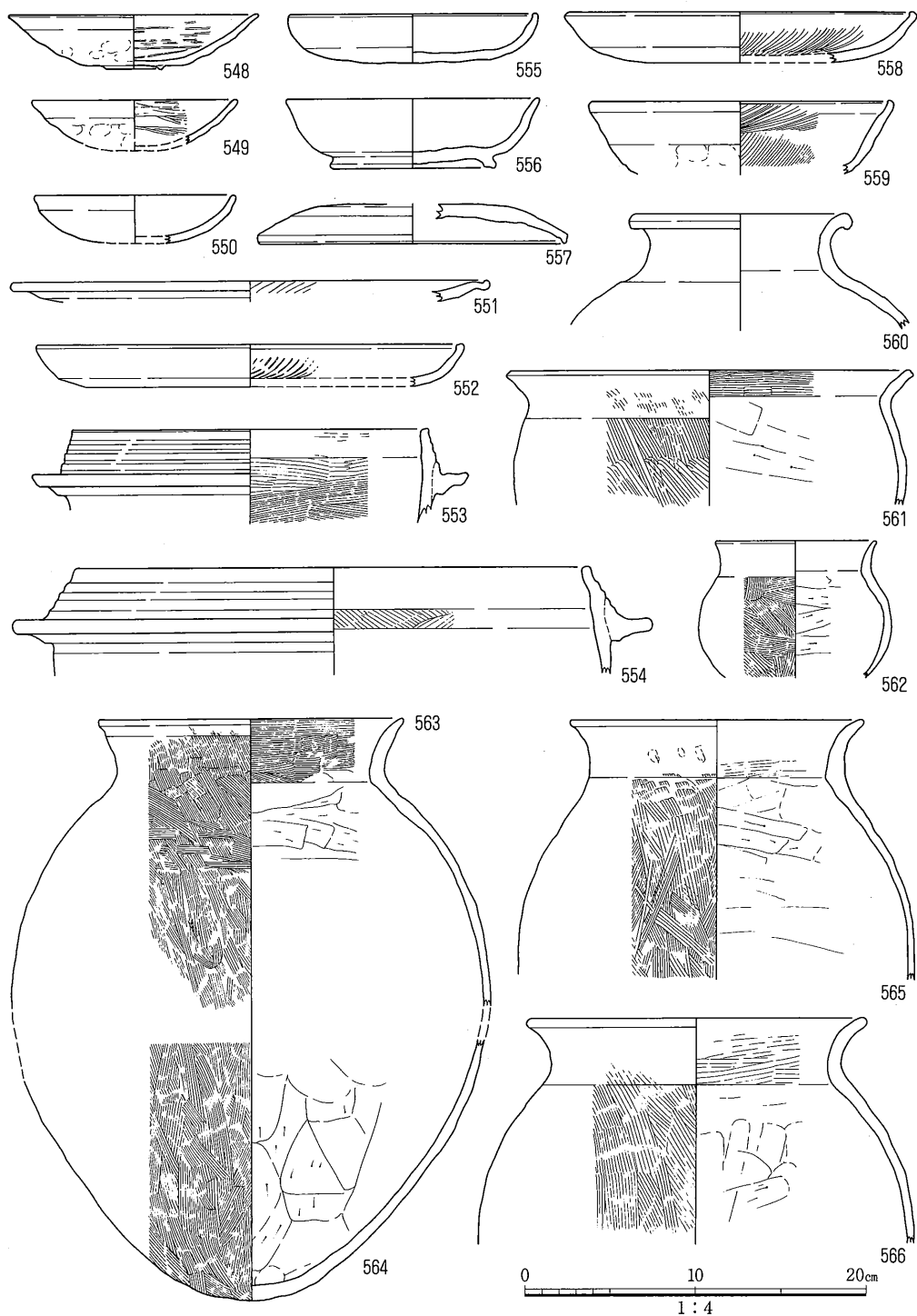


图92 包含層・遺構出土遺物

第3c層(554)、第4a層(549)、第4e層(548・550)、第6e層(552)、第6f層(551)、第6h層(555~560)、第7a層(561~566)、SX301(553)

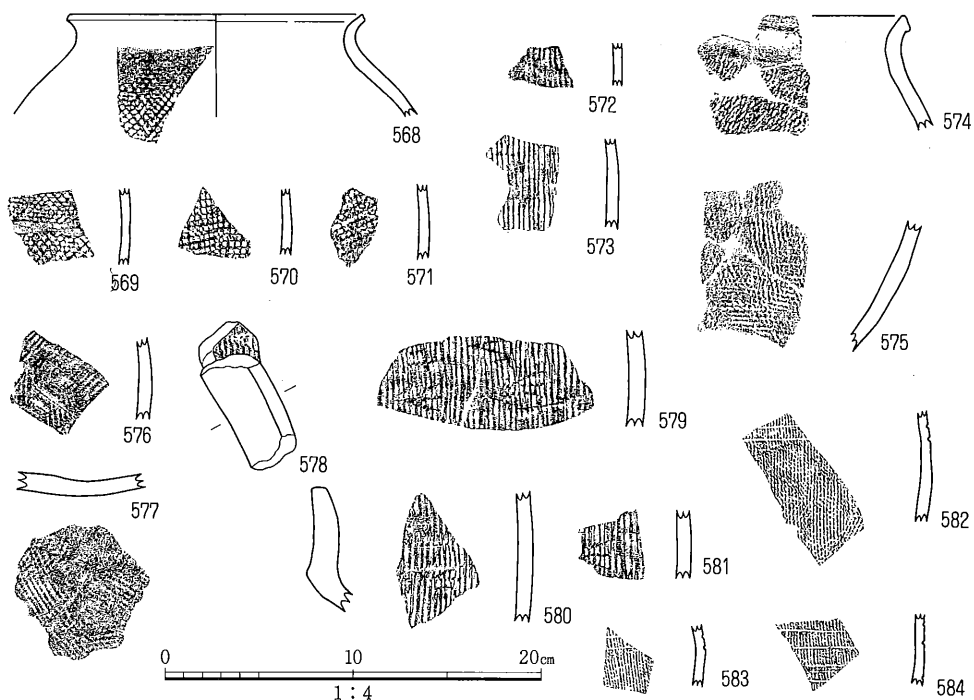


図93 各層出土の韓式系土器

第5a層(584)、第6c層以下(582・583)、第7a層(571・572・577・581)、第7a～7b層(568～570・574・576・578～580)、第7b層(573・575)

き内外面ともハケメ調整を施すが、体部内面の上半はその上からナデ調整を加えており、外面全体に煤が付着する。胎土にシャモットを含む壺602は外面の調整が不明であるが、内面をヘラケズリ調整し、頸部にかけて指頭圧痕が著しい。5世紀後半のものであろう。

また、第7a・7b層からは調査地北半を中心に数十点の製塩土器片が出土した。外面調整がナデもしくはユビオサエによるものと、タタキによるものの2種類があるが、前者が大半である。色調は、桃白色とにぶい黄橙色を呈するものの2種類が量的にほぼ拮抗する。

vii) 韓式系土器(図93)

571・572・577・581は第7a層、568～570・574・576・578～580は第7a～7b層、573・575は第7b層出土の軟質土器で、584は第5a層、582・583は第6c層以下の地層から出土した陶質土器である。568は口径15.5cmの広口壺の破片で、口縁部は頸部から直立したあと短く開く。体部の外面には2～3mmの格子タタキが施されており、内面はナデ調整である。569の外面には幅広の浅い沈線がある。568・569・571は同一個体であろう。572・573は外面に平行タタキが施された体部片である。574は口縁部が短く外反した甕で、体部外面を縄蓆文タタキで整形しており、内面はナデ調整である。575も同一個体であろう。576・577

は外面に平行タタキが施されており、後者は底部片と思われる。578～581は外面に鳥足文タタキが施された体部片で、578は移動式竈の炊き口の破片の可能性がある。579・580も同一個体であろう。以上の土器の色調は、にぶい橙～にぶい黄橙色で、胎土中に長石・石英・チャート・雲母・角閃石粒を含む。582～584は外面に細かい縄席文タタキを施し、内面をナデ調整する壺の体部片で、同一個体であろう。582・583は2条、584は4条の細い

沈線が施されている。色調は灰色で、胎土中に微細な長石・石英粒を含む。

以上の韓式系土器のうち、鳥足文タタキが施された軟質土器は百済系の土器とみられ、このほかのものも、共伴した須恵器の型式から5世紀後半代に属するものであろう。

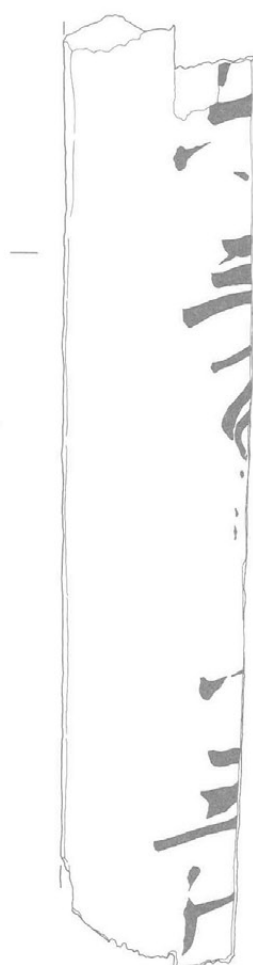
viii 木簡・木製品(図94・95・98、表3、写真5、図版21・51)

第6a～7b層を中心に木簡や、曲物の底板・棒・杭・板状木製品などの加工木および自然木が多数出土している。これらの木製品は畦畔の脇や、調査地やや北寄りの落ち窪んだ部分から集中して出土した(図95)。第7a～7b層に属するものが多く、板・棒・杭状の製品がめだつ。水成層からの出土は一部であることから、遠隔地から流されてきたものではなく、「馬池谷」の東側に広がる近隣の集落において、生活や、流路や畦畔など水田に係る施設の保持に使用されていたものと考えられる。

調査地中央部で第6e層から出土し



585



585

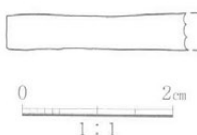


図94 木簡実測図

写真5 第6e層出土木簡

た木簡585は、左の側縁を除き欠損しているが、板の残存状況はよく、墨痕も明瞭である。現存長12.5cm、最大幅2.5cm、厚さは0.5cmで、釈文は図94に示した通りである。4文字目は不明であ

表3 層別の出土木製品一覧

種別\出土層	6d	6e	6f	6h	7a・b
棒・杭状	5	3	6	4	8
板状		3	9	22	13
曲物	1		2	4	1
斎串					1
木簡		1			

るが数字が入るものと思われ、5文字目は「斗」と推測できる。その他、曲物底板では、624が第6d層、625は第6f層、623・626は第6h層の出土で、伴出遺物からみていずれも奈良時代のものであろう。側板との結合方法を見ると624が木釘によるのに対し、他は紐状のものをを用いたと考えられ、623・625には孔部に桜とみられる樹皮が残存していた。また、623と626には鋭い刃物傷が無数に観察されることから、まな板などに転用されたものと思われる。第7b層出土の斎串622は、板材の一端を圭頭状につくるなど初現期の資料であるとは考えにくく、上層からの踏込みによる混入の可能性がある。

3) 遺構とその遺物

i) 室町～鎌倉時代の遺構と遺物(図92・95、図版20)

a. 自然流路による落込み

第3a層の基底面では、第3b層段階の自然流路による落込みの一部であるSX301とSX302を検出した。特にSX301は調査地の中央で幅数メートルにわたり下位の層を削込んでいる。埋土から出土した瓦質土器の羽釜553は14世紀後半～15世紀前半のものと考えられる。

第3c層下面および基底面では、溝群SD401～404を検出した。いずれも幅0.10～0.15mほどの溝で、耕作に伴うものであろう。

b. 島畠および溝

第4c層の上面では島畠状遺構を検出した。第4d層を盛り上げ島畠を設けている。第3b層段階の自然流路による浸食などのため残存状況が悪く、その規模などは不明であるが、南接するNG93-34次調査時の所見からみて東西方向に延びていた可能性がある。第4b層の基底面で東西方向に延びる溝SD405・406を検出したが、これらの埋土は第4d層と第4e層が攪拌された状態で認められ、島畠に伴う溝であると思われる。

c. 水田

第4e層の上面では水田面を検出し、調査地北端では東西方向の畦畔SR401が認められた。

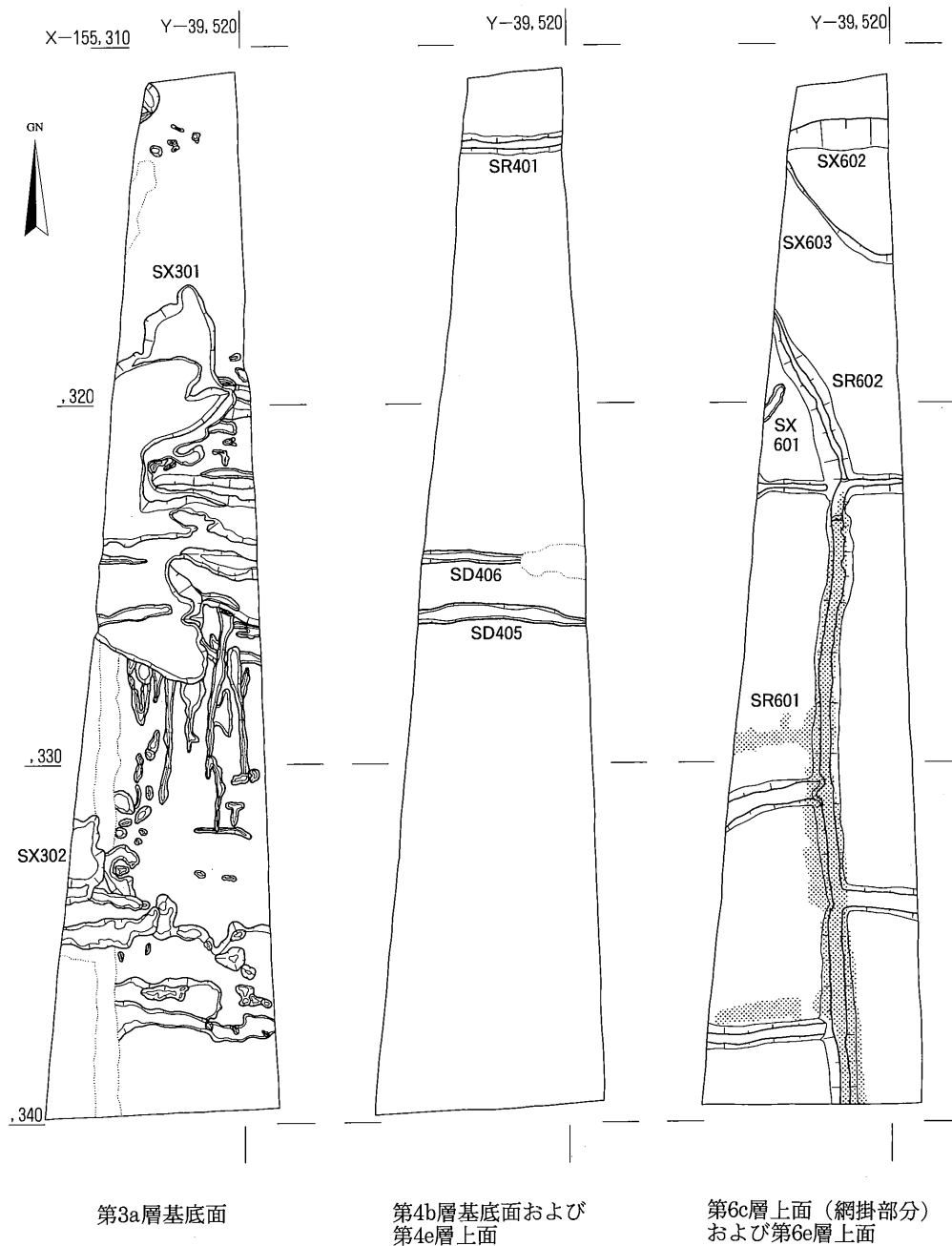
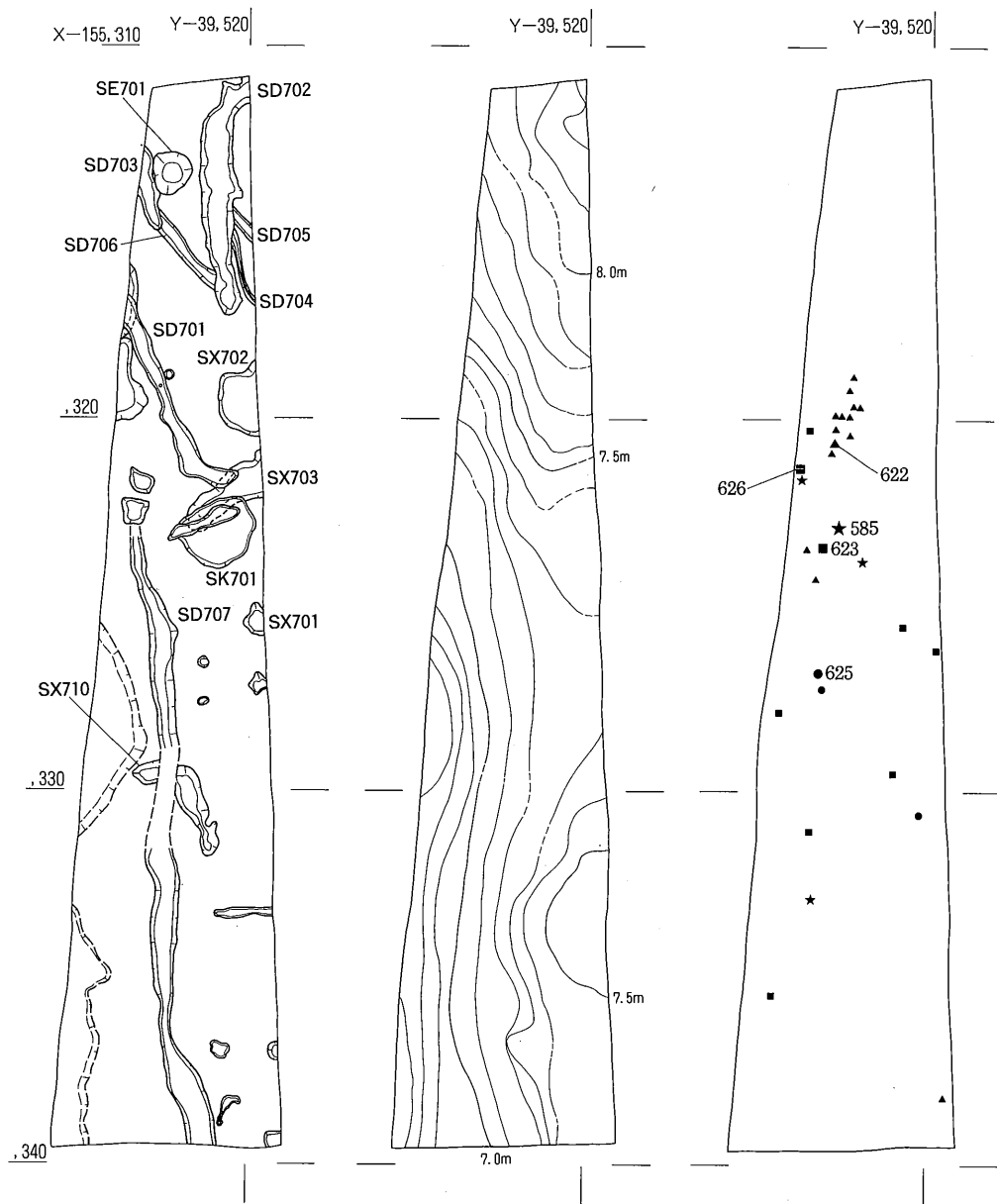


図95 各層の検出遺構と木製品出土状況



第7a層上面および
第7b層基底面

第7b層掘削後の
地形

木製品出土状況

- ★ 第6e層
- 第6f層
- 第6h層
- ▲ 第7a・7b層

0 5 10m
1 : 200

水田面は北端でTP+9.1m、南端でTP+8.9~9.0mとごく緩やかに南へ下がっている。

ii) 奈良～飛鳥時代の遺構と遺物

a. 水田(図95、図版20)

SR601 第6c層上面では水田面を検出し、畦畔**SR601**を確認した。水田面は、**SR601**に隔てられた西側ではTP+8.12~8.24m、東側ではTP+8.20~8.30mである。**SR601**は谷の傾斜に沿って北でやや西へと振れるが、ほぼ南北方向に延び、さらに東西方向の畦畔が取付くものである。その他、水田の区画に伴うと思われる段状遺構**SX602・603**、性格不明の落込み**SX601**などが検出されている。

SR602 第6e層上面では、水田面とそれに伴う畦畔**SR602**がより良好な残存状態で検出された。水田面は、**SR602**に隔てられた西側ではTP+7.95~8.06m、東側ではTP+8.08~8.19mである。**SR602**は**SR601**とほぼ同じ位置に認められ、谷地形に沿ってほぼ南北方向に延び、さらに東西方向の畦畔が取付く。基準となる南北方向の畦畔の位置は第6c層段階の水田へと継承されているのに対し、取付く東西方向



586



587

写真6 包含層・遺構出土鉄製品
第6h層(587)、SD701(586)

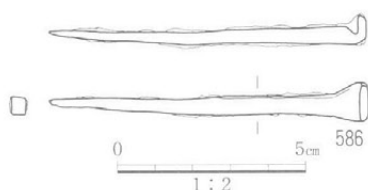


図96 SD701出土鉄製釘実測図

の畦畔の位置はやや異なる。規模については、頂部の幅が0.3~0.4m、西側の水田面からの高さが0.2m程度であったとみられるが、畦畔が西にふれる角では0.1m程度とやや低くなっており、水口が設けられていた可能性がある。一方、水田面の標高をみると第6c層、第6e層の水田面とも南北方向の畦畔の西側が0.1~0.2mほど下がることから、谷地形に対応した水田を設けていたと考えられ、棚田状の景観を呈していたものと推測できる。

b. 溝(図95~97、写真6・7)

SD701 第7層上面では、調査地北半を東南方向に延びる深さ0.1m程度の浅い溝である**SD701**が検出された。埋土は、褐～オリーブ褐色中～粗粒砂である。

出土遺物としては、須恵器と鉄製品がある。須恵器杯蓋**597**は、天井部の外面全体に直交する直線を組み合わせたヘラ記号が施されている。TK209型式に属するとみられる。鉄製釘**586**は、長さ8.5cm、断面が一辺0.4cmの方形で、X線写真を見ると頭部を叩いて薄く延ばした後に、折り返していることがわかる(写真7)。



586

写真7 釘頭部X線写真

iii)古墳時代の遺構と遺物(図95・97・98、図版21・52)

a. 溝

SD702～706 調査地北部の第7b層基底面で密集して検出された浅い溝群である。SD702から出土した須恵器無蓋高杯601は、薄手で2条の鋭い凸帯が巡り、口縁部はやや内湾する。内外面には暗緑灰色の自然釉がかかる。TK23型式に属するものであろう。

SD707 調査地の中央を南北に延びるSD707は谷の斜面に沿って延びる溝である。埋土は含粗粒砂～礫黒褐色粘土質シルトや含礫灰オリーブ色中～粗粒砂などであり、NG93-34次調査で検出されたSD708・709に対応するものであろう[大阪市文化財協会1999a]。遺物としては、縄文土器とみられる土器細片が出土している。

b. 井戸

SE701 調査地北部の第7b層基底面で検出されたSE701は、壁面の崩落が数回にわたり観察される素掘りの井戸で、深さは最深部で約1mある。縄文時代晩期の長原式とみられる土器細片が出土したが、遺物は少ない。

c. 土壇および落込み

第7層上面では土壇SK701が、基底面では落込みSX701・702・710が検出された。

SK701 調査地中央部東寄りで検出された、深さ約0.12mの土壇である。埋土は上から含粗粒砂～礫暗オリーブ褐色粘土質シルト、含礫暗オリーブ褐色シルト質極細粒砂よりなる。土師器・須恵器・製塩土器などが出土した。

SX701 調査地東辺の中央部で一部が検出された不定形の落込みである。埋土は暗灰黄色含礫粘土質シルトで下部は砂質が強い。土師器・須恵器・製塩土器などが多数出土した。須恵器では、杯身610・611、杯蓋607・608・609のうち、607はTK208型式、反時計回りにヘラケズリ調整する610はTK47型式、他はいずれもTK23型式におさまる。613～615は無蓋高杯で、613・615は器壁の外全面に淡黄色の自然釉がかかり、断面が灰赤色を呈するなど共通した様相を示す。614・615は長方形のスカシ孔を3方にもつ。いずれもTK23型式に属すると思われる。有蓋高杯612は楕円形のスカシ孔を3方にもち、杯部はほぼ全面に反時計回りのヘラケズリ調整を施す。TK208型式に属するものか。618・621は口縁端部下に断面三角形の凸帯を巡らせた甕の口縁部で、内外面には緑灰色の自然釉が付着する。621の口縁部から頸部にかけては密な波状文が巡る。いずれもTK208型式を溯るものであろう。

一方、土師器では、甕616・617・619・620などが出土している。616は短く外反する口

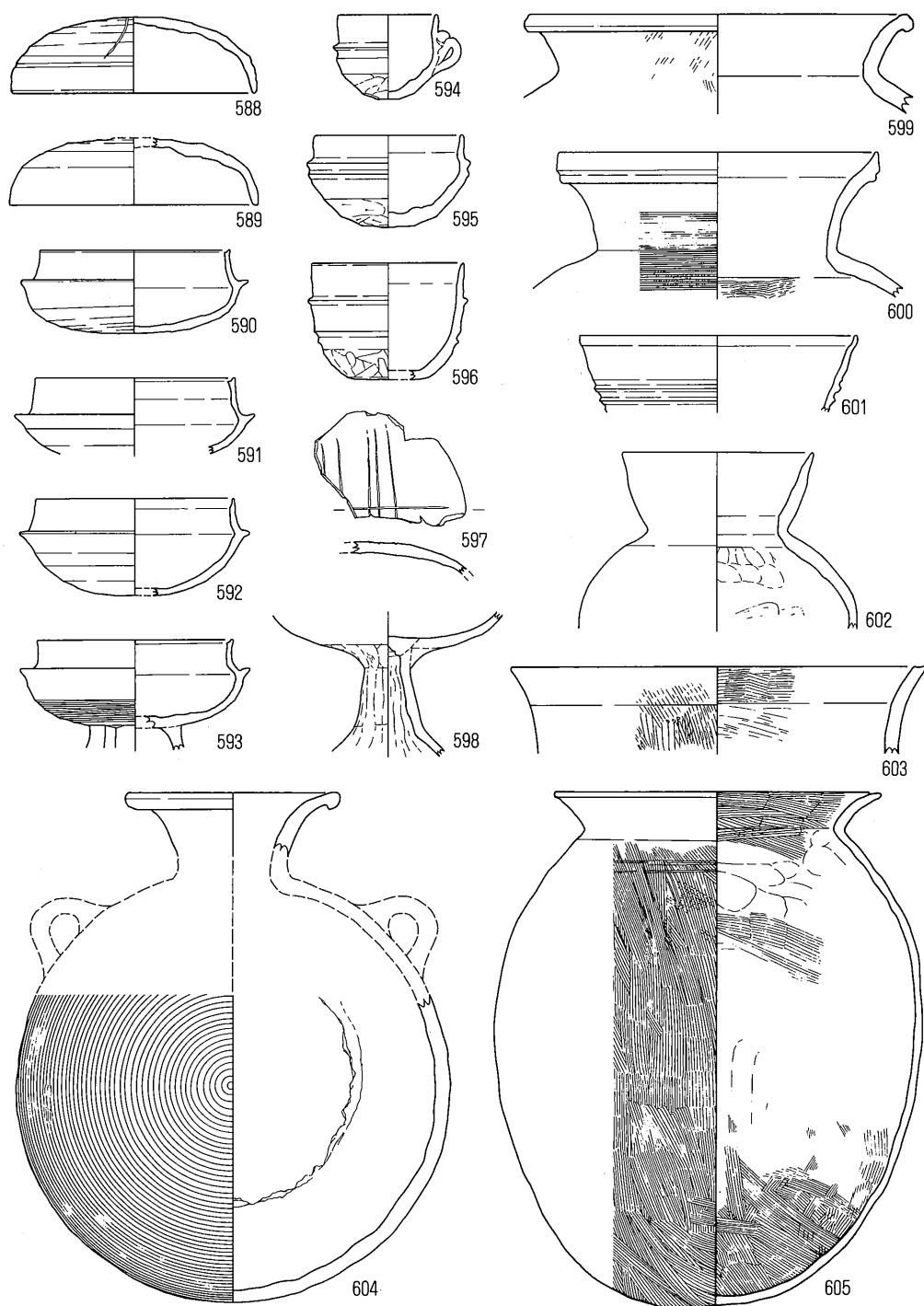


圖97 包含層・遺構出土遺物

第7a層(588~590・594・595)、第7b層(591・592・596・599・600・602・604・605)、SD701(597)、SD702(601)、SX702(593・598・603)

縁部直下にまで内面のヘラケズリ調整がおよび、体部との境が稜をなす。口縁部の内外面と体部の内面上半をナデ調整し、にぶい赤褐色を呈する小型の甕617は、長石・雲母を含みほかの土師器と様相を異にする。

SX702・703 調査地東辺の北半で一部が検出された不定形の落込みである。埋土は、含礫・粘土黒色砂質シルトや含礫黒褐色細～中粒砂質シルトなどからなり、同様な過程で埋る。**SX702**からは、土師器・須恵器・製塩土器などが数多く出土した。**593**は長方形のスカシ孔を3方にもつ須恵器高杯で、TK23型式～TK47型式に属する。杯部の外面から脚部の内外面にかけて自然釉がかかる。5世紀後半のものと思われる土師器高杯**598**は、脚部外面をナデによりやや面をなし、内面にはシボリメが観察される。土師器甕とみられる**603**はやや外湾しながら上方に伸びる口縁部の端部が面をなす。外面の調整は、口縁部がヨコナデ、体部が縦方向のハケで、内面は横方向のハケである。

SX710 調査地南半で**SD707**に隣接して検出された不定形の落込みで、埋土は含砂礫黒褐色粘土質シルトからなる。出土した須恵器杯蓋**606**はTK10型式に属するとみられる。

4) 小結

本調査では、古代から中世の水田や島畠をはじめとして、「馬池谷」と呼ばれる谷地形の一角の状況を地山面まで層位的に調査することができた。特に、調査地に南接するNG93-34次調査では断面でのみ確認した各層の水田を、平面で検出することができたことは大きな成果である。谷の埋没状況をみていくと、長原7B層の段階で西へと落ちる斜面は、長原6層すなわち飛鳥時代から奈良時代における水田耕作と水成層の堆積により徐々に緩やかとなり、長原5層の堆積後にはほぼ平坦な地形を呈するようになったことがわかった。また、その過程で水田への土地利用が活発に進められたことも明らかとなった。

一方、遺物については、木簡も含めた多数の木製品が出土した点が注目される。また、古墳時代中期後半に属する多量の遺物が出土したことは、本調査地の東方にこの時期の集落が広がっていることを示しており、周辺の調査成果とも一致するものである。中でも、**SX701**から出土した土器群はTK23型式を中心とする比較的時期幅の狭いものであり、当地域における土器編年を考える上で貴重な資料となりうるであろう。

第4節 西・西南地区の調査成果のまとめ

1) 飛鳥時代の集落について

95-14・76次調査では飛鳥時代の掘立柱建物が検出された。これまでに、調査地西方のUR86-11次調査で検出された瓜破遺跡東南建物群(図100)については、瓜破台地東縁辺部の大規模な水田開発との関係がすでに指摘されている[大阪市文化財協会1986・京嶋1992b]。また、この建物群を含む、長原遺跡および周辺地域における古墳時代から飛鳥時代にかけての集落の消長とその意味については、自然的要因と政治的要因の両面から詳細に考察を行った[高橋1999]。ここでは今回の調査で検出された建物が含まれる長原遺跡西南部・瓜破遺跡東南部の掘立柱建物群について検討してみたい。

対象とする地域は「馬池谷」の西岸で、現在の大和川と瓜破霊園に挟まれた一帯に当る。まず、この地域の地形的条件を明らかにするために、地山の標高を参考にして地形の復元を試みた(図99)。それによると、「馬池谷」の西岸沿いに、標高10.5~12.5mの高さで南北に細長く延びる尾根状の高まりがある(以下「東高地」と称する)。東高地のすぐ西側は現大和川の堤防付近まで入込む浅い谷地形である。谷地形は北東方向に屈曲しながら延びるようで、最終的には「小谷」の小字名の残るC地点(NG93-82・NG96-76次調査地)とB地点(95-14次調査地)で検出された小さな谷地形(以下「小谷」と称する)となって「馬池谷」に取付くものとみられる。「馬池谷」の一支谷であろう。東高地は小谷によって北端部を分断され、半島状の地形となっている。谷地形の西側は再び高くなり、北ないし北東方向に瘤状に張出す丘陵状の地形となっている(以後「西高地」と称する)。

こうした地形条件の中で、飛鳥時代の掘立柱建物が発見されたのは東高地上(C・E・F・G地点)と西高地上(J・K地点)、さらに南側の両高地間の鞍部(I地点)上という高所に限られ、谷地形の中では検出されていない。発見された掘立柱建物数は、C地点(NG96-76次調査地)・E地点(95-41次調査地)で各1棟、F地点(95-76・NG97-18次調査地)で3棟、G地点(NG89-67・NG97-18次調査地)で8棟、I地点(NG92-11次調査地)で1棟、K地点(UR86-11・NG84-24次調査地)で3棟以上、J地点(UR86-11・NG87-65・UR91-22・NG92-46次調査地：いわゆる瓜破遺跡東南建物群)で25棟以上である。東高地上のもの(以下「東群」と称する)で13棟、西高地上のもの(以下「西群」と称する)で28棟以上であるから、現状では数的に西群が東群を圧倒している(表4)。



図99 馬池谷西岸地域における飛鳥時代の遺構分布図

次に両群の時期について整理してみたい。E地点の建物については、主軸方位に平行する溝から飛鳥Ⅰ～Ⅱに属する土器が出土している。F・G地点については、95-76次調査の建物と平行する溝から飛鳥Ⅰを中心とする須恵器が、NG89-67次調査地から飛鳥Ⅰ新相の須恵器が出土している。また、現在整理中のNG97-18次調査の建物と平行あるいはそれを切る溝からは、飛鳥Ⅰ～Ⅱに属する土器が出土している。東高地の先端部のC地点の建物は、現在整理中であるが、建物を切る溝から飛鳥Ⅰ～Ⅱに属する土器が出土しており、その時期は飛鳥Ⅰの早い時期

に求められる可能性がある。95-14次調査地で出土した多量の遺物をはじめとして、B・C地点の谷地形の中からは飛鳥Ⅰ～Ⅱの土器が出土しており、それらは本来、東高地上もしくは小谷の対岸にあった生活域から転落したか、投棄されたとみるべきであろう。また、G地点の南方約400mのH地点(NG95-28次調査地)では飛鳥Ⅱに属する遺物を伴う井戸が検出されており、付近に建物が存在する可能性が高い。こうしてみると、東群は飛鳥Ⅰ・Ⅱ段階にわたって存続し、その中心は飛鳥Ⅰの新段階に求めうる。また、その分布は、東高地上と、小谷の北側も含む広い地域に及んでいたことが推測される。

一方、西群では棟数や建物の配置状況からその中核と目されるJ地点の建物群は、最低でも2回以上の建替が確認されており、飛鳥Ⅱ～Ⅲ段階を中心に存続したものと考えられる。K地点の建物群はJ群に後出することが知られており、飛鳥Ⅲ～Ⅳ段階にかけて存続する[大阪市文化財協会1992]。I地点では建物に平行する溝から飛鳥Ⅲ～Ⅳに属する土器が出土している。また、飛鳥Ⅲ段階の遺構は東高地上では発見されておらず、西高地上でもJ地点の遺構の数が減っていることから、建物群が衰退したと推定できる。こうしてみると、建物群の中心は東群から西群のJ地点へと移動し、飛鳥Ⅱの時期に建物数が極大に達した後、飛鳥Ⅲ・Ⅳの時期に建物数を減少させながら、さらに西群のK地点へと移動し

表4 馬池谷西岸地域における飛鳥時代の主要な掘立柱建物

	地点	遺構名	間数(備考)	桁行(m)	梁行(m)	面積*(m ²)	方向(°)	調査回数
西 群	J	SB03	2×2	4.69	3.13	14.66	N9.5W	UR86-11
		SB04	3×3(総柱?)	5.30	4.02	21.31	N11.5W	
		SB05	4×2	7.26	4.26	30.93	N10W	
		SB06	3×2(総柱?)	4.72	3.58	16.90	N10W	
		SB07	6以上×2	9.52以上	3.60	34.27以上	N7W	
		SB08	3×3(総柱布掘り)	5.34	4.00	21.36	N6.5W	
		SB09	6×3	10.28	4.72	48.52	N13W	
		SB10	6×2(東庇)	10.11	4.26	55.40	N9W	
		SB11	6×2	10.34	4.33	44.77	N11W	
		SB12	5以上×2	8.05以上	3.64	29.30以上	N4W	
		SB13	6×2(東西庇)	10.05	4.10	63.72	N10.5W	
		SB14	3×3(総柱)	4.06	3.88	15.75	N11W	
		SB15	3×3(総柱布掘り)	4.01	3.79	15.18	N3.5W	
		SB16	3×3(総柱)	5.28	4.01	21.17	N11W	
		SB17	5×3(4面庇)	9.62	4.74	92.18?	N7W	
		SB18	3×2(総柱)	4.35	3.52	15.31	N13W	
		SB19	3×3(総柱)	5.03	3.99	20.07	N13W	
		SB20	3×2	5.43	3.93	21.34	N18.5W	
		SB21	3以上×2以上				N13.5W	
		SB22	6×2(南庇)	10.0	5.1	51.0	N10W	
		SA04	16以上	28.4以上			N8W	
		SA05	9以上	19.4以上			N10.5W	
	SB01 SB02 SB03 SB04 SB01 柱列A	SB01	4×2(南庇もしくは縁)	6.2	3.2	24.32	N15W	NG87-65
		SB02	2×2(総柱)	3.8	2.8	10.64	N8W	
		SB03	5以上×2(南縁)	8.2以上	3.8	41.82以上	N7W	
		SB04	6×2(東庇もしくは縁)	12.8	3.1	52.48	N9W	NG87-65等
		SB01	2×6	12.85	3.75	48.19	N9W	
		柱列A	3以上	7.2以上			N0W	NG92-46
								NG92-46
	K	SB301	7×2	12.95	3.95	51.15	N5W	NG84-24
		SB01	2×2	3.18	3.04	9.65	N10W	UR86-11
		SB02	3×2	3.88	3.68	14.26	N11W	
	I	SB01	2×2以上(西縁)	3.8以上	4.3	21.28以上	N4W	NG92-11
東 群	C	SB601	3×2(総柱)	4.25	3.3	14.03	N38W	NG96-76
	E	SB601	2以上×2(柱穴小)	3.5以上	3.4	11.9以上	N20E	NG95-41
	F	SB602	3×3(総柱?)	4.18	3.86	16.13	N11.5E	NG95-76
		SB601	3×3(総柱)	4.0	3.7	14.80	N7E	
		SB602	6×2(東廂 総柱)	10.8	5.4	77.0	N3E	NG97-18
	G	SB618	3×2以上	5.7	4.2以上	23.9以上	N10W	NG89-67
		SB619	2以上×2以上(柱穴小)	4.1	2.8	11.5以上	N1W	
		SB620	4以上×3	8.0以上	5.7	45.6以上	N28W	
		SB603	3×3(総柱)	3.7	3.6	13.32	N5W	
		SB604	3×3(総柱)	3.7	3.3	12.21	N2W	
		SB606	2以上×2以上	2.5以上	2.0以上	5.0以上	N2E	

* 桁行・梁行は身舎の、面積は庇・縁を含んだ計測値を示す。

ていったとみることができる。

次に、東群と、特にJ地点の掘立柱建物群が質的にどのような差異をもつのかを、以下①～④の視点から個々の建物の特徴(図100、表4)に注目して検討する。

①建物の方位については、J地点では北から西へやや振れ、 $N4^{\circ}\sim 13^{\circ}W$ の間にほとんどの建物がおさまり、その配置にはかなり高い計画性が看取される。一方、東群では、 $N22^{\circ}E\sim N38^{\circ}W$ の間であり統一性がない。

②建物の種類では、J地点は総柱建物の占める割合が高いと考えられてきたが、東群でも近年の調査により総柱建物の検出例が増加しつつあり、従来の評価を見直す必要が生じている。

③区画施設については、東群のG地点で建物のすぐ東側を巡る区画溝が見つかったが、J地点では溝のほかに柵が存在する。

④柱穴の一辺が30cm前後と比較的小さい建物は、東群には2棟存在するのに対して、J地点では発見されていない。東群では、NG97-18次調査地で検出されたSB602を例外として、今回の調査で検出された2棟を含め、概して小規模なものが多いとみられる。

大型建物の比率が高く、計画的に配置されたとみられるJ地点の建物群の性格について

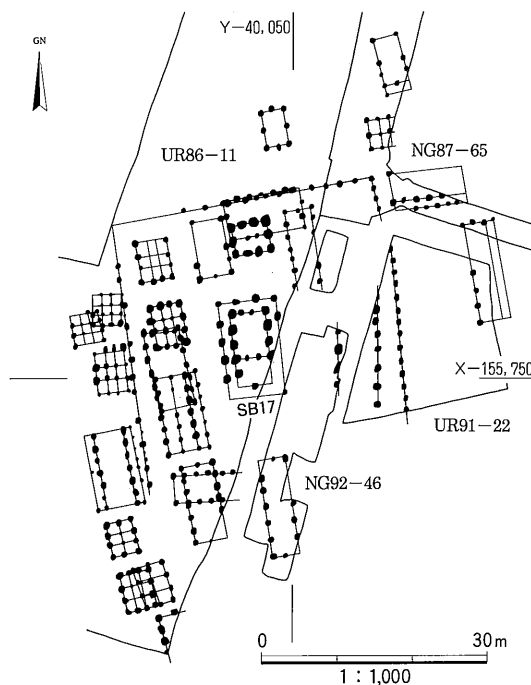


図100 瓜破遺跡東南建物群配置図

考えると、集落の共同施設的な機能を想定することが可能である。例えば総柱建物が生産物を収納する倉庫で、SB17のような大型建物がより政治・祭祀面の機能を果たし、防御や権威の付加のために柵が巡らされていたといった全体像を復元することもできよう。一方、東群の性格について考えると、④の小規模な柱穴をもつ建物については、例えば農耕に係わる作業などが行われた作業小屋のような用途が考えられる。また、95-76次調査地で馬具とみられる鉸具の出土したことで、95-14次調査地など東高地先端部付近の谷地形内(A～D地点)からウシ・ウマ骨が出土したことは、東高地周辺でウ

シ・ウマの飼育や解体が行われていたことを示すものであろう。これらのことや、①の建物配置の計画性が薄いことからみても、西群に比して東群に、一般の集落に近い要素を多く見出すことができよう。

冒頭に述べたように、「馬池谷」西岸地域の建物群は、同時期に「馬池谷」の東方で行われたとみられる大規模な水田開発と密接な関係をもっていたと考えられている。今回の検討では、当地域の建物群が東・西2群に大別され、中心が東群から西群へ移ったことを明らかにした。また両群には建物群として若干の異なる特徴があることが分かった。この差異については、西群が生産物の管理施設として中核的な役割を果たし、東群は実際の開発作業に携わった人々の拠点であったというような想定も可能であろう。もし、このように両建物群の担った役割が明確に区別されていたとすれば、水田開発が階層的に十分組織された体制の下に行われたことを示していると解釈することもできよう。

今後の課題としては、まず、最近の調査で見直す必要が生じた東群のあり方について、資料の蓄積と整理を進めつつ再検討する必要がある。また、最低2回の建替が想定されるJ地点建物群を各時期に分離する作業などを通じ、各建物群の並存期間や先後関係をより細分した時間軸の中で確定すること、さらに、建物群の特徴から抽出される質的な差異を、土器・木製品・動物遺体など遺物の検討から具体的に裏付けていくことも課題である。

飛鳥時代の掘立柱建物が検出された調査に関する参考文献

NG84-24：大阪市文化財協会1992、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅳ

UR86-11：大阪市文化財協会1986、『府営高野大橋第2住宅団地建設に伴う瓜破遺跡発掘調査(第2次)(UR86-11)略報』

NG87-65：大阪市文化財協会1994、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅶ

NG89-67：大阪市文化財協会1997、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅸ

NG92-11：大阪市文化財協会1999、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅺ

NG92-46：大阪市文化財協会1999、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅻ

NG96-76：大阪市文化財協会1997、『平成8年度長吉瓜破地区土地区画整理事業施行に伴う長原遺跡等発掘調査(NG96-76)略報』

NG97-18：大阪市文化財協会1998、『平成9年度長吉瓜破地区土地区画整理事業施行に伴う長原遺跡等発掘調査(その2)(NG97-18)完了報告書』

第Ⅳ章 遺構・遺物の検討

第1節 長原・瓜破遺跡で出土した古墳時代から奈良時代にかけての木製品

1)はじめに

長原・瓜破遺跡は旧石器時代から現代にいたるまでの各時代の地層が良好に遺存するだけでなく、河川の氾濫などを起源とする水成層が幾重にも堆積し、台地上では井戸や灌漑水路が数多く掘削されるなど、木製品が残りやすい環境に恵まれていたと考えられる。本報告書に収録した95-14・49次調査の資料は、既往の調査で数多く出土している木製品の中でも、質・量ともに最も注目すべきものの一つであるといえよう。ここでは報告済みの資料を中心に、重要なものについては現在整理中の資料も一部含めて、当遺跡で出土した古墳時代から奈良時代にかけての木製品を集成・整理してみたい(図101、表5)。

2)木製品が出土した主要な調査の概要と地理的分布

95-14・49次調査地が位置する長原遺跡西地区では、古墳時代中期以降、特に「馬池谷」の兩岸に沿って場所を変えながら集落が営まれたことが判明している。木製品が出土した調査地の分布も谷の兩岸と内部に集中しており、その量は他の地区を凌駕している。また、木製品の種類や用途についても、工具・服飾具・容器・祭祀具・建築部材など多岐に及ぶが、中でもNG86-41次調査では、古墳時代後期の井戸から、叩き具・当て具をはじめ須恵器生産に係るとみられる諸工具一式や木錘などが出土しており特異な様相を示している。また、現在整理中のNG97-55次調査では、平城宮土器Ⅲの土器を伴う最古級の絵馬とみられる木製品が出土している。

長原遺跡西南地区では、NG93-6・7次調査とNG89-63次調査で、5世紀初頭の一ヶ塚古墳の周溝とその近隣から鋤・ナスビ形木製品などの農耕具が複数出土しており、木製品全体の出土量が少ない中で、農耕具の占める割合が高くなっている。

長原遺跡中央地区では、NG88-54次調査で6世紀中葉の南口古墳の周溝から、刀形とみられる資料を含めた多量の木片が出土した。また、NG1次調査では、木弓や容器の蓋な

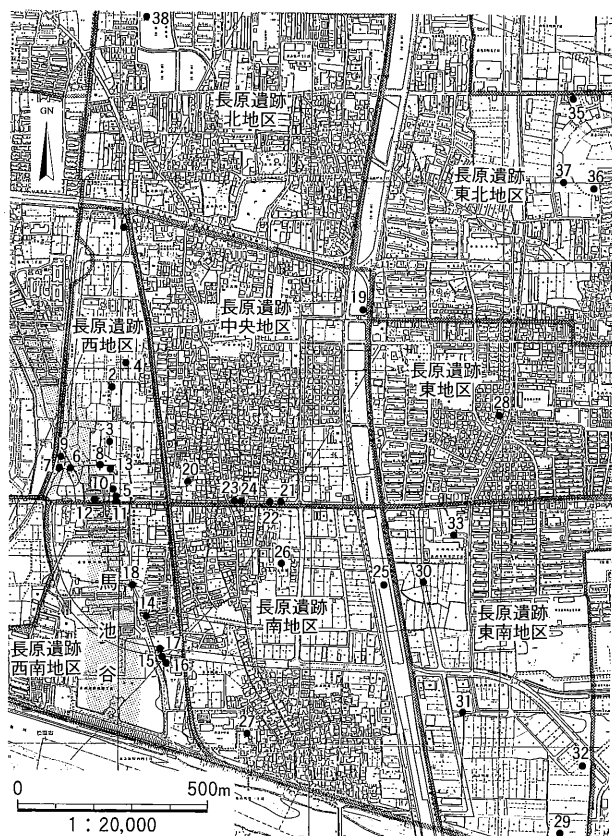


図101 木製品出土調査地点の分布図
(図中の番号は表5の調査地番号と対応する)

ど類例の少ない木製品が出土しているが、いずれも時期を特定することは困難である。

長原遺跡南・北・東地区に関しては資料数が極めて少なく、実態は不明である。

長原遺跡東南地区では、現在整理中のNG93-56次調査で古墳時代中期の井戸を中心に棒・杭状の木製品が大量に出土していることが注目される。加工木片や自然木の出土量も多いことから、同地点で木製品製作が行われていた可能性もあるが、その内容を見ると、農・工具や容器などの日常生活用具、祭祀用具が欠落している。古墳時代における遺跡周辺の地形復元によれば、同地点は集落群の間に存在した浅い谷筋近くに位置する

[清水和明1998]。同じ谷筋の開口部に位置するNG95-36次調査地点から矢板状製品が数点出土していることを考え併せると、それらの棒・杭状の木製品は、後述するNG95-57次調査で検出された、土地開発のための治水に係る施設とみられる土手状遺構と同様な性格をもつ施設が近隣に存在した可能性を示唆するものかもしれない。そのほか、NG82-41次調査では古墳時代中期に属する井戸から梯子状木製品が出土している。

これまで実態が不明であった長原遺跡東北地区では、近年の調査で、木材を組合わせた土手状遺構や他地区では例を見ない多様な木製品が出土するなどの調査成果が得られた。NG97-12・52次調査では古墳時代中期の水成層から曲物・箱材・把手・天秤棒・馬形・舟形・ミニチュア又鍬・建築部材・紐綴じ装飾のついた板状製品・板材など多様な木製品が出土した。NG95-57次調査およびNG97-52次調査では組合わせた杭・柵材・植物繊維などに盛土をした土手状遺構が検出されており、治水にかかわる施設であると考え

られる。

瓜破遺跡東南地区では、NG84-24次調査で、船材を転用した可能性のある丸太刳抜き材を組合わせた飛鳥時代の井戸が検出されており、斎串や曲物などが出土している。井戸とそこから出土した木製品は、同調査および隣接して行われた調査で検出された掘立柱建物群で使用されたものと考えられ、建物群の性格を検討する上でも貴重な資料であるといえる。

3) 各論

a) 容器

曲物については、NG93-34次調査でNG7B層準から出土した底板が、5世紀後半に属するとみられ、当遺跡では最も古い時期の資料の一つであると考えられてきた。95-49次調査においても、同層準で円形の板状製品が出土しているが、厚みが薄く結合方法も確認できないことから曲物底板と断定することは難しい。ところが近年、5世紀前半に属するとみられる、ほぼ完形の曲物桶がNG97-12次調査で出土し、当遺跡における曲物の出現時期がさらにさかのぼることとなった。同調査出土資料は現在整理中であるが、一回り大きく段状をなす底板に彫り込んだ溝に側板を挿入し、斜めに打込んだ木釘で固定するという曲物初現期の特徴を有している。

一方、側板と底板の結合方法が確認できる当遺跡における初現期の例としては、樹皮結合によるものが前述のNG93-34次調査出土資料、木釘結合によるものはNG97-12次調査出土資料やNG84-24次調査出土資料がある。

また、曲物については平安時代以降、井戸枠への利用が当遺跡において普及することが確認されているが、NG87-50次調査出土資料などからみて、飛鳥時代後半から奈良時代にかけて既にそうした利用が始まっていたものと考えられる。

次に、刳物に関しては、95-14次調査出土資料のほか、NG85-16次調査で古墳時代後期の溝から出土した資料や、現在整理中のNG97-52次調査で古墳時代中期後半の包含層から出土した資料などがある。両端を尖らせ舟形を呈する95-14次調査出土資料と異なり、NG85-16次調査出土資料は両端を丸く、NG97-52次調査出土資料は一端のみを丸く仕上げ突出させている。

b) 祭祀具

斎串とみられる資料については、NG84-24次調査、95-14・49次調査で出土しており、井戸からの出土例が多い。中でも95-14次調査出土の斎串状木製品は飛鳥時代初頭に属す

るものであり、形態的にも板材の端部を斜めに切り落としただけの古い要素をもつものが含まれる。また現在整理中のNG96-41次調査ではNG7A層準から人形とみられる木製品が出土している。

剣・刀形とみられる木製品については、NG85-16次調査・NG91-70次調査で古墳時代中期後半に属する資料が出土しているほか、NG95-57次調査では古墳時代後期前葉以前の資料が2点出土している。また95-14次調査、NG88-54次調査、NG96-14・41次調査などで、古墳時代後期から飛鳥時代にかけての時期に属する、刀形とみられる木製品が出土している。

そのほか、NG97-12・52次調査地では馬形・ミニチュア又鍬・舟形2点が出土しており、いずれも5世紀前半に属するものと考えられる。

c) 農具

農具では、NG93-7次調査で5世紀初頭の一ヶ塚古墳の周溝から鋤・鋤柄が複数出土した。二次的な加工痕からみて実用品であり、古墳の築造や葬送儀礼に用いられた可能性もある。また、隣接するNG89-63次調査ではナスビ形木製品2点を含む鍬・鋤などの農具が出土している。現在整理中であるこれらの木製品は、8世紀中頃の土器を伴う地層から出土しており、同時期の資料であると考えられる。しかしながら、同層には一ヶ塚古墳に伴う可能性のある多数の埴輪が含まれること、また、当遺跡で鍬・鋤が出土しているのは隣接するこの2地点のみであること、さらに型式学的にもよりさかのぼる要素をもつことなどから、これらの資料の所属時期については慎重に検討を重ねていく必要があるものと考えられる。同時に、飛鳥時代以降、水田開発が大規模に行われた当遺跡において、農具の出土量が必ずしも多くなく、また当地点のみで鍬・鋤の農具が出土していることの意味を、生産用具の管理の問題も含めて考えていく必要があろう。

そのほか、NG86-58次調査でNG7A層準から出土した横槌は、渡辺誠による分類のE類、NG93-76次調査で出土した5世紀後半に属する横槌はB類に該当し、どちらも豆打ち用と類推される[渡辺誠1985]。また、DD85-1次調査では6世紀中葉の鎌柄が出土しており、NG97-60次調査では木柄と鉄刃部の装着状態が分かる奈良時代の鎌が出土している。

4) まとめ

長原・瓜破遺跡でこれまでに出土した木製品を整理してきたが、その構成や分布の傾向についてまとめるならば、まず、馬池谷の周辺を中心に量的な分布に濃淡が見られること、

質的にも出土製品が多様な地域と、棒・杭などに偏る地域があることが挙げられる。また、製品の中で農具の占める割合が小さい一方で、土地開発のための治水施設などに木製品が重要な役割を果たしたことが見て取れる。

次に、今回報告した95-14・49次調査出土資料のもつ意味を考えると、飛鳥時代から奈良時代にかけてのまとまった資料が新たに提供されたこと、「馬池谷」周辺地域における多様かつ豊富な木製品利用の実態があらためて裏付けられたこと、主要な資料について樹種が判明したこと、などに要約されるであろう。個別には、まず当遺跡でも初出の資料である2点の履物が注目される。前章で詳述した通り、全国的にみても出土例は稀少であり、その用途について踏込んだ検討を行うためには、出土地周辺の土地利用の実態や、他の出土遺物の構成を比較するなどの作業を進めていく必要がある。また、斎串状木製品については、当遺跡における斎串の編年や、それを用いた祭祀の開始時期を考える上で貴重な資料となると考えられる。

樹種鑑定の結果については、斎串にはヒノキ、履物には針葉樹であるコウヤマキが用いられており、他遺跡出土資料でみられる一般的な傾向と合致する。これまでに得られた樹種同定の成果としては、NG86-41次調査出土の諸工具が全て異なる樹種からなることや、NG95-57次調査などで検出された土手状遺構の部材がコナラ節などを中心とする落葉広葉樹製であることなどが判明している。今後は、資料の蓄積と遺跡周辺の植生分布の調査を進め、製品別の樹種の使い分けや、原材料の供給および製品の加工・流通などのシステムについても検討していきたい。

* 木製品が出土した長原・瓜破遺跡の調査に関する参考文献

長原遺跡調査会1978、『長原遺跡発掘調査報告』	NG1
大阪文化財センター1978、『長原-近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書-』	
大阪市文化財協会1992、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅳ	NG84-24
大阪市文化財協会1993、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅴ	NG85-16 NG85-70
大阪市文化財協会1993、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅵ	NG86-41 NG86-58
大阪市文化財協会1994、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅶ	NG87-50
大阪市文化財協会1995、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅷ	NG88-54
大阪市文化財協会1998、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅰ	NG95-57
大阪市文化財協会1999、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』ⅩⅢ	NG93-6 NG93-7 NG93-34 NG93-71 NG93-76 NG93-82
大阪市文化財協会1999、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』ⅩⅣ	NG94-4 NG94-18 NG94-19 NG94-46 NG94-47
大阪市文化財協会1999、『長原遺跡発掘調査報告』Ⅶ	NG82-41 DD85-1

表5 長原・瓜破遺跡で出土した古墳時代から奈良時代の木製品一覧

地点 番号	調査次数 (NG)	製 品 名	点数*	出 土 遺 構	時期・層位・ 共伴土器型式	備 考
長原遺跡西地区						
1	84-25	扉	1	SE01	NG 7	5世紀末～6世紀前半
	(整理中)	まぐさ	1	SE01	NG 7	5世紀末～6世紀前半
		柱	1	SE01	NG 7	5世紀末～6世紀前半
2	85-16	建築部材	1	SE01	TK23～MT15	ほぞ孔あり
		板状	2	SE01	TK23～MT15	
		木片	多数	?	NG 6・7	
		板状	3	SD52	TK47～TK10	
		舟形容器	1	SD49	TK10	
		板状	3	SD48	TK23～TK47	
		刀形	1	SD48	TK23～TK47	
		不明板状製品	2	SD52	TK47～TK10	
3	86-41	木片	8	SE01	MT15～TK10	
		加工木片(棒状など)	30	SE01	MT15～TK10	
		トイ状	1	SE01	MT15～TK10	
		丸棒状欠損	1	SE01	MT15～TK10	
		板状	1	SE01	MT15～TK10	
		ノミ・刀子の柄	1	SE01	MT15～TK10	
		横杵(陶土混練用?)	1	SE01	MT15～TK10	コウヤマキ
		横杵(上記杵の柄)	1	SE01	MT15～TK10	カシ
		横杵(陶土混練用?)	1	SE01	MT15～TK10	コナラ属
		叩き具	1	SE01	MT15～TK10	ヒノキ
		鉄斧の柄	1	SE01	MT15～TK10	クヌギ
		当て具	1	SE01	MT15～TK10	マツ
		木錘	1	SE01	MT15～TK10	広葉樹
4	91-70	剣形	1		TK23～TK47	(整理中)
5	93-34	杭	1		NG7A	
		曲物底板	1		NG7B(5世紀後半)	
		加工木(棒状)	1	NG7B	NG7B(5世紀後半)	
6	93-71	木片	12	谷内	NG6Bii	
		加工木片	6	谷内	NG6Bii	
		加工木片	8		NG7A	
		円頭棒状製品	1	谷西斜面	NG7A	
		木片	27	谷内	NG7A	
		不明材	1	谷内	NG7A	挟りあり
7	93-82	板状	11	SX701	飛鳥I	
		杭?	1	SX701	飛鳥I	
		木片	5	SX701	飛鳥I	
		棒状	1		飛鳥I	
8	94-46	杭	10		NG 6	
		棒状	11		NG 6	
		棒状	2		NG6B	
		杭	5		NG7A	
		杭	1		NG 7	
9	95-14	板状	2		NG6A	
		棒状	5		NG6A	
		板状	5		NG6B	
		棒状	3		NG6B	
		杭	2		NG6B	
		加工木片	2		NG6B	
		板状	36		NG7A	
		板状	2	SD711	NG7A	
		棒状	16		NG7A	
		棒状	2	SD711	NG7A	
		棒状	1	SE701	飛鳥I	ヒノキ
		杭	4		NG7A	
		加工木片	1		NG7A	
		履物	2		NG7A	コウヤマキ
		舟形容器	1		NG7A	ヒノキ
		柱?	1		NG7A	
		鎧形不明製品	1		NG7A	
		建築部材	3		NG7A	
		下駄	1		NG7A	
		刀形?	1		NG7A	
		曲物底板	2		NG7A	

		曲物底板	1	SK716	TK209	
		斎串状	1	SK716	TK209	ヒノキ
		斎串状	6	SE701	飛鳥Ⅰ	ヒノキ
		板状	2	SE701	飛鳥Ⅰ	
		棒状	7	SE701	飛鳥Ⅰ	
		杭	3	SE701	飛鳥Ⅰ	
		加工木片	1	SE701	飛鳥Ⅰ	
		曲物側板	2	SE701	飛鳥Ⅰ	
10	95-49	曲物底板	6		NG6A	(平城宮Ⅱ～Ⅲ)
		曲物側板	3		NG6A	(平城宮Ⅱ～Ⅲ)
		板状	42		NG6A	(平城宮Ⅱ～Ⅲ)
		棒・杭状	19		NG6A	(平城宮Ⅱ～Ⅲ)
		斎串	1		NG7B	本来NG6Aか
		曲物底板?	1		NG7B	
		板状	13		NG7B	
		棒・杭状	8		NG7B	
11	96-71	曲物底板	1		NG 5	綴孔・刃物傷あり
	(整理中)	曲物側板	6		NG7A	
		曲物底板	8	(同一個体か)	NG7A	樹皮結合 刃物傷
		板状	1	SD701下部層	TK216～MT15	
		不明製品	1	SD701下部層	TK216～MT15	
		柱	2	SD701下部層	TK216～MT15	
		柱	1	SE701	TK23	
		杭列	多数		NG 5・6Ai	
12	96-32	杭	2	飛鳥時代杭列	NG7A	
	(整理中)	板状	2	古墳時代流路		
13	97-55	絵馬?	1		NG6Ai	平城宮Ⅱ～Ⅲ
	(整理中)	板状製品	2	SD601	平城宮土器Ⅱ～Ⅲ	
		曲物底板破片	3	SD601	平城宮土器Ⅱ～Ⅲ	
		曲物底板破片	1	SD601	平城宮土器Ⅱ～Ⅲ	外周線あり
		曲物側板破片	18	SD601	平城宮土器Ⅱ～Ⅲ	墨書あり
		曲物破片	3	SD601	平城宮土器Ⅱ～Ⅲ	
		棒状	10		平城宮土器Ⅱ～Ⅲ	
		板状製品	28		平城宮土器Ⅱ～Ⅲ	
長原遺跡西南地区						
14	89-63	ナスビ形木製品	2			
	(整理中)	鋏	1			
		鋤	1			
		鋤柄	1			
		櫛状木製品	1			
15	93-6	木片	2		NG7B?	一ヶ塚古墳
		自然木・炭化木	24		NG7B?	
16	93-7	木片	2		NG7B(5世紀初頭)	一ヶ塚古墳
		板状	2		NG7B(5世紀初頭)	
		鋤柄(カシ)	1	周溝内	5世紀初頭	
		鋤(カシ)	1	周溝内	5世紀初頭	(93-18)
		棒状(鋤・鋤柄か)	1	周溝内	5世紀初頭	(93-18)
17	94-18	板状(炭化)	3		NG 7	一ヶ塚古墳
18	97-60	鎌	1	溝	奈良時代?	(整理中)
長原遺跡中央地区						
19	NG 1	木弓	1	SD51	5～7世紀	
		木製容器蓋?	1	SD51	5～7世紀	
		杭	20	SD51	5～7世紀	
20	88-54	木片	61	周溝埋土	NG6A～7B	南口古墳
		木片	1	SD703内	南周溝埋土下	
		丸太	1	SK701裏込土		
		木片	2	墳丘盛土		
		木片	4		NG 6・7	
		木片	5		NG 6(作土)	
		木片	21	周溝上	NG7A	
		刀形?	2	東周溝埋土内	TK10?	
21	93-76	木片	1	SD701上層	TK209	
		木片	6	SD701中層以下	5世紀後半	
		横槌	1	SD701下層	5世紀後半	
		杭	1	SD701下層	5世紀後半	刃物痕あり
		木片	1		NG 6・7	
		建築部材か	1	SD701下層	5世紀後半	ほぞ孔あり

22	94-19	竹	2		NG6A	
23	96-41	杭	1	SP412		
	(整理中)	人形?	1		NG7A	
24	96-14	刀形?	1		NG6Bi	
	(整理中)	板材				
長原遺跡南地区						
25		不明製品	1	塚ノ本古墳周溝	5世紀前半	大阪文化財センター調査
26	85-70	杭	1	SD06灌漑用	奈良	
27	94-47	板状	1	SD601	飛鳥時代~	
長原遺跡東地区						
28	95-36	矢板状製品	数点	SD303	古墳時代中期	(整理中)
長原遺跡東南地区						
29	82-41	梯子状	1	SE703	5世紀中葉	スギ
30	86-58	下駄	1		NG6Ai	
		横槌	1		NG7A	
		加工木片	8	SD03	4世紀末~5世紀初	
31	87-50	曲物(井戸枠)	3個体	SE601	7世紀後~8世紀後	
32	93-56	棒状	95		古墳時代中期?	杭か
	(整理中)	建築部材?	3		古墳時代中期?	ほぞ孔あり
		板状	3		古墳時代中期?	
		杭?	3		古墳時代中期?	
		木片・炭化材	13		古墳時代中期?	
		加工木?	43		古墳時代中期?	
		加工木	2	SE502中層	ON46以前	
		棒状	15	SE501	TK73~TK216	
		加工木	4	SE501	TK73~TK216	
		板状	3	SE501	TK73~TK216	
		木片	多数	SE501	TK73~TK216	
		棒状	1	SK501最上層	ON46以降	
		板状	2	SE503下層	古墳時代中期	
		棒状	12	SE503下層	古墳時代中期	
		木片	多数	SE503下層	古墳時代中期	
		加工木	5	SE503下層	古墳時代中期	
33	94-4	板状	1			
		不明製品	1			
長原遺跡東北地区						
34	84-4	船形容器	1	SD702	古墳時代中期	
	(整理中)	鉄斧柄	1	SD702	古墳時代中期	
		棒状	1	SD702	古墳時代中期	
35	95-57	柵材	多数	土手状遺構	TK10以前	コナラ節など
		刀形	2		TK10以前	
		建築部材?	2		TK10以前	ほぞ孔あり
		加工木	2		TK10以前	
36	97-12	曲物	1		NG7Bii相当	木釘使用
	(整理中)	指物箱材	1		(5世紀前半か)	
		把手	1			
		馬形	1			ヒノキ
		舟形	1			
		ミニチュア又鋏	1			
		天秤棒	1			切り込みあり
		柱材	?			
		杭	?			
		板状	?			
		棒状	1			
37	97-52	不明組合せ具	4		NG7Bii相当	ヒノキ
	(整理中)	紐綴じ装飾付き板	1		(5世紀前半か)	ヒノキ
		舟形	1			
		棒状	1			孔列あり
		柵材	多数	土手状遺構	NG7Bi相当	コナラ節など
		杭	多数	杭列	NG7Bi相当	
		刳物容器	1		NG7Bi相当	ケヤキ
長原遺跡北地区						
38	DD85-1	鎌柄	1	RK7Aiv層相当	6世紀中葉	
瓜破遺跡東南地区						
39	84-24	刳抜き井戸材(スギ)	1	SE01	飛鳥Ⅲ?	挟り・孔あり
		曲物底板	1	SE01	飛鳥Ⅲ?	木釘使用
		斎串	1	SE01	飛鳥Ⅲ?	

* 点数は、同一個体とみられるものを除き、木片1つを1点と計量している。

第2節 長原遺跡95－14次調査出土の動物遺存体

久保和士・松井章・宮路淳子・佐久間桂子

1) 概要

長原および隣接する瓜破遺跡では、これまでに多くの動物遺存体が出土してきた(註1)。今回報告する資料は長原遺跡95－14次調査で出土したもので、大部分が飛鳥時代に属する。骨の大部分は3A・3B・4A・4B区を中心に拡がる飛鳥時代の窪地SX701のウシ・ウマ骨出土集中部(以下、集中部と略す)に堆積したものである(図103～107、図版8・9)。この窪地には、水成層である第15層(長原標準層序では長原6Bii)が堆積しており、常時水浸き状態であったために乾燥状態では残らない動物遺存体や木製品などが残ったと考えられる。しかし大部分の骨が水漬けの状態で埋没していたため、骨の成分であるリン分が地下水に含まれる鉄イオンと化合して、藍鉄鉱(ビビアナイト)を析出してもろくなっているものが多かった。そのために骨の表面に残された解体に伴う刃物傷を確認することは困難であった。ただ分厚く頑丈な脛骨の表面に斧様の傷を観察できたのみである(図版59)。しかし、集中部での出土状態は、腱で繋がっていた前肢、後肢、胴部などが地表で風化や水の作用でバラバラになって堆積したとは思えず、ウシ・ウマの骨の集中部は、図面で見える単位に近い状態でこの窪地に投棄され堆積したと考えられよう。

出土した動物遺存体の大部分は、長原遺跡標準層位の長原6Bii層と長原7A層から出土しており、古墳時代後期から飛鳥時代にかけてのものである(別表1)。その中には原形の判別できる骨の総数が320点あった。その内訳はウマが171点、ウシが86点、骨の大きさ、厚さ、形状からウシ・ウマの区別のつきにくい破片が65点で、これまでの長原遺跡から出土しているイノシシ・シカ・イヌなどは含まれていない(表6・7、図版53～59)。特にもっとも多くの動物遺存体が出土した集中部は、長原6Bii層の飛鳥時代のものである。出土したウシとウマの出土分布をみると、両方が集中部の中に混在し(図108)、ウシ・ウマが時間をかけて別々に投棄され堆積したというよりは、集落の別の場所で解体処理された残滓を、この場所まで運んできて何回かに渡って投棄したと考えられる。この西南方には飛鳥時代の集落が存在し、その集落の別の場所で生じたウシ・ウマの廃棄物をこの窪地に投棄したと考えられよう。動物遺存体の出土した層位は、集中部では長原6Bii層を主体とする

表6 95-14次調査出土動物種名

哺乳綱

偶蹄目

ウシ *Bos taurus*

奇蹄目

ウマ *Equus caballus*

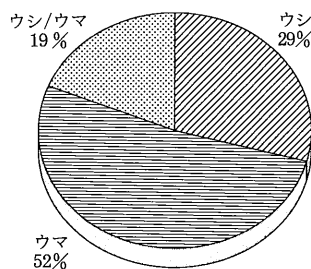
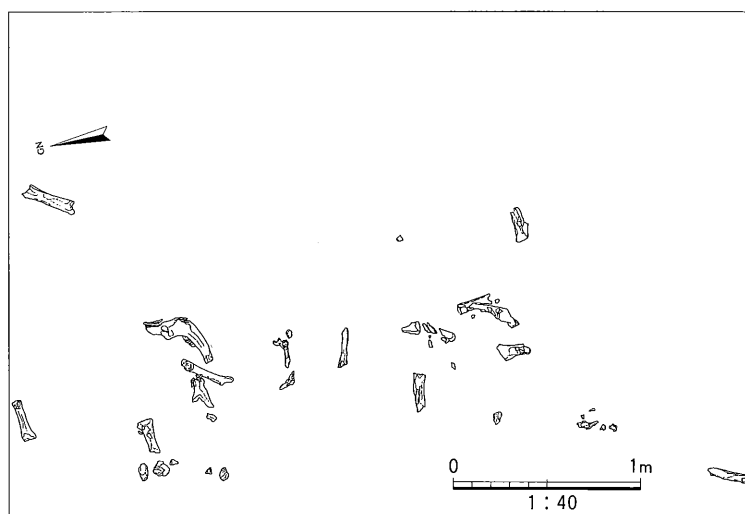
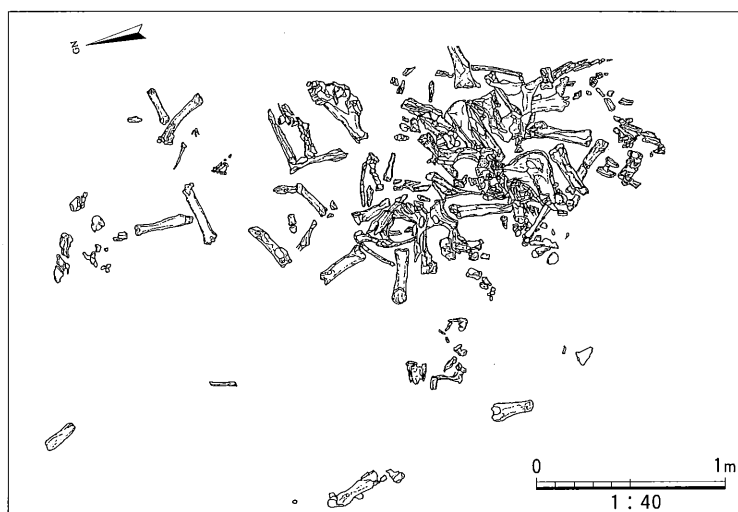
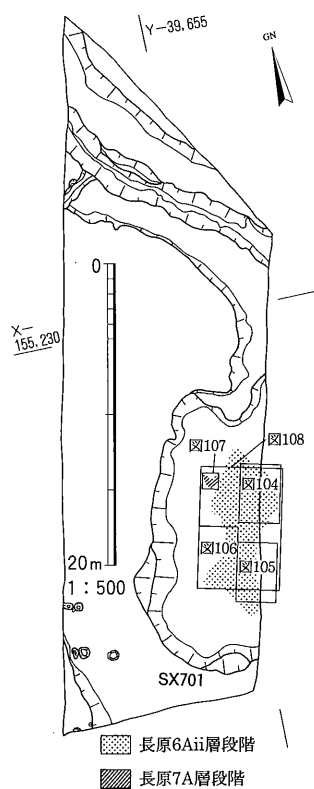


図102 ウシ・ウマ骨の破片数比



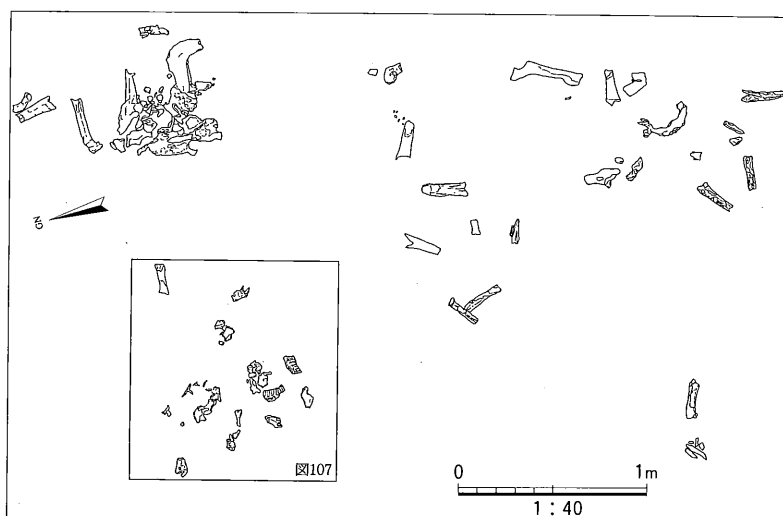


図106・107 ウシ・ウマ骨出土状況その3・4

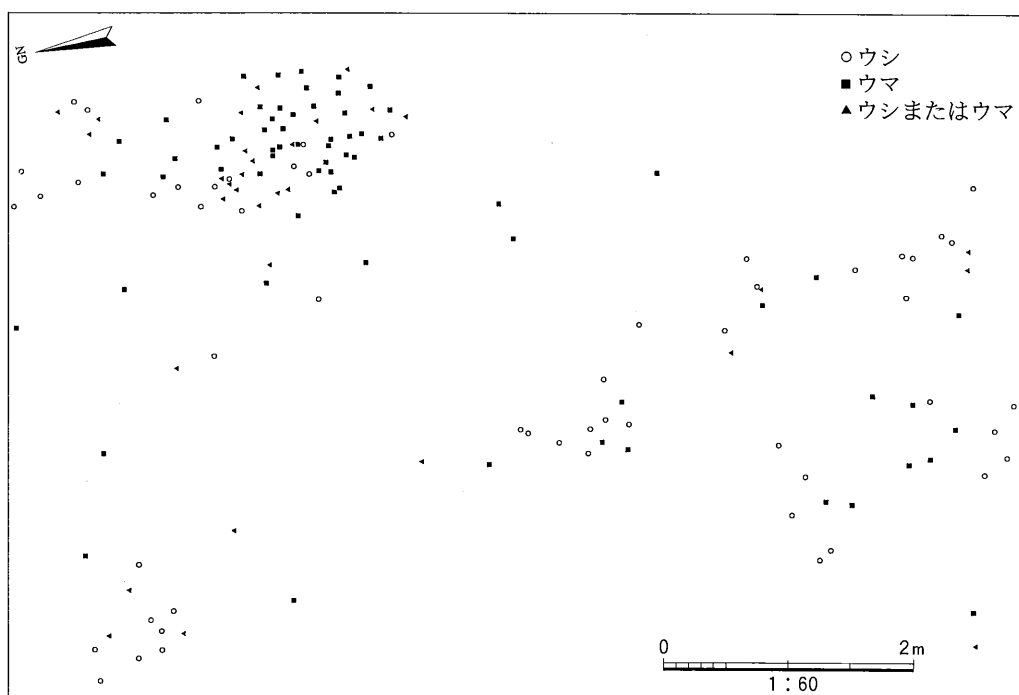


図108 ウシ・ウマ骨種別分布図

が、集中部に含まれないものとして長原7A層の古墳時代後期の層からも若干数が出土している。

2) 出土した動物遺存体の種類と観察

i) ウマの形質・年齢(表8・10)(註2)

a) 形質について

出土したウマの中で、計測を行えるものを、西中川駿らが報告した現生の在来馬の値と比較すると次のような特徴が明らかになる[西中川駿ほか1991]。

遺跡から出土する頭蓋骨、下顎骨で最も計測部位が残りやすいのは、臼歯列長・前臼歯列長・後臼歯列長などである(註3)。ここでは臼歯列長を基準にしてウマの大きさを考察する。計測した結果によると、試料R697では臼歯列長が182mm、R976では164mmをはかり、大きさが異なった。これまでに記載されている古墳時代から古代のウマの計測値は、林田による報告では岡山県川入遺跡では161mm、同じく上東遺跡では156mmである[村田重幸・鈴木孝司1974]。また、神戸市長尾宅原遺跡の7世紀前半の河川から出土したウマは、臼歯列長が160mmとなり[松井章1988a]、川入・上東遺跡などのこれまで報告されていた古墳時代のウマ、あるいは在来小型馬の範疇に含められる。一方、松井による8世紀後半の平城京の報告では、それぞれ170mm・175mm・170mm・167mmであった[松井1984]。これらの計測値と比較すると、試料R697の計測値は非常に大きく、平城京から出土したウマの数値をもはるかにしのぐ。権威の象徴としてウマを考えるなら、大きく見栄えのするものが価値を持つことは自然で、このウマはこの時代には例を見ない立派な個体であったといえよう。

b) 年齢について

奈良時代やそれ以降にみられる、20才を越えたような極端な老齢馬は見られず、第三後臼歯の萌出が終わり、臼歯列全体に摩耗が進行をはじめた5～6才くらいの個体や、第四前臼歯や第三後臼歯のエナメル高がある程度摩滅が進行した10～15才程度(註4)の牡馬が多いことがわかる。また乳歯を持つ幼馬も見られず、この遺跡が牧を伴っていなかったことの間接的証拠になるかも知れない。

ii) ウシの形質・年齢(表9・10)

ウマで見たように、この遺跡から出土したウシも牡馬の個体が多く、老齢、幼齢の個体は見られない(註5)。ウシの下顎骨の臼歯列長は、R632で93mmである。この値は、在来

和牛である天然記念物、山口県見島牛の現生オスの値、93.5mmとほぼ等しく[西中川ほか1991]、わが国のウシの形質がこのころまでたどれるといえよう。ただしウマに比べて、ウシは出土例も少なく、その形質的系譜をたどるためにはまだ、地域的、時代的出土例を増やさねばならないだろう。

3) 考察

i) 長原遺跡における牛馬の出土の時期

久保のこれまでの研究の蓄積からすると、長原遺跡でウマが出現するのは、長原第16次調査におけるSD04、長原7Bi層からの出土で、5世紀中葉のことである。ウシはさらに遅れ、足跡化石ではRK7Bi層上面で6世紀前半と考えられる。さらに実際に遺存体として出土するのは、6世紀後半以降から7世紀前半(飛鳥時代前半)のことである[久保1999a]。さらに近年の成果では、さらに新しく、長原7A層、7世紀前半であるという。今回の報告例は、飛鳥時代(7世紀前半)ということで、長原遺跡およびその周辺でも牛馬の普及が急速に進んだ時期であったといえよう。このような傾向は、畿内各地の遺跡での出土の傾向と一致し、牛馬の普及が今まで考えられていた以上に遅れることを示す。この傾向が他の地域で報じられる3・4世紀における牛馬の出土例と共通のものと考えて良いだろう。

ii) ウマについて

この地域には長原古墳群が存在するが、その一つの6世紀中葉、長原古墳群の新しい時期に属する南口古墳の周濠および墳丘で、ウマを用いた特殊な動物儀礼の存在が発掘で明らかになった。この古墳では周濠中でウマを殺し、頭部を前方部正面の墳丘においた後、四肢を周濠底に突き立てたままにして上部の肉を解体して供献したり宴を催したと考えられている[久保1995]。このような情景は、『日本書紀』『垂仁紀』に見られる、倭彦命を葬る際に「近習者を集えて、悉く生けながらにして陵の域に埋みて立つ」という埴輪の起源に関する記述を、人をウマに置き換えればその情景を彷彿とさせるものである。『日本書紀』の場合は人が犠牲となって古墳の周囲に立ったまま生き埋めにされたのであるが、この古墳の場合はウマの頭を切断して胴部を立ったまま周濠中に突き立てて、頭部を墳丘にささげたと考えられる。この古墳に葬られた人物は、特にウマとの関わりの深い人物であったのであろう。

さらに古墳時代から古代にかけて長原遺跡に居住した人々が、特に牛馬と深く係わっていたことが、この地区から出土する様々な遺構、遺物から伺える。一つの例として6世紀

後半から7世紀前半に建物を撤去した後の柱の抜取穴の一つに、一体のウシの四肢骨を配置して埋戻した祭祀の跡が存在することである[久保1999a]。これは『日本霊異記』に見えるウシを殺して漢神を祭る信仰と同じものと考えられる。その他にも井戸からウマが出土したり[久保1993]、馬墓を設けたり[久保1992a]、あるいは8世紀前半の水田域に隣接する大きな窪みにウシの頭部を埋納した例[久保1992b]など、さまざまな牛馬とのつながりのありかたが伺える。

R697のウマは、前臼歯前縁から後臼歯の後縁の歯槽間で182mmをはかり、古代では類を見ない大きさである。松井が長尾宅原遺跡で報告した臼歯列長160mmの個体や[松井1988a]、林田が報告した川入や上東遺跡から出土している体高108–122cmのトカラウマ相当クラスとは形質の異なる大きな個体である。さらにこの値は体高124–142cmの中型馬である木曾馬などに匹敵するかこれを凌駕し[林田1974]、明かに中世の鎌倉材木座出土のウマのなかでも平均より大きなものである。こうした形跡は、断片的ではあるが他の部位の計測からも伺うことができる(表10)。

長原遺跡でのこうしたウマの出土例から、古墳時代を通じて全国的に小型馬主流であったウマの形質が、この頃より長原遺跡では大型化することが挙げられよう。ウマが権力者にとって、傑出した威信財であったことに異論はないであろう。そして優れた形質のウマを入手することがその権威を一層高める効果を持ったことは、古代、中世を通じての文献に多く見られる。このような品種改良のためには、大きな権力のもとで広い範囲から優れた形質、つまり大型のウマを選別して入手するか、自ら牧の経営に乗り出し、優れた形質のウマを育種しなければなかったことであろう。奈良時代、平安時代には律令制のもとでこうした体格の良いウマが各地の牧で選別されて、平城京に運ばれたり、地方でも重要な公的機関で飼われていたと考えられるだろう。ただし、関東地方などの農村部では、多分、農耕用に小型馬が好まれたせいも、中、近世にいたるまで、現生のトカラウマ相当の矮小馬も中型馬とともに出土することが特徴である[松井1988b](註6)。

iii) 集中部のウシ・ウマ

今回のウシ・ウマの集中部での出土状況は、解体処理された残滓をこの窪みに投棄したと考えられるが、実際にそれぞれ何個体のウシ・ウマがここに埋存していたかを算定することは困難なことである。こうした場合、考古学では個体数算定のために(1)破片数法、(2)最小個体数算定法、(3)重量法が用いられるが[Chaplin1971]、それぞれに長所、短所がある。そこで(3)はこのような散乱骨が主体の遺跡では論外として(1)、(2)の方法

を用いて集中部に何個体のウシ・ウマが埋存していたかを推定してみる。まず、破片数法によると、ウシが82点、ウマが147点である(図102)。さらに最小個体数法によって、この集中部に最少、何個体のウシ・ウマが投棄されていたかを算定すると、ウシの場合、脛骨が左右6個体で重複しない部位としては最も多く、最小個体数は6個体となる。同様に、ウマも脛骨の右側が最多で、5点出土しているので最小個体数は5個体と算定できる。両方の算定法では、ウシとウマの比率が逆転するが、実際に分類した印象としては、破片数法による比率がより実態に近いと考えられる。その実数は破片数法を考慮に入れると、最小個体数法で得られた数字の2～3倍程度、つまり、ウマが10～15頭、ウシが5～10頭程度、解体されて投棄されたという印象を持つ。このようにウマがウシに比べて多いのは畿内での一般的な傾向であろう。

4) 集中部と文献との対比

753年に施行された『養老厩牧令』の「官馬牛死条」と、『養老令』を含む令の注釈書である『令義解』や『令集解』には、公の牛馬の死んだ際の処置について以下のように定める[松井1987a]。

1. 馬が死んだ場合、皮と脳を取れ
2. 牛が死んだ場合、皮と角と膽(胆嚢)を取れ
3. 牛黄(胆石)があった場合、別に収めよ
4. 駅馬、伝馬として使用中に、出先で死んだ場合には、現地で皮と宍(肉)を売って代金を本司(元の役所)に収めよ

通常の斃れ牛馬の処理と考えられる1・2の場合には、宍が含まれないが、地方では「皮と宍を売りに出せ」と定めながら、1・2に肉の処置について記載しないのはこういった理由によるものであろうか。一つの可能性は、皮・脳・角・膽などは、それぞれ死んだ動物のさまざまな生産にかかわる原材料として価値があると考え、肉は解体処理という作業の代償、もしくは解体処理場、あるいは解体処理に携わる集団に帰属されるべきものであったのかも知れない。

これは、『左経記』の長和五(1016)年正月二日の記事に見える貴族の屋敷で死んだ牛を、河原人等が来て解体して持ち帰ったという伝聞記録と合致する。この場合では、河原人等は代償を受けずに、皮・肉・骨などまで持ち帰ったとされているが、牛黄まで持ち帰る権利はなかったため、その話を聞いた貴族によって勘責を加えられて、牛黄をしぶしぶ提出

したという。

『養老職員令』によると皮革生産は内蔵寮や大蔵省に所属する百済手部、狛部らが担っていたとされているが、この記録の残された11世紀になると、河原人等が斃牛馬処理と皮革生産を担っていたこと、牛黄の帰属に関しては、旧来通り斃れ牛の所有者のものであったと推定できる。律令制の解体後は、斃牛馬処理、皮革生産などにかかわった工人集団は、国家統制から切り離されて、都市の周縁で、その他のさまざまな生業にも従事しながら操業していたと考えられる。鎌倉時代の作である『天狗草紙』には、賀茂の河原に杭を打って牛皮を延ばして天日に干している粗末な家と菜園を持つ家族が描かれる。平安時代から鎌倉時代にかけての京都では、こうした人々が「河原人」と呼ばれて、斃牛馬処理に当たっていたと思われる。

このような文献記録に対して、斃牛馬処理の考古学的な証拠として長原遺跡の北部・東北部に含められる大阪市城山遺跡の8世紀後半の溝から出土したウマの遺存体がある。その頭蓋骨および肋骨・椎骨・大腿骨などには解体痕があり、解体されて散乱状態で骨が投棄されたことがわかる。さらに頭蓋骨の前頭骨には斧で切れ目を入れて、側頭骨から後頭骨へ向って切り抜けて脳を摘出した痕跡があり、それが『養老厩牧令』に準拠した処理であり、松井は、その脳が『養老厩牧令』と『令集解』の規定に見える「官の馬」の脳で、『延喜式』内蔵寮式にみえる「鹿皮一張 長さ4尺・広さ3尺 毛を除き曝し涼すに一人、膚穴を除き浸漬するに一人。削りて暴し、脳を和え、槎り乾かすのに一人半。」(註7)と鹿皮を鞣すための鞣剤として利用されたことを論じた[松井1987b]。久保もまた森の宮遺跡の7世紀の溝、SD701から出土したウマの頭蓋に人為的に開けられた痕跡があることに注目して同様の所見を述べている[久保1996]。すでに小林行雄は、このような脳漿鞣による皮革製作技術が、『日本書紀』仁賢紀に見られる、高麗より献じられた工匠、須流枳・奴流枳等の記事(註8)に対応するものとして、おおよそ5世紀後半に皮革製作技法に革新があったことを指摘した。

本調査地でも集中部の中のウマの頭蓋骨が仰向けになって出土しているが(図版9)、その前頭部から後頭部にかけて欠損しており、人為的に脳を摘出するために破損した可能性が強い。この例も森の宮遺跡と同様、7世紀に属するものであり、大阪市内およびその周辺では早い時期から脳を使った皮革製作集団が存在したことを示すだろう。

5) まとめ

調査地からは約320点のウシ・ウマの骨が出土し、そのうち飛鳥時代の窪地SX701には、約230点が含まれていた。ウシ・ウマの出土状態は、元来の生物学的な骨格の位置関係を保っているものは無く、散乱状態であり、人間が解体し肉を取った残滓であると考えられよう。

このような牛馬の散乱状態の出土と、その中のウマの頭蓋骨の前頭部、頭頂部が割られていることは、その中の脳を摘出した可能性が強く、この処理は、『養老厩牧令』官馬牛死条、およびその注釈書である『令義解』および『令集解』に見える斃れ牛馬の処理規程に合致するといえる。ただ、この地で処理された牛馬が官馬牛であったか、その処理を順守した私馬牛であったかは判断できない。いずれにせよ養老厩牧令が、長原および隣接する城山遺跡において7・8世紀に厳密に守られていたことを証明できたことは大きな成果であろう。

解体されたウマの中には、中近世のウマに比しても引けを取らない大きな個体が存在し、この時期にすでに体高の異なる中型馬、小型馬が併存していたことがわかった。

この報告は、1999年5月に天逝された大阪市文化財協会調査員、久保和士氏が整理し、資料化を進めていたものである。氏の計報に接し、これまで共同で研究を続けていた松井がその後を引き継ぎ、宮路淳子、佐久間桂子の協力の下で本稿をまとめた。氏の精緻な資料化にもかかわらず、その成果を十分に紹介することのできなかった我々の非力さをお断りしておかなければならないことは言うまでもないが、久保氏の最後の研究資料をまとめる役割を与えていただいた大阪市文化財協会に感謝する。

註)

- (1) 久保和士[1999b]の年譜を参照のこと。
- (2) 計測方法については、Driesch, Angela 1976 *A Guide to the Mesurement of of animal bones from archaeological sites*. Peabody Museum Bulletin 1, Harvard University. を用いる。計測値表の計測番号もこれに対応する。
- (3) この値は、歯槽間で測るのと、植わっている歯のエナメル質の端部間を測るのとでは、若干の違いがある。歯槽間が年齢を通じて変動が少ないうえ、歯が脱落していても計測可能なので、歯槽間の値を基準に用いることとする。
- (4) Goody, P. C. 1983 *Horse Anatomy*. J.A. Allen & Company Limited, pp. 36-41. による。
- (5) ウシについては、それぞれの臼歯の摩滅の進行と年齢に関するデータを持たないので具体的な年齢推定を行うにいたらなかった。
- (6) 大崎貝塚からは縄文時代後期の貝層からウマの骨が出土したということであったが、後に中世のものと

判明した。このウマの中手骨の全長がトカラウマのものとはほぼ等しい。

(7)「鹿皮一張、長四尺・廣三尺、除毛曝涼一人、除膚完浸釋一人、削暴和腦槎乾一人半、染皂革一張、長廣同上 燒柔薰烟一人、染造二人」

(8)是歳、日鷹吉士還自高麗、獻工匠須流枳、奴流枳等、今倭國山辺郡額田邑熟皮高麗、是其後也。

この節に関する参考文献

- 久保和士1992a、「動物遺体」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅲ、pp.93-94
1992b、「動物遺体」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅳ、pp.96-98
1993、「動物遺体」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅵ、pp.54-56
1995、「南口古墳出土のウマについて」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅷ、pp.407-413
1996、「動物遺体の調査結果」：大阪市文化財協会編『森の宮遺跡発掘調査報告』Ⅱ、pp.134-174
1999a、「動物遺体の調査結果と検討」：大阪市文化財協会編『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅱ、pp.107-120
1999b、『動物と人間の考古学』真陽社
- 西中川駿ほか1991、『古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究』
平成2年文部省科学研究費補助金(一般B)研究成果報告書
- 林田重幸1974、「日本在来馬の源流」『日本古代文化の探求・馬』社会思想社、pp.215-262
- 林田重幸・鈴木孝司1974、「倉敷市上東遺跡出土の馬歯について(川入遺跡の馬下顎も含めて)」：岡山県教育委員会『埋蔵文化財発掘調査報告書第2集 山陽新幹線建設に伴う調査2』、pp.364-367
- 松井章1984、「動物遺存体」：奈良国立文化財研究所『平城京右京八条一坊十一坪発掘調査報告書』、pp.54-56
1987a、「養老厩牧令の考古学的考察—斃れ馬牛の処理をめぐる—」：『信濃』39-4 信濃史学会、pp.231-256
1987b、「城山遺跡出土の動物遺存体」：大阪文化財センター『城山遺跡(その2)』、pp.227-232
1988a、「長尾宅原出土の動物遺存体」：妙見山麓遺跡調査会『神戸市北区 長尾宅原遺跡 宮之元地区の調査(1986)』、pp.157-160
1988b、「大崎貝塚出土の動物遺存体」：野田市立郷土博物館『野田市大崎、東金野井貝塚発掘調査報告書』、pp.11-16
- Chaplin, R. 1971 *The study of animal bones from archaeological sites*. Seminar Press, London.

表7 ウシ・ウマの部位別出土量

	計	不明	左右	左	右		計	左右	左	右	左または右
ウマ						ウシ					
頭蓋骨	1					前頭骨	3		1	2	
前頭骨	1		1			前頭骨+後頭骨	1			1	
側頭骨	1			1		側頭骨	2		1	1	
後頭骨	1					口蓋骨	1	1			
前頭骨+頬骨+側頭骨+ 頭頂骨+後頭骨	1			1		後頭骨+側頭骨+頬骨	1				1
口蓋骨	2		1	1		上顎骨	3		1	2	
上顎骨	3		2	1		上顎骨+口蓋骨	1		1		
上顎？	1				1	上顎歯	2			2	
上顎歯	48		24	22	2	下顎骨	4		1	2	1
上顎臼歯	1				1	下顎	1		1		
上顎骨+切歯骨	1	1				下顎歯	2		2		
下顎骨	8	2	3	3		頭蓋片	2				2
下顎歯	10		5	4	1	頬骨	2		1	1	
他顎骨	1				1	涙骨	1			1	
他臼歯	1				1	肩甲骨	2		1	1	
切歯骨	4		2	1	1	上腕骨	6			6	
頸椎	3					坐骨	1			1	
第3頸椎	1					大腿骨	8		5	3	
軸椎	1					橈骨	7		2	5	
腰椎	1					脛骨	12		6	6	
環椎	1					寛骨	6		3	3	
環椎？	1					尺骨	6		2	4	
肩甲骨	8		4	4		踵骨	2		1	1	
寛骨	2	2				距骨	2			2	
上腕骨	5		3	2		中手骨	1			1	
肋骨	4		2	1	R?1	中足骨	6		2	4	
坐骨	1		1			中心第4足根骨	1		1		
腸骨	2		1		R?1	計	86点				
種子骨	2		2			ウシまたはウマ					
基節骨	2		1	1		上顎歯	1		1		
中節骨	3		1	1	1	上顎骨	1				1
末節骨	4				4	下顎骨	1				
大腿骨	7		4	3		頭蓋骨	5				
橈骨	4		2	2		臼歯	1				
尺骨	1		1			臼歯片	5				
橈骨+尺骨	2		1	1		椎骨(おそらく頸椎)	1				
脛骨	10		5	5		頸椎	1				
中手骨	2			2		胸椎	1				
第3中手骨	1		1			肩甲骨または寛骨	1				
中足骨	3		1	2		肋骨	5				
第2中足骨	1		1			肢骨	25				
第2+3+4中足骨	1		1			大腿骨	2				
第3中足骨	1		1			脛骨	1		1		
第4中足骨	1		1			手根骨または足根骨	3				
第1+2足根骨	1		1			不明	11				
第3足根骨	2		1	1		計	65点				
第3足根骨？	1		1								
第4足根骨	1		1								
中心足根骨	2			1							
踵骨	1		1								
距骨	3		1	2							
計	171点										

表8 ウマの頭蓋骨・下顎骨計測値

計測部位			計測値(mm)	
ウマ頭蓋骨			R695	
4	基底短長	バジオン-前臼歯前縁間	346	
22	臼歯列長	歯槽間	157	
22a	臼歯列長a	エナメル端間	156	
23	後臼歯列長	歯槽間	75	
23a	後臼歯列長a	エナメル端間	74	
24	前臼歯列長	歯槽間	88	
24a	前臼歯列長a	エナメル端間	86	
35	後頭骨顆最大幅		105	
36	後頭窩最大幅		38±	
48	口蓋骨最大幅	左右歯槽間	123	
ウマ下顎骨			R697	R976
1				389
2				420±
3			117	125
4				277
5			293	280
6	臼歯列長(歯槽間)	P2前縁-M3後端	182	164
7	後臼歯列長	M1前縁-M3後端	90±	80
8	前臼歯列長	P2前縁-P4後端	93±	85
9	P2長さ×幅		33×17	32×156
10	P3長さ×幅		27×17.8	26×16
11	P4長さ×幅		26.2×18.6	25×15
12	M1長さ×幅			24×15
13	M2長さ×幅			24×14
14	M3長さ×幅			30×13
15			74	
16			62	
18			44	
19				232
20				214
22a	下顎枝高a	M3後端で		112
22b	下顎枝高b	P4,M1歯槽間で	88	72
22c	下顎枝高c	P2前縁部で	50	47.5

Pは前臼歯、Mは後臼歯を示す。

表9 ウシの下顎骨計測値

計測部位		計測値(mm)
ウシ下顎骨		R632
後臼歯列長	M1前縁-M3後端	93
下顎枝高a	M3後端で	81
下顎枝高b	P4,M1歯槽間で	68

Pは前臼歯、Mは後臼歯を示す。

表10 ウシ・ウマ骨計測値

種類	部位	左右	部 分	計測値(mm) (註2)
ウシ	下顎骨	右	切歯部・筋突起・関節突起欠[(P2~P4)M1~M3]	表9参照
ウシ	下顎骨	左	[M2M3]枝	計測不可
ウシ	寛骨	右	恥骨,坐骨結節欠	LA≒66
ウシ	距骨	右	近位欠	Bd=49.4
ウシ	距骨	右	0	GL1=64.2 Bd=41.2
ウシ	肩甲骨	右	関節窩・背縁欠	SLC=68.5
ウシ	肩甲骨	左	肩甲骨・背縁欠	SLC64.5
ウシ	上顎骨	右	[M1~M3]	後臼歯列長=87.1
ウシ	上顎骨+口蓋骨	左	[M1~M2]	後臼歯列長≒86
ウシ	上腕骨	右	大結節・外側顆欠	GLC≒278
ウシ	上腕骨	右	骨幹	SD=43
ウシ	上腕骨	右	骨幹 中位~遠位	SD=46
ウシ	上腕骨	右	骨幹 全体	SD=50.1
ウシ	大腿骨	左	遠位端欠,近位端接合不可	SD=48.8
ウシ	中手骨	右	近位端・内側滑車欠	SD≒43
ウシ	中心第4足根骨	左	0	GB=64
ウシ	中足骨	右	骨端少欠	GL≒225 SD=×
ウシ	中足骨	右	近遠位端欠	SD=34
ウシ	中足骨	右	遠位端欠	SD=36.2
ウシ	中足骨	右	遠位端欠	SD=42
ウシ	中足骨	左	近位端	Bp=56.6
ウシ	橈骨	右	近位端・遠位端前面欠	GL≒294
ウシ	橈骨	右	遠位端欠	SD=46~47
ウシ	橈骨	右	骨端少欠	SD=48
ウシ	橈骨	右	遠位端欠	SD=57
ウシ	橈骨	左	遠位半	Bd=76.0 BFd=51.0
ウシ	橈骨	左	遠位端欠,近位端少欠	SD=56
ウシ	脛骨	右	前縁欠	GL=337 SD=49.5 Bd=67.7
ウシ	脛骨	右	骨幹 全体	SD≒49
ウシ	脛骨	右	骨幹 ほぼ全体	SD≒51
ウシ	脛骨	左	近位端・遠位端少欠	SD=45 Dd=49.4
ウシ	脛骨	左	骨幹 全体	SD=48.4
ウシ	脛骨	左	近位端欠,遠位端少欠	SD=52
ウシ	脛骨	左	近位端欠,遠位端大半欠	SD=52.5
ウシ	脛骨	左	骨幹 ほぼ全体	SD≒45
ウマ	下顎骨	右	[(M3)]下顎枝 筋突起欠	Mand3=132 22a=106
ウマ	下顎骨	右	[(P2)P3(P4)]左右連合部有	P3 H=23くらい
ウマ	下顎骨	左	[(I3,P2)P3(P4)]	M22c=47.3
ウマ	下顎骨	左	[P3P4(M1~M3)](M1~M3)は舌側のみ	P4 h≒67
ウマ	下顎骨	左+右	左切歯部・筋・関節突起欠・右筋突起欠	表8参照
ウマ	下顎骨	右	M1	h=31
ウマ	下顎骨	左	P3	h=24
ウマ	下顎骨	左	M2?	H31くらい
ウマ	寛骨	左+右	腸骨翼・坐骨結節欠	GBA≒116 SBI=130 LA=60
ウマ	寛骨	左+右	左腸骨翼・坐骨結節少欠,左右恥骨体欠	LAR=58
ウマ	環椎	0		GLF81.8 BFcr82.7 BFcd86.0
ウマ	基節骨(後肢)	左		Bp=56.8
ウマ	距骨	右	距骨滑車少欠	BFd=50.6
ウマ	距骨	左	0	GB=59.7 BFd=52 GH=56.3
ウマ	肩甲骨	左	関節窩少欠,背縁欠	SLC=65.6

種類	部位	左右	部 分	計測値(mm)(註2)
ウマ	軸椎	—	0	BFcr75.3
ウマ	上顎歯	右	M1	27.2×29.9 H50
ウマ	上顎歯	右	M2	29.3×29.2
ウマ	上顎歯	右	M3	B=22.2 H=32
ウマ	上顎歯	右	M1?	H=27
ウマ	上顎歯	右	M2	h22 エナメルB25.2×L27.3
ウマ	上顎歯	右	P2	h27 エナメルB27.3×L37.3
ウマ	上顎歯	右	P4	h36
ウマ	上顎歯	右	P2	L=41.1 B=29.7 h46
ウマ	上顎歯	右	M1	エナメルB25.0×L24.0
ウマ	上顎歯	左	M3	34.4×— H=—
ウマ	上顎歯	左	P2	41.9×22.2 H=30
ウマ	上顎歯	左	M1	h28 エナメルB24.3×L24.2
ウマ	上顎歯	左	P3	H=35
ウマ	上顎歯	左	P4	H=36
ウマ	上顎歯	左	M1	H=36
ウマ	上顎歯	左	P4	h>52
ウマ	上顎歯	左	M1	H≒62
ウマ	上顎歯	左	P2	h47
ウマ	上顎歯	左	P4?	H53
ウマ	上顎歯	左	P4	L=33.5 B=30.4 h56
ウマ	上顎歯	左	M3	エナメルB25.4×L27.2
ウマ	上腕骨	左	遠位端	Bd=71
ウマ	大腿骨	左	骨幹 全体	SD=44.5
ウマ	第3中手骨	左	近位端欠	SD=36.4
ウマ	第3中足骨	左	遠位端少欠	GL≒268
ウマ	中手骨	右	骨幹 全体	SD=32.7
ウマ	中節骨(後肢)	左	0	Bp=54.8
ウマ	中足骨	左	遠位半	Bd=46
ウマ	中足骨Ⅱ+Ⅲ+Ⅳ	左	遠位端少欠	GL=267 Bp=53.8 SD=35.0
ウマ	橈骨	右	近位端欠	SD=38.7
ウマ	橈骨	右	骨幹 全体	SD=40.6
ウマ	橈骨	左	近位端少欠,遠位端外側欠	GL≒308
ウマ	橈骨+尺骨	右	橈骨近位端・遠位端・尺骨肘頭欠	RadSD=43
ウマ	橈骨+尺骨	左	橈骨近位端・遠位端少欠	RadSD=44
ウマ	脛骨	右	近位端少欠	Bd=63 L1≒294
ウマ	脛骨	右	ほぼ完形	G≒347
ウマ	脛骨	右	骨端少欠	GL≒320(実長305) SD=46.3
ウマ	脛骨	右	近位端欠	SD=44
ウマ	脛骨	左	近位端少欠	GL≒365 Bd=72
ウマ	脛骨	左	骨幹 全体	SD=38.2
ウマ	脛骨	左	踵骨隆起欠	GB=49.8

別 表

別表1 長原遺跡の標準層序1995

層序	層序 概念図	層相	層厚 (cm)	自然現象 自然遺物ほか	おもな遺構・遺物	C.14yBP	時代
NG0層		現代客土	—				近代・現代
NG1層		現代作土	15-25				
NG2層		含細礫灰褐色～黄褐色シルト質砂	6-24		小溝群・畝間 青花・唐津・瀬戸美濃・備前など	(400)	近世
NG3層		含細礫淡黄褐色～灰色粘土質シルト	12-20	暗色帯	小溝群・畝間・島島		
NG4A層		含細礫黄灰色中粒砂	8-15		瓦器 (Ⅲ～Ⅳ期)		室町
NG4B層	i	暗灰色砂質シルト	av.20		←水田面 瓦器土器 陶磁器 須恵器 土師器		
	ii	含細礫黄灰色中粒砂	av.5		←水田面 小溝群・畝間		鎌倉
	iii	10～45cm 灰色砂質シルト	av.15		瓦器 (Ⅰ～Ⅱ期)	(800)	
NG4C層	i	明黄褐色砂質シルト	av.20		▽掘立柱建物		平安
	ii	にぶい黄褐色シルト質砂	av.20		←水田面		
NG5A層		灰色砂礫・シルト質細粒砂礫層を被在	10-80		平城宮Ⅴ～Ⅵ	(1200)	
NG5B層		青灰色細粒～極細粒砂	2-8		←鉄釘		
NG6A層	i	暗青灰色砂・粘土質シルト	≦20	タニシ	←水田面		奈良
	ii up.	暗緑灰色中粒～細粒砂	≦5			(1300)	
	ii lw.	粘土質シルト層と極細粒砂礫層の互層	av.10		←ヒトと偶蹄類の足跡		
NG6B層	i	含砂・礫黒褐色～暗灰色シルト質粘土	≦15	タニシ	←水田面		飛鳥
	ii	灰色粘土・シルト・細礫質粗粒砂	≦5	←乾痕	←水田面	(1400)	
NG7A層	i	含砂灰色粘土	av.10		←水田面		古墳後期
	ii	含砂黒褐色シルト質粘土	av.15		掘立柱建物		古墳中期
NG7B層	i	黒褐色砂・礫質粘土	≦35		←長原古墳群 埴輪 (Ⅱ～Ⅴ期)・須恵器 (～TK10)	(1600)	古墳前期
	ii	褐色極粗粒砂～粘土質シルト	≦20		←(←水田面：八尾南遺跡)		
	iii	暗褐色粘土質シルト	≦5		庄内式・畿内第Ⅴ様式 ↓方形周溝墓・野穴住居	(1700)	弥生後期
NG8A層		青灰～黄灰色砂・礫～粘土	≦40		←方形周溝墓・溝		
NG8B層		暗褐色砂質シルト	av.10		畿内第Ⅲ・Ⅳ様式・凸基式石鏡	(2000)	弥生中期
NG8C層	i	にぶい黄褐色極粗粒砂～中粒砂	av.25		←ヒトの足跡		
	ii	黄褐色シルト質粘土	≦15	←乾痕	←水田面・溝・自然流路の堤		弥生前期
NG9A層		灰色シルト質粘土	av.10		石器製作址・畿内第Ⅱ様式・石斧 畿内第Ⅰ様式・晩期長原式・石鏡		
NG9A'層		黒褐色砂・シルト質粘土	3-15				
NG9B層	i	灰オリーブ～黒褐色砂礫	≦90				
	ii	暗灰色シルト質粘土	10-40		畿内Ⅰ様式・堅持		
	iii	灰オリーブ色シルト質粘土	3-14				
	iv	暗灰オリーブ色シルト質粘土	8-50	アラカシ イヌガキ	土器 石標		
	v	灰オリーブ色シルト質粘土・砂	10-35		▽土器製作址 ▽土器堆積 ▽野穴住居・貯蔵穴		縄文晩期
NG9C層	i	黒褐色～褐色含シルト質粘土	2-8	←乾痕	←晩期遺物Ⅳ式 凸基式石鏡		
	ii	灰色シルト質粘土～砂礫	2-10		後期四ツ池式	(3000)	縄文後期
	iii up.	オリーブ黒～灰色シルト・粗粒砂質粘土	7-25				
	iii lw.	暗灰色シルト～粘土質粗粒砂	av.5	←火山灰層			
NG10層		緑灰～オリーブ灰色礫質砂・シルト	≦80		←地層		
NG11層		灰色シルト質粘土	≦16	←乾痕			
NG12A層		腐植黒褐色礫質粘土～シルト	≦15		中期北白川C式・石鏡	←4020±110SI (GaK-11323) ←4740±140SI (GaK-14942) ←4900±140SI (GaK-14941)	
NG12B層	i	NG12B層 暗灰色細粒砂質シルト	av.20	←地層?			
	ii	暗灰色シルト質火山ガラス	av.10	(2枚埋)			縄文中期
	iii	黒灰～灰色火山ガラス質シルト	av.10		中期初元Ⅱ式		
	iv	粘土質シルト			凹基式石鏡	←4900±100Cb (GaK-14940)	
NG12C層		5～20cm 緑灰色シルト質細粒砂～シルト	≦45				
12/13層漸移帯		暗灰色細粒シルト (～黒ボク・風成)	≦5	←乾痕	←横大路火山灰層		
NG13A層	i	灰色細粒シルト	≦5				縄文早期
	ii	灰黄～灰白色細粒シルト (火山灰質)	av.7	←乾痕	←阪手火山灰層準 ▽土器製作址		
NG13B層	i	黄褐色～灰黄色シルト質粘土	≦5		削器・ナイフ形石器・剥片・石核		
	ii	黄灰色粗粒シルト質火山灰	≦5	←平安神宮火山灰層	?剥片・石核	←25000	後期旧石器
NG13C層		暗灰黄～暗褐色シルト質粘土	av.12	↓乾痕			
NG14層	up.	灰白～緑灰色シルト質砂～砂質粘土	20-80		削器・ナイフ形石器・細部調整剥片石器		
	lw.	灰色砂礫～砂質シルト			▽土器製作址		
NG15層	up.	黄灰色～緑灰色粘土～砂礫	150-450				
	lw.	シルト・砂礫		ヒメマツノハダ ←ナウマンゾウの足跡			
NG16A層		暗灰～灰青色シルト・礫混り砂互層	≦150		←化石林・ナウマンゾウとオオツノジカの足跡化石	←87000	
NG16B層	i	暗褐色泥炭質粘土	≦20	←香森火山灰層層準			
	ii	灰色火山灰質砂質粘土	≦20	←北花田火山灰層層準		←91000	
	iii	灰色砂礫	≦40				
(未命名層)		灰色砂礫～砂質粘土	40-70		←ゾウの足跡状の凹み		中期旧石器
		暗緑色粗粒砂質粘土					

←：上面検出遺構 I：下面検出遺構 ▽：地層内検出遺構

Cb：炭 SI：土塊
【趙哲済1997】に加筆

引用・参考文献

- 上野純司1996、「和泉式土器」：『日本土器辞典』 雄山閣、pp.702-703
- 大阪市文化財協会1986、「府営高野大橋第2住宅団地建設に伴う瓜破遺跡発掘調査(第2次)(UR86-11)略報」
1987、「大同建設道修町ビル新築に伴う安曇寺跡発掘調査(AZ87-3)略報」
1992、「長原・瓜破遺跡発掘調査報告Ⅳ」
1993、「長原・瓜破遺跡発掘調査報告Ⅵ」
1995、「長原・瓜破遺跡発掘調査報告Ⅷ」
1998、「長原遺跡東部地区発掘調査報告Ⅰ」
1999a、「長原・瓜破遺跡発掘調査報告ⅩⅢ」
1999b、「長原遺跡東部地区発掘調査報告Ⅱ」
- 小沢洋1998、「上総における古墳中期土器編年と古墳・集落の諸相」：『君津郡市文化財センター研究紀要』Ⅶ
1999、「房総の古墳中期土器とその周辺」：『東国土器研究』第5号、pp.121-148
- 小畑弘己1989、「那珂君休遺跡」Ⅳ：『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第208集 福岡市教育委員会
柏原市教育委員会1990、「柏原市埋蔵文化財発掘調査概報 1989年度」
- 川西宏幸1978、「円筒埴輪総論」：『考古学雑誌』第64巻第2号 日本考古学会、pp.95-164(〔川西宏幸1988〕に再録)
1988、『古墳時代政治史序説』 塙書房
- 京嶋覚1990、「水田遺構と古代の長原」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告Ⅱ』、
pp.294-306
1992a、「長原・瓜破遺跡の製塩土器」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告Ⅳ』、
pp.155-160
1992b、「飛鳥時代の土器とその時期」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告Ⅳ』、
pp.149-154
1993a、「古墳時代後半期の土器の変遷」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告Ⅴ』、
pp.269-276
1993b、「5・6世紀の集落構成の復元とその特質」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告Ⅵ』、pp.269-276
- 群馬県教育委員会・(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・東日本旅客鉄道株式会社1998、「三ツ寺Ⅰ遺跡」
古代の土器研究会編1992、『古代の土器1 都城の土器集成』
- 小林謙一・佐川正敏1989、「平安時代～近世の軒丸瓦」：法隆寺昭和資材帳編纂所『伊珂留我』10
堺市教育委員会1984、「堺市文化財調査報告 第十八集」
1997、「浅香山遺跡発掘調査概要報告」：『堺市文化財調査概要報告』第63冊

- 佐藤隆1992、「平安時代における長原遺跡の動向」：大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告』Ⅴ、
pp.102-114
- 佐原眞1968、「近畿地方」：『弥生土器集成』本編2 東京堂出版、pp.53-72
- 清水和明1998、「長原遺跡北部周辺の古墳時代中・後期の様相に関する予察」：大阪市文化財協会編『長原遺
跡東部地区発掘調査報告Ⅰ』、pp.63-69
- 下村智1995、「雀居遺跡」2：『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第406集 福岡市教育委員会
- 菅榮太郎1995、「石鏃資料の型式および製作技法の編年的検討」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発
掘調査報告』Ⅶ、pp.367-388
- 高井健司1992、「コンピュータを利用した版下の作成」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅳ、
pp.3-6
- 高橋工1999、「長原遺跡および北部周辺地域における古墳時代中期～飛鳥時代の地形環境の変化と集落の動
態」：大阪市文化財協会編『長原遺跡東部地区発掘調査報告Ⅱ』、pp.79-106
- 田中一郎1955、「奈良高等学校校庭発見のⅠ号丸井戸調査概報」：『文化史論叢』奈良国立文化財研究所学報
第3冊 奈良国立文化財研究所
- 田辺昭三1966、『須恵器大成』 角川書店
- 趙哲済1995、「本書で用いる層位学的・堆積学的視点からの用語」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発
掘調査報告』Ⅶ、pp.41-44
- 1997、「長原遺跡の標準層序」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅸ、pp.14-18
- 長山雅一1988、「瓜破・喜連古墳群」：新修大阪市史編纂委員会編『新修大阪市史』第1巻、pp.395-400
- 奈良国立文化財研究所1976、『平城宮発掘調査報告』Ⅶ 奈良国立文化財研究所学報第26冊
- 西田敏秀1992、「九頭神遺跡(第53次調査)出土の八稜鏡について」：財団法人枚方市文化財研究調査会『財団
法人枚方市文化財研究調査会 研究紀要』第2集
- 寝屋川市教育委員会1993、「長保寺遺跡」
- 比佐陽一郎1997、「木製履物雑考」：『九州考古学』第72号 九州考古学会
- 前田洋子1986、「和鏡の用途の展開についてー出土鏡・水中検出鏡を中心としてー」：『歴史における青磁と
民衆』 日本史論叢会
- 松村道博1995、「雀居遺跡」3：『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第407集 福岡市教育委員会
- 森島康雄他1995、「瓦器椀」：中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』 真陽社、pp.315-337
- 渡辺誠1985、「ヨコヅチの考古・民具学的研究」：『考古学雑誌』第70巻第3号 日本考古学会、pp.52-93

あ　と　が　き

『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』シリーズは本書で15冊目となるが、長期間に渡り行われてきた長吉瓜破地区土地区画整理事業施行に伴う発掘調査も終わりが近づきつつある。本書で収録した調査は、複合遺跡である当遺跡の重要性をあらためて物語るものであったが、これまでの調査・研究成果を踏まえ、遺跡の性格やその動態をいかに総括していくかという点で、今後刊行される本シリーズの報告書一冊一冊が重要な意味を持ってくるといえよう。本書の中では、遺跡内における集落の変遷への考察や、出土木製品の集成などが試みられているが、各地点の調査成果を遺跡全体の中で、あるいは時間軸の中で位置付けるための努力が、より一層必要である。

尚、本書の作成にあたっては、獣骨などの整理にあたっていた当協会調査員久保和士が急逝するという不幸に見舞われたが、同氏の遺徳を偲ぶ皆様からの惜しみないご支援により刊行にこぎつけることができた。記して感謝の意を表するとともに、久保氏の冥福をお祈り申し上げる。

(松尾信裕)

索引

索引は遺構・遺物に関する用語と、地名・遺跡名などの固有名詞とに分割して収録した。

〈遺構・遺物に関する用語〉

M	MT15型式	52, 66, 111, 124, 127, 128, 133	飛鳥V	52, 132
	MT21型式	64	当て具痕	49, 59, 68, 82, 84, 96, 100, 111, 117, 122, 124, 127
	MT85型式	9, 66, 96, 98, 133		
O	ON46段階	29, 31, 34, 52, 74, 75, 107, 111	い 斎串	93, 100, 105, 137, 153, 155
T	TK10型式	34, 49, 82, 104, 124, 127, 128, 133, 144	生駒西麓産	8, 59, 61, 64, 88, 100, 124
	TK23型式	19, 26, 31, 34, 47, 49, 66, 74, 75, 82, 84, 90, 103, 107, 124, 127, 132, 133, 141, 144	和泉型瓦器椀	132
	TK43型式	52, 98, 111	和泉式土器	91
	TK47型式	9, 34, 46, 52, 68, 82, 84, 90, 91, 98, 100, 103, 107, 111, 127, 132, 133, 141, 144	井戸	34, 73, 91, 93, 103, 104, 109, 115, 141, 146, 151~ 153
	TK73型式	90, 91, 107, 108	う ウシ	36, 38, 106, 107, 149, 159~167
	TK208型式	28~31, 34, 41, 52, 59, 75, 78, 84, 124, 127, 133, 141	白玉	12, 27, 32, 76, 78, 93, 115
	TK209型式	49, 52, 66, 68, 73, 82, 96, 98, 100, 106, 107, 111, 127, 140	ウマ	38, 106, 107, 129, 132, 146, 159~167
	TK216型式	111	え 円筒埴輪	39, 111, 124, 128
	TK217型式	52, 66, 73, 113	か 瓦器	7, 14, 16, 18, 20, 22, 36, 41, 63, 111, 131, 132
あ	飛鳥I	46, 47, 54, 96, 100, 117, 120, 146	角閃石	8, 46, 52, 54, 59, 61, 64, 88, 100, 124, 136
	飛鳥II	46, 54, 96, 117, 146	鉸具	112, 148
	飛鳥III	44, 47, 146	火山ガラス	22
	飛鳥IV	44, 46, 47, 52, 64, 132, 146	瓦質土管	17, 18
			瓦質土器	20, 24, 35, 36, 111, 129, 132, 137
			滑石	12, 27, 30, 32, 49, 65, 76, 78, 92, 93, 115, 133
			鎌	56, 117, 154

竈	76, 104, 136			35, 36, 61~65, 106,
唐津焼	16, 35, 39, 115			107, 136, 137, 140, 144,
乾痕	8, 22			145, 149, 154
韓式系土器	75, 76, 78, 84, 85, 88,	スカシ孔		19, 26, 39, 53, 56, 74,
	135, 136			78, 79, 82, 111, 113,
関東系土器	46, 90, 91			124, 127, 141, 144
き 擬口縁	54	鋤		56, 78, 151, 154
畿内第Ⅰ様式	38, 60	せ 製塩土器		12, 13, 19, 29, 30, 31,
京焼	16			53, 75, 79, 82, 84, 88,
鋸齒文	49			132, 133, 135, 141, 144
く 杭	14, 18, 136, 152	青花		115
偶蹄類	10, 25, 36, 62	石錘		38, 61
釘	56, 137, 140, 153	石鏃		113
け 畦畔	10, 18, 22, 25, 36, 62,	瀬戸美濃系		132
	64, 106, 131, 136, 137,	そ 槽		38, 71
	140	総柱建物		121, 148
下駄	38, 57, 71	た 竪穴住居		30
建築部材	71, 93, 107, 151, 152	盾形埴輪		38, 56
こ 国府型	115	丹波焼		16, 111
耕作溝	109, 110, 115, 117, 128	ち チャート		41, 46, 53, 56, 85, 115,
黒色土器	9, 111, 132			136
小谷	145, 146	鳥足文タタキ		75, 136
子持勾玉	65	長胴系(甕)		46, 88, 133
さ 堺播鉢	111, 132	つ 土取り穴		109, 110, 115
柵	148, 152	て 鉄製品		56, 111, 112, 117
サヌカイト	61, 111~113	と 砥石		38, 56
し 自然流路	129, 137	陶質土器		44, 135
島畠	129, 137, 144	刀子		56
シャモット	44, 47, 52, 54, 59, 64,	東播系		41, 132
	71, 76, 85, 100, 103, 135	土壙墓		105
車輪文	111	ドロメンコ		111
縄蓆文タタキ	135, 136	な ナイフ形石器		38, 61, 115, 117
縄文土器	38, 141	長原式		38, 49, 60, 61, 141
植物遺体	66, 90, 131	は 羽釜		8, 111, 117, 132, 137
す 瑞花双鴛鴦文	4, 22, 23	履物		71, 73, 74, 155
水田	4, 6, 7, 11, 25, 33,	白磁		39, 132

八稜鏡	4, 22, 23	ほ 紡錘車	30, 32, 49
ひ 庇付建物	34	炮烙	115
備前焼	39, 111	掘立柱建物	12, 13, 25, 26, 28, 34, 92, 121, 128, 145, 148, 153
肥前陶磁器	16, 113, 132	ま 勾玉	65, 76, 78
鋌	111	曲物	38, 71, 106, 136, 137, 152, 153
平瓦	41	丸瓦	39
鱗付円筒埴輪	122	み ミニチュア甕	16
ふ 韃羽口	79, 82	ミニチュア高杯	46, 53, 68, 85
布留式	38, 54	も 木製品	38, 57, 66, 71, 73, 93, 100, 105~107, 136, 144, 151~155
へ 平安時代Ⅱ期	10	木簡	136, 137, 144
平城宮土器Ⅰ	132	ゆ 有孔円板	30, 32, 76, 78, 132, 133
平城宮土器Ⅱ	46, 132	ら ラミナ	7, 22, 131
平城宮土器Ⅲ	64, 132, 151		
平城宮土器Ⅳ	16		
平城宮土器Ⅴ	16		
ヘラ記号	47, 52, 66, 68, 74, 79, 82, 84, 96, 100, 103, 117, 120, 133, 140		

〈地名・遺跡名など〉

い 一ヶ塚古墳	128	高廻り2号墳	128
う 馬池谷	35, 36, 38, 39, 60, 62~ 66, 74, 76, 90, 106, 109, 127, 129, 136, 144, 145, 149, 151~154	玉手山遺跡	23
お 大坂魚市場跡	23	つ 塚ノ本古墳	128
大園遺跡	23	な 長尾宅原遺跡	162, 164
翁橋遺跡	23	那珂君休遺跡	73
か 川入遺跡	162, 164	長原176号墳	128
く 九頭神遺跡	23	長原40号墳	128
さ 雀居遺跡	73	長原古墳群	128, 149, 162
し 上東遺跡	162, 164	は 花塚山古墳	128
城山遺跡	166	ひ 東除川	7, 14, 17, 33
せ 前期難波宮	71, 73	へ 平城京	73, 162, 164
た 高廻り1号墳	128	み 三ツ寺遺跡	28
		南口古墳	34, 56, 151, 162
		も 森の宮遺跡	166

Archaeological Reports
of
Nagahara and Uriwari Sites in Osaka, Japan

Volume XV

A Report of Excavations
Prior to the Development of
the Nagayoshi-Uriwari Area in 1995

March 2000

Osaka City Cultural Properties Association

Notes

The following symbols are used to represent archaeological features and others in this text.

LC : Lithic concentration

NR : Natural stream

SA : Palisade or fence

SB : Building

SD : Ditch

SE : Well

SK : Pit

SP : Posthole or pit

SR : Paddy field baulk

SX : Other features

CONTENTS

Preface

Explanatory notes

Chapter I Outline and progress of research work	1
S.1 The outline of excavations in 1995	1
1) Excavations	1
2) Procedure of publishing this report	2
S.2 Outline and progress of excavations	3
1) Central sector of the Nagahara Site	3
2) Western and South-western sector of the Nagahara Site	4
Chapter II Results of research in the Central sector of the Nagahara Site	7
S.1 Research area NG95-20	7
1) Stratigraphy	7
2) Finds from each stratum	8
3) Features and finds	9
i) The Edo Period	9
ii) The Heian Period	9
iii) The Asuka Period	10
iv) The Kofun Period	12
S.2 Research area NG95-42	14
1) Stratigraphy	14
2) Finds from each stratum	16
3) Features and finds	17
i) The Edo Period	17
ii) The Kamakura Period	18
iii) From the Asuka to Nara Periods	18
iv) The Kofun Period	18
S.3 Research area NG95-54	20
1) Stratigraphy	20
2) Finds from each stratum	22
3) Features and finds	23
i) The Edo Period	23
ii) The Muromachi Period	24
iii) From the Asuka to Nara Periods	25
iv) The Kofun Period	25

S.4 Conclusion of research in the Central sector of the Nagahara Site	33
1) The Higashiyoke River and geographical change	33
2) Residential area in the Kofun Period	34
Chapter III Results of research in the Western and South-western sector of the Nagahara Site	35
S.1 Research area NG95-14	35
1) Stratigraphy	35
2) Finds from each stratum	39
3) Features and finds	61
i) From the Nara to Heian Periods	61
ii) From the Kofun to Asuka Periods	65
4) Conclusion	106
S.2 Research area NG95-13, NG95-41 and NG95-76	109
1) Stratigraphy	109
2) Finds from each stratum	111
3) Features and finds	115
i) From the Muromachi to Edo Periods	115
ii) The Nara Period	117
iii) The Asuka Period	117
iv) The Kofun Period	122
4) Conclusion	127
S.3 Research area NG95-49	129
1) Stratigraphy	129
2) Finds from each stratum	132
3) Features and finds	137
i) From the Kamakura to Muromachi Periods	137
ii) From the Asuka to Nara Periods	140
iii) The Kofun Period	141
4) Conclusion	144
S.4 Conclusion of research in the Western and South-western sector of the Nagahara Site	145
1) Asuka Period Buildings	145
Chapter IV Investigation	151
S.1 Wooden artefacts from the Kofun to Nara Period	151
1) Introduction	151
2) The outline and geographical distribution of artefacts	151
3) Details of each kind of artefacts	153
4) Conclusion	154

S.2 Investigation results of Faural remains	159
1) The outline of materials	159
2) Details of each kind of materials	162
3) Investigation	163
4) Examination through historical documents	165
5) Conclusion	167
Table of Stratigraphy at Nagahara Site 1995	174
Bibliography	175
Postscript	
Index	
English Contents and Summary	
Reference Card	

ENGLISH SUMMARY

The Nagahara and adjoining Uriwari sites are situated to the south-east of Osaka City, in one of the city's few remaining rural districts, and are composed of archaeological features from the Palaeolithic through to the Pre-Modern period (AD 1603~1868). Following improvement to both road and subway access, this area has undergone rapid residential growth which has been accompanied by increasing demands for water, sewerage and gas services. The sites lie within land being rezoned to accommodate the development of these services. Though emergency research prior to the rezoning and development of the area has been conducted since 1981, the area as a whole has been researched, almost continually since 1975.

This volume reports the results of 8 excavations at the Nagahara site (total area 4020 square meters) carried out during fiscal 1995. Three of these are located in the central sector of the Nagahara site (95-20, 42 & 54), the remaining five were carried out in the south-west and western sector of the site at Umaike-dani; four investigations west of the valley (95-13, 14, 41 & 76) and one on the eastern slope (95-49).

The main survey results for each period are as follows.

Palaeolithic period

Excavations recovered four backed blades, including a Kou-type blade (a stone implement resembling a knife) from two locations (95-14 & 41).

Jomon period

Stone arrowheads were found dating to the Middle to Final Jomon period (95-13, 41 & 76), as well as pottery vessels and a stone weight belonging to the Late Jomon period and Nagahara style pottery vessels of the Final Jomon period (95-14).

Yayoi period

Pottery vessels belonging to the Early and Middle Yayoi periods were found at several locations, however excavation uncovered no features dating to the Yayoi period.

Kofun period

Features indicative of a settlement, including the remains of *hottatebashira* structures, wells and ditches, were found, dating to the second half of the 5th century (95-14). In addition to this, pottery vessels, including vessels for the production of salt, the remains of wooden building material, a *komochi-magatama* (a larger curved bead with several smaller curved beads attached) and peach cores, were also found.

Investigations also recovered Izumi-style pottery vessels. This type of pottery originates in the Kanto region of Japan and few examples have been found in Osaka.

Pottery vessels, including examples of Korean-style vessels, and the remains of wooden goods were uncovered along with the remains of pits and ditches at site 95-49. Additionally, the remains of buildings, including large-scale *hottatebashira* structures, were found at several locations (95-20, 42 & 54). Cylindrical *haniwa* dating to between the latter half of the 4th century and the early 5th century were also recovered from a ditch (95-13), and early 6th century ditches were detected at several locations (95-13, 41 & 76).

Asuka - Nara period

The remains of two Asuka period *hottatebashira* structures separated by a ditch were found (95-13, 41, 76). Additionally, the remains of a series of multi-layered rice fields and levees were found. Excavation also recovered an iron sickle (95-41) and a cluster of cow and horse bones (95-14). Some of them exhibit evidence of butchering. In addition to this, the remains of wooden goods, including an *igushi* (a ritual wooden blade), *magemono* (a round chip vessel) (95-14 & 49) and a wooden tablet (95-49). The wooden tablet bears an inscription detailing rice volumes.

Heian period and later

Features dating to the Heian period and later, including ditches and the remains of rice fields, suggest that this area had been utilized as arable land at this time. Excavations also clarified the history of the Higashi-yoke River, an artificial irrigation canal constructed during the Asuka/Nara period (95-20, 42, 54). The canal had been made redundant by construction work in 1704, which changed the course of the Yamato River.

A *zuika souchoumon hachiryokyou* (an 8-ridged mirror featuring flower and bird motifs) was recovered from stratum associated with a Heian period flood (95-54). The mirror's form is indicative of a transitional style in which Japanese design exhibits originality out of Chinese influence.

Further Reading

Aikens, C. M. and T. Higuchi,
1982 *Prehistory of Japan*. Academic Press, New York.

Pearson, R. J., G. L. Barnes and K. L. Hutterer (eds),
1996 *Windows on the Japanese Past; Studies in Archaeology and Prehistory*.
 Center for Japanese Studies, University of Michigan, Ann Arbor.

Tsuboi K., (ed.)

- 1987 *Recent Archaeological Discoveries in Japan*. UNESCO, Paris and Centre for East Asian Studies, Tokyo.
- 1992 *Archaeological study of Japan*. Acta Asiatica 63. The Institute of Eastern Culture.

The Osaka City Cultural Properties Association

- 1978-99 *Archaeological Reports of Nagahara sites* Vols. I-VII, Osaka. (In Japanese)
- 1989-99 *Archaeological Reports of Nagahara and Uriwari sites* Vols. I-XIV, Osaka. (In Japanese, with English summary except for Vols. I-III)
- 1998-99 *Archaeological Reports of the Eastern Sector of Nagahara site* Vols. I-II, Osaka. (In Japanese, with English summary)

報告書抄録

ふりがな	ながはら・うりわりいせきはつくつちょうさほうこく 15							
書名	長原・瓜破遺跡発掘調査報告 XV							
副書名	1995年度大阪市長吉瓜破地区土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	池田研・田中清美・大庭重信・高橋工・久保和士・Robert Condon 松井章・宮路淳子・佐久間桂子・松尾信裕							
編集機関	財団法人 大阪市文化財協会							
所在地	〒540-0006 大阪府大阪市中央区法円坂 1-1-35 TEL.06-6943-6833							
発行年月日	西暦 2000年 3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ながはらいせき 長原遺跡	おおきかしひらのく 大阪市平野区 ながよしながはらにし 長吉長原西1・3丁目 ながよしながはら 長吉長原3丁目	27126	—	34° 36′ 00″	135° 34′ 40″	13次 19950508～19950803 19951030～19960229 14次 19950502～19951017 20次 19950605～19950802 41次 19950831～19960117 42次 19950904～19951021 49次 19951106～19960220 54次 19951021～19960112 76次 19960110～19960325	1589 675 70 720 104 272 122 468	土地区画整理事業 (長吉瓜破地区)施 行に伴う調査
所収遺跡名	種別	主 な 時 代		主 な 遺 構		主 な 遺 物		
長原遺跡	集落	旧石器時代				ナイフ形石器		
	田畑	縄文時代後～晩期				長原式土器・石錘・石鏃		
	古墳	弥生時代前～中期				弥生土器・石鏃		
	その他	古墳時代		掘立柱建物7・井戸・ 土塋・溝		土師器・須恵器・韓式系土器・ 製塩土器・円筒埴輪・ 滑石製品(白玉・有孔円板・紡錘車) ・木製品(棒状・杭状)		
		飛鳥～奈良時代		掘立柱建物2・畦畔・ 土塋・溝・杭列		土師器(墨書土器)・須恵器・木簡・ 木製品(曲物・槽・斎串状・履物)・ 鉄製品(鉸具・鎌・鋤先・釘・鋌)・ 瓦・ウマ骨・ウシ骨		
		平安時代		畦畔・土塋・溝		輸入陶磁器・黒色土器・土師器・ 瓦・瑞花双鴛鴦文八稜鏡		
		鎌倉～室町		畦畔・島畠・溝・流路		陶磁器・瓦質土器・瓦器・土師器・ 須恵器・瓦・杭		
	江戸時代		畠畝間・井戸・溝・ 土取り穴		国産陶磁器・輸入陶磁器・土師器・ 瓦質土管・下駄・寛永通宝			

原 色 図 版



95-54次調査出土の瑞花双鶯文八稜鏡

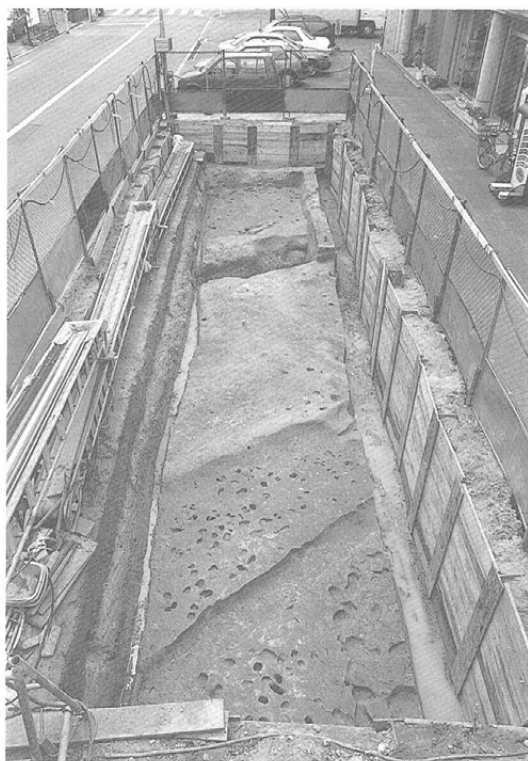


95-14次調査出土の和泉式土器

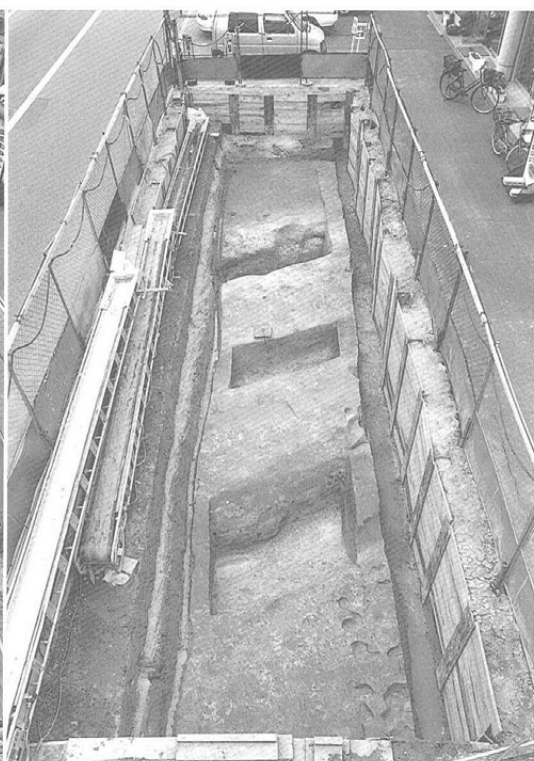
図 版



南壁地層断面(北西から)



長原6Bi層上部上面検出遺構(東から)



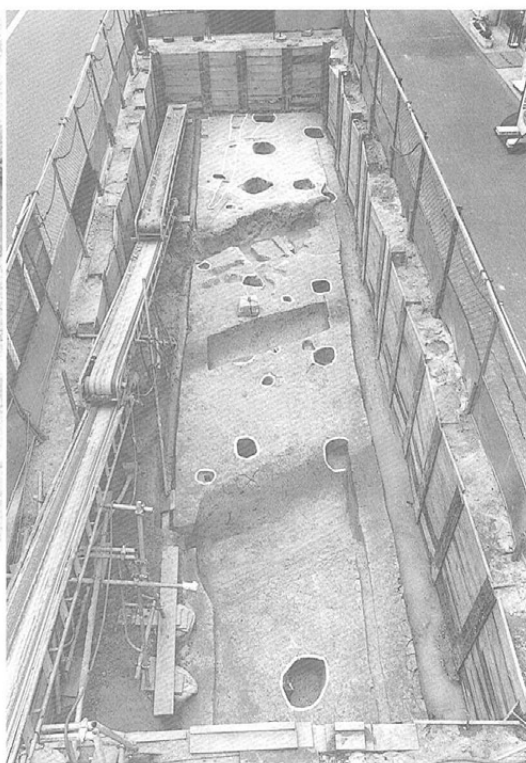
長原6Bi層下部上面検出遺構(東から)



SB701(北から)



SB701礎板検出状況(東から)



長原7B層上面検出遺構(東から)



南壁地層断面(北東から)



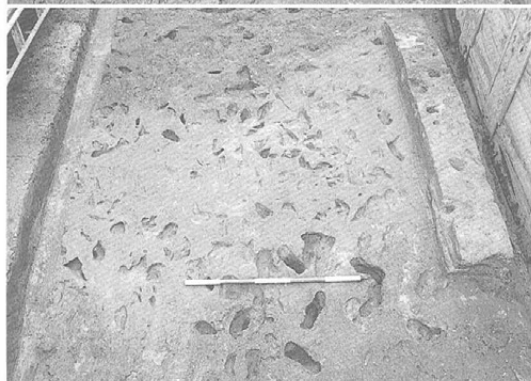
長原5層基底面検出遺構(東から)



長原7B層上面検出遺構(東から)



南壁地層断面(北西から)



上：長原6Ai層上面検出遺構(西から)

下：長原6Bi層上面検出遺構(西から)



長原6Bi層下面検出遺構(東から)

長原7B層上面検出遺構(東から)



図版五 中央地区95-54次調査地 古墳時代の遺構



SB706(北から)

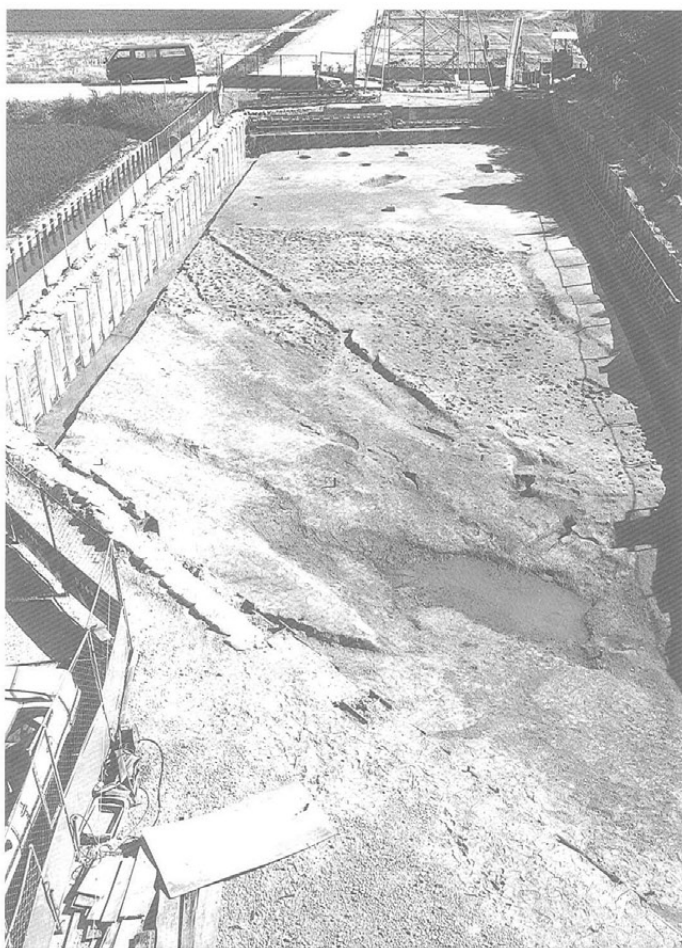


西壁地層断面(東南から)



南壁地層断面(北東から)

長原4Biii層上面検出遺構(北から)



長原6Ai層上面検出遺構(北から)



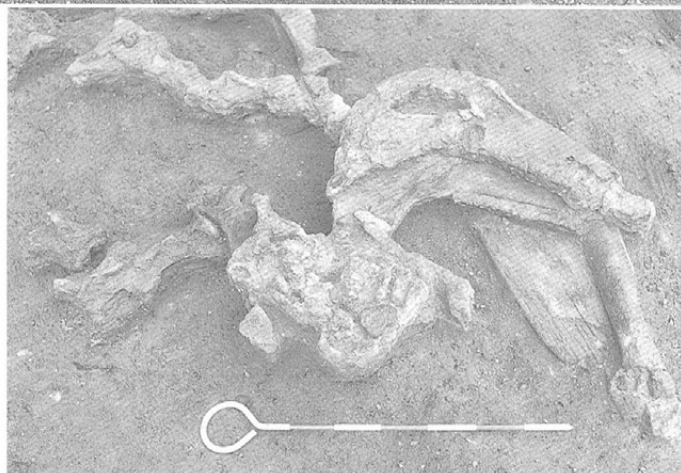
長原6Bii層ウシ・ウマ骨出土状況(北から)



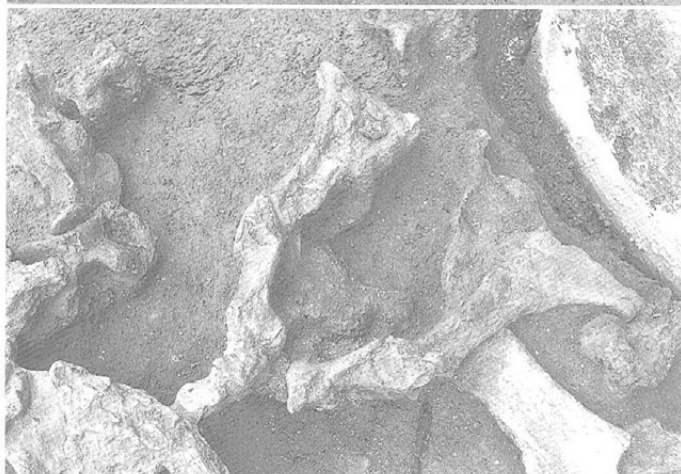
長原6Bii層ウシ・ウマ骨出土状況(西から)



長原6Bii層ウシ・ウマ骨出土状況
(南から)



長原6Bii層ウマ骨出土状況
(北西から)



長原6Bii層ウマ骨出土状況
(南西から)



SX701遺物出土状況(西から)



SD712関東系土器出土状況(南から)

古墳時代の遺構(南から)



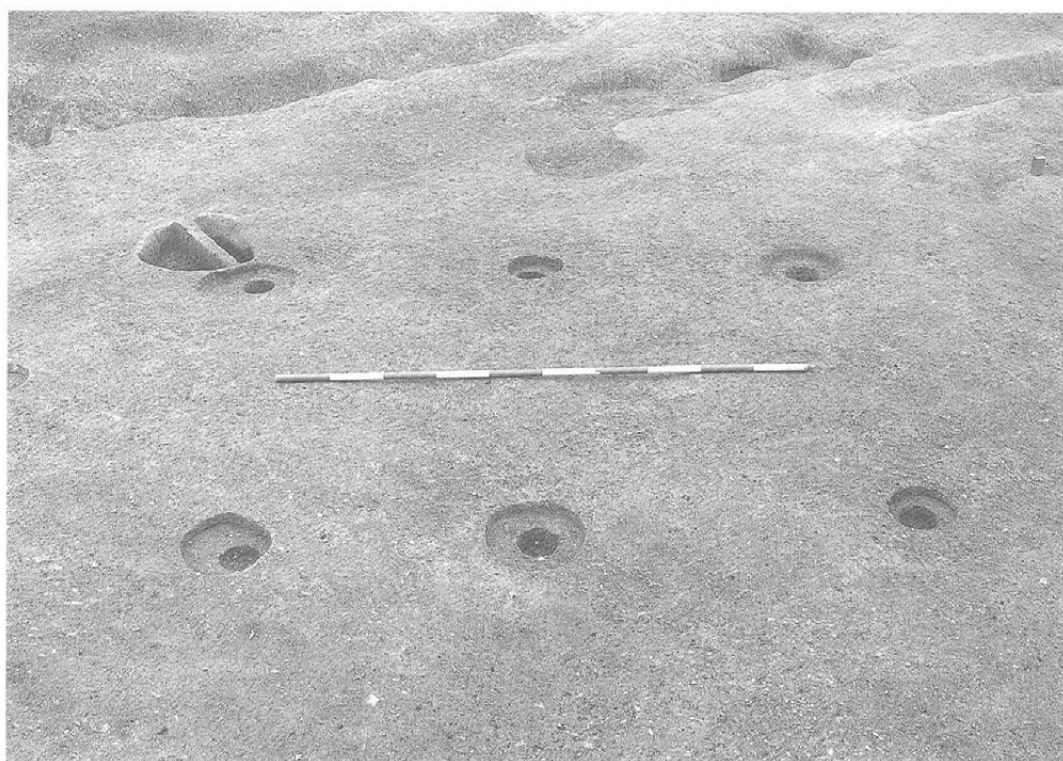
古墳時代の遺構(北から)



SE701(東から)



SE701南北断面(東から)



SB701(西から)



西部微高地全景(北東から)



西壁地層断面(東から)



第3層基底面耕作溝群(北から)



SD601検出状況(北から)



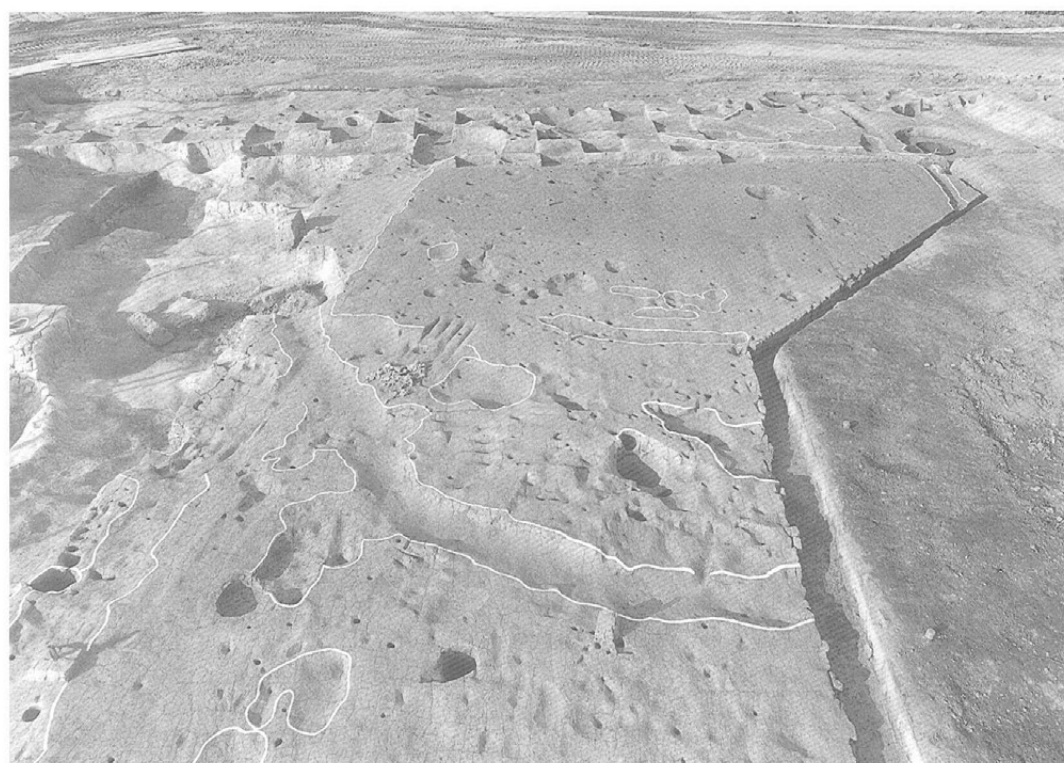
SB601(北から)



完掘状況(北から)



SX701遺物出土状況(東から)



SD704(南から)



SB602(南から)



95-13次調査地石器調査状況(南から)



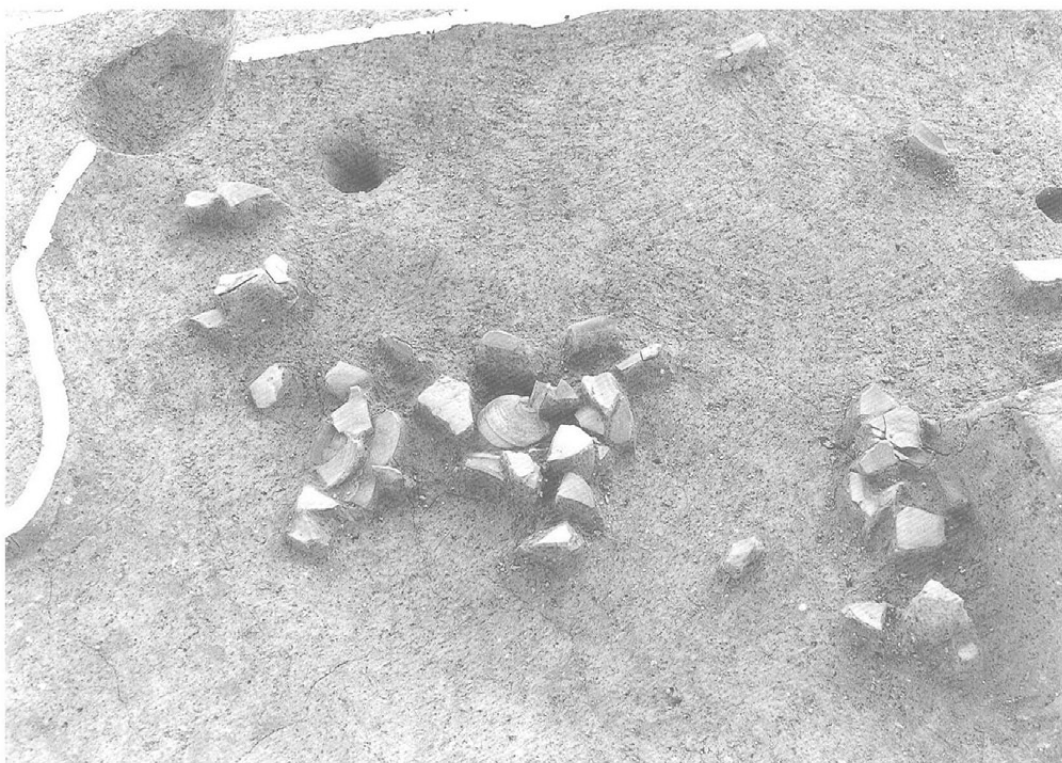
第3区完掘状況(東から)



SD701(東から)



SD702・703(東から)



SD703遺物出土状況(東から)



第4e層上面の水田・畦畔・踏込み(西から)



第6e層上面検出遺構と西壁地層断面(南東から)



第7a層遺物出土状況(北西から)



木簡出土状況(北東から)



第7b層基底面検出遺構(南から)



第7b層基底面検出遺構(北から)



9



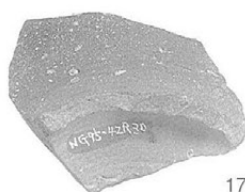
10



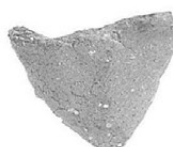
11



15



17



18



20



25



26



22



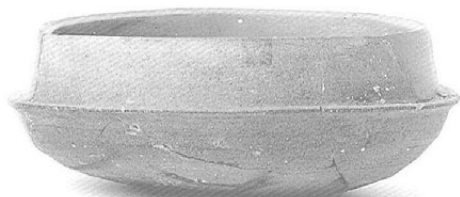
23



24



39



40



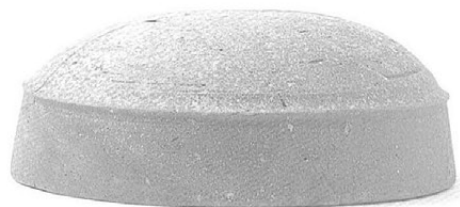
33



37



35



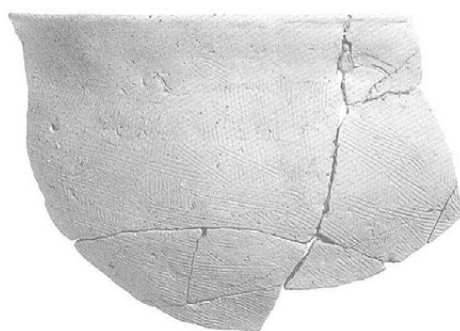
36



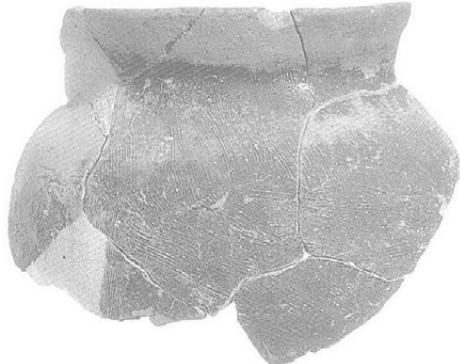
43



44



46



47



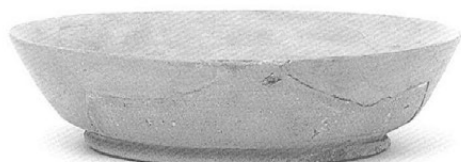
78



97



77



90



95



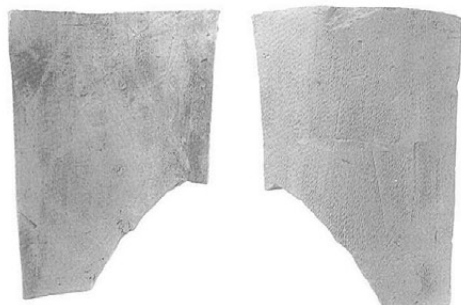
88



92



73



84

長原3層(73・77)、長原4Biii層(78)、長原6Ai層(88)、長原6Aii層(84・90・92)、
長原6Bi層(95・97)



125



119



120



118



104



127



113



101



89

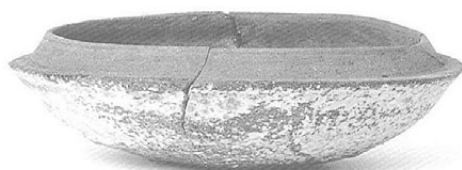


103

長原6Ai層(89)、長原6Bi層(101・103・104)、長原6Bii層(113・118～120・125・127)



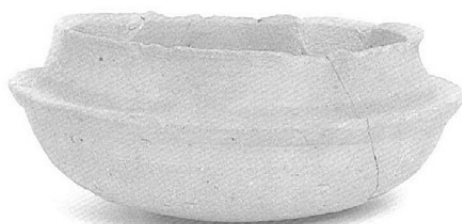
137



139



136



141



140



145



144



142



146



161



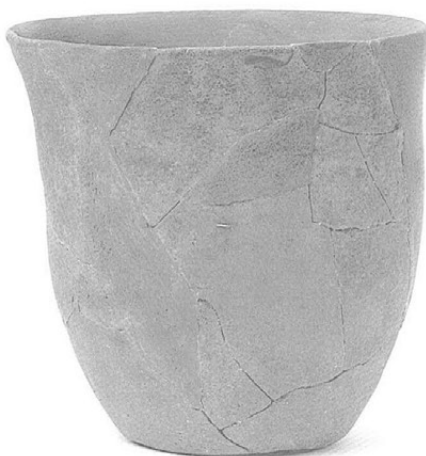
163



152



162



155



156



166



165



182



186



183



187



185



184



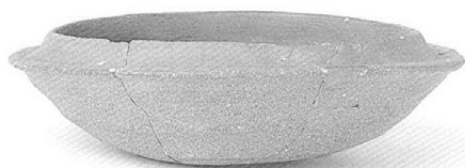
189



188



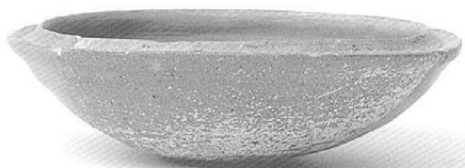
206



220



210



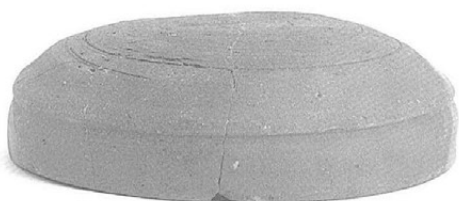
219



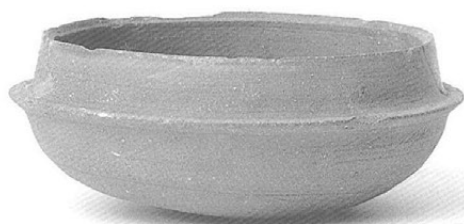
211



221



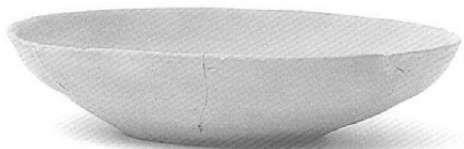
215



223



216



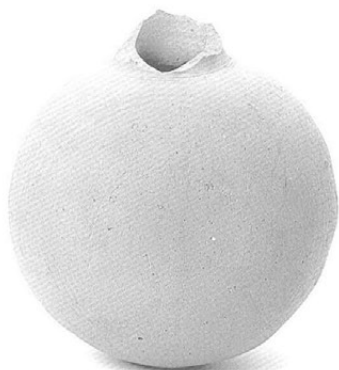
234



230



235



226



231



229



224



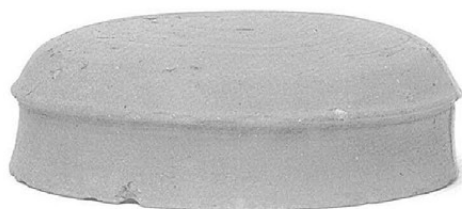
225



227



228



253



271



252



259



262



273



274



255



261



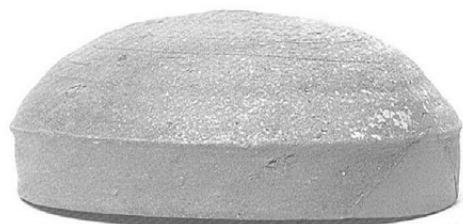
295



297



309



307



300



299



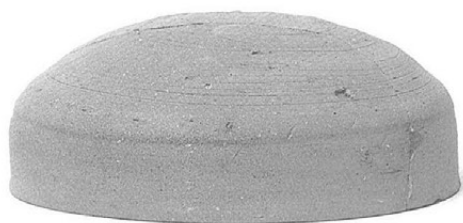
305



308



303



302



301



311



317



313



315



314



321



325



316



326



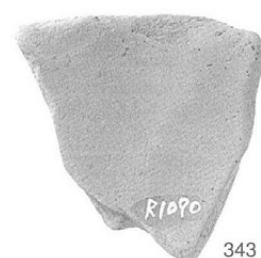
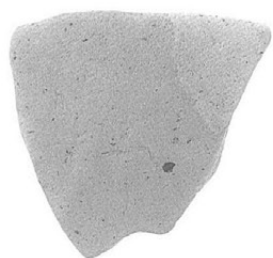
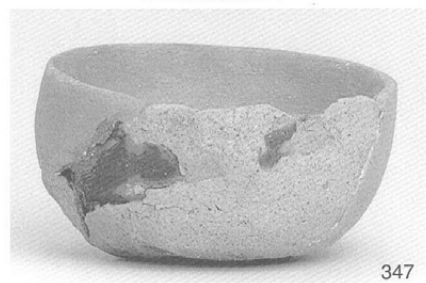
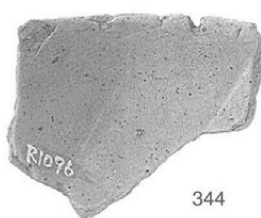
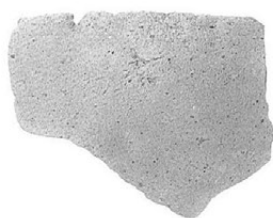
324



323



331





358



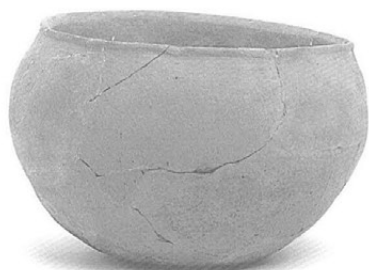
355



356



354



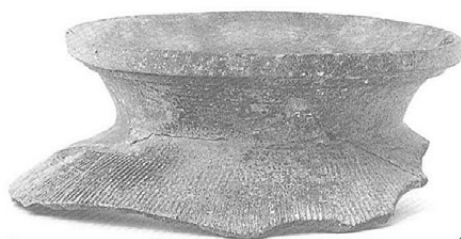
360



335



381



338



384



333